

平成22年度 卒業論文

バルカン戦争期におけるオスマン帝国外交とバルカン諸国

—指導者達の手記に見える帝国外交の理想と現実の乖離—

(指導教員 新井 政美)

東京外国語大学

南・西アジア課程 トルコ語専攻

学籍番号 8507299

氏名 瀧口 慶

～目次～

序章	3
1. 「バルカン問題」の歴史的背景.....	3
2. バルカン戦争をめぐる諸国の思惑	4
3. 研究史としてのバルカン戦争におけるオスマン外交研究	5
4. 従来の研究における問題所在と本稿の構成.....	7
第一章 バルカン戦争前夜.....	9
はじめに	9
第一節 青年トルコ革命後のオスマン帝国	10
(1) トロツキーの予見と二面的危機.....	10
(2) 革命後の革命志士たち	14
(3) エンヴェルとアルバニア蜂起	18
第二節 イタリア＝トルコ戦争	21
(1) 後発的帝国主義国家・イタリア	21
(2) 予期せぬイタリアの野望	24
(3) トリポリタニアの激闘の中で	27
第三節 新たなる動乱の序曲	31
(1) 20世紀初頭のマケドニア・アルバニア問題	31
(2) エンヴェルのトルコ民族主義化と戦争終結.....	34
おわりに	38
第二章 第一次バルカン戦争	39
はじめに	39
第一節 戦争の夜明け	40
(1) 欺瞞に満ちた同盟構想.....	40
(2) 「メガリ・イデア」の異質性	43
(3) パートナーの模索とキーマンとしてのルーマニア	47
第二節 開戦	51
(1) モンテネグロの「好戦外交」と帝国の孤立.....	51
(2) オスマン帝国の劣勢とジェマル・エンヴェルの動向	54
(3) 「和平」と「理想」の確執.....	58
第三節 大宰相府襲撃事件.....	62
(1) 「理想」のための大宰相府襲撃.....	62
(2) 大宰相府襲撃後の新政権と敗戦への道.....	65
おわりに	70

第三章	ロンドン条約締結	71
はじめに		71
第一節	第一次バルカン戦争の傷跡	72
(1)	敗戦後の革命志士たちと変化の兆し	72
(2)	海軍から見る「英土同盟」の可能性と破綻	76
第二節	ロンドン条約の不備	81
(1)	大国・ブルガリアの外交と諸問題	81
(2)	アルバニアをめぐるアドリア海沿岸国の外交戦略	85
第三節	三巨頭体制の成立	88
(1)	シェヴケト・パシャ暗殺の新たな意義	88
(2)	ジェマルの弾圧の真意と「ちぐはぐ」な三頭政治の形成	91
おわりに		95
第四章	第二次バルカン戦争	96
はじめに		96
第一節	束の間の平和	97
(1)	バルカン同盟内の対立と反ブルガリア同盟の構築	97
(2)	オスマン帝国陸軍の改革をめぐる独土・露土関係	101
第二節	戦火は再び	105
(1)	ブルガリアの「兄弟殺し」の功罪とエンヴェルの戦略	105
(2)	ブルガリアの3つの「誤算」とオスマン帝国の電撃参戦	108
第三節	ブカレストの講和	112
(1)	領土再分割と顕在化する帝国主義的打算	112
(2)	外交的再構築の起点としてのオスマン-ブルガリア同盟	115
おわりに		120
終章		121
参考文献		129

※特記事項

・文中に現れる人名ならびに地名には、「トルコ人ならびにオスマン時代の地名の呼称」についてはトルコ語の表記を使用し、その他の人名・地名については現地での呼称ならびにそれに準拠した表記を使用する。また、一部を除いてはパシャ(Paşa)、ベイ(Bey)等の称号も表記すると共に、生没年(不明のものに関しては省略)も併記する。

・本稿で登場する「オーストリア＝ハンガリー」とは、1867年の「アウスグライヒ」によってオーストリアとハンガリーが統合した以降の帝国をさす。それ以前に関しては、「オーストリア(帝国)」と表記する。

・本論中の年月日の表記は、オスマン帝国でも使用されたユリウス暦を主に使用する。

序章

1. 「バルカン問題」の歴史的背景

1354年。永遠の世界帝国を自負するビザンツ帝国領・カリポリス(Kallipolis, 現トルコ領・ゲリボル)に、アナトリア半島からトルコ人が海を渡って町を占領した。この時よりトルコ人、およびアナトリアで急速に勢力を拡大していたオスマン帝国がバルカン半島史における主要なアクターとして登場したといわれている。しかし当時のバルカン半島には、すでに民族・宗教・言語・生活基盤のすべてが多種多様に混在しており、国家もまた大小様々なものが存在する状況にあった。この多様性こそ、バルカン半島史や現在のバルカン半島の民族問題を語る上で欠かすことのできない概念であり、またカリポリスの占領から第一次世界大戦後の帝国の滅亡まで続くオスマン帝国のバルカン半島の支配の歴史のなかでも繰り返し問題となってきたことである。文字に記したり、口頭で述べてしまったりするのは簡単にできるようなものではあるが、その実は時として紛争に発展する可能性を秘める重大な社会問題でもある。現にこのバルカン半島では、わずか数年前にはコソヴォやボスニアといった地域で紛争が発生し、かつて「ヨーロッパの火薬庫」と呼ばれたこの地には未だに争いの火種が尽きることはない。

しかしオスマン帝国の場合、度重なる征服と版図拡大に伴って「世界帝国」と呼ばれる存在になるにつれ、この問題を一地方の社会問題から国家システム上の問題へ内包していった。イスラーム王朝としてアナトリアで成立した国家は、バルカン半島・アラビア・北アフリカ・地中海東岸という非常に広大な地域を領有することで世界帝国となり、同時に多民族国家という属性を持つことで多様性を国家そのものの問題に位置づけた。オスマン帝国がこの問題を解決する手立てとして採択したミッレト制は長らく機能し、オスマン帝国は16世紀ごろには最盛期を迎え、ローマ帝国を彷彿とさせる帝国となった。

とはいえ、万物には栄枯盛衰が必然なもので、18世紀ごろからオスマン帝国の栄華にも陰りが見えてくる。オスマン帝国領ハンガリーの喪失をきっかけに、オスマン帝国はバルカン半島における優位性を喪失させていった。イスラームの名のもとに他民族をコントロールしてきたオスマン帝国にとって、「瀕死の病人」と揶揄されるほどの帝国の脆弱性は致命的なものであった。18世紀以降、オスマン帝国は産業革命を機に植民地獲得に乗り出した列強から、領土はもちろん外交的にも格好の餌食とみなされた。バルカン半島も、弱肉強食の領土・権威争いの的となり、オスマン帝国が築いた一時の平和はもろくも崩れることとなった。

さらに19世紀ごろから現れたナショナリズムの風潮は、多民族国家を国家システムの前提とするオスマン帝国にさらなる打撃を与えた。帝国領の民はナショナリズムに目覚め、数世紀来自分たちを支配してきたオスマン帝国に反旗を翻すようになり、ギリシャのように自民族の国家の樹立を目指す戦いを起こして独立を果たした国家も登場した。大国はこれを利用してオスマン帝国への政治的影響力を強め、介入してくることも少なくなかった。特にロシアは正教徒の保護を名目とした介入の構えを見せ、クリミア戦争・露土戦争といった形で直接オスマン帝国と戦火を交えるようになった。

このような情勢の中で、オスマン帝国は近代化を以てこの問題に当たろうとした。19世紀中期のスルタン・アブデュルメジト1世(AbdülMejid I, 1823年-1861年)の勅令から開始されたタンジマートは、1876年にミドハト憲法とよばれる帝国憲法の制定をもって立憲政に移行するところまでつながり、近代化・西欧化の端は開かれた。しかしこの第一次立憲政と呼ばれた時代は、時のスルタン・アブデュルハミト2世(Abdülhamid II, 1842年-1918年)を始めとする保守派の抵抗を受けて停止し、オスマン帝国の内からの解決は達成されることがなかった。

オスマン帝国は、戦火と銃撃を交え続けるバルカン半島の情勢を改善することができず、バルカン半島における優位性を失っていった。そして、バルカン半島の盟主としてのオスマン帝国に止めをさすことになったのが、1912年に勃発するバルカン戦争であった。

2. バルカン戦争をめぐる諸国の思惑

バルカン戦争が発生する20世紀初頭は、ヨーロッパの大国が植民地を求める帝国主義の時代から、その帝国主義同士が世界各地で衝突を繰り返す時代への過渡期である。世界各地で衝突が繰り返される中、バルカン半島は上記の経緯から列強にとって本国から最も近いところにあり、それ故に最も外交上重要となる激戦区となった。そして同時に、その問題の複雑性から戦争につながる点で最も危険な地域でもあった。

当時のバルカン半島では、バルカン半島に生きる民たちの要求が以前にも増して激化した。オスマン帝国からの独立を目指す諸民族はもちろん、ギリシャ・セルビア・モンテネグロといったすでに独立を果たした国家も「同胞たちの帰属」を名目に勢力拡大を狙っていた。これは19世紀末のナショナリズムの隆盛に起因するところが大きいのだが、同時にこれはバルカン戦争でのバルカン同盟側の最大の大義名分となった。

さらにこの半島には、オーストリア＝ハンガリー帝国とロシア帝国という強国の存在もあった。1867年の「アウスグライヒ(Österreichisch-Ungarischen Ausgleich)」によって、ハプスブルク家の支配するオーストリア帝国は、かつてバルカン半島で一大勢力を誇ったハンガリー王国を巻き込んでオーストリア＝ハンガリー帝国に改組していたが、それ以前からこの三国は様々な局面で対立と協力を繰り返した。しかしかつての対立は、領土的側面はもちろん、キリスト教対イスラーム教という宗教的側面が強かったのだが、この時期になると情勢の複雑化によって関係の変化も迫られることとなった。特にオーストリア＝ハンガリーもまたオスマン帝国のように多民族国家であり、民族的な観点の上では同様な問題を抱えていたといわざるを得なかった。それはロシア帝国の南下政策の策略としてのスラヴ系民族への刺激によってスラヴ系国家のより過激なナショナリズム政策が展開されるようになると、オスマン帝国との連携を行わざるを得ない状況になった。

大国間ないし半島の諸民族の複雑な関係性を自国の権益に絡めながら解決するために、1878年のベルリン条約を初めとして、バルカン半島に関する条約が幾度となく締結された。しかしそれでもなお一向に改善の兆しが見えないバルカン半島の情勢は、周辺国に「ヨーロッパの火薬庫」の危険性を忘れさせることはなかった。

またこの時期のバルカン半島の動乱は単に一地域の問題に留まることはなく、20世紀初

頭における外交体制の形成に一役買うことになる。20世紀初頭における外交史において、オスマン帝国やバルカン諸国、そしてすべての国々に強い影響力を持っていた列強として、次の国がある。当時の外交世界のキャスティングボードを握っていたイギリス。そしてそのイギリスと当時最も敵対した関係にあったドイツ帝国である。20世紀初頭の外交世界で欠かすことのできないこのイギリスとドイツ帝国の対立は、フランスの国際的孤立を是とするビスマルク体制の崩壊とドイツ皇帝・ヴィルヘルム2世の「世界政策」の産物であるが、その余波は両帝国を盟主とする、「勢力均衡(Balance of power)」による国際的安全保障体制の構築にまで及んだ。

こうした時代の中、頻発する戦争による国力の低下も相まって外交的に不利な状況にあったオスマン帝国は、崩壊の道を進む帝国を維持するためにこの安全保障体制に参入せざるを得なかった。このバルカン戦争の時代というのは、オスマン帝国が帝国の威信と存亡をかけて帝国主義同士の激突に参入していく時代でもあったのだ。

3. 研究史としてのバルカン戦争におけるオスマン外交研究

さて、旧来のオスマン帝国の在り方に一石を投じることとなったバルカン戦争に関する研究は、当事国である現在のトルコ共和国をはじめとする世界各国の歴史家たちの手によって既に行われている。2度にわたるバルカン戦争期の外交についての文献としては、エルンスト・クリスチャン・ヘルムライヒ(Ernst Christian Helmrich)の *The Diplomacy of the Balkan Wars 1912-1913* が挙げられる¹。このヘルムライヒの研究では、オスマン帝国をはじめとするバルカン戦争の当事国たちが当時どのような外交を行おうとしたのかを広範にわたり研究し、書籍化されたものである。比較的論じられることの少ない当代のバルカン諸国の動向を垣間見ることができ、バルカン戦争というものがいかなるものであったかを捉える上では有用な研究であるといえる。

日本における研究としては、藤由順子の著書である『ハプスブルク・オスマン両帝国の外交交渉—1908 - 1914』が挙げられる。²第一次世界大戦直前期のハプスブルク帝国とオスマン帝国の外交交渉を主題とした書籍である。この著書の特徴としては、主としてバルカン半島を巡る両国の交渉を当時のオーストリア外相・エーレンタールや駐イスタンブル大使・パラヴィチーニといった外交の最前線にいた人物にまで至るレベルまで掘り下げて明らかにしているというところである。³これは従来のこの時期の研究にはなかったものであり、また国内事情についても知ることのできる研究である。

共和国期も含めたトルコ史全体の外交を知ることのできる研究としては、ロンドン大学教授・ウィリアム・ヘイル(William Hale)の *Turkish Foreign Policy, 1774-2000* がある。⁴もともヘイルはトルコの政治経済・国際関係・政治的発展の過程を研究することを専門とし

¹ Helmrich, E. C. (1938). *The Diplomacy of the Balkan Wars 1912-1913*. Harvard University Press.

² 藤由順子(2003) 『ハプスブルク・オスマン両帝国の外交交渉—1908 - 1914』 南窓社

³ 同書 30 頁

⁴ Hale, W. (2000). *Turkish Foreign Policy, 1774-2000*. Frank Cass Publishers.

ているが、この著書では、1774年に勃発した露土戦争後の講和条約であるキュチュク・カイナルジャ条約締結後からのオスマン帝国・トルコ共和国の外交政策が一通り網羅されている。各局面におけるトルコの時代背景も盛り込まれており、それらを見ながらトルコ外交史を把握することができる研究だと言える。

オスマン帝国の直接の後継国家たるトルコ共和国でも、もちろんこの戦争に関する研究は行われている。統一と進歩委員会 (İttihat ve Terakki Cemiyeti) を専門とし、トルコ近代史研究の大家であるプリンストン大学教授・シュクル・ハーニオール(M. Şükrü Hanioglu)も、自身の研究論文である”The Second Constitutional Period 1908-1918”⁵をはじめとする論文・著書の中でこの戦争を取り上げている。彼の研究の特徴としては、政治・経済・外交・思想といったオスマン帝国の内外全てのことを、進歩と統一委員会という組織全体とのかかわりの中で論じているところにある。彼の研究のなかでは、青年トルコ革命以降中心的な役割を担うことになった統一と進歩委員会が、この時代の対内・対外世界でも主体的な存在として描かれている。

またこのバルカン戦争ではオーストリア＝ハンガリーの存在が大きいのだが、オーストリア＝ハンガリーにスポットをあてたものとしては、現在は立命館大学等で非常勤講師をしている馬場優が著した『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争 - 第一次世界大戦への道』も存在する。⁶オーストリア＝ハンガリーがサラエヴォ事件をきっかけとして軍事的手段に訴えるようになるまでの過程を、当時のオーストリア＝ハンガリーの内的状況を踏まえつつバルカン戦争を中心にその原因を探る研究である。比較的前述の藤由の研究に似ているところではあるが、オーストリア＝ハンガリーとオスマン帝国の二国間の関係性を論じた藤由とは異なり、馬場の研究はあくまでオーストリア＝ハンガリーただ一国に焦点を当てて当代の外交問題を論じている。

以上のように、現在のバルカン戦争をめぐる研究のトレンドとしては、バルカン戦争という一つの出来事に対して、各当事国それぞれにスポットを当てることで複眼的に論じようとする傾向にある。いずれの研究も、主観にとらわれることなく客観的な分析のもとに論じられた研究ばかりである。特にヘルムライヒの研究は、バルカン戦争の時代の各国の外交を広く知ることができ、そして最も戦争のあった時期に近い時代にて行われた研究であることから、上記の馬場の研究をはじめとする多くのバルカン戦争研究にも取り上げられており⁷、この時代の研究における最も信頼度の大きい研究である。しかしこのヘルムライヒの研究をはじめとする従来の研究には、いくつか問題点も存在する。それらについては、次に論じることとする。

⁵ Hanioglu, M. Ş(2008).”The Second Constitutional Period 1908-1918” in *The Cambridge History of Turkey: Volume 4, Turkey in the Modern World*. Cambridge University press.

⁶ 馬場優(2006) 『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争 - 第一次世界大戦への道』法政大学出版局

⁷ 同書 12頁

4. 従来の研究における問題所在と本稿の構成

まず、このバルカン戦争期における外交の問題を考える際に想起すべきなのは、この戦争における中心的なアクターはどこにあったのかということである。真っ先に挙げられるのは、もちろん2度の戦争を引き起こしたセルビア、ブルガリア、ギリシャなどのバルカン諸国であろう。事実、多数のバルカン戦争研究の手本となっているヘルムライヒの研究では広範に及ぶ史料探索の中でもバルカン諸国の動向にスポットが当てられており、他の研究でも必ず取り上げられている内容である。しかしバルカン諸国はあくまでこの戦争の当事者の一方に過ぎず、この戦争を完璧に総括できる唯一の存在であるわけではない。その意味では、外交的には非常に深く関与したものの、戦争そのものには直接参戦したわけではないオーストリア＝ハンガリーなどの列強もまた同様なことが言える。戦争そのものの概念を顧みれば、当然この戦争の主要なアクターとしてもう一人の当事者が存在していなければならない。言うまでもなくオスマン帝国である。

しかし従来のバルカン戦争期の研究では、ヨーロッパにおけるバルカン諸国側のナショナリズム的史観の支持やオスマン側の圧倒的なまでの資料不足も手伝って、オスマン帝国は絶えずこの戦争においては脇役であり、またかつては同地域を支配していた圧政者のような立ち回りになっている。大半のバルカン戦争の研究では、オスマン帝国が主要なアクターとして研究されることは少ないのである。藤由の研究では、研究資料としてオスマン側の資料を用いており、彼女自身オスマン帝国自身の外交を主軸とした展開を目指しているが、それでもなおあくまで主体となったのはオーストリア＝ハンガリーのほうであり、やはりオスマン帝国は両国間の関係の中では客体的なポジションを脱することができたとは言い切れないことは否めない。⁸

オスマン帝国が主体的なアクターとして扱われている研究がないことに加えてもう一つ問題となっていることは、各研究では後の指導者的立場にある人々のことがさほど考慮されず、彼らにスポットライトを当てた取り組みが為されていないことである。この2度のバルカン戦争の最中には、当時陸軍中佐であったイスマイル・エンヴェル(İsmail Enver, 1881年-1922年)と彼の盟友であるメフメト・タラート(Mehmet Talat, 1872年-1921年)、アフメト・ジェマル(Ahmet Cemal, 1872年-1922年)らによるクーデター、そしてその3人による「三頭政治(Üç Paşalar)」の成立という、その後のオスマン帝国の命運をある種決定づける出来事が発生している。最末期のオスマン帝国の内政・外政における政策決定には、彼らの影響力というものは計り知れないものであった。そういうこともあってか、ちょうど彼らの権勢が絶頂に達する第一次世界大戦期に関する研究においては3人のことも十分に配慮された研究がおこなわれている。

しかし「三頭政治」の草創期に当たるこのバルカン戦争の時代については、彼らがまだ統一と進歩委員会という一結社の中心的メンバーであったにすぎないこともあってか、彼らの存在は統一と進歩委員会の一側面として登場するに限られている。統一と進歩委員会の研究を専門とするハーニオールの研究でも、専ら統一と進歩委員会の組織全体がオスマン帝国に

⁸ 藤由順子(2003) 1・2頁

いかなる影響を与えたかというアプローチを用いており、手紙・手記の編纂は行うものの、そこから指導者たち個人が考える理想像を読み取ることは行っていない。⁹

こうした問題が所在していることを踏まえて本稿では、後の指導者であるエンヴェル、タラート、ジェマルの3人が、バルカン戦争というオスマン帝国における一つの時代の終焉を導く出来事を通してどのような対外感情を抱き、そしてそれがどのような形で統一と進歩委員会ならびにオスマン帝国全体の外交姿勢に直結していったのかを、彼らが記した手紙・手記を紐解きながら検証する。「手記」、「手紙」というものの性質上、幾分か客観性に欠ける部分は存在するが、少なくとも彼らが実際にどのようなことを当時考え、そして何を目標として行動を起こしたのかを読み取ることはできるはずだ。

なお、本稿ではバルカン戦争の前哨戦となるイタリア＝トルコ戦争とボスニアをめぐるオーストリア＝ハンガリーと対立したボスニア危機といったオスマン帝国を取り巻く国際情勢も取り上げる。こうした国際情勢の変化は、一種の自己実現に成功した青年トルコ革命直後のエンヴェル、タラート、ジェマルの3人の動向を確認したうえで、彼らがこれら2つの出来事を通してどのような対外感情を抱くようになったのかを読み取るうえで欠かすことのできないものであるからだ。そのうえで2度にわたるバルカン戦争での動向や外交姿勢を調査し、主要なテーマとなるオスマン帝国全体のバルカン半島を中心とした対外姿勢への影響を検証する構成で論じていく。その過程で、彼らの動向とオスマン帝国の実際の外交政策の比較を行っていこうと思う。



Mehmet Talat¹⁰



İsmail Enver¹¹



Ahmet Cemal¹²

⁹ Hanioglu, M. Ş. (1989). *Kendi Mektuplarında Enver Pasa*. Der yayımları.

¹⁰ Ambassador Morgenthau's Story

(<http://net.lib.byu.edu/estu/wwi/comment/morgenthau/images/Morgen07.jpg>) 2010年11月3日閲覧

¹¹ <http://www.lib.utexas.edu/photodraw/portraits/index.html> 2010年11月3日閲覧

¹² <http://www.gutenberg.org/etext/10338> 2010年11月3日閲覧

第一章 バルカン戦争前夜

はじめに

1908年7月24日。憲法復活を求める一連の武装蜂起により、オスマン帝国はかつて廃止された憲法を復活させ、第二次立憲政と呼ばれる時代に入った。後世では「青年トルコ革命」とよばれるこの革命の中に、後に三巨頭として政治の実権を握ることになる3人の男はいた。セラーニク(Selanik, 現ギリシャ領テッサロニキ)の郵便局員でありながら、統一と進歩委員会による革命の一端を担うことになる「オスマン自由委員会」を組織した男・メフメト・タラート。そのオスマン自由委員会に参加し、その思想に共感していたオスマン帝国軍人・アフメト・ジェマル。そして統一と進歩委員会の有力幹部としてすでに頭角を現していた男・イスマイル・エンヴェルである。生まれも育ちも違うが信念を共にして走り続けた男たちの理想は、この日を以てある種達成されたのである。しかしこの出来事をきっかけに、彼ら3人の運命はもちろん、オスマン帝国そのものの運命もまた大きく動き始める。

かねてから統一と進歩委員会の内部では、委員会がパリへ亡命した時から委員会の運動路線をめぐる中央集権派と非中央集権派(地方分権派)による内部対立が存在していた。この内部対立により、統一と進歩委員会は一時期まともな運動を展開することができない状態に陥ったこともある。しかしそのような状態になってもなお両者は一步も引くことはなく、彼らは「アフデュルハミト2世の専制政治の打倒」というただ一点だけで共同戦線を張っているという呉越同舟の関係であり続けた。結局青年トルコ革命に至るまで、その凝りが取り除かれることはなかった。

青年トルコ革命が成功して自分たちの目標が達成されると、内部対立は専制体制後の新体制の方針をめぐる対立にすり替わる形で再び顕在化した。ここでも対立が解消されることはなく、結果として強引に集権派によって排斥された分権派が、国内の保守派勢力と結託して翌年に3月31日事件と呼ばれる反革命クーデターを発生させ、帝都・イスタンブルは混沌へと誘われた。

一方、この青年トルコ革命が「憲法改正」と「専制政治の打倒」という民主的意味合いを含んでいたこともあってか、海外では歓迎される出来事となっていた。しかし同様に、この革命を好機と捉える国家もあれば、体制の転覆につながりかねないと危機感と警戒心を覚える国家も存在していた。各国はそれぞれの思惑を胸に、オスマン帝国に対して新たな外交姿勢を示すようになっていく。

これはバルカン戦争よりも少し前の話。しかしこの時代は、青年トルコ革命の達成によりエンヴェル・ジェマル・タラートの3人が国際政治・国際外交の表舞台へ登場するようになる時代でもある。3人はバルカン戦争以前のこの時代の中でどのような体験をし、またそれらを通してどのような考え方を構築することとなったのか。本章ではバルカン戦争の前夜と称して、バルカン戦争以前のオスマン帝国を取り巻く国際情勢も取り上げながら、バルカン戦争中の外交の土台となる部分を検証する。

第一節 青年トルコ革命後のオスマン帝国

(1) トロツキーの予見と二面的危機

青年トルコ革命の達成は、アブデュルハミト2世の専制政治に終焉をもたらしたとともに、「民主的な立憲君主制国家」としてのオスマン帝国の始まりを意味した。またこの革命の成功は、スルタンの絶対的権力の下で繁栄を極めたオスマン帝国が真の意味で民主化された出来事として世界に衝撃を与えるものともなった。「キエフスカヤ・ムィスリ(キエフ思想)」の戦時特派員としてバルカン戦争中にルポを行ったレフ・トロツキー(Lev Davidovich Trotsky, 1879年-1940年 後のボリシェヴィキ革命家)は、この青年トルコ革命の成功について同誌に寄稿した自身のルポの中で次のように述べている。

歴史の次の時代にトルコでわれわれは何を見ることになるのか。それを論じて役には立つまい。ひとつ明らかなのは、革命の勝利が民主トルコを意味することだ。民主トルコは間違いなくバルカン連邦の基礎になるだろう。そしてバルカン連邦は、近東の「蜂の巣」から、不幸な半島のみならず全ヨーロッパに雷雲をもたらしている資本主義や王朝の陰謀を永遠に一掃するだろう。スルタン専制の復活とは、トルコの歴史的な死と、死んだ肉片の壮大な堆積でしかない国家の存続を意味するだけだ。反対にトルコ民主主義の勝利は平和を意味する。¹³

トロツキーが語った「民主主義の勝利＝平和」という図式は、革命成功時に統一と進歩委員会に参加したメンバーたちが思い描いたものと合致している。統一と進歩委員会の中心にいたタラートもまた、自分たちの行動についてこのように振り返っている。

我ら青年トルコの活動とは、帝国に平等(müsavvat)、自由(hürriyet)、そして正義(adalet)という理念を取り入れようという願望があって発露されたものであった。この原則は、確かな目的に則って青年トルコ人、アラブ人、ギリシャ人、アルバニア人、トルコ人のような祖国に住まう全ての帝国臣民を団結させることを、そして同様に、この団結によって愛する同胞たちの安全と進歩のために将来協働することができることを考えてのものだった。¹⁴

ここで彼が言っていることは、彼らの目指す理念は専制体制時代では成し得ない近代的思想

¹³ レフ・トロツキー. (1909年). “Novyj Turchiya”. *Kievskaya Mysl* (3) in バルカン戦争 (1926年), (清水昭雄, Trans.) 25頁

¹⁴ Bolayır, E. (1946) 14頁

に存在するのであり、それを一般人のレベルにまで広げてゆくところに彼らの活動の意義があった。統一と進歩委員会が一番の狙いというものも、青年トルコ革命のなかで達成した成果であるオスマン帝国憲法(Kanun-ı Esasi)の復活であり、憲法復活によって同憲法が理念とする「ムスリムと非ムスリムの平等化(第8条)」、「上下両院からなる議会の開設(第42条)」が実現されることによって全国民を一致団結させる「オスマン主義」というイデオロギーを確立させることにあった。このイデオロギーにより、ある種多民族国家の宿命といえる民族蜂起に悩まされ続けているオスマン帝国を救う手立てとなることを望んだのである。

しかし結局のところ、トロツキーやタラートが語ったように民主化されたオスマン帝国がバルカン半島の平安を導く存在になることもなく、そして青年トルコ革命によって実現できたと考えていた彼らの願望が既存の問題を一掃させるような出来事につながることもなかった。彼らが狙っていたようにオスマン帝国領内で頻発していた反乱が沈静化したわけでもなく、ましてやかつてのように「オスマン」という旗印のもとで全民族が団結を誓うようなことも起こらなかった。むしろこの民主的な立憲革命の達成によって、内面的・外面的の二面から湧き上がるさらなる危機に対応しなければならない状態に陥るというパラドックスを生み出したのである。

オスマン帝国の内面で起こった危機として挙げられるのは2つ存在する。1つ目は、統一と進歩委員会のメンバーが予想していたことに反して、自由と平等によってオスマン帝国の非ムスリム系の人々が統一と進歩委員会の在り方に異を唱えるようになったことであつた。20世紀初頭までにオスマン帝国は数々の国に独立を許していたが、それでも多くの民族が残存していたこともあり、未だに多民族国家としての性質を脱却できずにいた。だが自由と平等を体現するこの革命は、オスマン帝国に残存する民族にまでも「オスマン」という枠組みから脱却するチャンスを与えたのである。特にこれが顕著に出たのはギリシャ系オスマン人たちであつた。彼らは、統一と進歩委員会が目的を実現できていないことを知ると、暴力で以て委員会の在り方に異を唱え、メンバーの職務への暴力的阻害を図る者も現れた。「オスマン」というフレーズに神経質になった議員・ボショ・エフェンディ(Boşo Efendi)が、「オスマン銀行」の「オスマン」をめぐる無礼な言動を行うという事例もあった。¹⁵しかしこの問題が厄介だったのは、ギリシャ系オスマン人全員が最初からこぞって同じ方向性で反対・抵抗を行ったわけではなく、彼らの思想によって幾分か抵抗の意図に差異があったのに、最終的には「同じ民族」として単一の勢力として結集し、政府の計画に反対していったところにあった。保守派のギリシャ系オスマン人にとっては、自由と平等は彼らの利益や意図に反するところにあつたし、ヘレニズムの理想を掲げる者たちにとってはオスマン主義を攻撃する絶好の機会となった。タラートが望んだ「全帝国臣民」への自由と平等は、彼の願いとは裏腹に特定の人の特権や利益、意図のために利用されたのである。

もう一つは、統一と進歩委員会内での派閥闘争が革命の達成によって蒸し返されてしまい、委員会内に分裂をもたらしたことであつた。元来統一と進歩委員会内では、「オスマン帝国憲法の復活」と「攘夷」を掲げてパリに亡命し、地下新聞『メシヴェレット(協議会)』の編

¹⁵ 同書 15頁

集を行っていたアフメト・ルザ(Ahmet Rıza, 1859年-1930年)が率いる中央集権派と、「帝国内の国民との融和政策」を第一に掲げ、スルタンの娘婿でありながらヨーロッパへ亡命していたサバハッディン皇子(Prens Sabahaddin)率いる非中央集権派が対立を重ねていた。最終的にこの派閥闘争は集権派が多数派となることでその明と暗を分けるようになるのだが、その後も非中央集権派は革命後の下院選挙で「自由党」を組織し、ギリシャ系やアラブ系といった諸外国系オスマン人や保守派と結託することでわずかながら存在し、サバハッディン皇子は集権派優勢という苦しい状況のなかで自身の主張を貫き続けた。

以上のように青年トルコ革命後の内面的危機は、統一と進歩委員会が掲げた理念そのものと委員会が内包していた問題によってもたらされた。青年トルコ革命の翌年に発生する「3月31日事件」とよばれる反革命クーデターにつながったことは、この2つの危機が良い具合に結合して発生した、ある種必然的な出来事であった。そしてこのクーデターの鎮圧は、「行動軍(Harekat Ordusu)」の司令官であるマフムート・シェヴケト・パシャ(Mahmud Şevket Paşa, 1858年-1913年)を中心とする体制の構築に大きく影響を与えた。

一方、内面的危機と同様にオスマン帝国を襲った危機は外面からも存在していた。トロツキーが「ヨーロッパ外交の申し分のない微笑みから、内政の困難に乗じてトルコを細かく噛み裂いてしまおうとする帝国主義のどう猛な歯」と表現した¹⁶ように、オスマン帝国の混乱に乗じて、大国が各々の思惑を秘めてオスマン帝国への介入を始めた。そしてこの外面的危機は、その後の統一と進歩委員会、ならびにエンヴェル、タラート、ジェマルの3人の外交観において非常に重要なファクターとなる。

革命後に発生した外面的危機としてまず発生したのは、1878年のサン・ステファノ条約で自治国となったブルガリアが、東ルメリアを名実ともに支配して完全独立を宣言したことであった。そもそもサン・ステファノ条約による大ブルガリア公国の成立に際し、南下を目指すロシアとそれを阻止したいイギリスの外交的争いが存在しており、同年に開かれたベルリン会議でもロシアの南下を阻止できるかどうか争点となっていた。サン・ステファノ条約時の大ブルガリア公国の領土は、北はドナウ川からセラーニクのすぐ北にまで及び、国土が黒海とエーゲ海に接する国名の「大」にふさわしい広大な領土を形成していた。もちろんこの領土策定には、露土戦争で勝利したロシアの意向がふんだんに盛り込まれていた。クリミア戦争以降黒海北部に海港を持つロシアにとって大ブルガリア公国の成立は、同じスラヴ系国家であるブルガリアを足掛かりすることで長年にわたって黒海の入口・ボスポラス海峡をオスマン帝国に握られていたことを打破し、直接黒海艦隊を地中海へ送り込むことができるチャンスでもあった。しかしこれに危機感を覚えたイギリス・オーストリア＝ハンガリーはロシアの野望をくじくことを画策し、結局ベルリン会議で大ブルガリア公国は3つに分割されることになった。そのうち東ルメリアは自治州として、マケドニアは元の通りオスマン帝国に返還され、残った領土はブルガリア自治公国としてブルガリアの手に渡った。¹⁷一応自治国が成立したとはいえ、これには当時のブルガリア大公・アレクサンドル(Alexander

¹⁶ レフ・トロツキー、(1909年)、25頁

¹⁷ R.J.クランプトン(1997)、116頁

I, 1857年-1893年)や後の大公・フェルディナンド(Ferdinand I, 1861年-1948年)をはじめとして、多くのブルガリア人は満足するなどできなかった。その後ブルガリアは、自治州となった東ルメリアを1885年に合併を宣言¹⁸し、1896年からフェルディナンドは自身の独裁体制を確立¹⁹してオスマン帝国から領土を獲得するチャンスを虎視眈々と狙った。そのためにブルガリア軍は、フェルディナンドのもとで近代化を果たした。この近代化されたブルガリア軍は、のちに第一次バルカン戦争においてオスマン帝国に対して怒涛の快進撃を続け、オスマン帝国を始めとする多くの国々にとてつもない脅威を与えるとともにブルガリアに多くの領土を獲得するチャンスをもたらすこととなる。この青年トルコ革命は、フェルディナンドの大ブルガリア公国の実現という願望を満たすにはあまりに絶好の機会であり、大ブルガリア公国の成立にむけた布石となる出来事となった。そして今回の独立宣言には、強力なバックアップが存在した。ベルリン会議でブルガリアの拡大に反対したオーストリア=ハンガリーである。

ブルガリアの独立宣言の翌日。オーストリア=ハンガリーは、ベルリン会議で管理下に入れたボスニア・ヘルツェゴビナの2州を併合した。いわゆる「ボスニア危機」である。オーストリア=ハンガリーがボスニアとヘルツェゴビナを併合するにあたり、オーストリア外相・エーレンタール(Alois Lexa von Aehrenthal)は、駐イスタンブル大使のパラヴィチーニ²⁰や利害関係があるロシアの外相・イズヴォリスキー(Alexandr Petrovich Izvolskii, 1856年-1919年)といった外交筋の人物と接触し、周到に準備を重ねてきた。特にバルカン半島における天敵となっているロシアとは、ブルガリアの拡大にて明確に示されたボスポラス・ダーダネルス海峡の通行への渴望との兼ね合いを見定めながら交渉を行った。交渉の末、エーレンタールとイズヴォリスキーは青年トルコ革命後にそれぞれの要求を達成させた。²¹

しかしオーストリア側には、もう一つどうしても解決させないとならない問題が存在した。その問題は実は青年トルコ革命に際して併合を行ったことにヒントがある。オーストリア=ハンガリーもまた、広大な領地の中に数々の民族を内包する多民族国家であった。そして隣国には、19世紀以降強力なナショナリズムを掲げて領土拡充と狙うセルビアの存在があった。彼らからすれば、「ムスリムと非ムスリムの平等化」をうたうオスマン帝国憲法の成立は、ハプスブルク家による支配体制を覆しかねないものであるし、セルビアが大セルビア主義を以て領土拡充させることを正当化させ得るものでもあった。そのためオーストリア=ハンガリーは、セルビアが奪取する前にボスニアとヘルツェゴビナを併合する必要があった。

ブルガリアの事例も似たような理由がある。確かにブルガリアは国家として独立を果たすことを望んだものの、革命によってオスマン帝国がいかなる存在へと生まれ変わるのかはやはり気がかりであった。もしオスマン帝国が革命によって民主的で強力な国家になってしまったら、ブルガリアもオスマン帝国が陥った状況に突入する危険性があった。自身の独裁体

¹⁸ R.J.クランプトン (1997). 131頁-137頁

¹⁹ 同書. 第6章 フェルディナンドの独裁支配 1896~1918年(163頁-)

²⁰ 藤由順子(2003) 30頁

²¹ Taylor, A. J. (1990). *The Habsburg Monarchy 1809-1918*. Penguin Books.

制を築いたフェルディナンドが公国からわざわざ王位について王国へと格上げさせたのには、こうした危険性を抑止するために自身の絶対性をより強調する意図が見られる。

オスマン帝国は二面的危機に直面したが、その実はオスマン側からも付入る隙は存在していた。しかし統一と進歩委員会は、次に述べる理由によりそれを活かすことはできなかった。

(2) 革命後の革命志士たち

青年トルコ革命の成功は志士たちの願望をかなえるものとなったが、同時に二面的危機を発生させることになり、さらにそれらに対処できないという委員会の姿を晒すことになった。彼らがこのような状況に陥ったのには、いくつか理由がある。

まず一つ目にあげられるのは、統一と進歩委員会の構成員全員が必ずしも同じ思想を共有できていたわけではなかったことがあげられる。これは先にも書いた内面的危機の一つとして挙げた集権派と非集権派の対立とは別に、委員会そのものの構造にはもう一つ問題があった。この青年トルコ革命を成功させたのは確かに「統一と進歩委員会」という組織であるが、青年トルコ革命を実行したのは、あくまでニヤーズィやエンヴェルたちセラーニクの第3軍団の若き軍事エリートたちがその主体であった。しかし実行したメンバーの中には、彼らのように士官学校卒のエリートばかりではなく、たまたま軍団に配属されていた叩き上げの兵卒たちも多く存在したし、革命中にはエディルネの第2軍団やスルタンの派遣した鎮圧部隊が寝返って参加している。事前に支部を設置していたエディルネの第2軍団はまだしも、彼らにとって外様となるスルタンの鎮圧部隊には、エンヴェルなどはもちろん、タラートのようなすでに指導的地位にいた者の息でさえかかっているのに等しい状態にあった。一部の兵士には、ただ上官の意向により自分たちが何をしようとしているのかさえ分かっていない者さえいた。そうした者たちの一部は、革命後になって統一と進歩委員会が進歩的政策を打ち出そうとしていることに気づき、また自身の願望を達成されないことを理由に、同じく反抗的姿勢をとる非集権派のメンバーなどとともに反抗を始めるようになった。

もう一つ問題だったのは、その実行に移した第3軍団のエリートたちでさえ、理念の追求に固執してその他の準備を行ってなかったのにも関わらず、ただ周囲の状況に流される形で武装蜂起を起こしてしまったことだった。そもそも彼らが武装蜂起に踏み切ったのには、革命前の1905年に日露戦争で日本がロシアを撃破し、そしてそれに触発される形で翌年の1906年にイラン・ガージャール朝にて立憲革命が発生したというように、彼らの熱意を焚きつける出来事が立て続けに発生したという時代背景がある。特にガージャール朝での立憲革命は自分たちが目指すものに近いということから、統一と進歩委員会の運動へのさらなる原動力となった。そんな革命への機運が高まっていた1908年6月、彼らはイギリス国王・エドワード7世とロシア皇帝・ニコライ2世がマケドニアを中心としたオスマン帝国の分割を協議したという情報を手に入れることになる。結局この協議が帝国解体の危機と捉えられ、統一と進歩委員会が革命を起こす直接のきっかけとなったのだが、元々内部対立によりまともな活動を行えていなかった彼らが、わずか3年の間に発生した出来事に触発され、そして革命を20日で完遂させてしまった。イランの立憲革命が完遂するのに5年かかったことを考えれば、この結果はあまりに性急なものである。タラートのように志を持つ者こそ

多かったものの、彼らは内部で統一された単一の政治的・外交的・社会的なビジョンでさえろくに持たぬ、まさに丸裸な状態で国家の命運を握る存在になってしまったのである。この事については、この革命で「自由をもたらす英雄」として賞賛されたエンヴェルもニヤーズィも重々承知であり、トロツキーの取材のなかでもこれを認める発言をしている。²²

目標を達成させた今、彼らに必要とされるようになったのは誇り高き理想ではなく、現実を直視したビジョンであった。彼らは統一と進歩委員会のイデオロギー組織としての体質を脱却するために、3月31日事件を通して自身の在り方を模索するようになった。青年トルコ革命でそれぞれ役割を果たしたエンヴェル・ジェマル・タラートの3人も、3月31日事件以降それぞれ違う形で自身の在り方を模索し始める。

ジェマルの場合、自身の理想像をより確かなものにするため、3月31日事件以降統一と進歩委員会の首脳陣をはじめとする多くの人物とより深い関わりを持ち、論議を重ねるようになった。特に彼が交流を重ねて自身の参考としたのは、すでに統一と進歩委員会とは対立関係にあった非集権派のサバハッディン皇子であった。彼らの交流は、ジェマルがイスタンブールの第1軍団の団長に任命されてイスタンブールの治安維持の任を任されてからより積極的なものとなったが、ジェマルとサバハッディン皇子の関係については彼自身の回想録²³の中にも次のようなエピソードが語られている。

そもそもジェマルがサバハッディン皇子と関わりを持つようになったのは、3月31日事件の時のことだ。というのも、3月31日事件でサバハッディン皇子は事件を指導したとして行動軍に逮捕されたのだが、皇子をその時逮捕した人物こそ「行動軍」の一部隊を率いたジェマルだった。しかしサバハッディン皇子の逮捕は、「行動軍」の司令官であるシェヴケト・パシャにとっては想定外のものであった。ジェマルの回想録によれば、シェヴケトは皇子の逮捕の報を受けるとすぐに、他の政治家を敵に回す行為だとして皇子の逮捕は不適切な行為であったと陳謝し、皇子たち非集権派のメンバーとは対立すべきではないという持論を語っている。²⁴しかしこの逮捕というのは、実はサバハッディン皇子が望んだものでもある。統一と進歩委員会に在籍していた頃より、自身は皇族の一員でありながら、非常に壮大で傲慢に等しい言動を繰り返し、そして絶えず陰謀と暗殺を張り巡らす策士でもあったサバハッディン皇子は、ルザ達集権派との内部対立が進行する中で、ある日突然今までの陰謀と計画を断念してまで自身の保身を望むようになった。そうになったのは、実はジェマルがサバハッディン皇子を捕える旨のある種脅迫的な発言をしたことだと、タラートがジェマルとともにベルリンへと赴く道中でおどけながらジェマルに打ち明けた²⁵のだが、ジェマルは以降サバハッディン皇子と度々話をして、時には直接、時にはサバハッディンの兄弟であるリュトフッラー皇子(Prens Lütfullah)を介した伝言で論議を重ねるようになった。彼がこの中で見出したことは、集権派と非集権派の目指す根本的な方向性は違うものの、実際のところはサバハッディンが自身の著書の中で集権派の人間を「全身に血を浴びて血みどろになっている人

²² レフ・トロツキー、(1909年)、21頁

²³ Cemal, B. (1959). *Hatıralar Bahriye Nazarı ve 4. Ordu Kumandanı Cemal Paşa*. Selek Yayınları.

²⁴ 同書 32頁

²⁵ 同書 32頁

物」と主張した²⁶ような集権派の独裁性と過激性を非集権派も似たように秘めており、もし非集権派が権力を握ったとしても、彼らの意思は万人に受け入れられることなく現実世界で起こった同様なことが発生する状況にあったということである。つまりジェマルは、集権派・非集権派の内部対立はもとより意味を成さないものであり、いずれにせよ理想を盲信するばかりの自分たち自身の詰めの甘さ、無知さ、そして現実を顧みない姿勢によってオスマン帝国の現状を変える存在に統一と進歩委員会はまだ達していないと考えたのだった。

サバハッディン皇子をはじめとしたこうした交流の中で自身を反省してか、これ以降彼は自身の理想を引き続き持ちつつも、政治・社会では市民レベル、軍事では一兵卒レベルにまで及ぶ綿密な観察を行い、常に現実的な思考に則った行動をとるようになる。それは外交面でも言えることで、彼は常に現実的な外交戦略を目指すようになり、理想主義外交戦略を推進させていくエンヴェルとタラートとは一線を画す存在となっていくのである。

タラートの場合、革命後に彼はまず自身の理想を見直すことにした。彼の「全民族のオスマンによる統合」という理想は、図らずも対象となる民族の独立と反乱を頻発させるチャンスを与えることになってしまった。そこで自身の理想をもう一度熟考することで、彼自身の理想のどこに甘さがあったのかを把握しようとした。特に彼がこのとき注目したのは帝国内で盛んな反抗を見せるギリシャ系オスマン人ではなく、今回新たに台頭してきたブルガリアと、この革命でホットになったバルカン方面とは正反対のカフカス方面で活動を展開していたアルメニアの存在であった。タラートはこの革命の発生に際し、帝国内の各民族を次のように評している。

アブデュルハミトの専制政治に際し、ギリシャ人たちはこの政権が続けば国家が確実に崩壊するという結末を分かっていたし、自分たち自身が特にルメリにおける彼の後継者となるだろうと考えていた。(中略)

ブルガリア人とアルメニア人は、ヨーロッパ諸国の干渉に乗じて自分たちの独立を確かなものにするという目的で、アブデュルハミトの専制政治を支持していた。

クルド人とアルバニア人は、宮殿(オスマン帝国による支配)の庇護下へ避難することで、政府から物資を得て個人的に巨大な利益を手中に収めていた。

アラブ人たちに至っては、これらが自身の利益を内部からキリスト教徒やムスリムたちのいる土地へ流出し、一部の人間に特権が与えられるようになると考えていた。このように、自身の利益を確かなものにすることを画策していたアルバニア人、クルド人、そしてアラブ人も、私が上層部で議論をしているメンバーに含まれていた。²⁷

彼の考えでは、ブルガリア人とアルメニア人は周辺国からの介入によって自身の独立を果た

²⁶ 同書 33 頁

²⁷ Bolayır, E. (1946). 13・14 頁

すために、アブデュルハミトの専制政治に賛同をしている民族であるにとらえられた。しかし彼らはオスマン帝国憲法の復活という新たなチャンスを得ることで、政府への反抗と外国からの干渉に乗じて独立を確保するための動きを見せるようになった。やはりここでも自身の理念が、独立という方向で用いられたということを改めて再認している。また3月31日事件に次いでアナトリア南部のアダナで発生したアルメニア人虐殺事件・アダナ事件(Adana hadiseleri)についても、彼自身が非常に注意深く調査を行った。彼はトルコ人とアルメニア人の間には一種の友情(dostluk)が存在しているとも考えていた²⁸ため、事件の真相をはっきりさせて然るべき場合にはアルメニア人との和解を目指した。しかし、タラートは革命後の動乱の中でも、自身の崇高な理想を捨てることはしなかった。むしろ彼の場合、そのあまりに崇高な理想故に彼の中で新たなジレンマを抱えるようになる。崇高な理想を穢されたことに対して厳しい態度で対処する国家運営に携わる人間としての在り方と、厳格な対処こそ理想に反するとして理想を貫くために妥協的な態度を示して許す理想主義者としての在り方の線引きをどこに置くかということである。事実彼は、アダナ事件やルメリで発生した殺人事件がムスリムによる犯行であると言われた事に関して、ムスリムの関与を完全否定するのではなく、これらの事件がアルメニア人やブルガリア人が自身の政治的意図をもって行われたのだということを厳格に述べ、ムスリムの犯行であれアルメニア人の犯行であれ、虐殺の実行者に対してそれ相応の罰を課したいとした一方で、とにかく自身の国家運営に携わる人間としての使命と政治的目的を忘れてしまいたいという旨の発言をしている。²⁹

その態度は、1911年3月に発生するアルバニア蜂起にも似たものが出る。3月31日事件以降、事実上の最高権力者となったシェヴケト・パシャはこの件に関して強硬な対応を示したが、タラートはアダナ事件と同様なことを考えた。シェヴケトの言う通り、国家運営の人間としてここは徹底した対応をすべきであることはタラートも分かっていた。ブルガリアが独立し、今ここでアルバニアの独立を許すようなことがあつては、オスマン帝国が革命によって弱体化したという証明を周辺地域、特に独立の機運が高まっている地域に晒すことにもつながりかねないからだ。しかし元より帝国民へ自由と平等をもたらすという理想に則って革命を起こしている以上、蜂起の鎮圧は理想に反するということを意味した。葛藤を重ねながら、タラートはこの件に関しては妥協的対応を示唆するようになった。委員会当局としても、アルバニアはかねてから最も信頼関係にあったところであった故、内務大臣であったタラートを辞職させることはあっても、方向性としてはタラートと似たような妥協を示していた。当然シェヴケトはこれに不信感を抱き、統一と進歩委員会はこのタラートの妥協的態度によって潰されかねない状況にまで追い込まれている。

以上のようにタラートは、革命後の動乱を通して現実を直視するようにはなったものの、なおも自身の理想と現実のジレンマに苦しむ存在となった。彼のこの中層的存在感は、その後エンヴェルやジェマルと「三頭政治」を敷く上で、理想を貫くエンヴェルと、理想は持ち続けているが現実主義的思考を持って行動をおこなうジェマルの緩衝材としての役割を持

²⁸ Bolayır, E. (1946). 15 頁

²⁹ 同書 16 頁

ったが、その一方で彼の意向次第で国家の方針が決まりかねない不安定要素ともなったのである。この彼の不安定さが、第一次世界大戦直前までのオスマン外交の路線決定において非常に重要なキーポイントとなってくるのは言うまでもない。

タラートがそうして自身の信念的ジレンマに陥るようになったちょうどその頃、イスマイール・エンヴェルは己の見聞を広めるための旅に出ていた。

(3) エンヴェルとアルバニア蜂起

1911年3月19日。彼はイスタンブルでシェヴケト・パシャと対面していた。エンヴェルとシェヴケトは、3月31日事件では「行動軍」の司令官とその参謀という関係で事件の鎮圧にあたっており、それ以来2人は様々なことについて相談を繰り返すようになった。この日エンヴェルは、シェヴケトからマケドニアへ行く必要性を説かれたうえで国家とはいかなるものであるかを知り、それに殉ずる必要があるという事で、セラーニクやマケドニアのマナストウル(Manastır, 現マケドニア領ピトラ)、ティクヴェシュ、アルバニアのシュコドラ(Shkodra, トルコ語では İşkodra)などに約3カ月にわたって行くことになる。³⁰この3カ月の間で彼は33通もの手紙を書いているが、その一つ一つには当時の天候や訪問先の都市の様子を事細かに書いている。たとえば彼はシェヴケトから出立するように言われた2日後には、ブルガリアとの利権がぶつかっているサル・ルメリ(Salı Rumeli)に行っているが、そこでは「今日は天気がとても良い(Bugün hava çok güzel.)」と天気のことを言及しているし、今回の出立がまるで楽しい冒険であると自分で言い聞かせているようなことも書き綴った。³¹また時には移り変わる景色にメランコリックな心情を重ね合わせ、時には現地の人々と触れ合いながらそこで感じ取った思いのたけを記している。

同年4月14日から滞在を始めたセラーニクでは、まずプロパガンダの必要性と他国のプロパガンダの対策の必要性を実感させられている。セラーニクにはすでに他国民によって貼られたと思われるプロパガンダがあり、エンヴェルもこの時自分たちを宣伝するプロパガンダを用意して、対策を行っている。³²このプロパガンダの一件から、エンヴェルは国境沿いの地域におけるプロパガンダの影響力の大きさを知ることができた。

また彼はセラーニクで、自身にとっても思い出深いものとなる出来事と遭遇している。セラーニクで彼は軍の指揮官という自分としては不釣り合いに感じていた地位で400人が集う晩餐会に参加した。そこでは他の部隊の武官たちと食事をし、ハンガリーやトルコの行進を見物していたのだが、彼はそこで現地の子供たちから自分のための行進と彼の栄誉をたたえて喝采を送るというサプライズを受けた。これにはエンヴェルもいたく感動したようで、自身がいかに恵まれた存在であるかという事を再認した出来事となった。³³

もちろん彼はこの旅路の中で現在の外交状況を知る機会も得ている。オーストリアによる占領後のボスニアの在り方について書かれた本を読んで、エンヴェルは現在のマケドニアの

³⁰ Hanioglu, M. Ş. (1989). 35 頁 1. İstanbul, 19 Mart 1911

³¹ 同書 35 頁 2. 21 Mart 1911

³² 同書 36 頁 3. Selanik, 14 Nisan 1911

³³ 同書 37 頁 5. 17 Nisan 1911

状況とボスニアの状態が非常に近いという事を知ることができた³⁴し、セラニクやマナストウルで将校たちと度々会合を開いている。そして1911年4月21日ごろから、エンヴェルはアルバニア蜂起について言及を手紙の中で行うようになっていく。³⁵彼はこの反乱に携わることで、自身の外交観、特にバルカン半島における外交戦略を形成させていく。

このアルバニア蜂起で主体となったのは隣国・モンテネグロの支援のもとで反乱をおこしたカトリック系アルバニア人約4000人であり、ムスリム系アルバニア人はオスマン帝国側の味方となっている。ムスリム系アルバニア人の総数が200万人であることを考えれば、4000人のカトリック系アルバニア人の反乱を鎮圧することはたやすいと言えるので、反乱そのものにエンヴェルが心配をすることはなかった。しかしこの自身の手紙³⁶にも書いたように、彼が本当の意味で恐れたのは、アルバニア蜂起の鎮圧に乗じて支援したモンテネグロへ侵攻することによって、他のバルカン諸国全体との戦争に発展することであった。特に彼が気にしたのは、当時バルカン半島には大セルビア主義を掲げて勢力拡大を拡大させようとしているセルビア王国の存在であった。当時のセルビア国王・ペータル1世(Peter I, 1844年-1921年)のもと、セルビア軍は大幅な近代化が果たされ、オスマン帝国ばかりかオーストリア＝ハンガリーにも脅威を与えるほどの精強さを備えるようになった。この軍を駆使して広大な領地を有する強国となったセルビアが、例えばもし新興国でありながら強国としての潜在性を秘めるブルガリアとも同盟を組むようなことがあれば、オスマン帝国にとっては脅威となりえる存在となると考えていた。エンヴェルはこの時、バルカン諸国が「対オスマン」の名の下で連合した時の危険性を実感したのである。

しかし、この時は結局バルカン諸国が連合するようなことはなかった。当時のセルビアは、青年トルコ革命時にオーストリア＝ハンガリーが勝手に併合したボスニア＝ヘルツェゴビナをめぐる対立を繰り返す状況にあり、すでに1909年2月の段階でオスマン帝国側と協定を結び、ノヴィバザール地方の返還と賠償金の支払いが完了している³⁷ボスニア＝ヘルツェゴビナを取り返せないでいるニコラ・パシッチ(Nikola Pashitch, 1848年-1926年)内閣には退陣の危機が迫っている状況にあった。エンヴェル自身は、このパシッチ内閣の動向によってオスマン帝国のアルバニア蜂起の結末を決めるとも考えていたのだが、³⁸エンヴェルにはいくつか勝算があった。まず彼はこのセルビアの動向は、こちら側から攻撃を仕掛けられない限りはアルバニア蜂起には介入できないと考えていた。というのも、彼にはセルビアはオーストリア＝ハンガリーとの交渉が難航することが分かっていたし、交渉が確実に決裂することが分かっていた。青年トルコ革命後に発生したボスニア危機の処理を担当していた人物が他ならぬこのエンヴェルであり、ボスニア危機の動向は逐一把握していたのである。³⁹このようにエンヴェルは、他の委員会メンバーが把握しきれていない中で様々な経験や友人から

³⁴ 同書 38頁 6. 17 Nisan 1911

³⁵ 同書 40頁 8. 21 Nisan 1911

³⁶ 同書 53頁 19. Selanik 7 Mayıs 1911

³⁷ 藤由順子(2003) 36頁

³⁸ Hanioglu, M. Ş. (1989). 53頁 19. Selanik, 7 Mayıs 1911

³⁹ 藤由順子(2003) 40頁

の情報を通して自分たちの敵・味方を的確に区別しており、会合を通してアルバニアおよびその周辺地域を担当する武官たちが敵対勢力への準備を行うようにした。

またエンヴェルは、アルバニア蜂起を通してオスマンのあるべき外交像についても考え始めている。オスマン帝国がいかなる場面においてもドイツに同調しようとしていることを察知するとともに⁴⁰、いざバルカン諸国(特に敵対関係が露見したモンテネグロ)と戦争を始める時に、どのような同盟を持ってこれに当たるべきなのかを模索した。エンヴェルが出した解答は、モンテネグロが将来ブルガリアと同盟を締結するという事を見越したうえでのルーマニアとの同盟であった。当時のルーマニアは、カロル1世(Carol I, 1839年-1914年)を王に据えた王国であり、カロル自身がドイツとは縁のあるホーエンツォレルン=ジグマリンゲン家出身だったことから、ルーマニアは親独路線を推し進めていた。オスマン帝国がこのまま親独路線へ進むようになれば、同じ方向性を持つルーマニアは同盟に応じてくれると考えた。さらに彼の場合、ルーマニアにはとても親しく、トルコ最良の友人がルーマニアの軍務大臣であったことから、同盟の締結の可能性は彼にとってはより現実味のあるものだった。

そしてルーマニアを引き込むと同時に、エンヴェルはドイツを自分たちの後ろ盾にすることを考えた。ドイツを後ろ盾にすることができれば、オスマン帝国にとっては強力なバックアップが存在することになり、ドイツにとってもイギリスを相手取ってヨーロッパ全体で発生するだろう戦争にもオスマン帝国が味方するという、相互に利益をもたらす同盟が形成させることができると目論んだのである。

こうしてアルバニア蜂起の時期には、エンヴェルの中に「ドイツ=オスマン=ルーマニア同盟」の構想とそれまでのプランが出来上がっていた。この同盟案は、彼自身の経験と情報に基づいて考えだされた構想であり、そこには机上の空論ばかり立て続ける理想主義者としての従来のエンヴェル像とは異なる姿が見られる。とはいえ彼がやはり強い愛国心を持つ情熱家であるのは間違いなく、彼は手紙の中で次のような言葉を記している。

(中略) 親愛なる友よ、トルコ人がいかにして考えたのかをご覧になりましたか！だが繰り返し言うのだが、これは私がドイツを愛するという感情論によって至ったものではありません。それどころかこの同盟関係が、私が愛する祖国の民に危険が及ばないという我々にとって有益なものであるが故であり、また両国が利益をともに享受し、そして末永く両国がともに進歩していくことを可能にするものであるが故であります。私はハンス⁴¹と議論して触れ合いたいと思っています。国家を統合させようという感情が現れたからではありません。私の個人的な考えと国民の利益とは何ら関係はない。もしもドイツが突然わが祖国の獰猛な敵になったとしたら、私は貴方の最も誠実かつ最も自己犠牲的な友人としてあり続けるつもりです。⁴²

⁴⁰ Hanioglu, M. Ş. (1989). 58 頁 23. İstanbul, 14 Mayıs 1911

⁴¹ ここでの「ハンス」とは、彼の一友人の名を表すものではなく、オスマン帝国と同盟関係となるドイツ人全般のことを指したのではないかと考えられる。〔小学館『独和大辞典』より〕

⁴² Hanioglu, M. Ş. (1989). 61 頁 27. 27 Temmuz 1911

エンヴェルにとってアルバニア蜂起という事件は、彼に自分たちの周囲で起こっている現実を見せつける事件となったと同時に、彼を理想に燃える革命家という枠組みから、理想は貫きつつも絶えず現実にも気を配る政治家へと昇華させ、さらに政治家としての素質をより高度なものへ変化させるきっかけとなる出来事であったと言える。現実には縛られることのない彼の理想は、現実を見させることによってそれを確証のあるものにしたのである。

エンヴェル、タラート、ジェマルはこうして革命後に自身の在り方を再考した。そしてそれを試される機会というのは、アルバニア蜂起からわずか数か月後に突然彼らのもとへ舞い込んできたのだった。

第二節 イタリア＝トルコ戦争

(1) 後発的帝国主義国家・イタリア

彼らを試す機会というのは、帝都・イスタンブルより地中海を隔てた北アフリカ・トリポリタニア(Tripolitania)の地にあった。オスマン帝国ではトラブルスガルブ(Trablusgarp)と呼ばれたこの地は、キレナイカ(Cyrenaica)、フェザーン(Fezzan)とともに16世紀以降オスマン帝国がこの時代まで唯一保持することのできた、オスマン帝国最後のアフリカ領であった。トリポリタニア自体本国に比べると開発はあまり進んでおらず、また本国政府から遠距離に位置することから影響力が小さいため、かつて半独立状態のカラマンル朝(Karamanlı Hanedanı, 1711年-1835年)が成立することもあった。この時代にもなってくるとオスマン帝国は、この低開発の地にかつての世界帝国としてのオスマンの名残を重ね合わせることで、戦略的・象徴的な価値を見出すようになっていた。⁴³このトリポリタニアの地に食指が動いて獲得に乗り出した国家があった。トリポリタニアとはちょうど地中海をはさんだところに位置するイタリア王国であった。当時の世界的潮流からすれば、イタリアは誰がどう見ても後発的な帝国主義国家に位置する国家であった。イタリアがなぜ後発的な帝国主義国家になってしまったことを知るには、「イタリア王国」というものがいかにして建国されたのかを知る必要がある。そしてこのイタリアの後発性こそが、後の対オスマン外交およびトリポリタニアにおける両国の激突に大きな影響をもたらすようになる。

19世紀中期、イタリア半島では西北部に位置するサルデーニャ王国を中心とした統一運動(Risorgimento)の末、1861年にやっと単一国家としてのイタリア王国が成立したばかりであった。サルデーニャ王国時代からこの国家は、後にイタリア王国初代首相となるカミッロ・カヴール(Camillo Benso, Conte di Cavour, 1810年-1861年)⁴⁴のもと、外交戦略の中で2つのポイントを打ち出した。1つ目は、自身の国際的アピールによって自分たちがイタリア半島を束ねる正当なる国家であることを示すことである。中世以降半島を完全に掌握する統一国家が現れないイタリア半島は、ローマ教皇領をはじめとする小規模の国家が乱立する

⁴³ Hanioglu, M. Ş. (2008) 86 頁

⁴⁴ カヴールの生涯については、R.ロメオ、(1984).『カヴールとその時代』(柴野均, Trans.)を参照

状態にあった。統一されない間、北部にはオーストリア帝国の勢力が入り、その気になればイタリア半島全土を攻撃する土壌は存在していた。その中で、サルデーニャ王国という国家こそがイタリア半島に君臨する唯一の世俗的勢力⁴⁵であることを示し、国際関係の中でも対等に大国とやり取りのできる存在であることを示さなければならなかった。これはイタリア北部を制圧しているオーストリアを相手取り、そして北部を取り返す上での絶対条件であった。そしてこれに関連して打ち出された2つ目のポイントは、サルデーニャを中心とした新生イタリアが大国間の利権争いに巻き込まれることを防ぐために積極的な国際関係を構築しようとしたことである。大国間の争い続く世界の中で生き残るためには、やはり大国との同盟を組んで勢力均衡を果たすことが上策であると考えられた。この考え方は、今我々が見ている時代のオスマン帝国の外交路線にも合致するところがある。そしてこの2点の外交戦略を体現化したものが、オスマン帝国とロシアの間で1854年より勃発したクリミア戦争への出兵であった。国内で様々な論議が重ねられた末にサルデーニャ王国がクリミア半島へわざわざ1万5千もの兵を派兵することになった⁴⁶のは、クリミア戦争を通じてイギリスやフランスという2つの大国との関係を構築し、さらに大国との同盟の締結によって因縁のオーストリア帝国とも実質的に同盟関係になるという、ある種「そうせざるをえない不本意な形」となった⁴⁷とはいえ、オーストリア帝国を内から牽制する意図があった。

しかしこうした外交努力により、イタリア王国はイタリア半島を統治する唯一の存在になったのだが、統一した時にはすでにイギリスが世界のヘゲモニーを唱え、それに続く形でフランス・ドイツといった国々が植民地獲得に取り出しており、すでに植民地にできそうな土地はごく限られたものとなっていた。そのため、彼らは国力拡大のための植民地を本国から比較的近い距離にあるアフリカに求めた。そのアフリカの中で自分たちの植民地にできそうだったのは、地中海沿岸に広がるオスマン帝国領か東アフリカで独立した国家として存続していたエチオピアであった。

まずイタリアは、本国の南に位置するオスマン領チュニスの獲得を目指した。当時のチュニスは確かにオスマン帝国領ではあったが、実際はチュニスの太守が半ば世襲化されており、彼らによる半独立政権がチュニスを支配している状態にあった。この頃のチュニスは、押し寄せるヨーロッパ諸国の植民地政策に対抗するため、太守のフサイン・イブン・アリー (Al-Husayn ibn Ali at-Turki, 1669 年-1740 年) が建てたフサイン朝 (Husain Hanedanı, 1705 年-1952 年) のもとで近代化が推し進められていた。また地方名と同名の中心都市であるチュニスは、古くから国際都市として繁栄する大都市であったが、19世紀になるとヨーロッパ各国の移民が入植し、ますます国際色豊かな都市となってチュニスの商業的・工業的価値は、統一したばかりのイタリアが渴望するのに値するものとなっていた。しかしこのチュニスをめぐっては障害がいくつか存在した。特に一番大きい障害は、フランスという大国

⁴⁵ 彼らの中にはイタリア王国をローマ教皇領も内包した統一国家にする意図があり、これに反発した教皇から破門を通告されることもあった。[R.ロメオ. (1984). 283 頁]

⁴⁶ 同書 263・264 頁

⁴⁷ 同書 271 頁

の存在であった。フランスはこのチュニスに積極的に入植者を送り込み、チュニスにおける影響力を少しずつ増加させていた。またフサイン朝が近代化政策の末に多額の外債を抱え込んだ際には、イタリアとともにフランスも借款を申し出ている。1871年にフランスが隣国のアルジェリアを手中に収めると、フランスの勢いはとどまることを知らず、イタリアはしきりに自国の植民地にしようとする行動をとったが成果が出ることなく、むしろフランスへの譲歩を重ねるようになった。1877年にフサイン朝でクーデターが発生した際にも、イタリアは自身の権益を獲得できたのにもかかわらず、同じく権益を獲得したフランスに譲歩している。統一したばかりのイタリアには、大国・フランスに抑止をする程度の力を持つはずがなく、また抵抗して同盟を破棄させるようなリスクを負う事にメリットはなかったのである。結局イタリアはチュニスの植民地化を断念し、1881年のフランスのチュニスへの侵攻、そしてフランスによって同地の保護権設定条約が締結されてチュニスが完全に保護国化される⁴⁸までの過程をただ傍観するしかなかった。

チュニスを断念した後、イタリアは次にエチオピアへの介入を強めた。1869年のスエズ運河の開通によって地中海から一気に紅海へ抜けるルートが確立されたことにより、イタリアは同年のマッサワ領有を契機にエチオピアの紅海沿岸地域であるエリトリアへの進出を急速に拡大させた。⁴⁹その後エチオピアとの交戦によってイタリアはこの地域を初の植民地として奪取することができたが、資源の少ない土地であったエリトリアだけに満足することはできず、植民地化の矛先はついにエチオピア本国へと向けられた。イタリアは、エリトリア獲得の際の平和条約であるウッチャリ条約内の条文を利用し、1893年よりエチオピア本国への攻撃を本格的に実行した。⁵⁰この時イタリアは、エリトリアをめぐるエチオピアとの争い、さらにかつてスーダンで発生したマフディーの反乱の鎮圧の経験から、エチオピアとの戦争は装備面などの違いから短期決戦で雌雄を決することができるだろうと考え、エリトリア総督に就任したイタリア陸軍大将のオreste・バラティエリ(Oreste Baratieri, 1841年-1901年)率いるイタリア軍はわずか1万5千の兵と50門の大砲を用意するだけで侵攻を行うことになった。しかし結果を言えば、彼らの目論見は完全に外れた。彼らの目論見が外れる原因には、当時のエチオピア皇帝の存在があった。

エリトリアを奪われた少し後の1889年よりエチオピア皇帝となったメネリク2世(Menelik II, 1844年-1913年)は、とにかく好奇心の旺盛な人物であり、ヨーロッパ各国に使節団を派遣してはヨーロッパの近代的な制度・物資を取り入れる西洋近代化に熱心な皇帝であった。⁵¹特に関心のあったのは近代的兵器の数々であり、彼は槍や弓矢といった前近代的装備が主体であったエチオピア軍の改革を目指し、即位前からフランスなどから銃や大砲などの大量の近代兵器を購入⁵²した。全兵士の武器を変えるのには届かなかったのだが、イタ

⁴⁸ France, Tunis. (1881). "Treaty of Guarantee between France and Tunis". (大畑篤四朗, 編) 『近代国際関係条約資料集』, 18, 105 頁・

⁴⁹ 岡倉登志. (1999). 『エチオピアの歴史—"シェバの女王の国"から"赤い帝国"崩壊まで』 88 頁

⁵⁰ 同書 102-105 頁

⁵¹ 同書 150 頁

⁵² 同書 92 頁

リアのエリトリア収奪後のエチオピア軍の中には、すでにイタリア軍と同等の兵器が導入されていたのである。さらに彼は使節団の派遣を通してヨーロッパの利害関係も知っている外交のプロフェッショナルでもあった。彼は交戦国・イタリアの外交的状况を知った上で、フランスやロシア、イギリスといった大国をイタリアとの戦争中に味方につけている。この友好関係を結んだ国家の中には、エチオピアの旧敵でありながら、チュニスの一件でイタリアへの不信感を募らせ始めたオスマン帝国の姿もあった。⁵³

こうして西洋近代化を推進し、物質的にも外交的にも緻密な防衛戦略を練ったエチオピアと、そのエチオピアを侮っていたイタリアとでは勝敗は明らかであった。1896年、両軍はエチオピア・ティグレ州に位置するアドワで一大決戦を迎えることとなった。装備の面で互角となっていた両国の会戦は、数で勝ったエチオピアのほうに軍配が上がり、イタリアはアフリカの民に負けるという屈辱的な敗戦を喫する事になった。その後イタリアは、イギリス領ソマリランドでの反乱に乗じてインド洋沿いの地域の領有に成功したものの、約40年後になってファシスト政権を樹立したベニート・ムッソリーニ(Benito Amilcare Andrea Mussolini, 1883年-1945年)政権によって征服するまで、イタリアはエチオピアに手を出すことはできなかった。

イタリアによるチュニスおよびエチオピアでの植民地化への動きは、イタリア自身の外交努力によって列強の中で波を荒立てることはなく、むしろこの動きを黙認させることに成功した。⁵⁴しかし彼らの植民地への渴望は止められることはなく、イタリア国民の強い要望もあってなおも推進された。そして彼らの次の標的となった所こそ、トリポリタニアだったのである。

(2) 予期せぬイタリアの野望

そもそもイタリアがトリポリタニアに目をつけるようになったのは、先のフランスによるチュニス侵攻と関係が深い。1878年のベルリン会議では主にバルカン半島におけるオスマン帝国領の問題が話し合われたのだが、そのなかでイギリスとフランスは両国の関係をより強固なものにするために、イギリスによるキプロス占領とフランスによるチュニス占領を秘密裏に相互承認し、それぞれの占領地における権益の優先権を確認している。もちろんこれは双方の利権の対立を防止するものでもあり、その後も両国の間には同様の取り決めがなされ、最終的には英仏協商の締結にこぎつけることになる。しかし、英仏双方にとって邪魔になっていたのが他ならぬイタリアの存在であった。北アフリカを中心に植民地を獲得しようとしたイタリアとは、フランスはチュニスの、そしてイギリスとはすでに1878年6月のイギリス=オスマン防衛同盟条約の締結で以てイギリスがオスマン帝国より行政権を獲得したキプロス⁵⁵の代わりにエジプトの領有について激しく抵抗を示した。まだ新興国であっ

⁵³ 同書 103頁

⁵⁴ Hanioglu, M. Ş. (2008) 86頁

⁵⁵ Great Britain, Ottoman Empire. (1878). "Convention of Defensive Alliance between Britain and Turkey". (大畑篤四朗, 編) 『近代国際関係条約資料集』, 18, 55頁・

たイタリアと英仏両国の戦力差や経済規模の差を考えれば、英仏にはイタリアを度外視して事を運ぶ力は十分あったのだが、イタリアがこの問題を機に宿敵・ドイツとの関係強化に力を入れるようになっていたこともあり、ドイツを刺激するような高圧的外交を安易にするわけにはいかなかった。そこでフランスは、イタリアのご機嫌を伺いつつこの問題を穏便に流してしまうために一計を案じた。

まずフランスが行ったことは、自身のチュニスでの優位性をアピールしながら、イタリアにまだ手をつけられずに残っている北アフリカの土地を、存在している利害関係も含めて詳細な情報をあえて流すことであった。この時情報として流したのは、北アフリカの西端に位置するモロッコとオスマン領のトリポリタニアであった。しかしモロッコについては、すでにフランス自身も介入を始めているし、最近ではスペインがモロッコとの戦争によってその影響力を強めていて植民地化を果たすのには困難であることを説明している。一方でトリポリタニアはオスマン側の影響力が小さい故に植民地化するにはたやすいという見解を出し、またトリポリタニア・キレナイカ・フェザーンの広大な領地内には資源も富む土地があるという事をイタリアへ説明した。こうすることによりフランスは、さほど列強からの介入を受けていないトリポリタニアへイタリアを誘導させ、トリポリタニアを獲得させる交換条件として、自身のチュニスの領有を認めさせようとしたのである。

さらにこれを確かなものにするために、フランスはイギリスにも協力を申込んでイタリアのトリポリタニア領有を国際的に認める土壌を作り上げた。これには、たとえイタリアがトリポリタニアへの獲得に熱意を示さないうちにフランスがチュニスを獲得した場合に、イギリスなどと協力してイタリアを丸めこむ打算的な意図も含まれており、イギリスとしてもイタリアがイギリスによるエジプト領有に関して抗議を示す際に受け流すための手立てとして外交戦略上使える一計であった。結局このフランスの戦略は実際に実行に移され、81年にフランスがチュニスを保護国化した後の1887年2月12日に、イタリアはイギリスとの地中海の現状維持に関する交換文書のなかで、イギリスによるエジプトにおける優位性とイタリアによるトリポリタニアにおける優位性を確認し、有事には英伊両国が相互援助を果たすという旨の取り決めがなされた。⁵⁶

しかし当のイタリアとしては、トリポリタニアの領有を認めてもらえたとはいえ、それが自分の意図しない形で実行された事は満足 of いかないものであった。イタリアはフランスの目論見通り民間レベルでのトリポリタニアへの進出を行ったものの、トリポリタニアの獲得に本気になったわけでもなく、むしろフランスへの反抗心がより一層強いものとなり、イギリスからトリポリタニア領有を認めてもらった8日後の1887年2月20日、ついにイタリアは予めから友好関係を強めたドイツと、北イタリアの件で敵視しているとはいえドイツのために組まざるを得なかったオーストリア＝ハンガリーとの同盟締結を果たすことになった。いわゆる「三国同盟」の締結である。⁵⁷イタリアがトリポリタニア獲得を一応は目指し

⁵⁶ Great Britain, Italy. (1887). "Exchange of Notes between Great Britain and Italy respecting the Status Quo in the mediterranean". (大畑篤四朗, 編) 『近代国際関係条約資料集』, 18, 153 頁・

⁵⁷ German Empire, Austria-Hungary, Italy. (1887). "The Second Treaty of the Triple Alliance between Austria-Hungary, Germany and Italy". (大畑篤四朗, 編) 『近代国際関係条約資料集』, 18, 175 頁・

つつも、フランスに対して反抗の意を示していたのは、三国同盟締結に際し、イタリアがドイツと個別に締結した友好条約の中で、フランスに対する独伊それぞれのモロッコ・トリポリタニアの優位性を確認しあったことから分かる。⁵⁸

そんなトリポリタニアの地にさほど興味を示さず、民間人の入植を細々と行っていたイタリアが、突如トリポリタニア獲得に本腰を入れるようになったのは、20世紀に入ってからであった。エチオピアの植民地化失敗以降、イタリア国内では極右派勢力による急激なナショナリズム高揚が見られるようになる。さらに1904年の英仏協商成立によるフランスのモロッコの優越権獲得に対し、ドイツが1905年にタンジールで、また1911年にアガディールで2度の対仏干渉事件(モロッコ事件)を起こすと、それに乗じてトリポリタニアを含む北アフリカの植民地候補地の獲得を喧伝する旨の主張が盛んになり始めた。極左・極右を含めた全政党をうまくコントロールしていたイタリア首相のジョバンニ・ジョリッティ(Giovanni Giolitti, 1842年-1928年)は、このナショナリズム高揚のはけ口として、またイタリア本国の工業化の推進のための布石としてトリポリタニアを早急に獲得するのは必然であると考え、⁵⁹すでにトリポリタニアで事業展開していたローマ銀行(Banco di Roma)をはじめとするイタリア系企業・活動家に植民地化の準備を進めさせた。しかしこれにはオスマン帝国もある程度の対応をせざるを得なかったのだが、実際のところはどうだったのか。これについてはタラートが自身の回想録⁶⁰の中で言及している。

タラートによれば、当時オスマン帝国政府は青年トルコ革命以降に発生した「ブルガリアの利己的な独立宣言」と「オーストリア＝ハンガリーによるボスニア・ヘルツェゴビナ併合」について、両国にこれらの件で抗議する勇気を示すことができなかった。⁶¹ただ、それはオスマン帝国がこの独立宣言と併合に対して弱腰であったからではなく、その理由にはイギリスのアスキス(Herbert Henry Asquith, 1852年-1928年)内閣が存在していたことを挙げている。⁶²アスキス内閣では、皇帝・ヴィルヘルム2世の世界政策のもとで活発な軍拡が展開されていたことと関連して対独姿勢がより強化され、英独間で大規模な建艦競争も展開されるほど、外交戦略上ではドイツ包囲網結成に向けてフランス・ロシアと活発な協議を重ねていた。結局それが最終的には、ドイツがベルギーの中立政策を侵して占領したことをきっかけに第一次世界大戦を起こすのだが、オスマン帝国としてはこの時点では親独路線をとるか親英路線をとるかはっきりさせてないところもあるので、革命後の混乱が積み重なったこともあってアスキス政権を刺激して英独間の争いに首を突っ込むようなことはあまり取りたくなかったのである。

そこにイタリアがトリポリタニアに関して干渉をしてきたのである。1906年にモロッコに関する条約を締結したばかりであっただけに、このイタリアのトリポリタニアへの干渉

⁵⁸ German Empire, Italy. (1887). "Separate Treaty between German Empire and Italy". 大畑篤四朗(編). (1997). 『近代国際関係条約資料集 第4編(第18巻)』. 龍溪書舎. 175頁-

⁵⁹ オルシ・ピエトロ. (1942). 『伊太利史』. (東又清, 訳) 興風館. 332・333頁

⁶⁰ Bolayır, E. (1946).

⁶¹ 同書 17頁

⁶² 同書 17頁

についてオスマン帝国側としては、タラートが回想録内で言うように「意図もなくトリポリタニアへ攻撃を加えてきた」という認識があった。⁶³とはいえトリポリタニアがオスマン側としては戦略的価値を見出していた土地であっただけに、フランスが形成したイタリアのトリポリタニア領有を国際的に認める土壌によってベルリン会議に参加したような国々が沈黙を守っていた中で、オスマン帝国はローマ銀行による土地購入を禁止するなどを盛り込んだ防衛的条例を制定する⁶⁴など断固とした態度でイタリアとの外交に臨んだ一方で、ただ純粋にイタリアとの戦争や他国からの介入を未然に防ぐ意図をこめた抗議⁶⁵や「トリポリタニアにおけるイタリア権益の拡大」を含めた融和的な回答も行っている。⁶⁶しかしこれらの対応は、かえってイタリアにトリポリタニアへの侵攻の大義名分を与える形になってしまい、ジョリッティによる侵攻決定を促すことになる。そして1911年9月28日。イタリアはオスマン帝国へ「トリポリタニアへの侵攻」と「この件に関するオスマン帝国の非介入の要求」を盛り込んだ最後通牒を通告し、オスマン側の拒否を受けて翌29日よりイタリア軍はトリポリタニアへの侵攻を開始した。ここに、約1年にわたって繰り上げられるイタリアとオスマン帝国間の戦争の火蓋は切られた。

(3) トリポリタニアの激闘の中で

イタリアがオスマン帝国に最後通牒を突きつける前の9月4日のこと。エンヴェルは「Bu gece çok yorgunum...(今宵はとても疲れた...)」という書き出しから始まる手紙を書いた。⁶⁷エンヴェルは3月31日事件以降、前節で語ったように長期にわたってアルバニアへ視察に赴いたことはあったが、本来は駐在武官としてベルリンにて職務をこなす立場にいた。しかしトリポリタニアの件でイタリアとの確執が決定的なものとなると、エンヴェルはベルリンでの任を辞し、ベルリンを離れてセラーニクに戻ってきたのである。彼はこの日、約5時間にもわたって同志たちとトリポリタニアの問題について話し合った。政府が上記の態度でイタリアへの対応を取っている間、彼らは政府とは別にイタリアへの対処法を考えていたのである。彼らがこの話し合いの中で主に決めた戦略は非常に強硬なものであった。現在の政府が似たような対応を取り、そしてイタリアによる攻撃の際には、彼らはイタリアによる攻撃前にトリポリタニアに暫定政権を樹立し、その後にイタリア製製品のボイコットの展開を中心に経済的消耗を与えながら”Guerilla-Krieg(ゲリラ戦術)”を基本戦術としてイタリア軍を叩くというものであった。彼らがこのような戦略を考えだしたのはいくつか理由がある。

まず彼らがシミュレートしたイタリア軍の侵攻は、精強なイタリア海軍の支援の元で上陸・侵攻を行うというものである。当時のイタリア海軍は、当時としては新しい戦艦の部類に入る準弩級戦艦8隻を主軸とした軍編成をしており、建艦競争をしていた英独などと比べると見劣りはするが、それでもかなり精強な軍を保有していた。一方のオスマン帝国海軍も、

⁶³ 同書 17頁

⁶⁴ Hanioglu, M. S. (2008) 86頁

⁶⁵ Bolayır, E. (1946) 17頁

⁶⁶ Hanioglu, M. S. (2008) 86頁

⁶⁷ Hanioglu, M. S. (1989) 75頁 34. Selanik, 4 Eylül 1911

1903年と翌年に「メジディエ(Mecidiye)」と「ハミディエ(Hamidiye)」という2隻の防護巡洋艦を就役させ、さらにドイツからは青年トルコ革命後に前弩級戦艦を購入し、それぞれ「バルバロス・ハイレッディン(Barbaros Hayreddin)」と「トゥルグット・レイス(Turgut Reis)」という名で編成に組み込むなどして急速な近代化が図られていた。しかしそれでも現段階の戦力差は歴然であり、現段階でオスマン帝国海軍がイタリア海軍に正攻法で勝利することは難しかった。北部に海岸が位置し、なおかつ主要な都市が地中海沿岸部に集中しているという地理的条件から、イタリア海軍に出撃命令が下されるということは容易に想像できた以上この存在をどうにかしなければならなかった。そこで次に考えたのが、陸ではゲリラ戦と夜襲を徹底して行い、そして海軍のほうはマルマラ海の方へ引き込んで分断することであった。これについては、エチオピアの一件があったとはいえ、イタリア陸軍の実力を実際に見たわけではなかったため、もし自分たちが予想していたものよりもイタリア陸軍が強かった場合、軍を何度も再編してでも敵を叩くことを考えた。というのも、イタリア側の司令部は遠いところに設置されると予想していたので、夜襲を続ければ連絡系統に打撃を与えることができ、そこから混乱を与えられると考えていたのである。

ただしエンヴェルは、この作戦を実行するに当たってあるものの絶対的必要性を見出していた。それは、トリポリタニアに住むアラブ人およびムスリムによる協力であった。彼はこの作戦を通して、最終的には全ムスリムのボイコット運動を引き起こし、特にイタリアの植民地でその支配を嘆いているムスリムたちの反抗を誘発させようと考えていたのである。彼がこのように考えたのには、彼が以前体験した出来事に由来するところが大きい。ある時、エンヴェルは軍に召集されたオスマンの在郷軍人(予備役)たちと同じ列車に乗り込む機会があった。その時彼は、その同志たちが仲良くムスリム・非ムスリム関わりなくオスマンの行進曲を口ずさんでいたのを見た。エンヴェルはこの事を尋ねてみると、彼らは自分たちのことを国家という大きな喜びを共有するムスリム・非ムスリムであると説明した。エンヴェルはこの時、確かにオスマン帝国は斜陽に向かっているが、国民の魂にはまだ宗教をも超えた強い愛国心が存在しているのを確かに見たのである。⁶⁸彼が列車の中で目の当たりにした光景は、彼がアルバニア蜂起の際に見てきたこととは全く同じものであり、駐在武官としてベルリンへ赴いたときにも忘れることのなかった彼の理想像そのものでもあった。彼はこうした実際に体験した出来事から、彼の中でこのトリポリタニアでの騒乱はオスマン帝国とイタリア間のトリポリタニアをめぐる帝国主義的戦争から、ヨーロッパで「権利を奪われた野蛮人(haktan yoksun barbarlar)」と蔑まれてきたムスリムの誇りと尊厳を守り、そしてそれをヨーロッパへ見せつける挑戦の場に変貌していったのだった。⁶⁹それは彼の理想像と完全に結合し、彼の理想主義者としての側面をより一層強めることとなった。ただ彼はそのまま理想に溺れることをよしとせず、彼がただの現実味のないロマンティストではないことを死後になっても自身で証明できるようにするために、彼は作戦の計画を友人に知らせる手紙を書いていたのである。⁷⁰

⁶⁸ Hanioglu, M. Ş. (1989) 76頁 34. Selanik, 4 Eylül 1911

⁶⁹ 同書 76頁

⁷⁰ 同書 76頁

この「愛国心」という概念は、彼らが「Trablusgarb Direnişi(トリポリタニアの抵抗)」と呼んだこの戦いの中では殊更重要なものとなっており、オスマン帝国に対する彼らの思い入れの強さを感じさせるものである。その熱意は実際に参加していないメンバーたちの中にも存在していた。当時バグダード知事という地位にいたことでこの抵抗に参加できなかったジェマルもまた、争いが続く1911年12月に政府宛ての電報のなかで次のように語った。

トリポリタニアの地への介入で忙しい同志たちの中に、長年にわたって祖国のためにもにいた友がいます。彼らがそこで国家の名誉を完遂させるために常に死に抗っているときに、自分はこうしてバグダードにしようなど、私は自分の良心を押さえつけることなどできません。数ヶ月もの間、私は強い呵責に身を引き裂かれる思いをしています。(中略)私のところにトリポリでの情報が入ってくる時、トリポリタニア州には新しい知事が派遣されることが望まれているらしいと聞きました。もし本当に望んでおられるならば、私を知事として派遣し、ベキル・サーミ・ベイ⁷¹を私のポストであるバグダード知事にしてください。もしこれにふさわしいと見なされていないのならば、私はトリポリタニアの司令官が命令するところで兵士として、もしくは記者のような仕事をするつもりでトリポリタニアへ行く用意をします。⁷²

ジェマルは、青年トルコ革命以降多くの人と関わり、現実的視点を養っていったことは前節でも書いたことではあるが、それでも彼の中にも祖国を愛し、そして祖国のために命を賭して戦う憂国の志士としての信念を絶やすことはなかった。結局彼が持ちかけた訴えは承認されることはなく、このトリポリタニアの抵抗に最後まで参加することはできなかったのだが、バグダード知事の後に担当したコンヤ知事在任中にバルカン戦争が勃発すると、彼はコンヤ知事を辞職して戦場の最前線に立つのである。

さて、エンヴェルはその後中央委員会へ出向してトリポリタニアへ義勇軍の司令官として現地へ赴くのだが、理想主義者としての側面を強め、その実現へ一層決意を固めた一方で、彼はいつ戦場で散るのかも知れないという軍人としての側面について思い悩んでいた。海上輸送でトリポリタニアへ出発する前日に彼はこんなことを書き綴っていた。

ああ、わが愛する人よ、私は自分が恥ずかしい。こんな様で貴方の目の前にも出ることなどできません。イタリア人が私達のことを有害で恥さらしな連中であると考えていたし、私自身非常にちっぽけな人間であるから、名誉や私達への尊敬の念を引きずっているようなこの汚点を自分で払拭したいのです。

⁷¹ 当時のトリポリタニア州知事・Bekir Samih Bey(任期: 1911年11月 - 1912)のこと。

⁷² Cemal, B. (1959). 15 頁

この手紙を読んでいる貴方にとっては、私は来るべきところにまで来たという事になるでしょう。きっと、誰かは私がどこへ行っているのかを知っていることでしょう。私は、トリポリタニアから自分の声を人に知らせたい。私は、貴方に宛てて書いた手紙の内容のことを全て実行する所存です。政府が諦めようとも、私は自らの血が私の恥ずべき汚点を晴らすまで、その決意を覆しはしないでしょう。

本日、私はスルタン陛下に謁見いたしました。とても静かで悲しい雰囲気でした。アッラーは時折無情であらせられますが、この良き老人⁷³は帝国で起こった悲惨さを浮き彫りにしておられたのです。もし機会があれば、私のことをどうか忘れないでいてください。回想の中で私が言っていたように、トリポリタニアの砂漠の熱い砂の底へ私の存在を沈めないでいてください。⁷⁴

彼は戦場にて志半ばで倒れることを非常に恐れた。崇高なる理想を確かにし、そしてそれを海外勢力へ知らしめることを達成する意思を持っていようとも、ある日突然戦死してしまっただけでは意味がなくなってしまうからである。いつ倒れるのかわからない状況のなかでも自分の見たこと、感じたことすべてを後世へ遺すため、彼はトリポリタニアに赴いてからの約1年間の間に実に100通もの手紙を戦場から書き続けた。⁷⁵

エンヴェル達義勇軍がトリポリタニアへ上陸し本格的な戦闘が開始されると、戦いはエンヴェルが予想していたような展開を見せた。もとよりオスマン側にとっても、本国から地中海をはさんだところに位置するトリポリタニアは兵站の面で困難を生じさせるところであり、制海権を奪われてしまったら両端(エジプトとチュニス)を他国に押さえられている以上、トリポリタニアは孤立する危険性があった。イタリア海軍もエジプト国内のイギリス軍もそれは承知で、陸軍が上陸を始めるとすぐに補給ルートの遮断を行っている。⁷⁶しかしイタリア陸軍はイタリア海軍の援護によって沿岸部の占領を完了させたものの、内陸部ではエンヴェルの目論見通り、エンヴェルや陸路で秘かに義勇軍に合流したムスタファ・ケマル(Mustafa Kemal, 1881年-1938年 後のトルコ共和国初代大統領)の軍によるゲリラ戦が着実にその成果を出していた。彼の考えるアラブ人による抵抗の協力も得ることができ、開戦直後にトリポリ・トブルクといった主要都市を征服していたイタリア陸軍の侵攻に歯止めをかけ、戦闘は局所的な決戦から一進一退を繰り返す塹壕戦が主体となった。

とはいえ、オスマン側にとっては戦況が明らかに不利なものであり続けたことに変わりはなく、双方とも事態を打開させることはできずにいた。イタリアは数的・質的に優勢であった海軍を使ってこの膠着状態を脱するためにドデカネス諸島やロードス島の占領を行い、ベ

⁷³ 当時 67 歳だったメフメト 5 世(Mehmet V, 1844 年- 1918 年)のこと。

⁷⁴ Hanioglu, M. Ş. (1989) 78 頁 35. 8 Ekim 1911

⁷⁵ 同書 80 頁-210 頁

⁷⁶ Hanioglu, M. Ş. (2008) 87 頁

イルート港ではオスマン帝国海軍の装甲艦「アヴニッラー」と水雷艇「アンカラ」を撃沈させ、またイスタンブールへの砲撃も行った。さらにトリポリタニア内部では現地ではアラブ人抵抗運動家への煽動・軍事的支援も行った。しかしそれらがオスマン側の動揺をもたらすことはなく、本国政府もエンヴェル達も抵抗を続けた。⁷⁷本国政府は1912年8月・9月にイタリアとの会談をスイスのレマン湖に面するウシー(Quchy)の地で行い、イタリアからの事実上の降服勧告も含めた話を持ちかけられたが、そこでも断固とした態度を崩すことはしなかった。またエンヴェル達の方でも、1912年9月18日に反撃の失敗⁷⁸およびエンヴェル自身の負傷はあったものの、それでもエンヴェルはトリポリタニアの人々を味方に引き留め、抵抗を続けることができた。彼はこの戦争の中で、アラブ人という自分たちとは異なる人種の存在を改めて考えさせられた。時には子供っぽい振る舞いをする彼らに少々ナーバスになることもあったが、戦争中の随所でアラブ人たちのエンヴェルへの忠誠度や士気の高さ、そしてオスマン帝国そのものへの愛国心の強さをたびたび感じ取っており、⁷⁹1911年11月25日の戦闘での勝利はアラブ人たちの活躍であると感服する場面もある。⁸⁰またエンヴェルは、アラブ人たちとラマダンと共に過ごし、彼らと戦争の今後を話し合ったりして親交を深めることもあった。⁸¹エンヴェルの父親が自分のもとへ来ることになってエンヴェルが憂鬱な気分になっていた時には、「彼(エンヴェルの父)は自分たちにとっても父であり、また彼に息子(エンヴェル)のことを皆がどんなにか崇拝しているのかを見ることができて嬉しいだろう。」とってエンヴェルの父親が来ることを喜ぶこともあった。⁸²彼は、アラブ人という強力な味方をバックにつけ、出発前に彼が立てたプランを確実に実行していったのである。そんな彼のもとに、バルカン半島での不穏な空気を感じさせる便りが届いたのは1912年8月1日のことであった。

第三節 新たなる動乱の序曲

(1) 20世紀初頭のマケドニア・アルバニア問題

エンヴェルは戦争中、度々オスマンの新聞や海外諸国の新聞を含めたありとあらゆるメディアを使って情報の収集を行い続けた。時にはイタリアの新聞のあまりのでたらめさに、新聞はいつも書きたいことを書いているという事を述べて苦言を呈していることもあった⁸³が、彼は新聞を通してトリポリタニアの外で起こっていることを知ろうとし、そしてそれをもとに自分の考えを常に練り上げていた。彼はこの8月1日にも、オスマン、ドイツ、フランス、イギリス、イタリアの新聞を読んでいたのだが、彼はここで3年前にマケドニアで発生したギリシャ・ブルガリア軍が革命政府に対して秘密裏に警察を派遣したことを思い起こ

⁷⁷ 同書 87 頁

⁷⁸ Hanioglu, M. Ş. (1989) 179 頁 118. 18 Eylül 1912

⁷⁹ 同書 115 頁 65. 31 Ocak 1912

⁸⁰ 同書 96 頁 53. 25 11 1911

⁸¹ 同書 178 頁 117. 15 Eylül 1912

⁸² 同書 161 頁 102. 4 Ağustos 1912

⁸³ 同書 163 頁 104. 10 Ağustos 1912

す記事を目にした。⁸⁴

20世紀初頭のマケドニアは、19世紀末から周辺諸国がその領有を主張して睨みあう、「火薬庫」と呼ばれたバルカン半島内でも最も衝突する危険性が大きかった地域となっていた。山岳部が多いバルカン半島のなかでも肥沃な平野に恵まれ、エンヴェル達にも馴染みの深いセラーニクはバルカン第3の規模を誇る海港都市であった。この価値ある地域をオスマン帝国の領有から切り離し我が物にしようと、オスマンを取り巻く周辺国はもちろん、列強諸国もその分割方法に議論を重ねていた。列強同士の会談の情報を聞きつけたことで統一と進歩委員会は半ば見切り発車の形で青年トルコ革命を起こしたということは先にも書いたが、それほどマケドニアをめぐる問題は、ただバルカン半島に所在する諸国だけの問題ではなく、大国をも巻き込んだ世界規模の問題になっていた。特にマケドニアの人々を自国と同じ民族であると唱え、その領有権を熾烈に争ったのはセルビア、ブルガリア、そしてギリシャの3カ国であった。しかし彼らが持ち出した領有権の論拠はそれぞれバラバラなものであった。セルビアはマケドニアにおける宗教儀式が自国のものに似ていると主張したし、ギリシャは現地の教会の管轄がギリシャ総主教区に属しているから自国の領土であるに等しいということを声高に唱えていた。ブルガリアに至っては、マケドニアの言語の文法・語彙がブルガリア語にそっくりだからブルガリア領であってもおかしくはないと主張した具合だった。マケドニアの領有を目指して行われた水面下の争いは、やがてマケドニアの住民も諸派に分かれてテロを互いに行う状態を作り出した。⁸⁵こうしたバルカン3国が自国権益の主張を応酬し合う構図は、実は19世紀末から全く変わらないものである。

露土戦争の後のサン・ステファノ条約を契機にオーストリア＝ハンガリーとロシアがこの問題に介入し始めると、マケドニアは一時的に大ブルガリア公国の領域に組み込まれたが、これがさらなる混乱を招くことになった。マケドニアの住人を「自分と同じ民族」と考えるセルビアとギリシャ、手に入れたマケドニアを死守したいブルガリア、マケドニアを取り返したいオスマン、そして互いの思惑が錯綜する列強諸国間の構図が存在しているのをはっきりと示されることになり、バルカン諸国は是が非でもマケドニアを手に入れようとし、そして列強諸国は自身のバルカン半島における影響力を強めようと巧みな外交戦略の応酬を始めるのである。ここについては、本稿では後にブルガリアの視点から捉える予定である。

そしてもう一か所問題となったのは、そのマケドニアに隣接する地域であるアルバニアであった。そもそもアルバニア人はその大部分がイスラーム教を奉じており、長い間オスマン帝国の官僚機構や軍隊に優秀な人材を提供し続けており、オスマン帝国にとってはバルカン半島内の地域の中では自分たちの同胞が多くいる地域として古くから馴染みのある親オスマン的な地域であった。ただしアルバニアの南部にはギリシャ正教の信徒たちのコミュニティも存在しており、正教がギリシャ語とギリシャ文化の教育を行っていた。そういった経緯から、この地域にはギリシャからの影響を強く受けていた。とはいえ青年トルコ革命の際、

⁸⁴ 同書 158頁 99.1 Añustos 1912

⁸⁵ 木村真. (1998). ナショナリズムの展開と第一次世界大戦. 著: 柴宜弘 (編), バルカン史 (ページ: 210頁-248頁). 山川出版社. 233頁

アルバニア人は革命を強く支持し、この機にアルバニア語の学校や新聞を設立するなど、革命の目的である自由を享受していた。しかし統一と進歩委員会は前述の通りシェヴケト・パシャら強硬派の意図もあってアルバニア独立まで認めるつもりはなく、次第に弾圧に乗り出すに至ってきた。そうした結果が、エンヴェルが見聞してきたアルバニア蜂起であり、その後の本格的な独立運動であった。もうひとつ、アルバニア人居住地域に含まれるコソヴォがセルビアとの衝突の種となっていた。14世紀までセルビア人の居住する地域であったコソヴォは、1389年のコソヴォの戦いによってセルビア軍がオスマン軍に敗退したことからセルビア人は北へと逃れ、その後にアルバニア人が移住してきたという因縁の地であった。これを理由にセルビアは、コソヴォも内包している北部アルバニアの領有を強く唱えた。さらに内陸国であるセルビアにとっては、北部アルバニアを領有することで海への出口を確保することにもなり、セルビアにとっての北部アルバニアは戦略的にも重要なものとなった。アルバニアの問題は、こうしてギリシャによる南部アルバニアへの野心とセルビアによる北部アルバニアへの野心があいまって状況はますます複雑さを極め、また各国のナショナリズムが強固なものとなるにつれて過激なものとなった。

しかしこうした話を研究史や当事国の歴史の中で歴史家たちが述べる際、当然その時の支配者であるオスマン帝国のことを考慮することはない。ブルガリアにせよ、ギリシャにせよ、セルビアにせよ、ナショナリズムに基づく史観の中ではあくまでオスマン帝国は「抑圧してきた存在」、「敵対する存在」として語られた。彼らは表面上では対立を繰り返していたが、潜在的には「対オスマン」という考えを持っていた点ではすぐにでも結託できる状態にあるものだった。もちろんこのアルバニア・マケドニア問題は列強間の勢力均衡ならびにバルカン諸国の外交関係の動向を左右するファクターにもなり、オスマン帝国もこれを考慮した上での外交戦略の練り上げを要求されることになった。

エンヴェルはその後も眼前の敵であるイタリアへの抵抗に集中していたものの、彼はマケドニア問題が再燃してきていることを感じ取り、「残念ながら彼らは私のみすばらしい故郷での混乱を待ちわびていた」としたうえでマケドニアの混乱が最終的にはこのイタリアとの争いに終止符を打つかもしいと考えた。⁸⁶彼がそのように考えた根拠としては、マケドニアで活動する「ブルガリア人が結成した組織」を挙げている。当時マケドニア内で精力的な活動をしていたそのような組織は、ブルガリア人のフリスト・タタルチョフ(Hristo Tatarchev, 1869年-1952年)らが率いた内部マケドニア革命組織(Vatreshna Makedonska Revoliucionna Organizacia)を置いて他なかった。⁸⁷

内部マケドニア革命組織は、マケドニアはもちろん、ブルガリア本国やトラキアといったブルガリアが領有を主張していた地域で活動していた政治的革命組織であった。もともとは19世紀後半にセラニクで結成された小さな反オスマンのマケドニア・スラヴ人革命組織であったのだが、後にこの地域で台頭し始めたブルガリア人が組織を支配するようになった経緯を持った。彼らの主張はいたって単純明快なものであった。そもそもマケドニアは他国

⁸⁶ Hanioglu, M. Ş. (1989) 166頁 106. 16 Ağustos 1912

⁸⁷ 木村真. (1998). 233頁

からの影響を受けない独立した領域であり、その住人は民族の別に関わらずマケドニア人と呼ぶべきであると考えていたのである。これらは設立当初に策定された組織の基本原則の中にも盛り込まれたことであった。

とはいえ組織の中心がブルガリア人になるにつれてブルガリアを念頭にした活動を見せていたこともあり、19世紀末から20世紀はじめにかけては「自治国家」としてのマケドニアを打ち立てる目的で活動を始めていたのだが、後にブルガリアによるバルカン半島の政治への関心に従って動くようになっていった。⁸⁸エンヴェルは、この組織がマケドニア問題において周辺諸国や列強の思惑を足止めする存在であると考えた。しかし内部マケドニア組織がそのような役割を果たすわけでもなく、さらに8月23日にはアルバニアでの反乱の知らせが入ってきて彼は内心焦るようになってきた。⁸⁹ここへきて、エンヴェルの目論見は外れるようになってきたのであるが、それは彼が現実を全く直視してないただの夢想家であったからではなく、軍人としてこれまで邁進してきた彼の見識の浅さ故の外交センスの未熟さに理由があり、そしてそれを完全に超越した外交世界の複雑さに根本的な原因が存在していたのである。エンヴェルの焦りとは裏腹に、彼のもとにはバルカン情勢はさらに悪化していくことを告げる便りが次々に舞い込んできた。

(2) エンヴェルのトルコ民族主義化と戦争終結

バルカン情勢が悪化していく中で、エンヴェルは確かにイスタンブルで完遂させた自分たちの革命による進展を感じた。しかし今となっては、どこか一国で蜂起や戦争の類が発生することによってバルカン半島全体におけるバランスを崩しかねないものとして、彼は内心恐れを抱いていた。そのような不安定な状態が続く限り、バルカン戦争での戦いがいつ起こるのかさえ見当もつけることができず、場合によってはイタリアとの戦争でトリポリタニアに在る間に戦いが始まり、ただバルカン半島での動乱を傍観するだけで終わることも考えられたのである。しかしそれでも、エンヴェルは自分の任務を全うした上でバルカンへ赴こうと考えていた。この時、彼はこのような手紙を書いている。

今は私の果たすべき義務を放棄する時ではありません。なぜならもし私が撤退することになったとしても、トリポリタニアに在る全ての将兵も撤退させる必要がまだ残されているからです。おそらく、一か月以内に事は明らかになるでしょう。私は自分がより必要性を感じるところで行動できると思っています。分かりますか、これが私の運命なのです。祖国を脅かさんとする危機が、私をコンパスの針のように引きつけるのです。---しかし私がどこにしようと、またたとえ包囲されようとも、私は必ず自分が抱く信念に値することに基づいて望むままに在ることでしょう。平和の中心はもはやここではありませんし、バルカン半島で起こるだろう戦争のことを誰が知っているのでしょうか?---

⁸⁸ 同書 235 頁

⁸⁹ Hanioglu, M. Ş. (1989) 169 頁 109. 23 Ağustos 1912

今、私だけでなく多くの人の上に暗雲と暗い未来が満ちてきています。---繰り返しますが、私は祖国のたった塵一つの大きさの土地も外国人たちに渡しはしません。たとえそれがドイツ皇帝であれ、また女王であろうともです。しかし私はこうしてあなたに小さなアンティークのプレゼント⁹⁰を贈っている。なぜなら、私はあなたがどれほどトルコ人であるのかを知っているからです。---⁹¹

ここでエンヴェルが持ち出した考えとは、何度も繰り返すように彼が従来から持っていた愛国心に他ならないのだが、この手紙での考えは従来のものとは少し違い、「オスマン帝国民」としての要素よりも「トルコ人」としての要素に重きを置いたものであった。彼はもともとオスマン主義者に近いスタンスの思想を有するところがあった。エンヴェルが青年トルコ革命後にセラーニクで行った演説では、オスマン帝国内に存在する全ての民族が兄弟であり、トルコ人、ブルガリア人、ギリシャ人、セルビア人、ルーマニア人もムスリムもその他の宗教を信ずる者たちも何も変わらず、皆オスマン人としての誇りを持つという旨の考えを出している。⁹²しかし彼がこうしてこの場で「トルコ人」という単一民族に絞った言葉の使い方をしたのは、幾分かオスマン帝国内で流布し始めたトルコ民族主義の存在が関係する。

そもそもトルコ民族主義の起源は、19世紀後半のロシアに求めることができる。この時期ロシアは中央アジアにて栄えるトルコ系のブハラ・ヒヴァ・コーカンドの3ハン国に対して精力的な征服活動を展開し、また同時期にはオスマン帝国に対してクリミア戦争を仕掛けていた。この3ハン国の征服活動がわずか20年で完遂すると、ロシアは中央アジアにトルキスタン総督府を設置し、政治的・経済的・文化的支配を強めていった。こうした対外的な圧力に危機感に触発され、クリミア=タタール人をはじめとするロシア国内のムスリム知識人の間で急速な民族意識の高まりと社会の改革への欲求が起きる。クリミア=タタール人の改革家・イスマイル・ガスプラル (Ismail Gaspirali, 1851年-1914年, ロシア名:ガスプリンスキー)は、改革の糸口を庶民レベルの教育に見出し、旧来のマドラサ・マクタブに基づく教育体制を近代化させるべく、アラビア語で「新しい」を意味する「ジャディード(jadīd)」の名を冠した改革運動・ジャディード運動を展開した。こうした改革の中で、ガスプラルはとくに言語教育に目を付けた。マドラサ・マクタブといった学校で勉強されたのは、宗教的学問を勉強する上で必要になるアラビア語であった。しかしマドラサ・マクタブといった学校に通う子供たちはこの難解な言語をゼロから学ばなければならず、代りに自分たち固有の言語の勉強は後回しにされていた。ガスプラルは識字率の向上のため、そして自らの母語に対する関心をもたせるため、アラビア語にとらわれない近代的な言語教育を試み、さらにトルコ系の民族ならばだれでも理解できる文語を広めようと共通語で書かれた『テルジュマン(Tercüman)』紙を刊行した。⁹³結果的にこれがマドラサ・マクタブを通して培うムスリムと

⁹⁰ 彼が書き綴っている手紙のこと。

⁹¹ Hanioglu, M. Ş. (1989) 170頁 110. 24 Ağustos 1912

⁹² 山内昌之. (1999). 23頁

⁹³ 新井政美.(1980). 1712-1811頁.

いう宗教共同体への帰属意識を、テュルク系という民族意識が凌駕して発露するようになるきっかけとなった。

しかし当のロシアにとっては、こうした民族意識の高揚は自国内の混乱を生じさせる危険分子以外の何物でもなかった。そこでロシアはこうした民族主義の高揚を警戒し、徹底した抑圧を加えた。ガスプラルもまた、「トルコのスパイ」として批判の矢面に立たされることとなった。こうした抑圧に加え、さらに「血の日曜日事件」を契機に1905年から翌6年にかけて続く第一次ロシア革命で自分たちの運動が挫折するようになると、多くのムスリム知識人たちはロシアから亡命した。彼らが向かう先は、当時トルコ系国家としては最も繁栄を極めていたオスマン帝国であった。

ちょうどその頃オスマン帝国では、青年トルコ革命とその後の3月31日事件によって専制君主の名で恐れられたアブデュルハミト2世が失脚するという事態が起きていた。もともとアブデュルハミト2世は、自身のカリフとしての宗教的権威をアピールすることによって、オスマン帝国の対外的な威信を維持するとともに、ムスリムを中心とした国内の総力結集を目論んだところがあった。この思想については、「カリフ」という肩書によってなされるか否かの違いはあるが、先に書いたタラートの思想に似たところもある。しかしアブデュルハミト2世が失脚したことにより、オスマン帝国内では宗教の帰属意識に基づく団結よりもトルコ人としての民族意識の団結を主張する言論も唱えられるようになる。その最前線に立った民族主義論者がズィヤ・ギョカルプ(Ziya Gökalp, 1876年-1924年)であった。彼は文化全般から民族というものの在り方を見出し、特に伝承された叙事詩や伝説に民族精神の源流は存在していると考えた。そんな彼の言論を、タタール人のユースフ・アクチュラ(Yusuf Akçura, 1876年-1935年)をはじめとするロシアから亡命してきた民族主義者の主張が後押しし、トルコ系諸民族の一体性を訴えるトルコ民族主義は、バルカン戦争以降のオスマン帝国における主要な思想の一つとなる。⁹⁴指導者的地位にいるエンヴェルもまた、ギョカルプのような思想的指導者と委員会の会合で出会うたびにトルコ民族主義に刺激を受け、彼の中でトルコ民族主義の思想をもたらし続けた。この手紙は、後に中央アジアを奔走し、そしてその末に彼が果てるまで抱く彼の理想において、元来の「オスマン主義」に加えてトルコ民族主義的側面をも内包するようになり始めたことを物語るものである。

ただそのようにエンヴェルが考えている間にもバルカン半島の情勢は確実に悪化の途をたどっていた。トリポリタニアではまだ戦闘は続いていたが、比較的戦闘が落ち着くようになり、エンヴェルもバルカンでの動向に気を配るようになってきた。数日後には部下たちと長時間会議を開き、全バルカン諸国の動向に従ってオスマン側も全軍を動員できるよう準備する旨の電報も送られてきた。この時彼の手紙の中には、最後には自分たちは勝つことができるという気持ちが湧いてきたとあって喜びを示していることも触れられている。⁹⁵しかし彼の中で勝利できるという考えが出てきた後も、彼はトリポリタニアで戦闘を続けながらヨーロッパ全体で発生する戦争の可能性を考え続けた。もちろんそれがバルカンでの戦争に直

⁹⁴ 新井政美. (1979年). 191-308頁.

⁹⁵ Hanioglu, M. Ş. (1989) 192頁 109. 28 Eylül 1912

結するところがあつたし、彼の愛する祖国の存亡がかかったものであると予想していたからだ。バルカンにおける問題でも、ドイツおよびオーストリア＝ハンガリーの介入が得られない場合はルメリで4日以内に戦闘が始まると考え、自分がそんな祖国にとって非常に危険が迫っているときにルメリにいないことを嘆いている。⁹⁶結局彼がここで考えたように、ドイツ・オーストリア＝ハンガリーからは効果的な介入は得られず、4日後の10月8日にモンテネグロがオスマン帝国に宣戦布告した。

モンテネグロが宣戦布告した日から数日後。彼は自分が言ったとおりになってしまったことを受け、バルカンでの争いに参加できないことを改めて嘆いた。この時の彼からすれば、たとえ名誉ある任務であつたとはいえ、もはやイタリアとのトリポリタニアでの争いはバルカンでの戦闘と比べるとたいしたものではなかった。ただここでこの時彼が再び上げたのが、イスラームという共通の宗教でもって果敢に戦ったアラブ人のことである。彼らにとって今回の争いの中で敵の前で死ぬことは、アッラーの恩恵を受けることができることであり、また天国に行つて家族と幸せな生活を送るためには必要なことと考えていた。エンヴェル自身、戦争に従事していたとあるアラブ人から、「祖国の宗教に殉じて死ぬことは、殉じて死なないことよりも幸せなことだ」という話もされている。⁹⁷この戦いは、結局数日後の1912年10月18日にローザンヌで開かれた講和会議でイタリアの大部分の要求を認める内容の条約を締結し、トリポリタニアの事実上の宗主権をイタリアが握ることで終結したが、彼はこのトリポリタニアでの戦いの中で様々なことを経験し、そして彼の考えとして残るものもたくさん得た。特に彼の場合、自身の中でトルコ民族主義的思想が高まりつつあつた一方で、従来の愛国心をより一層強力なものとするのができたし、「祖国」と「共通の宗教」という観点で強い味方となつたアラブ人の存在はとても大きいものとなつた。それは今回の一件で近代的な海軍の必要性を痛感させられた統一と進歩委員会にも同様なことが言え、領有する広大なアラブ世界を保全するためにイエメンのヤヒヤ＝ムハンマド＝ハミード＝アッディーン(Yahya Muhammad Hamid ad-Din, 1869年-1948年 後のイエメン王国初代国王)といった抵抗運動家とも妥協する必要性を見出すこととなつた。⁹⁸ただそれはオスマンが弱体化したことを受けて反乱が頻発することを抑える意味とともに、いざという時のためにアラブ人がオスマンの味方として参戦してくれることを潜在的に期待しての意味もあつた。オスマン帝国との戦いについて、戦争の終結後にイタリアの新聞で「この戦闘は20世紀初頭になって起こされた十字軍である」という報道がなされた時も、自分たちが狂信者・野蛮人ではなく、ヨーロッパ諸国と対等である存在になる必要があると語っている。⁹⁹

結果的にエンヴェルは、アルバニア蜂起の際に見出したスタンスをこのトリポリタニアでの抵抗を通してより確固たるものにした。特に彼の理想は、この時期から高まりつつあつたトルコ民族主義と、共通の国家・宗教によって民族の違いを超えた超民族的愛国心を混合させ、それを実現させるべく行動する人物へとより昇華させたのである。

⁹⁶ 同書 194 頁 125. 4 Ekim 1912

⁹⁷ 同書 197 頁 128 12 Ekim 1912

⁹⁸ Hanioglu, M. Ş. (2008) 87 頁

⁹⁹ Hanioglu, M. Ş. (1989) 206 頁 139. 8 Kasım 1912

おわりに

さてここで、第一章で述べてきたことを簡単にまとめてみたいと思う。青年トルコ革命で統一と進歩委員会は確かに政治の表舞台に出ることはできた。しかし委員会内で統率がとれていなかったこと、また革命を短期間にしかも唐突に始めてしまったという委員会の内部構造の欠陥によって、エンヴェルをはじめとする委員会メンバーは必然的に見識の浅いまま外交世界へと放り出されることとなった。この中でエンヴェル、タラート、ジェマルの3人は、それぞれの形で自分たちの理想をもう一度見直し、そしてそれぞれが自分の見解、さらには行動原理をも見出すに至った。

ジェマルはサバハッディン皇子などの様々な人物と話を重ねることで理想を盲信する統一と進歩委員会の姿を看破し、自身の理想を引き続き持ちつつも、政治・社会では市民レベル、軍事では一兵卒レベルにまで及ぶ綿密な観察を行う現実主義路線を進む男となった。彼の現実主義路線は、理想主義者としての側面を一層強めたエンヴェルとは対極の立場となった。

タラートは自身の理念の在り方を振り返ったが、なおも自身の崇高な理想を捨てることはなく、むしろ彼の場合、そのあまりに崇高な理想故に彼の中で厳しい態度で対処する現実的な政治家としての在り方と、厳格な対処こそ理想に反するとして理想を貫くために妥協的な態度を示して許す理想主義者としての在り方の線引きをどこに置くかという新たなジレンマに苦しむ存在になった。タラートの立場は、理想主義側のエンヴェルと現実主義側のジェマルのちょうど中間にいる存在となり、時には緩衝材として、そして時にはオスマン帝国の命運を握るキーパーソンとしての役割も持つようになった。

そしてエンヴェルは、アルバニア蜂起、トリポリタニアの抵抗という2つの動乱を通して、高まりを見せるトルコ民族主義を内に秘めながらも、それを共通の宗教・共通の国家を通しての強力な超民族的愛国心と混合させた理想主義的政治家として強い光を放つようになった。もちろんそれはただ彼が闇雲に実現不可能な理想を並べるわけでもなく、時にはメディアや手紙を使った情報収集や実見によって現実を直視したうえで、自身の持つ理想を確かなものへと昇華させた。言うなれば、彼はリアリズムをも兼ね備えた理想主義者という立場をとったのである。しかしそれぞれのとるスタンスは異なるものだが、彼らに共通して言えるのは、それぞれのスタンスの根底に存在していたのは、青年トルコ革命以前から統一と進歩委員会という共通の組織の中でともに育み、革命で発露させた「国家主義者(Nationalist)」としての理想像、そして祖国愛で結束した「愛国者(Patriot)」としての理想像であった。

しかし一方で、バルカン半島情勢やイタリアとの決戦の中でオスマン帝国は確実に劣勢に追い込まれていた。特に急速に力を強め始めたバルカン諸国は、長年バルカン半島において「多民族帝国」・「世界帝国」として君臨し続けてきたオスマン帝国のバルカン半島における支配を終焉させるのに足る思想と軍事力をもつ国家となっており、列強との利害関係の複雑性と相まってオスマン帝国を苦しめることとなったのである。

第二章 第一次バルカン戦争

はじめに

エンヴェルがトリポリタニアでイタリアの攻勢に抵抗し、ジェマルがコンヤの知事として行政を執行し、タラートが自身の在り方に苦悩しながらオスマンの行く末を模索していた1912年10月8日。予てから関係が悪化し始めていたモンテネグロがオスマン帝国に対して挑戦状をたたきつけた。その10日後にはセルビア、ブルガリア、ギリシャが相次いでオスマン帝国へ宣戦布告をした。2度にわたって繰り上げられる「バルカン戦争」と呼ばれる戦争の幕開けである。

バルカン戦争とは、一般的にオスマン帝国と「バルカン同盟」を構成したセルビア、ブルガリア、モンテネグロ、ギリシャとが約1・2年にわたって戦火を交えた戦争であると認知されている。しかし実際のところ、この戦争は20世紀初頭の外交の潮流にとっても忠実な側面を2つ内包した戦争であった。

まず一つ目は、この時代に発生したどの戦争よりも極めて帝国主義的な側面を持つ戦争であったことだ。当事者となったオスマン帝国やバルカン諸国以外にも、この戦争にはロシアやオーストリア＝ハンガリーといった列強の思惑も複雑に交錯し、バルカン半島における覇権をめぐる戦争と化した。ただしそれは列強諸国が直接的な介入をもってバルカン戦争へ参戦してきたのではなく、あくまで当事国への支援と影響力の行使に限定した、列強の代理と表せる形での事実上の参戦を果たしている。この帝国主義的傾向は、バルカン戦争後の講和条約であるロンドン条約にも表れることとなるし、オスマン帝国などがその後の外交姿勢を決定していくことにも少なからず影響をもたらしている。

そしてもう一つは、バルカン半島におけるナショナリズムの隆盛が形となって現れた戦争であり、そしてそれらがオスマン帝国内で形成されたミッレト制による既存のコミュニティ体制を打ち壊し、バルカン半島におけるオスマンのくびきを本当の意味で終焉させた戦争であったことだ。つまりこの戦争は、長年のオスマンの支配から脱却し、各国が民族的アイデンティティを持って独自の路線を進むようになることを決定づけた、バルカン半島の新しい歴史の始まりと「民族自決」の精神を意味するものとなったのである。しかしこれが、その後勃発する第一次世界大戦の引き金を引く要因やブルガリア、セルビアといった国々で国王が独裁化していく事態を招く要因にもなったし、なおも複雑さを増す現代のバルカン情勢の根底をなすものにもなったことは、ある種の歴史の皮肉とも言えるのかもしれない。

本章では、二度のバルカン戦争のうち、オスマン帝国と「バルカン同盟」の全面戦争となった第一次バルカン戦争での国際情勢、特にオスマン帝国とともに当事者として重要な役割を持つバルカン諸国の動向にも触れた上で、エンヴェル、タラート、ジェマルがこの戦争や戦争中に起こった出来事、特に戦争中に彼らが起こす「大宰相府襲撃事件(Babı-Âli Baskını)」の中でどのような考え方をもつようになったのか、そして後の彼らの外交の理想像にどのような影響をもたらしていったのかを検証する。

第一節 戦争の夜明け

(1) 欺瞞に満ちた同盟構想

バルカン戦争を語る上でまず欠かすことのできないものは、「バルカン同盟」という多国間同盟の存在である。先にも書いたように、この同盟には4カ国の参加があった。セルビア、ブルガリア、ギリシャ、そしてモンテネグロである。もともとはモンテネグロを除く3国で形成した同盟であったのだが、利害の一致から途中で参加したものである。しかしこの「バルカン同盟」ほど、本来の「同盟」の定義を最低限のレベルにしか守っていない同盟関係は存在しないだろう。事実彼らの同盟関係は、同盟が掲げた唯一の目標が達成されると、あっさりと瓦解してしまったのである。

そもそも「同盟(Alliance)」の定義とは、「何らかの利害・目的・思想の一致によって個人および勢力同士が協力関係にある状態」のことを指す。4カ国にとっての「利害・目的・思想の一致」とは、まぎれもなく「反オスマン帝国」であった。この利害の一致に基づき、19世紀末にも、独立前のセルビアとルーマニア、さらにギリシャが「バルカン同盟」の構想を練ることもあった。¹⁰⁰ここでルーマニアが参加していたのは、同国がオスマン領であったドブロジャ(Dobrogea)地方の領有を目指していたこともある。ドブロジャ地方とはドナウ川下流域から黒海まで至る広大な土地で、トルコではドブルジャ(Dobruca)と呼ばれている地方である。北方には石油の埋蔵が噂されたベッサラビア地方があり、そして当時はオスマン帝国とロシアが接する地域でもあった。クリミア戦争中にここはロシアの猛攻を受けて大部分を占領され、その後の講和でオスマン帝国へ返還されたのだが、当時はまだ内陸国であったルーマニアにとっては、ベッサラビアとともに黒海沿岸に領地を持つという積年の夢を具現化させる土地であった。ルーマニアはセルビアおよびギリシャと組むことで獲得に乗りようとしたのである。しかしここでこの3国にとって思わぬ問題が生じた。露土戦争の果てに締結されたサン・ステファノ条約によってセルビア、モンテネグロ、ルーマニアが独立を果たせたものの、広大な領地を領有する大ブルガリア公国にも自治権が与えられることになったのである。この大ブルガリア公国の領土の中には、セルビアとギリシャが望むマケドニアも、ルーマニアが望むドブロジャも含まれていた。ロシアはこうした領土をブルガリアに組み込むことで、ブルガリアの願望やロシアの地中海進出という長年の野望を実現させるとともに、3国の要求を挫折させようとした。結果的にこれがロシアの思惑通りに事が運び、3国の協力体制にほころびを生むこととなった。ベルリン会議でサン・ステファノ条約が破棄されてベルリン条約が新しく締結された後も、ルーマニアは望み通りドブロジャ地方の領有を成功させたことで離脱の方向へ向かい、結局自然消滅という形で頓挫した。その後も「バルカン同盟」が構成されることはなかった。

さらに同盟の構想を難しいものにしたものがマケドニア問題であった。前々から狙っていたセルビアとギリシャに加え、ベルリン条約で同地を破棄させられたブルガリアが執拗に介入を続ける形となり、マケドニアを手中にせんとにらみ合いを効かせていた3国に、オスマ

¹⁰⁰ 佐原徹哉.(1998). 153頁-209頁

ン帝国もまさか自身に対する同盟が結成されようとは予想さえしていなかった。¹⁰¹

むしろオスマン帝国は、彼らのそのような利害関係を見過ごすことはせず、逆に自分のために利用することを考えた。スルタン・アブデュルハミト2世は、こうしたバルカン半島の国々と同盟を組むことによって自身のバルカン世界での立場を保障するとともに、台頭を始めたブルガリアに対して牽制する外交を見せようとしたのだった。アブデュルハミト2世が提唱した、オスマン帝国、ギリシャ、セルビア、ルーマニアによる「バルカン連盟」の構想は、最終的にはセルビア国王・ペータル1世が反発したことで失敗に終わってしまったが、彼のバルカン諸国との結託を目指すという外交構想は、バルカン方面での安全保障を目指す帝国の必要性に合致するところがあった。それは統一と進歩委員会のメンバーも承知で、彼らは3月31日事件で当のアブデュルハミト2世を退位に追い込んだ一方で、バルカン外交の基本的な枠組みとして青年トルコ革命後の外交政策の決定の中で踏襲していった。¹⁰² それを実践する機会となったのが、バルカン同盟をめぐる交渉であった。

青年トルコ革命以降、西方でドイツの台頭がより顕著なものとなるにつれ、ロシアによるバルカンへの介入が頻繁に行われるようになった。ドイツという存在もさることながら、三国同盟によってドイツの同盟国となったオーストリア＝ハンガリーの存在が、オーストリア＝ハンガリーによって行われたボスニア危機の一件を契機に、更に気がかりとなるものになった。ボスニア危機に際しては、両国の外相・エーレンタールとイスヴォルスキーが水面下の交渉を行い続けることによって双方の協調を保つことができたが、この協調体制を持続できるかどうかは分からないところがあった。そこでロシア側は、自身の影響力を行使できるバルカン諸国に介入を行い、いざという時のためにバルカン半島全体を対象とする同盟を形成するように圧力をかけた。この同盟は、バルカン半島内でも最大級の領地を有していたオスマン帝国も加盟した、より広範な領域の中で形成される同盟となっていた。¹⁰³

ロシアがここへきてオスマン帝国を含めた同盟を持ち込んだのには、列強同士の勢力拡大の中でオスマンがドイツ陣営の仲間入りをすることを想定した理由もあった。オスマン帝国と交えた戦争の中で、ロシアはオスマンと単独で戦う分には問題ないことは理解していたし、19世紀末に立て続けに起こったクリミア戦争・露土戦争という実戦の環境の中でその戦力を把握していた。しかし、強力な陸軍・海軍を保有するドイツがオスマンと手を組むことになった場合には、当然ドイツの対抗相手であるイギリスと友好的な関係にあったロシアに対抗するために、人的・物的支援によってオスマン帝国軍の増強が図られることは予想できたし、そしてそのオスマン帝国軍がカフカス方面からロシア領へ侵入してくることで軍を分散させなければならなくなるという危険性もあった。オスマン帝国をも内包した包括的なバルカン同盟を形成させることにより、究極的にいえば世界レベルの戦争におけるロシアの潜在的敵国・オスマン帝国がドイツと結託するのを防ぐ防衛面でのメリットを狙ったとともに、ロシアが対独戦争に臨む時に軍をドイツへ集中的に送り込む攻撃面でのメリットを画策したのである。

¹⁰¹ Hanioglu, M. Ş. (2008) 87 頁

¹⁰² 同書 88 頁

¹⁰³ 同書 88 頁

しかしこのオスマン帝国をも含めた同盟は成立することはなかった。バルカン諸国がオスマン帝国の同盟加入に対して反対の姿勢を示したからである。この時バルカン諸国は2つの理由を持ってオスマン帝国の加入に反対している。まず一つ目は、バルカン諸国から見た限り、オスマン帝国の有する戦争遂行能力はおおよそ同盟内で比べてみても甚だ疑問のあるものであったからだ。この構想が出たのはちょうどイタリア＝トルコ戦争の時代である。前章第二節でも書いたように、オスマン帝国とイタリアの海軍力もその差は歴然であり、戦争中にオスマン帝国は主力艦隊を出し惜しみして東地中海の制海権をあっさりイタリアに取られ、さらにベイルート港を襲撃されて装甲艦「アヴニッラー」と水雷艇「アンカラ」を撃沈され、挙句の果てには帝都・イスタンブールへの砲撃やドデカネス諸島、ロードス島の占領も許している。また陸上の方でも、戦争の後半ではエンヴェルやケマルたちの活躍によってオスマン帝国側も抵抗することができたものの、序盤でトリポリやトブルクといった沿岸部の主要な都市を全て制圧されている。バルカン諸国はこうしたオスマン帝国の戦争遂行能力の陰を感じ取っており、同盟として組んだとしてもまともな働きをしないだろうと予測していたのだ。

そしてもう一つは、自分たちがオスマン帝国から獲得しようと考えていた領地を、同盟を組むことで獲得できなくなるかもしれないという理由であった。当時のバルカン諸国内ではナショナリズムが高まりを見せており、そんな中でオスマン帝国と同盟することは自身のナショナリズムを挫折させることに等しかった。この同盟案は諸国内のナショナリストの反感を買うことになったが、何よりもこれに反対したのは他ならぬ強力なナショナリズムを持っていた国王たちであった。

以上の理由によってオスマン帝国も含めた同盟は結成されることはなかったのだが、幸か不幸か、この同盟構想はバルカン諸国それぞれが同じ考えにあるという事を知らしめることになった。そしてこの理由に基づく利害の一致から、セルビア、ブルガリア、ギリシャは「反オスマン帝国」のもとでヨーロッパに残存するオスマン帝国領へ侵攻するべく各国が同盟締結を開始することになる。1912年3月に、まずはセルビアとブルガリアが同盟を締結させた。この同盟の背景には、両国が争ったマケドニアの中で市民の意見を代弁していた内部マケドニア革命組織がそのちょうど仲裁役として暗躍していたところがあった。¹⁰⁴さらに同年5月にはギリシャとブルガリアが同盟を締結させた。この間、モンテネグロも3国と同盟を結成させ、事実上の4カ国協力体制を作り上げた。ロシアもオスマン帝国を味方にひきこくことはできなかったものの、オスマン帝国に圧迫をかけることができるという事で4カ国の後ろ盾となり、「汎スラヴ主義」の名の下で積極的な支援を行った。

こうして「バルカン同盟」は結成されたわけだが、彼ら自身マケドニアをめぐる問題が残る以上この同盟が長続きなどしないことを重々承知であり、いつでも同盟解消できるように準備を行った。彼らの意識の中には、同盟によってオスマン打倒を目指す団結力以上に、自身の領土的欲求とナショナリズム的感情が勝っていたのだ。この同盟は、最初から彼ら自身も自覚していたように、欺瞞に満ちた同盟関係であった。

¹⁰⁴ Helmrich, E. C. (1938). 39 頁

(2) 「メガリ・イデア」の異質性

さて「バルカン同盟」の構築の際にバルカン諸国のナショナリズムが高まりを見せたことにも言及をしたが、このうち後のオスマン帝国ならびにトルコ共和国の歴史の中で非常に大きな関係性を持ったのが、ギリシャのナショナリズムであった。彼らもまた「メガリ・イデア(Megali Idea)」という強力なギリシャ民族主義を標榜しており、彼らの活動は第一次世界大戦後のトルコとの戦争(トルコで言うところの祖国解放戦争)でムスタファ・ケマルたちの抵抗によって完膚なきまで打ち砕かれる時まで、ギリシャ国王を中心に多くのギリシャ人たちによって掲げられた。しかしこの「メガリ・イデア」という思想の背景には、オスマン帝国に対して独立戦争を起し、ギリシャ王国を建国した時から続いたギリシャ人およびギリシャ王家も含むギリシャ王国の性質上の複雑な状況が根底に存在していた。

1833年にギリシャがオスマン帝国から独立した際、ギリシャの独立を支持した列強は、この新しい国家の国家体制は王を戴く君主国家にするべきという意見で一致した。当時のヨーロッパ世界の情勢は、フランス皇帝であったナポレオン・ボナパルト(Napoleon Bonaparte, 1769年-1821年)がヨーロッパを席卷した後に設立された国際体制・ウィーン体制のもと、フランス革命・ナポレオン戦争のプロセスの中で高まりを見せたナショナリズムに基づく共和主義によって旧来の秩序である君主体制が崩されることを恐れた各君主国が、自身の体制を保持しようと共和主義に反発している状態にあった。しかしこの意見の決定には、幾分か問題があった。この列強の考えというものは、現地のギリシャ人たちの考えを全く反映したものではなかったのである。現地のギリシャ人にとってこの独立戦争は、もともとギリシャに共和制国家を樹立させるために行われたものであった。事実このギリシャ独立の中心を担った人々はもっぱら共和主義的思想を掲げており、1827年には「初代大統領」としてイオアニス・カポディストリアス(Ioannis kapodistrias, 1776年-1831年)が指名されるなど、ギリシャ本土では着実に共和国樹立の足がかりが形成されていた。¹⁰⁵しかし結局のところ、共和制か王制かをめぐる国家体制の食い違いは、カポディストリアスが暗殺されたこと¹⁰⁶やそもそもギリシャ独立戦争は列強の支援がなければオスマン帝国に敗戦していたという事情から、共和制樹立は見送られ、半ば強制的にギリシャ王国建国が果たされることになった。このようにギリシャの独立時から列強とギリシャ人たちの間には断絶が生じており、ギリシャ人たちのナショナリズムは頓挫させられた。そればかりか、ギリシャの独立を自分たち自身の力だけで達成できず、さらに自分たちの望む領土を獲得することができなかったという強い劣等感をギリシャ人に植え付けることとなった。

ところでこの時ギリシャ人たちが持っていたナショナリズムとは、本当の意味での「ナショナリズム」と比べると非常に曖昧なものであった。¹⁰⁷当時独立したギリシャ王国の領域はペロポネソス半島を中心とした地域に限られていたが、ギリシャ人そのものが住んでいる領域を考えれば、完全な国民国家を達成できているわけでもない。王国国内のギリシャ人

¹⁰⁵ リチャード・クロッグ (2004). 36-37 頁

¹⁰⁶ 同書 52-53 頁

¹⁰⁷ 同書 54 頁

口よりも多い数のギリシャ人がオスマン帝国の広範な領地の中に残存していたし、さらに同一の民族であっても宗教の違いが存在したことで、そもそも「ギリシャ人」という民族をギリシャ国内で定義するのにはあまりに難しいことであった。ただ単に「ギリシャ語を話すこと」・「キリスト教徒であること」を定義しただけでも、やはりそれに該当する人々の多くはオスマン帝国にいたし、かといってより厳密な定義でまとめるのにも問題は生じた。この時期のナショナリズム国家のほとんどは、同一民族の圧倒的多数が共通の地方にかたまっていたことで成立できたのであり、残りの同胞については「領土問題」という形で奪還を目指すのが常であった。後のベルリン会議で独立するセルビアやモンテネグロや自治国となったブルガリアもこの例外ではなく、彼らは残存している少数の同胞を助けるという名目でオスマン帝国と領土問題で争うようになるのである。しかしギリシャの場合は、まだ大多数のギリシャ人が他国に残存する状態のまま独立を果たしたことで、いかに他国にいる同胞たちを宗教の違いなど関係なくギリシャ本土へ内包させるかがナショナリズムの焦点となった。そんなギリシャのナショナリズムに一石を投じたのが「メガリ・イデア」の考えであった。

「メガリ・イデア」を語るうえで欠かせない背景の一つに、上記のような経緯によってギリシャ王家がギリシャ人による王家が樹立されたのではなく、海外の王家がその王位を継承していったという外来性がある。それを象徴する話は、そもそもこの「メガリ・イデア」を誰が持ち込んだものかというところにある。この思想の原型を持ち込んだのはギリシャ人たちではなく、初代ギリシャ国王としてギリシャにやってきた国王・オソン1世(Othon I, 1815年-1867年)であった。彼はオットー・フリードリヒ・ルートヴィッヒ(Otto Friedrich Ludwig)という名をもつ、ヴィッテルスバッハ家のバイエルン王国の王子であった。しかし彼の血筋を遡ってゆくと、彼の母方の祖先がビザンツ帝国の王家・ラスカリス家¹⁰⁸の王女・マリア・ラスカリナ(Maria Laskarina, 1206年頃-1270年)につながることから、「ビザンツ皇帝の末裔」という意味合いも込めて今回ギリシャ国王として即位することになったのであった。彼自身自分がビザンツ帝国の末裔であることを知ってのことなのか、彼は若いころからキリスト教国によるローマ帝国の復活を望み、あわよくば自身が復活したローマ帝国の皇帝として即位することを夢見ていた。ギリシャ国王に即位した後になって、彼は自身の夢をかなえるべく積極的にオスマン帝国に対する干渉を行い続ける。その最たる例がクリミア戦争であった。ロシアとオスマン帝国が戦いを始めると、オソンはこの夢を達成することができる絶好の機会ととらえ、オスマン帝国に対して宣戦布告を行った。ギリシャの参戦は、ギリシャ軍がクリミア戦争のバルカン戦線でオスマン帝国軍を挟撃する役割を担ったものの、オスマン側で参戦したイギリス・フランスによって港を封鎖され、さらにはアテネへの圧力をかけられると、ギリシャは戦争から手を引かざるを得なかった。彼の野望はこうしてあっさりと失敗した。¹⁰⁹さらに彼の政治がギリシャ人に受け入れられなかったことが彼の治世に大きく影を落とした。彼の治世下になってからオスマン帝国時代よりも高い税率の税が課されるようになったし、何よりも受け入れられなかったのは、そもそも彼がギリシャの慣習に興味

¹⁰⁸ 厳密にはラスカリス家が統治していた頃のビザンツ帝国は十字軍によってコンスタンティノープルを支配されてできた亡命政権・「ニケーア帝国」になっていた頃である。

¹⁰⁹ 同書 62-63 頁

を持つ事なくカトリック教徒であり続けたからだった。「メガリ・イデア」と称せられることになる壮大な考えを浮かべておきながらも、ギリシャ人の民心を失っていった彼は1862年に発生したクーデターの末に退位させられることとなった。¹¹⁰

彼はこうして退位させられ、ギリシャ国王としてたいした実績も残すことはできなかったが、彼の「ローマ帝国の再興」という概念はギリシャ人のナショナリズムを正当化させ、そして実現化させるのにうってつけの思想となり、ギリシャ人のオスマン帝国から領土を獲得し同胞を「解放」する原動力にすることができた。彼の在位中にギリシャ王国首相を務めたイオアニス・コレティス(Ioannis Kolettis, 1773年-1847年)は、ギリシャ王国内のギリシャ人だけでなく、ギリシャ王国外にいる「ギリシャ」にまつわる概念を有する者を一括してギリシャ人とする定義を打ち出した。¹¹¹さらに彼は、これを確固たるものにするべくギリシャ王国の首都をかつてのコンスタンティノーブル、つまりオスマン帝国の帝都・イスタンブルに据えるべしと唱え、経済的首都であるアテネとの二重体制による国家運営の必要性を持唱えた。彼の定義と野望は、オソンの退位後になってオソンの「ローマ帝国の復興」という夢想と融合し、「ギリシャ人によるローマ帝国復興」というナショナリズム的な要素を含んだ「メガリ・イデア」をギリシャ国民に浸透されていった。皮肉にも、オソンの夢想は彼がギリシャ国王として即位し、そして退位した後になってより形をなすものとなり、実現の可能性をも見せるようになったのである。このように「メガリ・イデア」の概念は、海外から持ち込まれることによって行き詰まりを見せていたギリシャ＝ナショナリズムの定義付けと形成に大きく貢献し、ギリシャの対外外交路線の重要な方向性を持つものにもなった。

オソン体制以降のギリシャにおいて、この思想は主に2人の人物によって体现の道を進むこととなる。オソンの後継として国王となったゲオルギオス1世(Georgios I, 1845年-1913年)、そして20世紀初頭のギリシャを代表する政治家・エレフテリオス・ヴェニゼロス(Eleftherios Venizelos, 1864年-1936年)である。

ゲオルギオスもまた、元々はシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン＝ゾンダーブルク＝グリュックスブルク家のデンマーク王国の王子であった。彼もまた治世の最初はオソンとさほど変わらず、ただ自身の政治体制を形成させるのに腐心するばかりだった¹¹²のだが、似たような状態であったオソンとは違い、彼はギリシャ国王になるとすぐにギリシャ正教へ改宗し、ギリシャ語の習得にも勤しんだ。さらに彼は義理の兄でもあるイギリスの王太子・エドワード(Albert Edward, 1814年-1910年 後のイギリス国王・エドワード7世)との強い関係を持ったことでイギリスとギリシャの外交関係は非常に友好的なものとなり、また妹がロシア皇太子・アレクサンドル(Aleksandr Aleksandrovich Romanov, 1845年-1894年 後のロシア皇帝・アレクサンドル3世)の妻であったことでロシアとは潜在的な同盟関係を持つようになった。この強力な同盟関係は、オスマン帝国からすれば致命的な損害をもたらし得る外交的脅威ともなった。ゲオルギオスはこの外交的圧力と同盟を巧みに駆使し、1864年には

¹¹⁰ リチャード・クロック (2004). 63 頁

¹¹¹ 同書 54-55 頁

¹¹² 同書 64 頁

ペロポネソス半島西部に位置するイオニア諸島をイギリスから割譲され¹¹³、さらに1887年から翌88年にかけては露土戦争中にオスマン帝国に圧迫をかけて、最終的にはベルリン会議でアテネの北部にあるテッサリア地方と北西部にあるイピロス地方の南部の一部を割譲されるようになった。¹¹⁴こうした諸地域を列強の調停の隙を上手く掻い潜ることで掌握すると、次にオスマン帝国との間で問題となったのがクレタ島の領有問題であった。

クレタ島にはギリシャ系の人々が多く住んでおり、ギリシャが独立を果たすとクレタ島内でも独立ないしギリシャとの併合を望む機運が高まった。オスマン帝国もこのクレタ島の動向には注意を払っており、1888年にはクレタ島での動向を察して軍を派兵して鎮圧も行っている。それでもゲオルギオスはクレタ島を手中に収めることをあきらめることはなく、1896年末にクレタ島で反乱が発生すると、列強の反対を押し切る形でクレタ島を獲得すべく派兵し、そして同時にギリシャ国民からの圧倒的な支持のもとでオスマン帝国へ宣戦布告し、マケドニアへの侵攻を開始した。このクレタ島の反乱の中には、後に名声をあげて首相となるヴェニゼロスの姿もあった。しかし「希土戦争」と呼ばれたこの戦争はギリシャ側の準備不足が大きく響き、さらに列強からの支持も受けることができなかったこともあり、オスマン側へ多大な賠償金と領地の一部の割譲をもたらす結果に終わってしまった。¹¹⁵

とはいえこの戦争の結果、クレタ島はオスマン帝国から自治権を与えられ、クレタ州としてギリシャ人による行政を認可されるようになった。この時の議会でリーダー的存在となったのがヴェニゼロスであった。彼のリーダーシップと巧みな外交手腕によってギリシャ本国とクレタ州の距離はさらに急速に縮まっていき、さらにはクレタ島総督として派遣していたゲオルギオスの息子・ゲオルギオス王子(Georgios Tis Ellazas, 1869年-1957年)をも辞任に追い込んだ。彼はもとよりクレタ島を自治州という立場のままにつもりはなく、最初からギリシャへ編入させることが目標であった。彼が目標を達成させるのは、ちょうど青年トルコ革命のときであった。青年トルコ革命に乗じてクレタ島を列強などの反対を押しつけてギリシャへ強引に編入させたことでヴェニゼロスはその権力基盤を固め、1910年にはついにギリシャ本国の首相となった。

ゲオルギオスは、首相になったばかりのヴェニゼロスと早速先の希土戦争のなかでオスマン帝国に敗戦した理由を共有し、「メガリ・イデア」の達成のための条件を話し合った。彼らが話し合いの中で見出したのは、やはりギリシャの根本的な軍事力不足、そしてともにオスマン帝国を打破する友好国が身近にいなかったことであった。特にギリシャの軍事力不足は、他のバルカン諸国からは「最弱」と揶揄されるものとなっており、数で圧倒的に優位にあるオスマン帝国を打破して「メガリ・イデア」を達成させるのには程遠いものであった。そこで2人は、自分たちが得意とする分野でそれぞれ暗躍を始めることを決めた。

ゲオルギオスは、なおも友好的な関係にあるイギリスから大量に軍艦を購入し、またフランスの支援のもとで陸軍の増強を図ることで、陸軍・海軍ともにオスマン帝国に対抗しうる

¹¹³ 同書 64 頁

¹¹⁴ 同書 68 頁

¹¹⁵ 同書 69 頁-70 頁

軍事力を急ピッチで増強し始めた。¹¹⁶さらに1910年には主力となる装甲巡洋艦「イエオギオフ・アヴェロフ」をイタリアから購入したことで、ギリシャ海軍はバルカン諸国内では随一の海軍力を保有するようになった。こうして急ピッチで増強されたギリシャの海軍力は、バルカン戦争においてオスマン帝国海軍との海戦ならびにオスマンによるアジア側からの兵員輸送の抑止、そしてエーゲ海の制海権の獲得の点で絶大な威力を発揮することとなる。

一方ヴェニゼロスは、20世紀初頭のオスマン帝国の情勢を冷静に分析し、ロシアからのバルカン連盟の際にセルビアがこれを拒否したことに目を付けた。セルビアとブルガリアとはマケドニアの件で対立はあったものの、「オスマン帝国を打倒する」というただ一点に関して言えばこの上なく貴重な近隣国であった。ギリシャはゲオルギオスの人脈の関係でイギリス・ロシアの支援を受けることはできたものの、やはり実際にオスマン帝国と対峙するうえでは近隣国との連携は不可欠と考えていた。ギリシャにはオスマン帝国領土内にギリシャ人が多くいることで報復を受ける可能性も考えたが、ヴェニゼロスはそれを覚悟の上で同盟締結を画策した。こうしてヴェニゼロスの指導のもとで、ギリシャはセルビア・ブルガリア・モンテネグロと同盟を組み、バルカン同盟の一端を担うようになったのである。¹¹⁷

以上のようにギリシャは、国王・ゲオルギオスと首相・ヴェニゼロスの存在に支えられる形でバルカン同盟に参加し、自身の「メガリ・イデア」を達成させんとした。しかしその根底には、ギリシャ人の複雑な民族状況によって自身のナショナリズムを規定することのできなかったギリシャ人に代わり、海外出身の王や少数民族出身者がその根底をつくることで初めてギリシャ人も新しい形のナショナリズムに目覚めることとなったことが存在している。

「メガリ・イデア」の発想は、他のナショナリズムとは一定の共通の性質を持ちながらも、他方である種壮大ともいわれる「外来性」という異質な性質も持つようになったのである。

(3) パートナーの模索とキーマンとしてのルーマニア

セルビア、ギリシャ、ブルガリア間でバルカン同盟が結成された一方で、オスマン帝国政府もまたこの時期になってバルカンにおける緊張の高まりを感じ取るようになった。しかし当のオスマン帝国は今、アルバニアの反乱を鎮圧すると同時にトリポリタニアをめぐるイタリアとの戦争を遂行している途中であり、また本節(1)でも書いたようにバルカン諸国の利害対立を見て対オスマン帝国の連合の可能性を少しも考えていなかったこともあり、バルカン半島は事実上「ガラ空き」というのに等しい状態にあった。オスマン帝国内ではアブデュルハミト2世の「バルカン連盟」構想を継続していたものの、セルビア、ブルガリア、ギリシャの3国で同盟が締結されてしまった今となっては何ら意味をなさないものとなった。しかしだからと言ってすでに戦時体制下にあるなかで増強を行うのには厳しいところがあった。タラートによれば、当時の大宰相であるガーズィー・アフメト・ムフタル・パシャ(Gazi Ahmed Muhtar Paşa, 1839年-1919年)の命令によって約10万人もの予備役の兵を再徴発させた¹¹⁸ようだが、それでも短期集中的に増強させるのにはあまりに時間が足りなさすぎ

¹¹⁶ 同書 74 頁

¹¹⁷ 同書 75-76 頁

¹¹⁸ Bolayır, E. (1946) 18 頁

た。そのような非常に切羽詰った状況のなかで、オスマン帝国内部では早急にバルカン半島における強力なパートナーを探す必要が出た。

彼らのなかでまず候補として上ったのは、かつてはバルカン半島を二分する勢力として渡り合ったオーストリア＝ハンガリーであった。すでに三国同盟によってドイツとは同盟国にあったオーストリア＝ハンガリーは、予てから親独外交路線を打ち出そうと考えていたオスマン帝国政府にとっても同盟国のような存在となることは十分考えられた。さらにオーストリア＝ハンガリーに期待できたことは、その強力な軍事力を以て隣国であるセルビアおよびモンテネグロへの外交的抑止力としての働きを示すことができると考えていたのである。特にセルビアに関して言えば、オーストリア＝ハンガリーはセルビアとは衝突を繰り返したからだ。青年トルコ革命時にオーストリア＝ハンガリーがボスニア・ヘルツェゴビナの領有をめぐってセルビアと対立したほかにも、青年トルコ革命の2年前に当たる1906年にも「豚戦争」という関税戦争を両国は引き起こしており、両国の関係の悪さは誰が見ても明らかなものであり、セルビアを相手取る戦争であれば参戦してくれるのではないかと考えた。

しかし、それはあくまでセルビアの敵国としてのオーストリア＝ハンガリーを見たのに過ぎず、列強の一角をなす国家としてのオーストリア＝ハンガリーの立場を考慮に入れば、オスマン政府内で考えられた案がすんなり実現化されるのかは怪しいところにあった。政府内部にいたタラートは、この争いの予兆に関しての列強の態度をズバリ見抜いていた。彼は自身の回想録の中で次のように語っている。

バルカンでの争いにおいて、ヨーロッパ列強にとってこの争いは気楽な仕事であった。どの国が2大勢力のいずれかに属することになるまいが、列強が全ての国々一つ一つに対して厳しい態度をとることこそが、多くの人々の血がバルカンの戦場で流されることを防ぐうえでは効果的な方法であったからだ。¹¹⁹

タラートも語ったように、多くの列強の権益が交錯するバルカン半島では、直接手を下すよりも力の弱い各国に対して威圧的な態度を見せることだけでも効果的であったし、何よりも列強は直接的な方法によって他の列強の介入を招くことも恐れたのだった。とはいえ当時の列強はリスクよりも政治的計算による行動をとるところもあり、確実に提携が不可能という事を確証するのもに難しいところがあった。タラートがオーストリア＝ハンガリーの駐イスタンブール大使であるパラヴィチーニと会談して様々な合意をなした際にも、当時のイギリスなど三国協商陣営は自らの利権を踏まえ、ドイツなど三国同盟側にとって強力な敵となる存在を自陣営へ引き込もうと考える節があるという話をパラヴィチーニから聞いていた。またその一方で、オーストリア＝ハンガリーとしてはオスマンがセルビア・アルバニアにおける

¹¹⁹ 同書 18頁

重要な役割を果たすことを期待しているということを話している¹²⁰。

そのオーストリア＝ハンガリーに關係する国家として次に候補に挙げたのが、ルーマニアであった。第一章第三節でエンヴェルもルーマニアを仲間に引き入れるべきと考えたことを書いたが、今回はオスマン政府側としてもそれを考えるようになったのである。しかしエンヴェルの場合、ルーマニアを引き入れることができる理由として「ルーマニア王家(ホーエンツォレルン＝ジグマリンゲン家)が親独路線をとっていたこと」と「トルコ最良の友人が軍務大臣を担当していた」というプライベートな理由をもっぱら挙げており、最終的にはドイツをオスマン帝国の後ろ盾にするということを目的としていたのだが、オスマン政府側が挙げた理由は、かつて破談したある三国間協定の復活を持ちだした。

1909年11月、オスマン帝国、ルーマニア、オーストリア＝ハンガリーの3国の間に三国間協定の締結をめぐるやり取りが交わされた。もともとはオスマン帝国とオーストリア＝ハンガリーの間の軍事協定の問題であったのだが、バルカンでの利害衝突の際にバルカン諸国に抵抗できる存在はオスマン帝国とルーマニアであると考えていたオーストリア＝ハンガリーは、三国に不測の事態が起こった際に協力し、共に解決を目指すという三国の協商設立を考えた。ちょうどこの年は、ロシアからもオスマン帝国をも内包したバルカン同盟の構想が打ち出されるようになってきた時でもあり、オスマン帝国にとってはロシアの考えによる安全保障体制かオーストリア＝ハンガリーの考えによる安全保障体制のいずれかを採用することができるチャンスでもあった。ただこのオーストリア＝ハンガリーの考えには、当時のオスマン帝国大宰相・ヒュセイン・ヒルミ・パシャ(Hüseyin Hilmi Paşa, 1855年-1922年)も支持をしていた。ヒルミ・パシャは、以前マケドニアをめぐる問題の際に的確な対応を見せており、国際的にも評価の高い宰相であった。オーストリア＝ハンガリーもヒルミを信用したところがあり、そのまま協定が締結されるかと思われた。

しかしこの協定を持ちこんだ時期が、三国の協定の締結を妨げることとなった。1909年11月というのは、まだオーストリア＝ハンガリーが勝手にボスニア・ヘルツェゴビナを占領してからまだ日が浅く、オスマン帝国側としては憎きオーストリア＝ハンガリーとの協定には抵抗感を抱いていたのである。さらに協定締結に好意的であったヒルミが辞職に追い込まれてしまい、この協定は破談。オスマン帝国はロシアの提唱したバルカン同盟の考えに接近するようになっていったのである。¹²¹しかしオスマン帝国はこの時、オーストリア＝ハンガリーの存在によって協定の締結にこぎつけることはできなかったものの、ルーマニアがドブロジャ地方南部を巡ってブルガリアと対立していたことを知っており、ブルガリアを挟撃するには有効な協力体制と考えたのである。ただルーマニアとの同盟を築く上で問題となったのは、ごく単純な理由からであった。ルーマニアにとってオスマン帝国やオーストリア＝ハンガリーは旧敵であったからだ。その歴史は1848年にまで遡ることができる。

1848年、この年ルーマニアではオーストリア帝国に対して革命が展開された年であった。かつてルーマニアには、ワラキア(Valahia)、モルドヴァ(Moldova)、トランシルヴァニア

¹²⁰ Bolayır, E. (1946). 18 頁

¹²¹ 藤由順子(2003) 137-141 頁

ア(Transilvania)の3つの公国が存在していた。当初はオスマン帝国の属国という立場が中世からずっと続いていたのだが、19世紀になるとちょうどこの場所がオスマン、オーストリア、ロシアの勢力がぶつかり合うところでもあったことから、この3公国の領土は実質上3帝国によって分割されるという状態にあった。それに耐えかねた形で発生したのがこの年の革命であった。しかし結果は失敗してトランシルヴァニアはオーストリア領となり、さらにすぐに起きたクリミア戦争のときにはワラキアとモルドヴァの2公国はロシアに占領された。¹²²クリミア戦争が終わるとワラキアとモルドヴァは元のオスマン帝国の属国として解放されることとなったが、2公国はこのクリミア戦争で自分たちの無力を思い知らされた。そこで2公国は、まず統一の公位継承者を据えることを行い、そこから両公国を統合させることを決めた。1859年におこなわれたモルドヴァ公位就任をめぐる選挙の末、モルドヴァ公として就任した人物が、アレクサンドル・ヨアン・クーザ(Alexandru Ioan Cuza, 1820年-1873年)であった。¹²³クーザはもともと1848年の時の革命を推進させ、後に軍司令官に任命された人物であるが、彼自身穏健的な自由主義者でもあった。そんな経緯もあり、当初はまさかクーザがモルドヴァ公となることは誰もが予想さえしてなかったのだが、彼の対抗馬となる人物たちが次々に消去法で不適格と見なされていったうちに彼がモルドヴァ公にふさわしいと考えられるようになった。クーザはモルドヴァ公に即位してから数日後、彼はワラキアの方でも満場一致でワラキア公に即位することを賛成され、ワラキアとモルドヴァは1862年にルーマニア連合公国となった。¹²⁴クーザの治世は非常に評判がよく、ルーマニア史上屈指の善政を敷いたとされる。特に彼が発布した土地改革法はルーマニアの農業力を拡大させ、さらに彼が開校したブカレスト大学では学業の振興が行われ、多くの知識人を輩出した。

とはいえ、新たに樹立されたルーマニア連合公国およびクーザの政策および彼の存在を気に食わないと思う者もいた。その先鋒にいたのが共和制樹立を望む急進派のメンバーたちであった。彼らはクーザを独裁者と呼び捨て、退位を要求するようになった。結局この介入と妨害は元ワラキア公やモルドヴァ公の思惑と連携して展開され、クーザはわずか4年という短い期間で退位に追い込まれることとなる。そして彼の後任としてやってきたのが、ホーエンツォレルン＝ジグマリンゲン家出身のカロル1世であった。カロルは1866年に即位した後、ベルギー憲法をもとにした新憲法を発布して内部構造の変革を行った一方で、当時着々と力をつけていたプロイセンの軍事顧問団を招聘し、軍事力・防衛力を強力なものにすることを第一の目標に据えた。もちろん手本とする国をプロイセンにしたのは彼がドイツに馴染みのある家系出身であったからなのだが、結果的に彼のプロイセンからの支援の目論見は上手くいき、オスマン帝国からの独立を確固たるものにすることも不可能なものではなくなった。そして彼の願望は、1877年の露土戦争で宗主国のオスマン帝国が敗戦し、セルビアやモンテネグロとともにルーマニア王国として独立を果たすことで¹²⁵結実した。

¹²² アンドレイ・オツェテア.(1977年) 46-73頁

¹²³ 同書 81-82頁

¹²⁴ 同書 87頁

¹²⁵ 同書 109-116頁

さらにルーマニアは、独立したばかりの祖国を守るべく対外的な協力体制を築こうとした。ここでも彼の「ドイツ愛」はいかんとなく発揮され、彼は統一帝国となったばかりのドイツとオーストリア＝ハンガリーとの同盟を画策した。ドイツも同じ王家の人間が統治しているという安心感と、ロシアへの抑止に役立つという考えからルーマニアとの同盟に好意的な考えを持ったことから、この3国は1883年に秘密同盟条約を締結させ、以後ドイツやオーストリア＝ハンガリーと袂を分かつことになる第一次世界大戦の勃発まで続いた。¹²⁶

こうしてルーマニアは親独政権として存在するようになり、オスマン帝国との間にも関税協定を締結し¹²⁷、さらに対ロシアの軍事同盟に関する協定の締結に向けた動きもあった。しかしそれでも、1848年からのルーマニアの歴史の中で、オスマン帝国は宗主国という立場を利用して度々干渉し、そして度々鎮圧部隊まで派兵するような歴史を両者が歩んできたこと、そしてルーマニア参戦によるロシアからの攻撃をルーマニア側も憂慮していただけに、いくら親独政権であっても協力してくれるかは分からないままだった。オスマン帝国のバルカン半島における「パートナー」は、その時その時の運に任されるような状態になったのである。

第二節 開戦

(1) モンテネグロの「好戦外交」と帝国の孤立

こうしてオスマン帝国は、バルカンにおける明確な協力者を得られず、同盟者の有無が一種の賭けのような状態になったままバルカン諸国からの強い圧力を受けるようになった。バルカン諸国の口実として主に用いられたのが、ベルリン会議における第23項・マケドニア改革であった。¹²⁸この条項には、文面通りマケドニアの改革を約束させるとともに、バルカン半島におけるオスマン帝国領にもある程度の自治を認めるものであったのだが、オスマン帝国(特に統一と進歩委員会)は青年トルコ革命で改革は達成されたというスタンスを取っており、この日まで完全な履行を行っていなかったのである。これに対してオスマン帝国に食ってかかったのは、1910年に王国となったばかりのモンテネグロであった。¹²⁹

当時モンテネグロを指導していたのは、1860年の独立戦争以降モンテネグロの頂点に君臨していたニコラ1世(Nikola Mirko Petrovich-Nyegosh, 1841年-1921年)である。ベルリン会議によって独立を果たしてから形式上は1905年からは立憲体制を成立させていた。しかし独立戦争から活躍したこの強権的君主は憲法などものともせず、閣僚の任命権や一部の議員を選ぶ権利をも有するなど、事実上の独裁政治を展開した。一時は議会もニコラの権限を制約しようとしたものの、逆に彼の逆鱗に触れて議会被解散させられ、ニコラに反対する自由主義者たちが選挙をボイコットする事態も生じた。¹³⁰

モンテネグロの外交スタンスは極めて単純で、とにかくロシアとの協調を図りながら自身

¹²⁶ 木村真. (1998). 225 頁

¹²⁷ 同書 119 頁

¹²⁸ Hanioglu, M. S. (2008) 88 頁

¹²⁹ 藤由順子. (2003) 169 頁

¹³⁰ 木村真. (1998) 227-228 頁

の勢力の拡大のために対立も辞さない好戦的なものであった。とはいえこのスタンスは主にニコラが推進させたスタンスであり、かつては地理的關係上ロシア、オーストリア＝ハンガリー、オスマンの3国とのバランスを上手く取りながらの外交を行っていた。しかしニコラが独立戦争を指揮し、そして18世紀にロシアからの積極的な支援を受けるようになると、モンテネグロは大きく親露路線へ舵を切るようになったのである。そんなモンテネグロ外交を象徴するのが実は日露戦争である。元々日露戦争は日本とロシアの間で発生したものであるが、この戦争にニコラは遙か東方に位置して何ら関わりを持たない日本に対しても宣戦布告を行った。当然戦闘に参加することはなく、モンテネグロの宣戦布告が戦時には日本側に気づかれなかったこともあったが、モンテネグロとロシアの協調性を垣間見ることができる外交である。

しかしこのロシアとの友好的関係をみることで、モンテネグロ外交のもう一つの側面が出てくる。それは隣国のセルビアとの陰悪な外交関係である。ただこの陰悪さの理由は非常に単純で、当時のセルビア国王・ペータル1世が自分の娘婿であり、「セルビア第一の人物」を自認していたニコラを差し置いてセルビア国王になってしまったからであった。この個人的な競い合いに加え、セルビアにモンテネグロとしては危険なものであった急進的な議会制度が存在したといった体制の違いやその議会を率いていた当時の首相がよりによって自分と同名の「ニコラ」・パシッチであったことがニコラ1世としては気に食わなかったところであり、セルビアとの陰悪関係はより一層強まることとなった。この陰悪関係は、モンテネグロがアルバニアのスクタリを攻略するときにも現れる。しかしそんなモンテネグロがセルビアを含めた「バルカン同盟」に参加することになったのは、やはり友好国・ロシアの圧力があったからに他ならない。¹³¹

そんなモンテネグロの好戦的な外交スタンスはもちろん直接的な利害衝突にも表れている。その矛先はもっぱらオスマン帝国とオーストリア＝ハンガリーであった。この時代になって、モンテネグロはしきりにアルバニアとコソヴォの獲得に向けた動きを見せ始めた。モンテネグロとアルバニア、コソヴォとはすぐに隣り合わせるところにあり、国土獲得の上では格好の土地であった。もちろんこの時アルバニアはオスマン帝国領で、コソヴォはオーストリア＝ハンガリー帝国領であったので、アルバニアやコソヴォで反乱や抵抗運動が起こればすぐにモンテネグロはその支援を行い、徹底した妨害工作を展開した。エンヴェルが視察したアルバニア蜂起もまた、モンテネグロの支援下で行われていた。

さらにモンテネグロの好戦的外交を支えるシステムとして、モンテネグロが独自にとった戦時体制があった。もともとモンテネグロには、かねてから非常時に国内男子全員を総動員して短期間に国境沿いに軍を配備するという伝統的な防衛手段があった。¹³²これはモンテネグロの地理的・人的規模の小ささが為せたものであるのだが、長年この伝統を実践してきたことによって、モンテネグロには3万の兵力と旧式の装備、戦術、制度しかないものの、

¹³¹ レフ・トロツキー. (1912年). “Seriya i Chernogoriya“. *Kievskaya Mysl* (353) in 『バルカン戦争』 (1926年), (清水昭雄, Trans.) 150-154 頁

¹³² 藤由順子. (2003) 111 頁

兵士一人ひとりが実践経験の豊富で勇猛果敢な軍を保有する国家となった。オスマン帝国ならびにオーストリア＝ハンガリーにとっては、この屈強な軍もさることながら短期間で他国領へ侵入できるモンテネグロ軍の機動力の高さが一種の懸念材料にもなっていた。

そんなモンテネグロが戦争をも辞さない得意の強硬策で打って出てきたこともあり、セルビア、ギリシャ、ブルガリアの同盟締結に危機感を感じて自治を要求してきたアルバニアの要求およびバルカン諸国からのマケドニア改革の履行要求を、大宰相・キヤーミル・パシャ(Kıbrıslı Mehmed Kamil Paşa, 1833年-1913年)が指導するオスマン帝国政府は融和的姿勢で自治要求を認可し、マケドニア改革の約束も行う決断をした。折しも1912年7月31日に内部マケドニア革命組織が爆弾テロを行ったことへの報復措置としてオスマン帝国が起こしたマケドニア住民虐殺事件・コチャナ事件がブルガリアの怒りを煽った¹³³ことも少なからず遠因となった。

キヤーミル政権のこの動きに統一と進歩委員会は反対運動を展開し、キヤーミル政権へ圧力をかけた。¹³⁴彼らの反対の意は学生らにも影響を与え、この決定をしたキヤーミルがいる大宰相府や宮殿に殺到して戦争遂行を要求する運動を行った。キヤーミルの行った決定はまぎれもなく「譲歩」であり、またとらえ方によっては「屈服」に等しいものであると感じ取ったのである。こうしてオスマン帝国内には、バルカン戦争を回避したいキヤーミルらオスマン政府とバルカン戦争を望んだ統一と進歩委員会の対立構造が改めてはっきりと現れ、バルカン諸国への対応が遅れた。そしてこれに痺れを切らしたモンテネグロはついにオスマン帝国へ宣戦布告を行い、バルカン戦争はこうして始まった。

モンテネグロの宣戦布告に続く形で、10月18日には他のセルビア、ギリシャ、ブルガリアもまたオスマン帝国に宣戦布告し、戦争はバルカン半島全体を巻き込んだ戦争に発展した。しかしここで、オスマン帝国の外交的期待は見事に外れることとなる。オスマン帝国が頼りとしていたオーストリア＝ハンガリーとルーマニアが動かなかったのである。タラートに対しては、確かにパラヴィチーニはオスマン帝国に期待する節を見せ、さらにオーストリア＝ハンガリーがアルバニアにおける問題で重要な役割を果たしたいと述べた¹³⁵が、それでもオーストリア＝ハンガリーとしてはロシアと衝突する危険性は見逃せないし、他の列強と同様に戦争後になってバルカンの将来を議論することのほうが有益であったのである。このオーストリア＝ハンガリーが打ち出した自身の立場は、当時の列強と同じ考えにあった。バルカン戦争以前はバルカン半島における現状維持を望んで積極的な介入を行った一方で、彼らの関心は次第に現状維持からバルカン戦争の火種がロシア・オーストリア＝ハンガリー間にも飛び火し、ヨーロッパ大陸全土を巻き込む戦争をいかに防ぐかに移ったことで、バルカン戦争の停戦命令を出すとともにバルカンの将来を議論する会議の招集に関心が移ってってしまったのである。列強がこのようなスタンスになってしまったことは、後にキヤーミルが尽力した列強による調停を失敗させる原因にもなった。¹³⁶これについてはタラート

¹³³ 同書 169 頁

¹³⁴ Hanioglu, M. Ş. (2008) 88 頁

¹³⁵ Bolayır, E. (1946). 18 頁

¹³⁶ Hanioglu, M. Ş. (2008) 89 頁

も言及を行っており、オーストリア＝ハンガリーが自身も攻撃を受けるかもしれないという警戒心によってそうなったのだと指摘している。¹³⁷

オーストリア＝ハンガリーが態度を硬化させたことで、ルーマニアの出方も変わった。ルーマニアにとってはブルガリアからドブロジャ地方南部を獲得できるチャンスでもあったわけだが、やはりベッサラビアにいるロシアの存在がルーマニアの行動を制約した。もちろんここでドイツが動けばブルガリアに宣戦布告できるのだが、ドイツもまた世界戦争への発展を危惧して動こうとはしなかった。結局ルーマニアは自身だけではどうすることもできないという事を理由に中立を宣言したのである。

こうして頼みのオーストリア＝ハンガリーとルーマニアが参戦を見送ったことで、オスマン帝国はセルビア、ブルガリア、ギリシャ、モンテネグロの4カ国に対して単独で戦わざるを得なくなった。それはオスマン帝国が外交的にも孤立したことを意味するものであった。

(2) オスマン帝国の劣勢とジェマル、エンヴェルの動向

モンテネグロが宣戦布告してノヴィパザール県へ攻撃を行い、さらにセルビア、ブルガリア、ギリシャもそれに続いて宣戦布告してから数日が経ち、バルカン戦争はバルカン同盟側の圧倒的優勢のまま進行していた。バルカン諸国は各地のオスマン帝国領へ向けて軍を展開し、着実に戦果をあげていた。イタリアとの戦闘中で兵をトリポリタニア方面に費やしたことなどが積み重なり、オスマン帝国は全体での抗戦ではなく、要衝一つ一つに軍を集中させざるを得なかったのだが、それでもオスマン帝国軍はあっけなく突破されていた。

そもそもオスマン帝国軍は予め1910年からドイツの軍事顧問団の指導のもと、ドイツ式の軍を作るよう指導を受け始めていた。1883年からドイツからやってきた軍事顧問のコルマール・フォン・デア・ゴルツ (Wilhelm Leopold Colmar Freiherr von der Goltz, 1843年-1916年)を始めとするドイツ軍人たちにより、士官養成や騎兵、歩兵、砲兵、工兵に至る全ての兵科の育成学校に至る細部までドイツ化させ、また軍事ドクトリンや都市の要塞化もまたドイツ式の方法がとられるようになった。オスマン帝国西部における要衝であったエディルネも、そしてアナトリア東部における要衝であったエルズルムも、ドイツの影響を強く受けたことで鉄壁の要塞と化した。¹³⁸さらにオスマン帝国軍最高司令部では、複数にわたる仮想敵国の組み合わせを考慮し、それぞれに応じた作戦計画の案を作成した。ブルガリア、ギリシャ、セルビア、モンテネグロの4カ国との交戦を想定して作り上げた第5計画はかなり完成に近いもので、地域ごとの各軍司令部にもこの計画をすでに伝達していたのである。¹³⁹しかしその計画は、オスマン帝国が外交戦略上バルカン諸国の利害対立から戦闘はないことを前提として考えられたことで、計画は結局中途半端なものになってしまった。中途半端な計画はそのままバルカン戦争の中で使用されたが、その戦闘の中で重要な欠陥が露呈されることとなる。バルカン諸国各軍の戦力の根本的な見誤りであった。

¹³⁷ Bolayır, E. (1946). 18 頁

¹³⁸ Erickson, E. J. (2001). 2-7 頁

¹³⁹ Erickson, E. J (2003), 62 頁

先にも書いてきたように、伝統的戦術と装備を重用したモンテネグロを除けば、ブルガリアもセルビアもギリシャも近代化と増強を行っており、それらはオスマン帝国の予想をはるかに超えるレベルに達していた。特にブルガリア軍の装備や戦術は、当時のオスマン帝国軍の水準を凌駕しているものであった。こうした戦力の見誤りや戦略上のミスが重なり、各地のオスマン帝国軍の防衛線はあっけなく突破され、オスマン帝国軍は各地方の要塞で籠城戦を展開するしかなかった。オスマン帝国軍第2軍も11月初旬にアルバニアでセルビア・モンテネグロ連合軍に敗戦し、撤退を余儀なくされた。戦闘開始から一年もたたない時点でバルカン半島のほとんどはバルカン諸国の手に落ち、エディルネやスクタリ、セラーニクといった要塞でオスマン帝国軍が抵抗する戦況となった。¹⁴⁰

この戦争の中で最もオスマン帝国にとって脅威となったのは、トラキアに展開するオスマン帝国軍の主力と互角以上の戦いを見せているブルガリア軍であった。ブルガリア国王・フェルディナンドの戦略のもとで総勢60万もの軍勢は一気にオスマン帝国の心臓部であるイスタンブールとオスマン帝国の重要な要塞・エディルネ、そして予てから狙っていたマケドニアに向けて怒涛の進撃を行った。オスマン帝国軍のトラキア方面の司令官・アブドゥッラー・パシャ(Kölemen Abdullah Paşa, 1846年-1937年)は、ブルガリアの軍勢は多方面に軍を分散させる作戦を考え、トラキア方面軍の兵力は微小なものと考えて約10万人の軍勢を配備した。ところが実際に彼の目の前にやってきたのは、歩兵、騎兵、砲兵を含む約40万の精強な軍勢であった。約4倍の軍勢の前にオスマン帝国軍は為す術がなく、1912年10月のクルクキリセ(現トルコ領・クルクラレリ)での大規模な戦闘では何もすることができず撤退を余儀なくされた。勢いをそのままに、ブルガリア軍はオスマン帝国の防衛ラインを突破しながらエディルネの包囲に成功し、同時に11月には帝都・イスタンブールの37マイル西方に位置するチャタルジャのオスマン帝国最後の防衛ラインまで迫ることとなった。オスマン帝国軍最高司令部でのミスに加え、こうした現場の司令官たちの戦略的なミスもまたオスマン帝国を劣勢に追い込む原因となったのである。¹⁴¹

さらにオスマン帝国の劣勢に追い打ちをかけたのが、当初は「最弱」と目されたギリシャ軍の存在であった。ヴェニゼロスとゲオルギオス1世の2人が考えた「軍備の増強」の構想およびその後のフランスの支援による軍拡化は、彼ら自身が予想するよりもはるかに超える戦果をもたらしていた。特にギリシャ海軍の海上戦での成果は絶大で、言うなれば彼らの存在があったからこそバルカン諸国は圧倒的優勢の中で戦うことができたのである。オスマン帝国はあまりに不足している兵力を補おうと何度も中東方面、アナトリア東部に展開する軍を海上輸送で増援として動員させようとしている。バルカン諸国の海軍と比べると、オスマン帝国海軍は強く、エーゲ海や地中海北岸の制海権さえ握ればオスマン帝国は形勢を逆転できるチャンスがあった。しかしそれを阻んだのが、ギリシャ海軍中將であったパヴロス・クントゥリオティス(Pavlos Kountouriotis, 1855年-1935年)が率いるギリシャ海軍であった。まず11月に水雷艇でオスマン海軍の装甲艦「フェトヒ・ビュレント」を撃沈させると、1

¹⁴⁰ Hanioglu, M. Ş. (2008) 89 頁

¹⁴¹ Erickson, E. J. (2003). 85 - 86 頁

2月にエーゲ海を奪還しようと打って出てきた「トゥルグット・レイス」および「バルバロス・ハイレッディン」を中心としたオスマン帝国艦隊に対して、ダーダネルス海峡の外れにてイタリアから買ったばかりの「イエオギオフ・アヴェロフ」ほか8隻の軍艦で迎え撃った。もともとオスマン帝国海軍がもっていた強さの秘訣は、各艦船が有している「主砲の火力」にあった。特に「トゥルグット・レイス」と「バルバロス・ハイレッディン」の火力はギリシャ海軍のどの艦船よりも強力なもので、正面から当たっていく戦術では一筋縄ではいかないうち力を持っていた。しかし一方で、この2隻には機動力の面で少し難があり、機動力のある艦船相手には苦戦するところもあった。そこでクントゥリオティスは、「イエオギオフ・アヴェロフ」が「トゥルグット・レイス」と「バルバロス・ハイレッディン」よりも速く動くことができた点で優勢であったことを考え、あえて自身が乗船している「イエオギオフ・アヴェロフ」をこの2つの戦艦にぶつけることにした。彼の目論見通り、この両国の艦隊が衝突したエリの海戦は結局、その「イエオギオフ・アヴェロフ」の高い機動力が存分に生かされた海戦となった。オスマン帝国艦隊は「イエオギオフ・アヴェロフ」の高速戦術に振り回されて大した攻撃もできずにギリシャ海軍に敗れ、エーゲ海の制海権を確保することに失敗した。こうしてギリシャ海軍はエーゲ海の制海権を掌握し、バルカン半島の外側にあるオスマン帝国領から増援部隊が送り込まれるのをシャットアウトしたのであった。¹⁴²

こうして陸上ではブルガリアがオスマン帝国の喉元まで迫り、海上ではギリシャ海軍が制海権を握った中で、エンヴェル、ジェマル、タラートもそれぞれ違う形でバルカン戦争へ参戦し始めていた。特にエンヴェルとジェマルはそれぞれ指揮官として軍を率い、特にトラキア方面でブルガリア軍と度々対峙した。タラートに至っては、自身が内相という重大なポストにいらながらも、一志願兵としてエディルネの戦線に赴いている。¹⁴³

1912年9月21日に陸軍中佐としてコンヤの予備軍(Redif Fırkası)の指揮官となっていたジェマルは、バルカン半島で不穏な空気が高まってきていたのに合わせて軍の動員を急ぐためにコンヤへ電報で命令文を送り、すぐに結成された第9軍団の団長としてチャタルジャに隣接するチェルケズキョイ(Çerkezköy, チャタルジャの東)へ向かった。しかしバルカン半島での不穏な事態が急を要するものであっただけに、ジェマルはチェルケズキョイに到着する時までは行動の計画がまだない状態で軍を動員し、そして着いてから作戦を綿密に練り始めた。ここで彼は、他方からやってきた軍団にも自分の作戦や指示を行き渡らせる為に、第9軍団のいくつかの大隊を分散させ、作戦が的確に行われるかどうかを連絡できるようにした。さらにジェマルは、自身の部隊がその辺一帯の地形を知らないままであることを踏まえて、自部隊の兵たちに直接地形の調査をさせ、その把握を行わせている。¹⁴⁴命令系統の確認や地形の把握といった戦闘準備における情報収集は、戦争を行う上ではごく当たり前に行われることではあるのだが、ジェマルの場合はこれらのことを以前よりも増して徹底的に行うようになった。ジェマルのそうした性分は、1912年10月16日に自部隊がサライ(Saray, チェルケズキョイの北西)から数キロ南に位置するビュユックマニカ(Büyük

¹⁴² Erickson, E. J. (2003). 188 頁

¹⁴³ Cemal, A. (1933) 5 頁

¹⁴⁴ Cemal, B. (1959) 14-15 頁

Manika)村へ移動を行った時にも出ており、ジェマルはどんなに些細なものであろうとも自分の目で直接確認をするためにわざわざ自部隊の元へ駆けつけている。¹⁴⁵こうして常に現場での状況を直接見ながら入念に戦争準備を行っていたジェマルであったが、チャタルジャの前哨戦となるプナルヒサル(Pınarhisar)ーヴィゼ(Vize)の防衛ラインをめぐる戦いではブルガリア軍に敗れた。この時ジェマルは、戦いが始まってすぐにオスマン帝国軍が敗北を喫するという事を察知し、敗走を開始してパニックに陥り始めたオスマン帝国軍を冷静にまとめ上げ、チャタルジャへの撤退を行っている。撤退後は作戦本部に身を移しながらも、やはり直々に新たに設置された防衛ラインにいるオスマン帝国軍の視察を行い続けた。現場の兵からの伝令で部隊がどこにいるのかについて分からない場合にも、ジェマルは徹底した調査を行っては行き先を教え、さらにわざわざ自分から兵たちの元へ赴くこともあった。¹⁴⁶しかしこの彼の現場を重視する性分が、皮肉なことに彼をバルカン戦争の戦線から一時離脱させる原因にもなった。1912年11月14日、いつも通り前線を視察していた時、彼は突然馬上で気を失い、軍のテントへ搬送された。彼は戦場で猛威を奮って病死者も多数出したコレラに感染してしまったのである。その翌日から彼はベッドの上で寝かされていたが、それでも彼は病を押してでも軍務を続け、前線の兵たちに命令を送り続けていた。とはいえやはり病状が深刻だったこともあり、彼は最終的にイスタンブルへ送還されることとなった。¹⁴⁷突出した働きを見せることはできなかったが、彼が青年トルコ革命後に感じ取っていたことを生かそうとしたことを見ることができる。

一方のエンヴェルも、トリポリタニアでの戦争から数カ月後にイスタンブルへ戻り、チャタルジャでジェマルが行ったようにブルガリアと対峙していた兵の視察を行っている。ただここで、エンヴェルはジェマルとは少々違う反応を見せている。トリポリタニアから戻ってきて初めて現場を視察した時、彼は兵士たちの状態は良くなっていると考えており、ブルガリア軍を撃破し、チャタルジャの前で壊滅させることを期待している旨を述べているし¹⁴⁸、数日後の彼の手紙にはこんなことも書かれている。

ただ自分自身を守るためではなく、チャンスのある時にブルガリア人たちを撃退することのためにも自分たちには力があるのだということを、我が軍が理解し始めたことを私は嬉しく思うのです。¹⁴⁹

彼がこの手紙を書いたのは軍の将校たちと話を交わした後のことであるが、エンヴェルの視点ではまだオスマン帝国軍には十分反撃の余地があると捉えられており、また後日チャタル

¹⁴⁵ 同書 15 頁

¹⁴⁶ 同書 15 頁

¹⁴⁷ 同書 16-17 頁

¹⁴⁸ Hanioglu, M. Ş. (1989) 215 頁 22 Aralık 1912

¹⁴⁹ 同書 215 頁 26 Aralık 1912

ジャに再度視察に行ったときにも、オスマン帝国軍が心身ともに万全になりつつあり、敵を倒すことが絶対に無理なことではないと考えている。¹⁵⁰彼はもしも本当の意味でオスマン帝国軍が心身ともに壊滅的なものとなっていたとしたら、陸軍にせよ海軍にせよ主要な指揮官はとくに全滅しており、エディルネなどで抵抗できないと考えていたのである。¹⁵¹とはいえいくら万全になりつつあろうとも、祖国を蹂躪されているのは間違いなく、エンヴェルはこの逆境の中でもブルガリアに抵抗し続けようと考えていた。

このようにジェマルやエンヴェルは、序盤から続く圧倒的な劣勢の中でもオスマン帝国軍の動向をしっかりと観察し、逆転のチャンスを伺い続けていた。しかし統一と進歩委員会全体の意向や2人がそれぞれ考えていた理想像と照らし合わせてみれば、彼らのこの姿勢は合致していたものであることはさほどおかしいことではない。むしろ彼らは委員会全体の姿勢と同調させながらも、自分たちの理想像を着実に実現させる動きを見せていたのである。しかし軍事的にみれば好転を見せ始め、エディルネをはじめとする要衝で抵抗が続けられた一方で、エンヴェルが憂慮していた政治的・思想的確執はもはや修復不可能なものとなりつつあった。

(3) 「和平」と「理想」の確執

エンヴェルやジェマルがブルガリアに抵抗しようとしていたその時、バルカン戦争中の1912年10月29日に大宰相に就任したキャーミル・パシャは完全に進退窮まった状態に追い込まれていた。11月初旬にはセラーニクがギリシャ軍の猛攻によって陥落し、すでにオスマン帝国の敗色が濃厚となっていた。なおもバルカン諸国の猛攻は途絶えることはなく、オスマン帝国西部における要塞・エディルネが陥落するのも時間の問題であった。しかし一方で国内を見てみれば、ブルガリアとの戦闘を継続するよう主張する統一と進歩委員会からの圧力が強く、すんなりと和平への道が開かれるわけでもなかった。キャーミルもまたオスマン帝国の行く末を憂いている憂国の政治家としての自分の感情と、自身の言動一つで自身の存亡が決定しかねない指導者としての過酷な環境の中にいた。

キプロスのレフコシャ(Lefkoşa, ニコシアとも)で生まれたキャーミルは、半独立状態にあったエジプトでエジプト副王などを歴任したのち、ロンドンを訪問する機会を得た。彼はそこである種自身の行く末をも決定させた出来事に遭遇した。1851年にロンドンで開催されたロンドン万国博覧会であった。水晶宮(The Crystal Palace)という名で親しまれた会場、そこで展示された数々の美術、そして産業革命の産物といえる近代的工業製品の数々は、まだ18歳であったキャーミルに衝撃を与えたと共に、彼にイギリスという帝国への強い憧れを持たせるようになった。万国博覧会に行つて以降、キャーミルはまるでとりつかれたように必死に英語を勉強しはじめ、ついには英語を完璧に使いこなすまでになったという。そんな彼を見て同僚たちは彼のことを「英国かぶれ(Anglophile)」と呼ぶようになった。¹⁵²

そんな親英的なキャーミルは、1885年に初めて大宰相のポストに就いてからはあこが

¹⁵⁰ 同書 217 頁 31 Aralık 1912

¹⁵¹ 同書 216 頁 28 Aralık 1912

¹⁵² Bayrak, M. O. (2002). 130-132 頁

れのイギリスとの友好を掲げ、親英的外交路線を展開していった。彼のこの親英的姿勢は、彼が4度務めた大宰相の地位の中でイギリスとオスマン帝国の間に親密な関係をもたらし、両国は公式の場でも親身な関係にあった。このキャーミルのスタンスは、前大宰相のメフメト・サイト・パシャ(Küçük Mehmed Sait Paşa, 1830年-1914年)の時の外交スタンスに似ているところがある。実際のサイトとキャーミルは文字通り「ライバル」のような関係にあり、ロシアによるバルカン同盟構想が持ち込まれた時には、キャーミルがサイトに対して「ロシアに媚を売っている」と言って強く非難することはあった¹⁵³が、彼らの考え方は、オスマン帝国にはイギリスやドイツのような大国の支援が絶対的に必要という点では共通する考え方を持っていた。ただこの二人が違うところは、外交路線を明確に提示するかどうかにあった。サイトはイギリスなどの三国協商陣営かドイツなどの三国同盟陣営のいずれかに属すべきとする「サイト原則」というものを打ち出してはいた。¹⁵⁴これは1911年時点でのサイトのさらに前任の大宰相にあたるイブラヒム・ハック・パシャ(İbrahim Hakkı Paşa, 1862年-1918年)が「いずれの陣営とも同盟せず、ただ自国の強化を図るべき」とした意見¹⁵⁵に対して出されたものであり、事実上オスマン帝国がいずれかの陣営に参加するという外交姿勢を決定づけるものとなったのだが、サイト自身そのどちらにオスマン帝国は属すべきなのかまでは明確にはしなかった。彼がこの考えを出したのはちょうどトリポリタニアをめぐるイタリアと戦争をしていた時のことであり、その戦況と周りの状況次第でイギリス側かドイツ側へどちらにも接近できるようにする意図があった。しかし彼の日和見的な思想がかえって仇となった。結局ドイツがイタリアとの戦争に少しも介入してくることもなく、さらにその後にイギリスとフランスに同盟締結を断られたことでサイトの外交は破綻してしまったのである。

一方キャーミルもまたいずれかの陣営に属すべきという考えにあったが、すでに「親英派」であることを表明している彼の外交趣旨もまたはっきりとしたものとなっていた。バルカン戦争の中でオスマン帝国が劣勢に立たされていた中でもそれは変わることはなく、彼はイギリスを通して調停をしてもらうよう要求し、実際にイギリス主導の会議が開かれた。オスマン帝国とブルガリアの間に休戦協定が締結されると、セルビア、モンテネグロも休戦に応じ、イギリス・ロンドンでイギリス外相・グレイ(Edward Grey, 1862年-1933年)を議長として各国のロンドン駐在大使が結集して開かれたロンドン大使会議のなかで、バルカン戦争における平和条約の締結をオスマン帝国に示唆することが行われた。¹⁵⁶

しかしキャーミル政権の外交政策が万人に受け入れられていたわけでもなく、政策実行の度にキャーミルは自分にとっての大きな障害を2つ生んでいた。一つは対外的にオスマン帝国の利害がぶつかりやすいオーストリア＝ハンガリーという近隣の大国の存在、そしてもう一つは青年トルコ革命以降国内で急速に勢力を伸ばし始めていた統一と進歩委員会の存在であった。特に後者の存在は、キャーミルに自身の政権と統一と進歩委員会の間に複雑な対

¹⁵³ 藤由順子. (2003) 148 頁

¹⁵⁴ 同書 148 頁

¹⁵⁵ 同書 148 頁

¹⁵⁶ Hanioğlu, M. Ş. (2008) 89 頁

立構造が介在していたことを知らしめるばかりか、最終的にはキャーミルの政治人生をも終焉させるものとなったのである。

そもそもキャーミル政権とオーストリア＝ハンガリーとの関係の悪化は、何もバルカン戦争中に始まったものではなかった。青年トルコ革命後の第二次立憲制の中で、キャーミルはサイトに次ぐ革命後2人目の大宰相として1908年に就任し、その後も大宰相のポストを交代しては就任するというサイクルが続いた。青年トルコ革命以降、革命後の混乱や対外関係の面での理由から、オスマン帝国では4年間で延べ10人の大宰相が入れ替わり立ち替わりを繰り返す事態になった。¹⁵⁷これは現代の日本の政治にも共通しているところがあるが、政権を担う者が頻繁に変わるようになれば、確かに政策の計画・実行に流動性を与えて様々な意見を反映させることができるというメリットはあるが、その分政権の政策実行に対する信頼性は失われるし、政策が長続きするのかどうかさえあやふやな状態になってしまう。20世紀初頭のオスマン帝国の大宰相による政治システムも同じような状態に陥っており、それは周辺の列強から大宰相の信用性がどうなのかについて不信感を与えていた。特にそれが顕著に出たのが、いうまでもなくオーストリア＝ハンガリーであった。オーストリア＝ハンガリーの場合、大宰相の態度・姿勢によってオスマン帝国が自身の味方となるのか敵となるのかが変わってしまうこともあり、大宰相の選出の際にはかなり警戒心を強めていた。

そんな列強がオスマン帝国の政治能力に不安の色を隠せていない中で現れたのが、親英派のキャーミルであった。キャーミル政権とオーストリア＝ハンガリーとはセルビア、ブルガリアの問題で連携を行ったものの、キャーミルがもともと「英国かぶれ」と同僚から言われているほどの人物であっただけに不安を払拭させることはできなかった。そしてこのオーストリア＝ハンガリーの不安は現実のものとなった。1909年、キャーミルは突如4人の大臣を解任し、自分と同じ親英派の人物を擁立し始めたのである。結局これには半ば蔑ろにされた議会も黙っておらず、議会は不信任投票を行ってキャーミルを辞任させ、新たな大宰相としてヒュセイン・ヒルミ・パシャを擁立するにいたったが、この一連の動きはオーストリア＝ハンガリーにオスマン帝国そのものへの疑念を強めさせることとなった。¹⁵⁸

とはいえオーストリア＝ハンガリーとの関係以上に、キャーミルからすれば統一と進歩委員会との対立関係はより深刻なものとなっていた。統一と進歩委員会とキャーミルの対立関係は主に2つの観点で語ることができる。

まず1つ目は、それぞれがどの陣営を支持して考えていたのかという勢力均衡の問題であった。これはもう火を見るよりも明らかな違いであるが、親英的外交路線を骨頂とするキャーミルに対し、統一と進歩委員会は1908年8月の時点ですでに親独路線を進もうという方向性を持っていた。その目的は、バルカン諸国を通してバルカン半島における利権を望み、そして現にこのバルカン戦争中にもバルカン諸国に秘かに支援を送り続けているロシアへの対抗であった。この時統一と進歩委員会は、『ヨーロッパでの戦闘において、いかなる場合にもオスマン帝国はドイツの協力者として参加する』という通達を行った。¹⁵⁹エンヴェ

¹⁵⁷ 藤由順子. (2003). 127 頁

¹⁵⁸ 同書 128-129 頁

¹⁵⁹ Hanioğlu, M. Ş. (2008) 85 頁

ルはこの通達内容が後になって現実の外交の中で実行され始めていることを察知して、「ドイツ＝オスマン＝ルーマニア」同盟構想を実現させて敵対勢力に当たるべきだという考えをアルバニア蜂起の中で打ち出したわけだが¹⁶⁰、統一と進歩委員会の親独路線は実際に統一と進歩委員会が主導となって行ったオスマン帝国軍のドイツ化の中にも見ることができる。ただこの時は、ドイツ皇帝・ヴィルヘルム2世自身はドイツ＝オスマン同盟の利益の保持を望んでいたものの、すでに同盟国となっていたイタリア・オーストリア＝ハンガリーがボスニア＝ヘルツェゴビナ、アルバニア、トリポリタニアといった地域を虎視眈々と狙っていたという事情もあって実現しなかったが、それでもなお統一と進歩委員会はドイツとの同盟を望み、そして必然的にイギリスとの協調外交路線を打ち出していたキャーミルら親英派と対立することになったのである。

さらにキャーミルと統一と進歩委員会との対立関係を深刻化させたのは、青年トルコ革命によってできたオスマン帝国の政治システムの在り方に関する対立であった。キャーミルや前任者のサイトを含め、バルカン戦争に至るまでの政府要人の大半はスルタンによる親政を望む旧体制の支持者が圧倒的であり、青年トルコ革命およびその後の3月31日事件で実質的に統一と進歩委員会は優位にあったが、まだ実権を完全掌握させるには至っていなかった。これは前章でも書いたような統一と進歩委員会の「準備不足」も多分にその理由として存在しているのだが、旧体制派のメンバーにとっては3月31日事件の末にアブデュルハミト2世を退位へ追い込んだ統一と進歩委員会の存在は危険分子そのものであった。その例外的存在が内相として入閣していたタラートやマフムート・シェヴケト・パシヤのような委員会に一定の繋がりを持っていた人間であるが、この状況を早期に内から打破させることはなかった。タラートはこうした自分たち統一と進歩委員会にとっては決して政治的に有利なものではない環境に大臣として在任していたが、それでも自身がもともと持っている理想を貫こうという意志があった。彼の原点ともいえるそうした意志が、タラートが大臣のポストにすでにいながら、一人の志願兵としてエディルネの戦線に赴いた背景となったのではないかと考えることができる。

こうした対立構造が表出した中で、キャーミルは和平に反対する統一と進歩委員会を弾圧し、そして列強が提示してきた和平案を受諾したのであった。この和平案とは、バルカン諸国が占領してきた領土にくわえ、クレタ島、エーゲ海諸島、そしてブルガリアとセルビアによって包囲中のエディルネを割譲させるものであった。当初キャーミルも、まだ陥落していないことを理由にエディルネの割譲には反対していたが、最終的にはこれに同意した。この対応は、統一と進歩委員会や軍から猛烈な反発を受けただけではなく、戦場で戦っている指揮官たちにも怒りを与えた。一志願兵として戦場へ身を投じたタラートにとっては自身の理想のための戦いが徒労に帰したことを意味したものとなった。¹⁶¹

「和平」と「理想」の間に発生した確執は、こうしたキャーミル自身の親英的外交観と、政府と統一と進歩委員会の間に存在した二面的な対立構造が招いた産物であった。もちろん

¹⁶⁰ 本稿 第一章第一節(3) 20 頁

¹⁶¹ Cemal, A. (1933) 5 頁

これについてキャミルの姿勢を批判することなどできない。しかし一つ言えることは、この2つの原因がもたらした確執は、最終的にキャミルの政治人生の終焉とエンヴェル、ジェマル、タラートの「三頭政治」の形成の直接の起爆剤となったこと、そして同時に、第一次世界大戦にまで至るオスマン帝国の在り方にある種決定づけたものとなったことである。

第三節 大宰相府襲撃事件

(1) 「理想」のための大宰相府襲撃

前節のキャミル内閣の動きを、エンヴェルとジェマルは見逃すことはなかった。キャミル政権およびオスマン帝国政府の在り方は完全に彼らにとって理想とは正反対のものであり、彼らの意向にそぐわないものであったことに間違いはなく、彼らはこの動きを何とか阻止しようと動き始めた。

1912年11月17日。ジェマルは前節(3)で述べたコレラ感染の一件で幾度となく死に直面しながらも、なんとかイスタンブールの自宅に戻ることができた。自宅に戻るとすぐに彼は、まずは感染したコレラの治療に励んで治療し、さらに1912年12月26日には「イスタンブール後方部隊監察官兼軍事行政長官(İstanbul Menzil Müfettişi ve Ordu İdare Reisi)」として復帰し始めた。ジェマルのこうした半ば「病み上がり」の状態のなかでも休まずに誠心誠意実直に任務を行う姿というのは、実のところ統一と進歩委員会にも刺激を与えることとなっており、その後行われる「大宰相府襲撃」に彼が誘われる主な理由にもなった。¹⁶²さらに言えば、このジェマルの姿勢というのは後に彼が権力者として中心的役割を果たしていく上でも非常に重要な要素となる。

そもそも統一と進歩委員会において、アフメト・ジェマルという男は非常に特異な存在である。彼は確かに統一と進歩委員会の在り方に共感を覚え、彼らと行動を共にしているが、彼が統一と進歩委員会と意見を同じくしていたところは主に「軍事的問題」と「愛国心」という2つの観点においてであった。本稿のテーマとなる「外交」の観点で言えば、ジェマルは統一と進歩委員会の外交戦略上にはあまり共感しておらず、エンヴェルのような親独派が多い中でも、ジェマルはどちらかといえばフランス最良の嫌独派の立場にあり、キャミルたちの思想に近いものを持っている。彼は幾分統一と進歩委員会の主張とは異なる立場をいくつか出しているが、彼自身はこの「軍事的問題」、「愛国心」の2つの観点が達成されてこそオスマン帝国に真の平和をもたらせると考えており、そのためにひたすら自己の理想に邁進していたのであった。そんな彼の姿は、彼が青年トルコ革命に参加した時のエピソードにも表れている。

青年トルコ革命後になって自宅に帰ると、突然彼は家族を含めた様々な人から称賛を受けた。突然の出来事であったこともあり、なぜそんなことが自分に対して行われているのか分からず、ジェマルは戸惑っていた。怪訝そうにしている彼を見て、称賛してきたある女性から「あなたは国民を救い、死への恐怖から解放した。だから称賛しているのだ。」という話をされるのであった。しかしジェマルは少し黙ってからその女性にこう言った。

¹⁶² Cemal, B. (1959) 17 頁

それは間違っていますよ、お嬢さん。本当のところは惨劇も、戦争も、反乱も、暗殺も、死の危険というものも、全てこの革命の後になってから始まるでしょう。もしも私がこうして抱きしめている祖国の若者の孫たちがある日この祖国で平和に暮らすのであれば、私や我が同志たちはその日を実現できたときになって初めて称賛に値する存在となるのです。¹⁶³

彼がこの時言ったことは青年トルコ革命後のジェマルの姿にも表れており、そしてバルカン戦争に至るまでにも行動として表していた。彼にとってここまでの道のりは、彼の内部に秘める「祖国の平和」という理想の過程にすぎず、そしてその一つ一つがジェマルの理想の糧、そして行動原理となり続けたのである。

さらに、理想に向けて邁進し、軍人としても与えられた任務を実直にこなす行動をしていたジェマルは、多くの人たちから尊敬の念を受け、そして親しまれた。彼の姿は、理想家としての、そして軍人としての理想の人物であった。彼を尊敬し、そして親しみを持っていた人物の中には、若き日のムスタファ・ケマルもいる。彼の性分と理想は、同じ立場にいた人々の心を掴むのに十分すぎるものであり、もちろんそれは統一と進歩委員会の中心人物たちの目にもとまるものであり、実際に大宰相府襲撃のメンバーとして彼を加えることとなったのである。彼はただ統一と進歩委員会の思想に非常に忠実な思想を共有していたから最終的に「三頭政治」の一角に据えられたのではない。彼の強い理想と愛国心はもちろん、それに向けて実直に邁進する姿勢、そしてその姿勢によって得てきた人望が彼を権力者にさせたのである。しかしこのジェマルの在り方が、後にエンヴェルとの確執をより大きくさせてしまうのである。

そのエンヴェルは、当時の陸軍大臣・ナズム・パシャ(Nazım Paşa, ?-1913)と掛け合い、戦争継続について訴え続けていた。一旦はナズムの気持にも変化を与えることはでき¹⁶⁴、また参謀本部でも好感触を得ることはできた¹⁶⁵のだが、それでも彼の政治的立場は非常に危ういものとなり、あたかも自分の周りを「敵(düşman)」に取り囲まれているような状況に陥っていた。¹⁶⁶この時彼はかなり精神的に追い込まれていたようで、手紙にもこんなことを書いている。

(なぜ私に手紙を書いてくれないのですか、なぜ私を助けてくれないのですか、一私の頭がもう働いてくれないし、私を助けてくれるような支援者が誰もいないような超人的

¹⁶³ 同書 4 頁

¹⁶⁴ Hanioglu, M. Ş. (1989) 216 頁 26 Aralık 1912

¹⁶⁵ 同書 218 頁 3 Ocak 1913

¹⁶⁶ 同書 216 頁 28 Aralık 1912

な争いを私は政府内部で始めたのです。)167 (括弧ママ)

彼の中で「理想」そのものと「理想」を実現する可能性が高まっている一方で、その「理想」を半ば否定された環境にいることにエンヴェルは悩み続けた。そして翌日、彼はキヤーミル政権が和平に向けた動きを見せていることを聞きつけることとなったのである。

エンヴェルはこの和平の動きを、全ヨーロッパ諸国にとってオスマン帝国が弱まることは利益であるに他ならないと考えた。エンヴェルが考えた大国の思惑とは次の通りである。

まず彼が上げたのはイギリス、フランス、ロシアの三国協定の構成国である。多くのムスリムがその領土もしくは植民地内にいるイギリス、フランス、ロシアにとって、オスマン帝国は自国内にいるムスリムたちの反乱の強力な支援者となる危険性があった。3国にとってオスマン帝国をそのままにしておくことは、ムスリムたちに反乱の機会を与えかねないことでもあった。そこでオスマン帝国が圧倒的な劣勢に立っている状態で和平を結ぶことで、ムスリムたちによる潜在的な危険性を排除しようとしたのである。

またエンヴェルにとっての将来の同盟国・ドイツに関して言えば、世界大戦に突入した際にアナトリアをその最前線にするチャンスであるともエンヴェルは考えていた。ただこれは、もちろんオスマン帝国とドイツが手を組む場合にせよ、また三国協定側と手を組むにせよ、アナトリアが両陣営の対立ではほぼ確実に戦場となることを暗示したところがあった。アナトリア方面に戦線を作ることで、ドイツ自身の負担も大きくなるものの、バルカン半島におけるオーストリア＝ハンガリーの強力な援護射撃にもなるうえに、ロシアをけん制することもできるからであった。

このほかにもエンヴェルは、新たな植民地を獲得できるようにするための軍拡の口実にもなるイタリア側のメリットや、領土を獲得するチャンスとなるオーストリア＝ハンガリー側のメリット、さらにブルガリアやルーマニア側のメリットを列挙し、和平による大国や周辺国の思惑が存在していることを感じ取っている。エンヴェルはこれらを打破するには、安易に和平を行うのではなくあくまで全員が一致団結して抵抗することであると、それを実行するために必要なことは、自分自身が思う通りの行動をオスマン帝国が取れるような環境、つまりオスマン帝国の実権をエンヴェル自身が握ることであると考えたのであった。¹⁶⁸彼のこの考えが、のちに「大宰相府襲撃」という事件の実行に繋がったのは言うまでもない。もちろんその考えの根底には、自身の権力欲ではなく、あくまで「祖国や祖国の民を救いたい」という盲目的な愛国心が存在していたのだった。

その後の手紙には、彼がいかにして政治の実権を握るのかを画策するエンヴェルの姿を見ることができる。たとえば1913年1月10日の手紙には、ナーズムと政治のことを話した際、ナーズムにキヤーミル政権の在り方に反対であることを大々的に宣言を行うことを提

¹⁶⁷ 同書 218 頁 3 Ocak 1913

¹⁶⁸ 同書 218-219 頁 4 Ocak 1913

案した。これによって、チャーミルの在り方に不満を持つ人々および軍部の共感を得ることができると考えたからだ。また彼は、新政権についての考えを知らせるために宮殿に行った。以前、スルタンがエンヴェルの提案を信頼してくれたことを思いだしてのことであったが、エンヴェルが懸念している独裁政治を自分自身がしてしまうことを恐れていたこともその理由になっていた。¹⁶⁹

こうした計画を水面下で練りつつも、彼は占領された土地を奪還するための計画も考えた。主な標的としたのが、かつて訪問し、エンヴェル自身が親オスマン的な人々が多いと感じたアルバニアであった。当時のアルバニアはモンテネグロ、セルビア、ギリシャの占領下であり、アルバニアの中心地・スクタリもモンテネグロ軍を主力としたセルビア・モンテネグロ連合軍による攻城戦のさなかであった。1月10日の段階で、彼は2日後に占領されたアルバニア北部とアルバニア南部のそれぞれで抵抗組織を結成させ、反乱をおこさせる為の工作員を派遣するつもりでいたのだった。¹⁷⁰それでもチャーミル政権が和平交渉を強行させた場合には、もはや政権ごと打倒するしかないとも考えた。¹⁷¹

こうしてエンヴェルは秘かに政権を獲得するための裏工作を続けたが、やはりチャーミル政権が考えを撤回するような素振りを見せることはなかった。そして1913年1月22日、統一と進歩委員会のリーダー格の人物および60人の将校や議員たちが結集し、大宰相府への襲撃が決定されたのだった。ただ彼自身、大宰相府への襲撃がどのような結末を迎えるのかが不安であったようで、襲撃当日の朝7時に次のような手紙を書いた。

もしこれが、我が祖国を救うことになるのなら幸いです。死ぬことになろうとも、私は自分の任務を遂行する決心をしたのです。今、神に祈っています。もしも私の計画がトルコ(Türkiye)に幸福をもたらさないのであるならば、私を殺してくれるように祈っています。ああ、神があなたをお守り下さるように。一馬に乗らなければなりません。同志たちが私を待っているのです…。¹⁷²

ただ純粹で盲目的といえる愛国心を胸に、エンヴェルたちは大宰相府へと向かった。1913年1月23日午後3時。分厚い雲に覆われた空の下¹⁷³、大宰相府襲撃が決行された。

(2) 大宰相府襲撃後の新政権と敗戦への道

エンヴェルが「理想」を目指し、ジェマルも「祖国の政治が正しいものになることに向け

¹⁶⁹ 同書 220 頁 10 Ocak 1913 彼はこの事について、手紙の中で「(中略), bir hükümet kuracağım çünkü diltatörlükten korkuyorum.」と語っている。

¹⁷⁰ 同書 220 頁 10 Ocak 1913

¹⁷¹ 同書 224 頁 12 Ocak 1913

¹⁷² 同書 224-225 頁 23 Ocak 1913

¹⁷³ Cemal, B. (1959) 18 頁

て行った」と語った¹⁷⁴大宰相府襲撃により、陸軍大臣だったナーズム・パシャは殺害され、そしてチャーミルも大宰相を辞職せざるを得なかった。実際の宰相府襲撃は、エンヴェル以下60人の将兵による実行部隊とタラート・ジェマルたち政権作りの準備担当に分かれて行動していたようで、ジェマルも襲撃決行時は本部にてエンヴェル達の襲撃の成否を待ち、襲撃が成功した後になってタラートやジェマルも大宰相府へと向かったという手順だったという。とはいえ、この襲撃はチャーミル政権を打倒し、そして統一と進歩委員会が実権を握る布石となる出来事であった。この事件でチャーミルに次ぐ大宰相として就任したのが、3月31日事件で「行動軍」の司令官であったマフムート・シェヴケト・パシャであった。マフムート・シェヴケト・パシャは3月31日事件以降、エンヴェルやタラートなど統一と進歩委員会メンバーと交流を行い、時に指揮することはあったが、統一と進歩委員会の正式なメンバーではなかった。事実、アルバニア蜂起の際にはタラートを始めとして統一と進歩委員会が妥協的態度を示した時には怒り心頭になって統一と進歩委員会の存続をも脅かしていたこともあり、シェヴケトと統一と進歩委員会の関係は、表向きには近すぎず、また遠すぎない微妙な距離感の中での関係であり続けた。そんな完全な同胞とは言えないシェヴケトに、「自分自身が思う通りの行動をオスマン帝国が取れるような環境」を欲していたエンヴェルが大宰相の地位を与えるようにした理由としては大きく2つの理由が考えられる。

まず考えられる理由としては、シェヴケトは統一と進歩委員会のメンバーではないにせよ、外交戦略上ではシェヴケトも「親独派」の立場をとっており、その点では統一と進歩委員会も信頼することができる人物であったということである。彼が親独派の立場をとるようになったきっかけとは、彼が一時期ドイツ軍人のコルマール・フォン・デア・ゴルツに随行して行動していたことであった。1881年にシェヴケトは、武器購入および軍需産業の一件で辞令を受けてドイツに渡っており、この時にゴルツから様々な手ほどきを受けたのである。また彼が昇進を続けた1889年にもドイツで長期間滞在することもあった。彼はこうした知識を現場に生かしたとともに、ドイツでの軍事と比較したうえでオスマン帝国の軍事史を研究し、オスマンの軍事史についてまとめた書籍も残している¹⁷⁵。バルカン戦争前後になってオスマン帝国軍をより一層ドイツ化させる方向になったのも、ドイツで軍事を学んできたシェヴケトの影響が少なからず存在していた。そんな親独派のシェヴケトが大宰相となれば、最終的にはドイツとの同盟を目指してくれるという期待を込め、大宰相という最高のポストを用意したのではないかと考えられる。

また、エンヴェル自身が独裁化しないとともに古参の非統一と進歩委員会派メンバーにも納得されるような人選を行うために、あえて実質の最高権力者であるシェヴケトを大宰相として担ぎあげたほうが、統一と進歩委員会側としても都合がいいということも理由としてはある。すでに「行動軍」の司令官として勇名を馳せていた一方、彼は1911年に組織されるオスマン帝国空軍の創設にも携わっており¹⁷⁶、各種軍事系の大臣を歴任するなど軍全体でも非常に強い権威を持っていた。エンヴェルやケマルに至っては3月31日事件では彼の

¹⁷⁴ 同書 19 頁

¹⁷⁵ Mahmud Şevket Paşa.(2010) *Osmanlı Teşkilat ve Kıyafet-ı Askeriyesi*. Türk Tarih Kurumu

¹⁷⁶ Erickson,E.J.(2001). 227 頁

参謀として彼と行動を共にしている。そんな彼を差し置いて自身が大宰相という地位を得ることこそエンヴェル自身が嫌がっていた自身の独裁化であり、何よりもシェヴケト本人も満足せずに今度こそ統一と進歩委員会を取り潰しにかかってくる危険性もあった。シェヴケトの就任を一旦挟むことで、シェヴケト自身に統一と進歩委員会と旧体制派の緩衝材としての役割を期待したことも十分考えられる。こうした理由によってシェヴケト政権が誕生したことで統一と進歩委員会が完全に政権を握ることにはならなかったが、今までに比べればかなり政治的立場を上昇させることになったのである。しかし他のバルカン戦争をめぐる研究の中では、大宰相就任をめぐる統一と進歩委員会とシェヴケトとの関係性はおろか、「大宰相府襲撃」によるシェヴケトの大宰相就任という事実すら語られていないことも少なくない。それはシェヴケトと統一と進歩委員会との関係性よりも、「大宰相府襲撃」の末にシェヴケトが大宰相に就任したことでオスマン帝国の好戦的な姿勢が示され、結局休戦協定が破棄されたという事実の方がより重要なものであったと捉えられていたからだ。¹⁷⁷

またシェヴケトが大宰相に任命されてから数時間後に、ジェマルはイスタンブル駐在の第1軍の指揮官として帝都の治安維持の任を任されるようになった。ただこれは事前にあった話ではなく、突然その任務に就くように頼まれたところがあった。襲撃した日の夜、大宰相府にてタラートと偶然会うなり、次のように言われて担当することになったのである。

—ジェマル・ベイ、我が息子よ！君にお願いしたいのだが、今イスタンブルの守備隊の特務および帝都の治安を維持するために、常にいかなる手段が取られるべきなのかを考えているならば、すぐに考えている方法全てを実行してくれ！¹⁷⁸

タラートからのあまりに唐突なお願いではあったが、ジェマル自身は与えられた任務に大きな価値と意義があることを確信しており、彼はその日からイスタンブルでの治安維持を担うことになるのであった。¹⁷⁹ジェマルのイスタンブル駐在および治安維持の任の着任は、彼がオスマン帝国の政治・行政において初めて参加し、そして命令を行っていくという彼の政治家としての人生の始まりを意味するとともに、その後シェヴケトが暗殺された時に非常に重要な意味を果たすものとなるのである。

こうして新政権は着実に組閣され、エンヴェルの計画は着々と実行され、彼の望むとおりのことが実現する土台は出来上がった。しかし襲撃後になって、彼は自分の理想とその他の人々の熱意の差というものを感じるようになった。これについて彼はこう語っている。

¹⁷⁷ 藤由順子. (2003) 172 頁 Hanioglu, M. S. (2008)でもシェヴケトの大宰相就任による停戦協定の破棄が言及されているのみ(89 頁)で、Hale, W. (2000)、Helmrich, E. C. (1938)では大宰相府襲撃すら取り上げられていない。

¹⁷⁸ Cemal, B. (1959) 18 頁

¹⁷⁹ 同書 18 頁

ここにいる全ての人間が私をうんざりした気分させるのです、親愛なる友よ！私の身の回りを見回してみると、友人であれ、私の敵であれ、全ての人間が臆病で、卑劣で、ご都合主義で、そして自身の利益ばかり考えているような連中であるのを見ると、すっかり心を取り乱し、自分自身を見失ってしまうのです...¹⁸⁰

ただ「祖国を救いたい」という気持ち一心でここまで駆け上がってきた彼にとって、政界の人と自分の熱意の差はあまりに苦痛なものであった。実権を握るのに近くなった一方で、彼の望んだ「一致団結」の思いは、まだまだ達成できていないものであったからだ。それでも彼は自身の理想のためにひたむきに自分の政務も軍務もこなし続けている。

1月28日。エンヴェル達はキャーミル政権が行ってきた休戦協定や和平に向けた交渉を決裂させ、戦闘を新たに再開させることを決定した。エンヴェルはオスマン帝国軍が以前より精強なものとなっていることを信じており、必ず逆転して祖国を救うことができると考えた。¹⁸¹2月に入り、本格的な戦闘が再開した。

戦闘再開後、エンヴェルは各地を転戦し続けた。しかし、エンヴェルが期待していたような展開はなかった。戦闘再開後、オスマン帝国はボラユル(Bolayır)とシャルキョイ(Şarköy)での反撃を計画した。特にシャルキョイでの反撃はエンヴェル自身が立案し、エンヴェルの部隊を含むオスマン帝国軍約2万の兵力、ライフル約1万5000丁、機関銃16門、火砲48門、海軍から水雷巡洋艦「ベキル・サトヴェト」と防護巡洋艦「メジディエ」、前弩級戦艦「バルバロス・ハイレッディン」と「トゥルグット・レイス」を引き連れる¹⁸²という大々的な反撃を計画した。ボラユルやシャルキョイでの反撃の目的は、現地のブルガリアを撃破するとともに、いまだに包囲されているエディルネの負担を軽減させる為の意味もあった。しかし共にブルガリア軍の攻勢に阻まれ、反撃は失敗した。

エンヴェルはその後も抵抗と作戦の立案を続け、なんとか反撃を行おうとした。一向に良い戦果を得ることができないこともあり、痺れを切らしたシェヴケト・パシャから一種の脅しも受けたが¹⁸³、それでもエンヴェルは戦略を練り続けた。もとより彼にとって敵との戦闘以外にこの戦争において重要なことはないと考えていた¹⁸⁴こともあり、劣勢な状況の中でも勝機を見出そうとしていたのであった。そんな状況の中で、彼は1813年のプロイセンの事例を現在のオスマン帝国の状況と重ね合わせている。¹⁸⁵1813年はプロイセンにとって、オーストリアやイギリスとともにライプツィヒの戦い(諸国民戦争)でナポレオン率いるフランス軍を打ち破り、1807年以降続いた危機、逆境から反撃に転じた年である。

¹⁸⁰ Hanioglu, M. Ş. (1989) 226 頁 27 Ocak 1913

¹⁸¹ 同書 227-229 頁 28 Ocak 1913

¹⁸² Erickson, E.J. (2003) 263 頁

¹⁸³ Hanioglu, M. Ş. (1989) 233 頁 26 Şubat 1913

¹⁸⁴ 同書 234 頁 20 Mart 1913

¹⁸⁵ 同書 238 頁 11 Nisan 1913, 239 頁 16 Nisan 1913

エンヴェルは現在のオスマン帝国はプロイセンと同じではないとしつつも、プロイセンのように戦いに参加することで反撃のチャンスを待とうとした。

しかしそれでも戦局が好転することはなかった。ボラユル、シャルキョイでの敗戦により、エディルネは完全にセルビア・ブルガリア連合軍の包囲下に取り残されることとなった。そして3月11日、セルビア・ブルガリア連合軍総勢15万の兵がエディルネに向けて総攻撃を始めた。7万5000人もの兵ですずっと包囲に耐えていたオスマン帝国軍も、15万人の総攻撃に最後の抵抗を行うものの、ついに3月26日に力尽きた。オスマン帝国側に7000人の戦死者と6万5000人もの捕虜を出し、ここに昨年11月3日以降包囲されていたオスマンが誇る古都・エディルネはついに陥落した。

エディルネの陥落は、エンヴェルの思いもむなしくバルカン戦争におけるオスマン帝国の完敗を決定づけるものとなった。エディルネの陥落と前後する形で、トラキアでの対ブルガリア軍戦線以外の場所でも、オスマン帝国の敗戦を物語る出来事が立て続けに起こるようになる。2月21日にはギリシャがオスマン帝国西部の主要都市であるヤンヤ(Yanya, 現ギリシャ領イオアニナ・ヨアニナ)を陥落させ、さらにアルバニアの要塞都市・スクタリもまた食糧が尽きたことで4月下旬にセルビア・モンテネグロ連合軍に降伏・陥落した。こうして主要な要塞がことごとく陥落されたことをうけ、徹底抗戦を呼びかけていたシェヴケト・パシャたち統一と進歩委員会派の軍人たちもさすがにこれには手の打ちようもなかった。こうしてオスマン帝国は講和条約であるロンドン条約の調印を余儀なくされ、5月30日に調印。約7カ月にわたって続いた第一次バルカン戦争は終結した。



ヤンヤの陥落¹⁸⁶

¹⁸⁶ http://en.wikipedia.org/wiki/File:Ioannina_liberation_1913.JPG#filelinks 2010年11月13日閲覧

おわりに

1912年10月から始まった第一次バルカン戦争は、タラートが自身の回想録の中で語ったように、バルカン諸国国内の複雑な時代背景や大国の思惑が重なり重なって発生した戦争であった。ギリシャ内の「メガリ・イデア」はもちろん、モンテネグロの「好戦外交」やセルビア、ブルガリアの在り方は、それぞれの利害関係を強く内包しながらも、ロシアの「バルカン同盟」構想のなかで「オスマン帝国への対抗」という共通の目的を見出すことで結束していった。そのような反オスマンの機運が高まるバルカン情勢の中で、オスマン帝国もまたルーマニアやオーストリア＝ハンガリーといった国々との協力関係を形成しようとしたが失敗し、オスマン帝国は外交上孤立していたことを痛感させられることとなった。

エンヴェル、ジェマル、タラートたちの場合は、こうした状況を政治的世界で知るのではなく、時には同志たちとの話のなかで、また時には実際の戦場の中で発見し、そしてそれぞれがオスマン帝国はバルカン諸国に抵抗することで打開できると考えた。それ自体、彼らが思い描いてきた理想や第一章での経験や考え方と合致するところが大きかったからである。

しかし彼らは、キャーミル政権による和平交渉というものによって、彼らの理想にはそれを実現化させる「権力」という名の力が自分たちにはなかったことを痛感させられることとなる。3人の中で特にこれに機敏に反応したのが、理想主義者として自己の中に確固たる理想を作り上げていたエンヴェルであった。彼はバルカン戦争の各方面の戦線でオスマン帝国が圧倒的劣勢に立たされ、さらに帝都・イスタンブルに向けてブルガリア軍が怒涛の攻勢に出ている中でも、自分たちが政治の実権を握り、より自分たちの理想を実現しやすいものにしようと考え、持ち前の行動力と並はずれた大胆さ、そして勇気を発揮していったのである。

『納得しなかった男 エンヴェル・パシャ 中東から中央アジアへ』の著者・山内昌之が著書の中で用いた言葉を借りれば、エンヴェルの理想主義者としての姿はまるで「怯むということを知らないよう」であり、そして「政治や外交の失敗は、軍事でとりつくろえると信じているよう」でもあった。バルカン戦争のなかで祖国が危機に瀕している中でも、彼は一切の妥協をすることなく、ただ自身の理想を叶えるために奮闘を続けたのであった。¹⁸⁷その結果起こされたのが「大宰相府襲撃」であり、そしてその後のマフムート・シェヴケト・パシャを大宰相とする新政権の樹立であった。彼らはこの第一次バルカン戦争および「大宰相府襲撃」を通して権力を握ることで、自分たちの理想が不自由もなく実現させることができる環境とチャンスを手に入れることができたのであった。第一次バルカン戦争中に発生した「大宰相府襲撃」は、後の「三頭政治」の成立やオスマン帝国がヨーロッパの勢力均衡図にどのように参入するかにおいて彼らの理想に半ば則した外交をするきっかけになったのと同時に、「大宰相府襲撃」以降のオスマン帝国の命運を分けるもの、そして彼ら自身の確執を生み出すものにもなったのである。

¹⁸⁷ 山内昌之。(1999) 28 頁

第三章 ロンドン条約締結

はじめに

5月30日のロンドン条約締結は、「大宰相府襲撃」以降権力を握り始めたエンヴェル達が初めて臨む講和条約締結の機会であり、また彼らに辛酸をなめさせる出来事となった。この条約によって反乱が発生したアルバニアが独立し、またエディルネを含む大部分のオスマン帝国領をバルカン諸国に割譲することになった。これによりオスマン帝国のバルカン半島での優位性は完全に失われ、オスマン帝国のバルカン半島での栄光の歴史は事実上終焉したとすることができるだろう。

しかし、この条約の締結にはかなり不完全なところがあり、バルカン諸国とオスマン帝国だけでなく、オーストリア＝ハンガリーやイタリアといった大国がこの条約の締結に参画したことで諸国間の利害対立がより顕著なものとなって現れることとなる。アルバニアが独立したことについても、セルビアやギリシャの主張を押し切る形で果たされたことでもあるし、マケドニア問題に至っては、結局バルカン諸国間の意見の一致を促すことができずに最終合意にこぎつけることさえできなかった。こうした大国間およびバルカン諸国間の意見の不一致と対立は、わずか1カ月後の第二次バルカン戦争はもちろん、その後に発生する第一次世界大戦にも反映されることとなる。

一方バルカン半島における領土を大幅に割譲させられたオスマン帝国内でも、外交政策の見直しを迫られていた。第一次バルカン戦争では外交面で事実上孤立していたことが判明し、誰かしら同盟者としての立場にある国家が必要となった。しかし「大宰相府襲撃」以降、統一と進歩委員会は元来の親独外交路線をより確実なものにする土台を着実に築きあげていた。それはエンヴェル・タラート・ジェマルの3人の個人個人の構想も同様で、彼らもまた襲撃以降になってどの大国と結託するべきかをよりはっきりと表し始めるようになる。ただジェマルに関しては委員会全体の親独路線とは異なる親仏路線を描き始めており、彼のこうした在り方は大宰相・シェヴケト・パシャが暗殺される後になって3人で結成される「三頭政治」が開始される中でエンヴェルと度々衝突を繰り返すようになる。親独派として強い理想を持っていたエンヴェルとの対立は、「三頭政治」のなかに「ちぐはぐさ」をもたらした。とはいえこうしたオスマン帝国内の同盟への模索の動きは第一次バルカン戦争前の時の模索よりもさらに積極的に行われ、第二次バルカン戦争後の同盟締結の完了、そして第一次世界大戦の参戦に向けてオスマン帝国は突き進んでいくのであった。

本章では、第一次バルカン戦争後の講和条約・ロンドン条約と第二次バルカン戦争が勃発するまでの戦間期のなかでのオスマン帝国外交および周辺国の外交を取り上げながら、シェヴケト・パシャの暗殺を経て最高権力者となるエンヴェル、ジェマル、タラートの外交に関する考えを彼らの動向の中から読み取り、そしてそれらがどのように全体の外交へ反映されていくのかを検証する。

第一節 第一次バルカン戦争の傷跡

(1) 敗戦後の革命志士たちと変化の兆し

ロンドン条約の内容は、敗戦国・オスマン帝国のバルカン半島での栄光の歴史の終焉を意味するものに変わりはなかった。この条約によってオスマン帝国は、古都・エディルネを含む黒海に面するミディエからエーゲ海に面するエネズを結んだラインよりも西の領地をすべて放棄させられ、さらにはアルバニア、マケドニア問題の列強による管理、ギリシャへのクレタ島の割譲など、ヨーロッパ側の多くの領土を一気に失ったのである。戦闘での敗北もちろんあったが、オスマン帝国のヨーロッパ側の領土はロンドン条約という大国・バルカン諸国の思惑が渦巻く外交戦争の中へと放り込まれることとなった。

タラートは第一次世界大戦直後、自身の回想録の中でこのロンドン条約締結によって生じたオスマン帝国を取り巻く悲惨な状況およびアルバニア・マケドニア問題がその問題の内的課題をよく理解していない列強のさじ加減一つで勝手に決定されることについて次のように述べている。

アルバニアおよびマケドニアの大部分においてトルコ人が多数派を占めているということを何ら考慮することなく、1913年のロンドン会議は残酷な外科医がするような手術を試み、そしてメスでバルカン半島の地図を好き勝手に切り裂いた。しかし、その手術がもたらした結果をまだ受け取っていないうちに、別の場所で新たな病が発生したのだった。¹⁸⁸

(中略)バルカン戦争で弱さを露呈したトルコ(Türkiye)には、何の権利も与えられなかった。「力が権利を凌駕する」という言葉は、トルコ(Türkiye)に対して何も遠慮もなく公に利用されたのだ。祖国は400年、500年の年月の中でトルコ(Türk)政権と結び付いていた多くの土地や都市、民族や宗教、そして市井の人々との関係を無慈悲にも剥奪された。ロンドン会議はこれらすべての問題において、ただ純粋に力の原則に則って行動したのだ。¹⁸⁹

タラートがここで述べたこととは、19世紀末から20世紀初頭にかけて帝国主義国家間に発生した利害対立を穏便に済ませるために用いられた常套手段そのものであった。特にアフリカでの事例はまさにタラートが言ったような方法で利害対立の收拾が行われ、今もなお「不自然な国境」という名の手術跡が深く残されている。当時彼らはこれで丸く収まり、そして自国の利益も安泰であると考えていたが、それらの行く末が植民地からの脱却後に利権・民族・宗教といった様々な形を伴って世界各地で発生した紛争であるとは、なんとも皮肉な話である。タラートも第一次世界大戦後の世界がどのようなものとなるのかを予め分か

¹⁸⁸ Bolayır, E. (1946) 18 頁

¹⁸⁹ 同書 19 頁

っていたようで、さらにはこんなことも述べている。

列強がこのような形を取ったことで、全てのヨーロッパ諸国は治療不可能な病が存在していることを宣告されることとなった。先の世界大戦はバルカン戦争が生み出したものである。この世界大戦が次に何を生みだそうとしているのかを、今決定できたり評価できたりする可能性はあるまい。ただ確かなのは、この世界大戦はヨーロッパにおける勢力均衡を以前以上に構築不可能なものにし、そして同時に多くの経済的・政治的事件を引き起こすことになるだろうということである。¹⁹⁰

ここでタラートが述べたとおり、第一次世界大戦は大戦後になって形成されたヴェルサイユ体制とちょうどその時発生した世界恐慌のなかでナチスおよびその独裁者・アドルフ・ヒトラー(Adolf Hitler, 1889年-1945)を生みだし、そして第二次世界大戦をも引き起こすことになった。タラートはここで遠回しな表現を使いながら、オスマン帝国の「分解」を行ったのも、そして同様にその原因を作ったのも、自分たちオスマン帝国やバルカン諸国ではなく、戦争の時には一方で秘密裏に支援をし、また一方では戦争しないように強く言うておきながら事態をただ見守っているだけであったのに、会議の場になって好き勝手にやっている列強であると考えたのである。この「バルカン戦争の原因＝列強」と考えた人物がもう一人いる。タラートとも話を度々していたジェマルであった。彼がタラートと似たような考えを口にしたのは、その「大宰相府襲撃」の際にエンヴェルたちクーデター実行部隊が殺害した陸軍大臣・ナーズム・パシャの葬儀の時であった。

すでにイスタンブル駐在の任に就いていたジェマルはこの時、この葬儀にはイスタンブルにいる全ての陸軍大将や海軍提督、大臣経験者、公務員、そして他国よりイスタンブルに駐在する武官たち全員を参加させるべきであると主張した。そもそも自分が「大宰相府襲撃」に参加したのは、もちろん統一と進歩委員会の願いもあったものの、ブルガリア軍がチャタルジャで陣取り、ギリシャ海軍がダーダネルス海峡を手中に収め、そして列強の戦艦がそれに乗じていつでもイスタンブルを占領できるようにベシクタシュで停泊していたなかでも無能で怠け者であり続けた大臣たちの手から祖国を救おうと思ったからということを挙げたうえで、統一と進歩委員会は法的手順に基づく排除方法を見出すことができず、クーデターという手を使ったということを述べている。とはいえ元凶となっていたナーズム・パシャを殺しただけでは上記のような四面楚歌の状態を打開できたわけではなく、自分たちの努力や自己犠牲の後に祖国が本当に救われるのかどうかは分からないままであった。そのため、駐在武官たちも参加させることで少なくとも列強によるイスタンブル占領を防ごうとした意図もあったのだった。

そうしてナーズム・パシャの葬儀が行われている中、彼は同行していたフランスの駐在武

¹⁹⁰ 同書 18-19 頁

官に対して次のように語っている。

我が親友よ！この葬儀が行われた原因は、あなた方ヨーロッパの人々にある。怠け者で売国奴のような人間が逃げて生きるために戦場に放り出されたトルコ人民に陰謀を張り巡らせた列強の権利の侵害が、この葬儀を引き起こしたのだ。このような葬儀がもっと行われること、そしてあなたが明日私の葬儀の後ろで歩いているかもしれないということを知ってくれ！¹⁹¹

ジェマルもまた列強、特にフランス、イギリス、イタリア、ロシアの陰謀がオスマン帝国内に複雑な関係性を生みだし、そして同時にバルカン同盟を結成させたということを指摘したのである。とはいえ、それでもオスマン帝国を救うことができるのはフランスおよびイギリスの力であると考えており、そのこととの折り合いをどうつけるかも考えている。¹⁹²

この時期からジェマルは、より一層タラートなど多くの人々と会話し、議論するようになる。このことは、ジェマルの考える「親仏・親英路線」の形成の布石ともなるが、特に注目すべきなのは、彼が手紙・会話を交わした知識人の面々である。彼が自身の回想録にもその名が乗っている人物としてあげているのは、1912年までイギリス・ウィンブルドンへ追放されていたリベラル派ジャーナリストのアリー・ケマル(Ali Kemal Bey, 1867年-1922年)、統一と進歩委員会に逮捕された経験も持ち、オスマン帝国がドイツに頼り切っている様を痛烈に批判した作家兼政治家のルザ・ヌール(Dr. Rıza Nur Bey, 1879年-1942年)、統一と進歩委員会から脱退したオスマン帝国議員のイスマイル・ハック(Gümülcineli İsmail Hakkı Bey, 1879年-1945年 後のブルサ県知事)、第一次バルカン戦争におけるチャタルジャ戦線の指揮官であったとともに、反統一と進歩委員会派のメンバーでもあったアブク・アフメト・パシャ(Abuk Ahmet Paşa, 1857年-1923年 第一次世界大戦後に陸軍大臣に就任)、そして3月31日事件以来ジェマルとかかわりを持っていたサバハッディン皇子であった。彼らに共通して言えることは、全員が統一と進歩委員会の在り方に反対の意を唱えた人物であるであり、同様に親英・親仏的外交姿勢を取っていたことである。彼らは1911年から1913年にかけてダマト・フェリド・パシャ(Damat Ferid Paşa, 1853年-1923年)が反統一と進歩委員会派のリベラル政党・「自由と連合党(Hürriyet ve İtilâf Fırkası)」を率いており、1912年の選挙でも統一と進歩委員会の独裁的体制に対して反対の意見を表明し、統一と進歩委員会の優位性を脅かした存在でもあった。もともとその自由と連合党もまた、サバハッディン皇子が結成し、3月31日事件では中心的役割を果たした「オスマン自由党(Osmanlı Ahrar Fırkası)」の流れを汲んだものであり、自由と連合党は反統一と進歩委員会派の官僚やパシャたちの支持を獲得し、そして反統一と進歩委員会派議員たちとの連携を

¹⁹¹ Cemal, B. (1959). 21 頁

¹⁹² 同書 21-22 頁

取ることにも成功していた。¹⁹³さらに自由と連合党は、統一と進歩委員会の親独的外交姿勢に懐疑的であった。当時の覇権国家はどうみても栄えある「大英帝国」なのであって、わずか50年足らずの歴史しかないドイツ帝国ではない。さらにそこに文化的超大国であるフランスが加わっているのであるならば、たとえドイツ側にオーストリア＝ハンガリーがいようともドイツ、オーストリア＝ハンガリーが勝てるはずがなく、危急存亡の秋を迎えているオスマン帝国を救うことができるのはこのイギリス、フランス以外にはありえないとした。親英的であったキャーミル・パシャ政権を支援したのも、同じ外交観を持っていたこの自由と連合党であった。ただ自由と連合党のこの姿勢には、どこか亡国の音を感じさせるものがあり、『トルコ狂乱(Şu Çılgın Türkler)』の著者・トゥルグット・オザクマン(Turgut Özakman, 1930年-)が「オスマン朝行政官と政治家は骨の髄まで奴隷根性に侵食されて」いると評した¹⁹⁴ような性質も含まれていた。こうした性質および根本的な相違から、同政党は「大宰相府襲撃」の際に統一と進歩委員会によって解党させられており、反統一と進歩委員会派メンバーは水面下での活動が展開することとなった。ジェマルはこうした人物たちと手紙を交換し合い、時には直接会う形で自己の考えを洗練させていたのである。¹⁹⁵こうしたジェマルの動きは、第二次バルカン戦争後になってからフランスやイギリスとの経済交渉などの場の中でより顕著な形を表し始め、親独派メンバーとの確執を深めることとなる。

その一方で、より親独的な立場を表明したのがエンヴェルであった。彼はロンドン条約の締結の3日前、大宰相・シェヴケト・パシャがエディルネ、ヤンヤ、スクタリの陥落を受けて和平に応じることを考えていることを耳にした。この日、彼は自分の人生の意味を考えていた。これまで彼は、ひたすら自分たちの祖国のために毎日最低でも9時間の軍務をこなしていた。しかし周りを見れば自分の評価は悪化している一方にある。また戦争にも負け続け、オスマン帝国を巻き込む動乱も終わることをまだ知らない状態にあったのだった。結局第一次バルカン戦争はエンヴェルが考えていたような「キリスト教対イスラーム」という単純な宗教的思惑ではなく、彼の見識の浅かった外交的・政治的思惑によって発生したことも、エンヴェルは終戦間近になって思い知ることとなったのである。そのような状況の中で、彼は自分の意義を見失っていた。¹⁹⁶しかし一方で、この戦争が終わった後には陸軍大臣もしくはドイツ軍人のもとで軍の改造を行うことを考え、それらを通して自分たち自身の将来に備え、軍を組織することを誓っている。ここでも彼はドイツの支援によってオスマン帝国の在り方を変えていこうという明確な意思を掲げており、それは統一と進歩委員会内の親独外交路線と相まって実際に実現することとなる。

ただここでエンヴェルが述べているのは、こうした戦争後の在り方について統一と進歩委員会のメンバーはそれぞれ考えており、それぞれ異なる考えを打ち出すことになるだろうということである。その中にジェマルが入っていたかどうかは定かではないが、彼の予想は「三頭政治」のなかでの中することとなる。エンヴェル、タラート、ジェマルはそれぞれ思い通

¹⁹³ 新井政美. (2001) 113-125 頁

¹⁹⁴ トウルグット・オザクマン. (2008) 663 頁

¹⁹⁵ Cemal, B. (1959). 23-34 頁

¹⁹⁶ Hanioglu, M. Ş. (1989). 244 頁 27 mai 1913

りのことを考え、特にジェマルとエンヴェルはそれぞれの外交官の主軸となる大国との協力をどこに仰ぐかをある程度その考えにまとめ始めていたのであった。こうした動きは彼ら3人だけではなく、統一と進歩委員会全体でもまた考え始めるのであった。

(2) 海軍から見る「英土同盟」の可能性と破綻

エンヴェル・ジェマルがそれぞれの理想とする外交姿勢を考え始めるとともに、統一と進歩委員会全体でもまたバルカン戦争前には失敗した同盟国の模索を再開し始めた。今回のイタリアとの戦争、そしてバルカン諸国との戦争の中でまず痛感させられたのは、イタリアやバルカン諸国と比べて海軍力が脆弱なものとなっていたことであつた。イタリアとの戦争前に新鋭の「バルバロス・ハイレッディン」と「トゥルグット・レイス」をドイツから買い付けて配備したものの、イタリア海軍の前には全く歯がたたず、さらに戦力の弱いギリシャ海軍にさえ高速戦術にかき回されて敗北した。オスマン帝国は、改めて近代的で戦力の豊富な海軍を設立する必要性を感じたのであった。¹⁹⁷ただし、海軍を設立と簡単に言っても短時間でそれを達成できるわけでもない。軍艦一隻作るだけでも莫大な時間・資金が必要となる。近代的艦隊を形成するだけでも10年は確実にかかるものがある。しかし圧倒的に劣勢な環境にあるオスマン帝国に、そんな長い年月を待っている余裕はなかった。

さらに強く感じることとなったのは、バルカン戦争における外交的孤立であつた。大国はその時その時の状況に応じた返答をしてくるが、結局バルカン戦争がはじまると互いの利害対立を理由にオスマン帝国の支援を行ってくれる存在はいなかった。今回のバルカン戦争の敗因も、オスマン帝国軍そのものの質よりも兵力数の点でオスマン帝国軍が完全な誤認をし、その物量に押し切られる形で戦争が進行してしまった所にあつた。言い換えれば、もし大国が一国でもオスマン帝国側に立って参戦してくれていれば、バルカン戦争の状況も違うものになっていた。オスマン帝国には、「友好的大国」の存在が必要であつたのである。

彼らがその候補として挙げたのが、覇権を握った大国・イギリス、イギリスに並ぶ植民地支配を行ったフランス、そして目下の同盟目標であるドイツであつた。当然統一と進歩委員会としては「大宰相府襲撃」の際に親英派であつたキャーミル政権を打倒し、陸軍もゴルツなどの軍事顧問団の支援のもとでドイツ化させていることもあり、ドイツとすぐにでも同盟を締結させたいところではあつた。しかし、それでもドイツ以上の実力を秘めるイギリスやフランスの存在はやはり気になるところであつた。特にイギリスに関して言えば前述の通り、オスマン帝国はイギリスとこの時代の中でも非常に友好的な関係を築いていたし、事実1911年にも、統一と進歩委員会のリーダー格の一人で財務大臣のジャヴィト・ベイ(Mehmet Cavit Bey, 1875年-1926年)がイギリス海軍大臣に就任したばかりのウィンストン・チャーチル(Sir Winston Leonard Spencer-Churchill, 1874年-1965年)に同盟の打診を行い、チャーチルから好印象の返事が返ってきたこともあつた。¹⁹⁸また実際の軍事面でもイギリスとのつながりはかなり強かつた。オスマン帝国陸軍がゴルツらドイツ軍事顧問団によって着々

¹⁹⁷ Hanioglu, M. Ş. (2008) 87 頁

¹⁹⁸ 貝瀬雅典. (2001) 8 頁

とドイツ化が果たされていく中で、オスマン帝国海軍では1912年からの2年間にわたってイギリス海軍提督のアーサー・リンパス(Arthur Henry Limpus, 1863年-1931年)を中心とするイギリス軍事顧問団を雇用した。スーダン、南アフリカ、中国北部と渡り歩き、そのなかで経験を豊富に蓄えていたリンパスの存在は、オスマン帝国海軍の軍人の育成はもちろん、オスマン帝国海軍のドクトリン策定にも大きく寄与した。また1911年には「艦隊委員会(Donanma Cemiyeti)」を通して庶民から寄付金を募り、その寄付金を元手にイギリスに新鋭の弩級戦艦2隻「レシャディエ(Reşadiye)」と「スルタン・オスマン1世(Sultan Osman I)」を発注していた。「艦隊委員会」を設立したのは、他ならぬ統一と進歩委員会である。さらに経済面でも同様なことは言え、オスマン帝国の最大の貿易相手も融資元も全てイギリスであったのが現状であった。¹⁹⁹結局イギリスの援助はイタリアとの戦争およびバルカン戦争のなかでは得られることはなかったが、それでもなおイギリスとの同盟の可能性が皆無でないことを示されていたのだった。

そもそもオスマン帝国の外交を歴史的観点から見るとすれば、オスマン帝国は伝統的に親英国家である。特に18世紀以降は「ロシアの脅威」の存在、そしてチャーミルのような親英的な人物がいたことにより、イギリスとオスマン帝国は「共通の敵」が存在することで協調していたのである。その両国の蜜月な関係を象徴していたものが、今ここでオスマン帝国が早急に獲得を所望しているオスマン帝国海軍であった。一見外交とは無関係な存在であるように思われるオスマン帝国海軍の存在であるが、実際のところはかなり密接なものもあったし、さらに時として外交姿勢そのものを暗示させる存在でもあった。そしてオスマン帝国が第一次世界大戦でのポジションを決定づけたのもまた、「海軍」という本来は外交とは別次元の存在があつてのことであった。

15世紀以降地中海の制海権を保持し、圧倒的な強さを誇ったオスマン帝国海軍も、18世紀から19世紀になるとオスマン帝国を表わすがごとく、海軍もまた衰退の一步を辿っていた。そのなかでも重要な役割を果たしていたのがイギリスの存在であった。スルタン・ムスタファ3世(Mustafa III, 1717年-1774年)の治世時から海軍の西欧化が始まったが、オスマン帝国がアブデュルメジト1世の号令のもとでタンジマート時代に突入した際には、オスマン帝国はイギリスから多くの軍艦を発注し、海軍力の増強を行い続け、また政策の一環として大量建艦が行われた結果、各種軍艦約200隻を保有する世界第三位の海軍大国にもなった。こうした大量建艦にあわせ、イギリスからさらに多くのイギリス人を技師や航海士として雇用した。イギリスの技師や航海士たちは当時としては最先端の技術と知識を獲得しており、タンジマート期のオスマン帝国海軍を支える存在にもなった。そんな影響もあってか、オスマン帝国海軍内の指令も母国語のトルコ語とともに英語も併用されるようになった。²⁰⁰イギリスが産業革命を通して「大英帝国」として世界の覇権を握るようになったのも、そもそもイギリスが1588年に「無敵艦隊」の異名を誇るスペイン海軍を撃破したことがきっかけであり、19世紀にはフランス皇帝・ナポレオンのフランス海軍をトラファルガー

¹⁹⁹ 同書 9頁

²⁰⁰ 小松香織. (2004) 16-26頁

の海戦で撃破するなど、イギリスが海洋立国であること、そして海軍の手本として見習うに値する実力を有していることは折り紙つきであった。東地中海、エーゲ海、黒海と直接利害関係がぶつかり、さらにトリポリタニアのような海を隔てたところに領地をもっていたオスマン帝国には、海軍の存在は必要不可欠であったと感じ始めていた。

しかし海軍の観点からみた「英土同盟」の可能性を見た際、この同盟を円滑に締結させることができなかった要因として、2人の人物の名前を挙げることができる。19世紀末から政権を担ったアブデュルハミト2世と1908年から1913年にかけて駐イスタンブールイギリス大使であったジェラード・ローザー(Sir Gerard Lowther, 1858年-1916年)である。

1876年にアブデュルハミト2世が即位すると、タンジマート期より拡大の一途をたどっていた海軍用の予算を一気にカットするという政策を打ち出した。もとよりタンジマートやその賜物である憲法などの西洋化の動きに対して懐疑的であった保守派のアブデュルハミト2世は、年々縮小傾向にあるオスマン帝国の規模には似つかない世界第三位の海軍力が国家予算を食い潰す存在であると考えたのである。ただそれは特に間違った問題であったわけではなく、購入済みの軍艦の維持費に加えてタンジマート後期に大量に軍艦を購入した影響で海軍の収支が黒字から赤字へと逆転していたこともあるように、タンジマートにおける性急な海軍の西欧化はオスマンの財政問題の原因として大きく立ちはだかっていたのである。²⁰¹海軍に限らず、タンジマートという西欧化は確かにオスマンに西欧の息吹をもたらしたが、その一方で年々縮小していくオスマン帝国の国家財政に破滅的なダメージを与え、最終的には破綻を起こしたことも注目されるべきことである。つまり、ごく限られた予算の中で軍隊の増強を行わなければならないというオスマン帝国の厳しい現実が、アブデュルハミトによる海軍予算の大幅カットを決断させたのである。

その一方で彼はこれまで見てきた経験から、早急に増強すべきなのは海軍ではなく陸軍の方であると考えた。彼はクリミア戦争でのオスマン帝国陸軍の弱体ぶりを痛感していたし、何よりも大きかったのが陸続きとなっている大国・ロシアの脅威を防がなければならないという防衛本能であった。彼は大国化していくヨーロッパに対抗し、そしてオスマン帝国を再生させることのできる軍を欲していたのだ。その気持ちは即位して2年後に勃発した露土戦争のなかでより一層強いものとなった。アブデュルハミト2世が陸軍を増強しようとしたその見本にしようと思った国こそ、陸軍の活躍が目覚ましいドイツであった。アブデュルハミトの目論見は見事に的中し、ドイツから買い付けた大量の武器・兵器²⁰²は1897年のギリシャとの戦争の中で抜群の効果を出すこととなり、彼の陸軍のドイツ化政策はより一層推進されることとなる。こうしたアブデュルハミトの陸軍を増強させようという志向が陸軍のドイツ化のそもそもの発端であり、20世紀の本格的なドイツ化の推進へとつながることになる。同時にこの傾向は、陸軍内に親独的軍人を多く生むことになり、親独派としての陸軍の姿が形成されるようになる。その中にいたのがシェヴケトであり、そしてエンヴェルでもあった。こうして見ると、アブデュルハミトが形成した親独的軍事体制のなかで育ったエン

²⁰¹ 小松香織(2002) 192-209 頁

²⁰² この武器・兵器の買い付けの中で、ドイツに派遣されるオスマン軍将校も多数いた。その一人が、「大宰相襲撃」後になって大宰相に就任したマフムート・シェヴケト・パシャその人である。[本稿 66 頁]

ヴェルたち陸軍兵士たちが、青年トルコ革命でそのアブデュルハミトに反旗を翻し、そして3月31日事件で彼を退位に追い込んでしまったのだから、なんとも皮肉な話ではある。

そんな陸軍とは対照的に、海軍は完全にアブデュルハミトから見捨てられたような状態となった。当時は海軍の技術革新が著しく、列強を始めとする多くの国では新型の軍艦が考案されるたびに新型艦への切り替えが行われた。しかしオスマン帝国の場合、アブデュルハミトが限られた財政のほとんどを陸軍に力を注ぐことによって予算がカットされ、新型艦に切り替えるどころか、旧来の軍艦の修理もままならない状態に陥ってしまった。さらにアブデュルハミトがろくに海軍への命令を行わなかったことや海軍兵士への給与受け渡しが遅れたことでさらにオスマン海軍の弱体化が進行した。²⁰³せつかくタンジマート期に買った大量の軍艦も、その多くがイスタンブルに置き晒しにされたことで実用不可能なものになり、実用可能な軍艦は半分以上となった。²⁰⁴1880年代になってようやく保持している軍艦の改装を行い始めたものの、限られた予算の中でできる改装も少なかった。当然その時もイギリスに改装を頼むのではなく、ドイツのような国々に委託したことで、徐々にイギリスとの繋がりも減るようになり、さらに今までイギリス人たちが大部分を占めていた技師たちもアブデュルハミトの時代になってドイツ人にとって代わられるようになった。²⁰⁵こうしたドイツ人の登用の背景にも、アブデュルハミトが親独的態度を取っていたことがあげられる。彼はオスマン帝国海軍が完敗した露土戦争のなかで次のように語っている。

露土戦争は、艦隊が数の優勢にもかかわらず、なんの役にも立たないことを立証した。我が軍艦のほとんどにイギリス人機関長がいた、つまり艦隊はイギリスの手にあったということだ。…役に立たず有害なだけの艦隊を持つ必要はない。私はこれを金角湾につないだ。²⁰⁶

こうしてアブデュルハミトが国家財政の関係とドイツを友好国と見る外交姿勢に転じた関係で海軍を軽視し、放置同然の状態に置いたことは他国の海軍が進歩を遂げていた中で世界第三位の海軍大国であったオスマン帝国海軍を新興国にすら遅れを取るようにさせただけではなく、海軍を通じて協力関係にあったイギリスとの関係を完全に疎遠なものにさせるきっかけを作ったのである。青年トルコ革命からの一連の流れの中でアブデュルハミトが退位して以降、統一と進歩委員会がやっと本格的な海軍の近代化を考え始めた時には、すでにオスマン帝国海軍の弱体化は手遅れとなっており、その結果がイタリアとの戦争やバルカン戦争の中ではっきりと露呈されることとなったのは言うまでもない。

オスマン帝国とイギリスの関係が疎遠なものとなっていく中で、英土関係にとどめをさす

²⁰³ 小松香織(2004) 61 頁

²⁰⁴ 小松香織(2002) 164-165 頁

²⁰⁵ 小松香織. (2004) 27 頁

²⁰⁶ 同書 62-63 頁

ことになったのが、青年トルコ革命後になって駐イスタンブル大使になったジェラード・ローザーの存在であった。²⁰⁷ローザーは由緒ある貴族階級出身であり、東京やブダペスト、ワシントンなどの大使を歴任したイギリス外交界の重鎮のような存在であった。彼は青年トルコ革命後になって大使に就任したが、オスマン帝国を取り巻く環境は非常に危険であることをすぐに看破している。すなわち、オスマン帝国はマケドニア、トリポリタニア、アルバニアといった地域で他国の利害対立に直結する可能性があり、また統一と進歩委員会が親独的態度を示している以上、そういった地域に首を突っ込むだけでドイツや利害対立をしている国々との戦争を引き起こしかねないという危険性を見抜いたのであった。ただローザーの考えでは、ドイツを刺激しない限りはそれらの問題はイギリス・フランス・ロシアの三国協商によって十分解決可能であるとしている。²⁰⁸ローザーはこうした理由から、統一と進歩委員会が支配的になっているオスマン帝国とはさらに距離を置くべきであり、一方でタイミングを見計らってオスマン帝国の抱えている問題に介入を行うべきであるとした。同時にローザーは、オスマン帝国との同盟は決してありえないことであり、そういった危険性を起こしかねない統一と進歩委員会は「近い将来のうちに消滅してしまうことが望ましいと考えている」と断じた。²⁰⁹彼がこのように強く統一と進歩委員会に対して強い反抗心を持った理由としてよく挙げられるのが、彼が根っからの差別主義者であることだ。事実、彼はイスタンブル駐在大使として在任中にも、ユダヤ人やムスリム、トルコ人、さらにはフリーメイソンの面々に対して強い偏見を示していたのである。²¹⁰

とはいえ、このローザーからの報告を受けたイギリス外務大臣・グレイは、アブデュルハミトの親独路線および陸海軍のドイツ化以降距離を置いた英土間の関係の様子を見ながら、ローザーからの意見を参考に英土関係を推し進めることとなった。イギリスがイタリア＝トルコ戦争に介入せず、さらにオスマン帝国に「友好的な大国」であるとアピールする²¹¹一方で、ロシアと共謀してバルカン諸国への支援を秘密裏に行うことも、外務大臣・グレイと駐イスタンブル大使・ローザーの両名が綿密な情報交換を行った末に仕組んだ外交戦術であった。²¹²そしてこの二人を中心としたイギリス外交が、バルカン戦争のなかでその食指を動かしたのが、バグダードやバスラと言った都市を含むメソポタミア地方であった。²¹³

以上のように、オスマン帝国側にとってはリンパスたちイギリス軍事顧問団の存在や戦艦の発注、チャーチルからの好印象の返事など、イギリスとの同盟の可能性があったと感ずることができる環境は確かに存在していた。しかし一方で、実際は海軍をめぐるアブデュルハミト時代からの関係悪化やローザーによるオスマン帝国との同盟の危険性の示唆によってイギリス側にはオスマン帝国との同盟の意思はほぼ皆無であり、両者の関係は少しずつ修復不可能なレベルに達しようとしていたのであった。この「英土同盟」の考えを完全に破壊し、

²⁰⁷ Hale, W. (2000) 33 頁

²⁰⁸ Heller, J. (1983) 11-14 頁

²⁰⁹ 同書 24 頁

²¹⁰ Hale, W. (2000) 33 頁

²¹¹ 同書 33 頁

²¹² Heller, J. (1983) 17-81 頁

²¹³ 同書 90-100 頁

英土関係の決裂を決定づけたのもまた、ドイツ「海軍」の巡洋戦艦「ゲーベン(Goeben)」と軽巡洋艦「ブレスラウ(Breslau)」になろうとは、この時予想だにしていなかっただろう。

第二節 ロンドン条約の不備

(1) 大国・ブルガリアの外交と諸問題

オスマン帝国がバルカン戦争で敗れ、大国との同盟に向けて本腰を入れ始めたそのころ、戦勝国となったバルカン諸国間では新たな問題が生じ始めていた。まず大きな問題として表れたのが、このバルカン戦争でその存在感をアピールしたブルガリアの存在であった。今回の戦争でブルガリアは、オスマン帝国の古都・エディルネを獲得したばかりか、エーゲ海とトラキアの出口となるデデアアチ(Dedeağaç, 現ギリシャ領・アレクサンドループリ)をも獲得し、さらには西部にも領土を拡大させたことで、フェルディナンド1世の目指した「大ブルガリア」はある程度達成することとなった。ブルガリアがここまで躍進できた理由としては、第一章で挙げた国王・フェルディナンド1世によるブルガリア軍の近代化のほかにも、ブルガリアのこれまでの外交の試行錯誤の数々も理由に挙げることができる。ブルガリアは独立以前から厳しい外交状況にあったが、フェルディナンドの外交観とその決断によってブルガリアを安定させるのに成功し、そしてロシアという強力な存在に支えられながら自国を強化してきた。その結果、バルカン戦争でもブルガリアは最大の戦勝国としての立場を確立することができたのである。しかしそれは一方で、バルカン半島の周辺国との軋轢を確実に生じさせ、そしてこのロンドン条約でその軋轢をうまく解決させられなかったことで問題は顕在化することとなった。もちろんこの軋轢が次の第二次バルカン戦争のきっかけをもたらすのだが、それを見るためには第一次バルカン戦争に至るブルガリアのこれまでの外交を見てみるとともに、そのなかで生じてきた問題を考える必要がある。

まだ王国になる以前のブルガリアでは、アレクサンドルの退位後に摂政政治が行われ、フェルディナンドが新たに即位するまでに度々ロシアや親露派の知識人たちの妨害に悩まされながらそれらを凌ぐので精一杯の状態であった。²¹⁴この時摂政の一人として国政を指揮していたのがステファン・スタンボロフ(Stefan Nikolov Stambolov, 1854年 - 1895年)であった。もともとは1869年に設立された革命組織・ブルガリア革命中央委員会(Balgarski Revolyutsionen Tsentralen Komitet)のメンバーであったスタンボロフは1876年と1878年の反乱に参加し、さらに1885年には先代ブルガリア大公のアレクサンドルに対して自治州となっていたルメリアとブルガリアの統一を宣言するように半ば脅迫めいた態度をとって実際にアレクサンドルにそうさせたことで、以来ブルガリア国内では有能な政治家として名をはせていた。独立以前からロシアの力を頼って独立運動を展開したことによってロシアからの強い影響下に置かれていたブルガリアの中で、スタンボロフは完全な親露的ではない自由主義的な立場に立った。あまりに近すぎる二国間の距離はかえって内政干渉を入れられるケースも多く、また植民地化・衛星国化の第一段階と合致するところがある。このブルガリアもまた、第二次世界大戦後になってそのロシアの後身・ソ連の影

²¹⁴ R.J.クランプトン.(1997). 142-143頁

響を受け続け、軍事的占領を経て共産化する道を辿ることになる。スタンボロフの自由主義外交は、親露派のブルガリア人からの反発を招いたものの、君主なきブルガリアをロシアによるブルガリアの事実上の保護領化から防ぎ続けたのである。そして1887年にフェルディナンドがブルガリア大公として即位するとスタンボロフは首相に任命された。²¹⁵

急進的ナショナリズムの持ち主であるスタンボロフの自由主義路線は、ブルガリア国内の経済を活性化させ、イギリスをきっかけにドイツ、オーストリア＝ハンガリー、フランス、イタリア、スイス、ベルギーといった国々と関税交渉を行うことに成功した。²¹⁶さらにスタンボロフは、オスマン帝国政府に揺さぶりをかけるべく、あえてバルカン半島の安定を崩す外交を行った。彼がその標的にしたのが、他国と利害対立を繰り返すマケドニアであった。1890年にマケドニア出身のブルガリア軍人によるクーデター未遂を利用し、マケドニアにおける不穏な空気が高まっていることをアピールさせ、そこでオスマン帝国がブルガリア人へ譲歩を行うように仕向けたのであった。²¹⁷結局これはスタンボロフの思い通りに事を運ぶことはなかったが、マケドニアにおける対立を意図的に引き起こしたことで、少なくともオスマン帝国のマケドニアにおける影響力を削ぐことに成功したのである。ただし、これが後々になってより大きな問題を生じさせる原因になったのも否めない。スタンボロフの策略は確かに「オスマン帝国のマケドニアにおける影響力の排除」という点では成功したが、この策略の結果が非常にまずい状況を作ることとなった。というのも、この時オスマン帝国はマケドニアにおける東方正教会の在り方に関連する取り決めを行っていたのだが、当時のオスマン帝国のバルカン半島における東方正教会の取り扱いは、帝都・イスタンブルにある総主教庁の影響もあって、ギリシャ正教や勢力を強めていたセルビアのセルビア正教を厚く待遇するところがあった。今回の件もそうで、結局ブルガリアよりもギリシャやセルビアに有利に働くものであった。²¹⁸つまり、スタンボロフはマケドニアにおけるオスマン帝国の影響は排除したものの、その隙にブルガリアの影響を強めることは実際のところはなく、マケドニアにおけるギリシャなどの影響力をただ強めてしまったのである。

結局、スタンボロフはこうした問題で成功したものの、肝心の「独立したブルガリアが国際的に認められること」を果たすことはできなかった。ベルリン会議では自治公国としてオスマン帝国の支配から逃れることはできたが、それでも国際的な承認を得たわけではなく、完全な独立国家とは言えない状態にブルガリアはいた。特に国際的な承認を阻んだのが、ほかならぬロシアであった。本来の目的を達成できないスタンボロフとフェルディナンドは対立を重ね、スタンボロフは退陣に追い込まれ、一年後には殺害されたのだった。²¹⁹

スタンボロフが政権を担った時代ののち、フェルディナンドはまずはロシアから自身を承認してもらうことを目指すため、ブルガリアの外交路線を180度転換させることをした。つまり、ブルガリアの再親露化である。バルカン半島における影響力を強く持つロシアこそ

²¹⁵ 同書 145 頁

²¹⁶ 同書 146 頁

²¹⁷ 同書 147-148 頁

²¹⁸ 同書 148 頁

²¹⁹ 同書 151-152 頁

がブルガリアの国際承認の最大の障壁であり、またロシアの協力がなければ旧敵・オスマン帝国やマケドニアをめぐる他国との競合に勝つことができないことも明らかな事実としてブルガリア外交には存在していたのであった。そんな時にロシア側から提示された条件が、王太子・クレメント(Boris Klement Sakskovurggotski, 1894年-1943年 後のブルガリア国王ボリス3世)の改宗であった。

フェルディナンドたちザクセン＝コーブルグ＝ゴータ家は生粋のカトリックであり、同じキリスト教であるとはいえ、ロシア正教を信仰するロシアとは違う宗派に属していたのであった。ロシアがここで王太子の改宗を迫ったのには、クレメントを改宗させることでブルガリアがロシアに好意的印象を持っていることを証明させることのほかに、自分自身や家族がカトリックであるとともに、わざわざローマ教皇に改宗を認可してもらったうえで王太子を改宗させることができるかというフェルディナンド自身の決断力を推し量るものでもあった。もちろんこのロシアの考えはフェルディナンドにとってはかなり重大な決断をさせるものであった。自分の息子のみを改宗させることに抵抗があったし、かといって拒絶すればロシアとの和解も困難なものとなり、マケドニア問題を含めるブルガリアが抱える問題を絶望的状况にする可能性があったからだ。個人か、それとも国家か。フェルディナンドは一国の君主としての自分とカトリック教徒としての自分を天秤に掛けられたのである。

悩みに悩んだ末、フェルディナンドは最終的にブルガリア全体の必要性や国民感情、そしてブルガリア国民の団結を果たすため、クレメントの改宗を認めた。1896年にクレメントの改宗の洗礼が執り行われ、彼は「ボリス」という名をロシア皇帝・ニコライ2世からつけてもらった。ロシアも約定どおり、ブルガリアとの全面的和解に踏み切り、列強とともにブルガリアの国際的承認を行うのであった。²²⁰

こうして「王太子の改宗」という個人的な問題を乗り越え、ブルガリアはフェルディナンドのもとで親露的外交路線へ転換したことで内政の強化に集中することのできる土壌も獲得したとともに、ロシアという強力な支援者を獲得することができたのであった。その後ブルガリアは、自身の支配体制を絶対的なものにするべく独裁体制を敷いたフェルディナンドの強力なブルガリア＝ナショナリズムのもとで結束し、またスタンボロフのライバルであり、欧化主義の第一人者であるストイロフ(Konstantin Stoilov, 1853年-1901年)政権による近代化および国内経済・商業発展の政策の数々でブルガリアは急速な発展を遂げた。フェルディナンドによるブルガリア軍の近代化を促進させたのもちょうどこの時期である。

しかしその一方で、19世紀末からマケドニア問題はより深刻さを増すこととなった。フェルディナンドのブルガリア＝ナショナリズムは確かにブルガリア国内の結束を強めたものの、先のスタンボロフの外交戦略によって不安定な状況になったマケドニアの中ではさらに他民族との確執を生みだす要因ともなった。また1892年に親ブルガリアの内部マケドニア革命組織が組織されると、マケドニア国内の民族問題はますます苛烈極まる状況へと陥り、バルカン半島で何か国際的な出来事が発生するたびにマケドニア国内では何かしらの動きを見せるようになるし、マケドニアを手中に収めんとする国々も関係も流動的に変動した。

²²⁰ 同書 154-155 頁

例えば1897年にアブデュルハミト2世によってドイツ製の兵器を装備したオスマン帝国軍がギリシャに圧勝する²²¹と、セルビアやブルガリアがギリシャとオスマン帝国の結託を恐れ、自民族の動きを煽り、ギリシャも負けまいと自民族を煽ることを繰り返した。こうした動きは結局、19世紀末からその形を少しも変えることなく20世紀初頭にまで引き継がれ²²²、そしてロンドン条約の不備をめぐってその苛烈さは表面化するのであった。

マケドニア問題が全く変貌することなく更に苛烈さだけ増していったなかで、バルカン戦争のなかでもブルガリアにとって外交問題となることは発生していた。大国・ロシアの動向を懸念し、第一次バルカン戦争では中立を維持してきたルーマニアとの確執であった。ルーマニアは第一次バルカン戦争では中立を維持したものの、本質的には親独政権であるとともに、オーストリア＝ハンガリーとは同盟関係にあった。そしてブルガリアとは、1877年の露土戦争以降黒海沿岸のドブロジャ地方をめぐる問題を抱えていたのである。そんな折、ルーマニアは戦勝し続けて領土を拡大させていたブルガリアに対して大胆ともいえる要求を行った。両国が対立するドブロジャ地方の国境線をより南に修正すること。事実上のルーマニアによる領土割譲要求であった。もちろんブルガリアはこの要求を拒絶し、ルーマニア・ブルガリアの関係は急速に悪化していった。ルーマニアからすれば、南に位置するブルガリアがバルカン戦争で拡大してしまえば、領有するドブロジャ地方北部はおろか本国まで脅かす存在になりかねなかったし、逆にブルガリアにしてみればルーマニアの存在とドブロジャ問題の存続はルーマニアにドブロジャ南部への侵略の大義名分を与え続けることになり、両国は一步も妥協することができない状態になった。この両者がドブロジャ地方をめぐる対立することを憂慮したのが、オーストリア＝ハンガリーであった。²²³

そもそもルーマニアとオーストリア＝ハンガリーは、ともに国境を接する存在であるロシアに対抗するために協調関係を築いてきた歴史がある。もちろん両国にはトランシルヴァニアの帰属問題という問題が存在していたものの、それ以上にロシアという脅威が彼らの敵対関係をも超越していた状態にあった。1866年にルーマニア国王にドイツ系の親独派のカロルが即位したことが、その協調関係をより一層強固なものにした。しかし一方で、同様にドイツ系の王家であり、また急速に成長を遂げているブルガリアをもオーストリア＝ハンガリーは同盟に引き込みたいと思っていた。²²⁴オーストリア＝ハンガリー・ルーマニア・ブルガリアが結託すれば、バルカン半島内でも一大勢力を築くことにもつながるし、何よりも南下するきっかけを何としても作りたいと思っているロシアの防波堤となる力を有することができるからである。両国の衝突を避けるべくオーストリア＝ハンガリーは、1912年に急死したエーレンタールに代わって外相に就任したベルヒトルト(Leopold Graf Berchtold, 1863年-1942年)を中心とした三国間の協議が重ねられることとなった。²²⁵

²²¹ 本稿 77 頁

²²² 本稿 31 頁

²²³ 馬場優. (2006). 123 頁

²²⁴ 同書 127 頁

²²⁵ オーストリア＝ハンガリー・ルーマニア・ブルガリアによるドブロジャ地方国境線策定をめぐる問題については、馬場優(2006)の「第4章 ブルガリア＝ルーマニア間の国境線問題—第二次バルカン戦争前史—(123-172 頁)」を参照されたい。

3 国の協議の結果、ルーマニアが北部の脅威となって干渉してくることを恐れたブルガリア側が譲歩し、ロシアのサンクト・ペテルブルグで行われた特使会談の結果、ドブロジャ地方南部のうちの内陸部のシリストリアと黒海沿岸のバルチックを結ぶラインよりも北側の地域を割譲することになった。²²⁶こうしてブルガリア・ルーマニア間の対立は解決できたかに見えた。しかし実際のところはルーマニアを完全に満足させるのには至らず、それは第二次バルカン戦争において開戦二週間後になってルーマニアが突然対ブルガリア参戦を表明するという形で再び現れることとなる。²²⁷

以上のように、ブルガリアの外交姿勢はマケドニアにおいて決定的な働きを担っていたとともに、19世紀末のマケドニア国内のブルガリア人を意図的に刺激するスタンボロフの外交と絶対君主・フェルディナンドの強力なブルガリア＝ナショナリズムによって、セルビア・ギリシャを巻き込むマケドニア問題をより苛烈なものにした。それは20世紀初頭になっても何ら変わることはなく、バルカン戦争以降になってバルカン諸国間が激しく対立するきっかけを作ったにすぎないものであった。さらにバルカン戦争での活躍によって領土拡大させる一方で、中立を維持していたルーマニアとドブロジャ地方をめぐって対立を深め、オーストリア＝ハンガリー主導で国境線策定会談を行うに至った。このマケドニア問題とルーマニアとの関係悪化は、第二次バルカン戦争でブルガリアに壊滅的な敗北をもたらす直接的な原因にもなり、オスマン帝国側からすれば古都・エディルネを奪還するチャンスを手にすることになるのである。

またロンドン条約の不備をめぐってさらに問題になったのが、バルカン戦争中に独立宣言を行い、ロンドン条約の中で正式に国際承認された独立国家・アルバニアの存在であった。

(2) アルバニアをめぐるアドリア海沿岸国の外交戦略

1912年11月28日。アルバニアは指導者・イスマイル・チェマル(Ismail Qemal, 1844年-1919年トルコ語ではイスマイル・ケマル)率いるアルバニア人愛国者たちの手によって独立を宣言した。しかしバルカン半島の歴史の中でみれば、この国は他のバルカン諸国とはかなり特異的な国家である。多くの国が青年トルコ革命以前から反オスマン帝国の考えを持っていた中で、アルバニアはいわば「オスマン帝国の良き隣人」であり「理解者」であった。エンヴェルがアルバニアを訪問した際にも、トルコ人であるエンヴェルに非常に好意的であり、エンヴェルにアルバニアがオスマン帝国における非トルコ人のオスマンのもとの結束を感じさせた国家である。そんなアルバニアは、結果として青年トルコ革命による改革に「一番裏切られた存在」でもあった。オスマン帝国の中央集権化を危惧し、1878年にコソヴォ(Kosovë)自治州の古都・プリズレン(Prizren)にてアルバニア民族の復興とアルバニア人としての意識を高揚させるべく結成されたプリズレン連盟(Liga e Prizrenit)は独立に向けた動きを見せ始め、独立のための反乱をおこし続けた。²²⁸

しかしこうしたアルバニアの独立に向けた動きの中で、アルバニアに深い関わりを持った

²²⁶ R.J.クランプトン.(1997) 187頁

²²⁷ 同書 188頁

²²⁸ 中津孝司.(1991) 20頁

のが北のセルビアと南のギリシャであった。チェマルたちの独立も、元々はこの2カ国によるアルバニア征服の危険性を危惧して行ったものでもあったのである。²²⁹ しかし、セルビアとギリシャのアルバニアの獲得を目指す動きに歯止めがかかることはなく、実際にバルカン戦争中にはアルバニアの独立後になってもセルビア・モンテネグロ連合軍がアルバニアのスクタリへの包囲戦を展開しており、まさに独立と併合が紙一重の状態にあったのである。とはいえアルバニアが独立宣言してロンドン条約締結後に独立が約束されたにもかかわらず、第二次バルカン戦争後にはセルビア軍がアルバニアからなかなか撤退しない事態が発生し²³⁰、さらにロンドン条約の締結において、アルバニアは自身に対する強大な敵・イタリアの存在を知ることとなる。しかしその一方で、セルビアと接する大国・オーストリア＝ハンガリーは、バルカンにおける動乱のもとを抑えておく意図もあってアルバニアの独立を積極的に支援し、特にセルビアとの関係をより悪化させることとなった。ここではロンドン条約の締結によって顕在化するアルバニアをめぐるセルビアとギリシャの対立、そしてアルバニアを手に入れようと画策するイタリアの關係に焦点をあて、第一次世界大戦・第二次世界大戦で蹂躪されるこの地をめぐる利害対立を結局解決できなかったアルバニアにおける問題を簡単に見てみこうと思う。

アルバニアに存在する複雑な民族・宗教の構成はさることながら、アルバニアがセルビア、ギリシャ、イタリア、モンテネグロに狙われるようになったのにはいくつか理由がある。まず挙げられるのは、セルビア、ギリシャ、モンテネグロがそもそも自国の拡大を目指していたことであり、また特にギリシャとセルビアに関して言えばアルバニアがナショナリズムのぶつかり合う場所に位置していたということである。セルビア国王・ペータルが中心となって掲げられた「大セルビア主義」も、ギリシャ国王・ゲオルギオスと首相・ヴェニゼロスのもとで掲げられた「メガリ・イデア」も、もともと自民族の結束を図るためのナショナリズムという性質を持っていたとともに、かつて自民族が樹立していた国家の領土をオスマン帝国から奪還し、その復活を目指すという領土の拡大を示唆する意図も含まれていた。セルビアにとってのその対象は中世セルビア王国であり、またギリシャのそれは世界帝国・ビザンツ帝国であるが、両国ともそれを実現せんとばかりにオスマン帝国領へ一挙に攻め込んだのであった。アルバニアもまた、かつての中世セルビア王国やビザンツ帝国の領土の中にあった土地であり、両国のナショナリズムの例外にはならなかった。特にセルビアの場合、すでに第一章で取り上げた²³¹ようにアルバニアはそもそもセルビア人居住地であったという理由から獲得する熱意があったのである。ナショナリズムの観点で考えてみれば、イタリアもまた古代ローマ帝国やヴェネツィア共和国時代に縁のある土地であったことから、イタリアの場合も同様なことを言える。

そしてセルビア、ギリシャ、イタリアが非常に絡むアルバニア獲得の決定的な利点は、アルバニアが面しているアドリア海そのものであり、さらに厳密に言えばアドリア海の入口であるオトラント海峡にあった。地中海から「アドリア海の女王」と呼ばれたイタリアの誇る

²²⁹ チャールズ・ジェラヴィッチ, バーバラ・ジェラヴィッチ. (1982) 98-99 頁

²³⁰ 馬場優. (2006) 235 頁

²³¹ 本稿 33 頁

商業都市・ヴェネツィアに至るアドリア海には、イタリアとオーストリア＝ハンガリーの2大国が面しているほか、それぞれの海軍の拠点も存在する海である。両大国にとっては海上における戦略を練る際に重要不可欠となる海であり、また海軍の使い方の次第では両国に致命的なダメージを与えかねない海でもあった。ちょうどアルバニアはそのアドリア海の入口であるオトラント海峡の正面に位置しており、また地中海もすぐ目と鼻の先に位置している。一見そこには何の外交的なメリットが存在しないようにも思えるが、軍事的な面でみれば非常に重要な場所であった。つまりアルバニアを自国領土として制してしまえば、同時にアドリア海の制海権をも掌握し、さらには地中海へ展開することのできる場所であったのだ。事実このオトラント海峡は歴史的にみても軍事的に重要な拠点になったことで度々そこをめぐる外交の争いが生じている。この点を見ると、セルビア、イタリア、ギリシャが直接利害対立をおこし、オーストリア＝ハンガリーがアルバニアの保持を望んだ理由も浮かび上がってくる。

このアドリア海の戦略的重要性を考える際、まずその必要性を真っ先に訴えるだろう国はやはりイタリアである。イタリアからすれば、アルバニアは半島最南端のターラント(Taranto)との真正面に位置するところにあり、アルバニアを手中に収めることはアドリア海の入口を完全に掌握することにもつながる。もしそうなれば、イタリアの本来の敵国であるオーストリア＝ハンガリーに対してアドリア海から強い圧力をかけることができるようになる。オーストリア＝ハンガリーから「未回収のイタリア(Italia Irredenta)」と呼ばれる北イタリア地域を奪還したいイタリアとしては、同盟関係というある程度余裕のある時期に少しでもオーストリア＝ハンガリーに圧力・脅しとなる材料が必要であった。さらに、ドイツやルーマニアのようなオーストリア＝ハンガリーとは同盟関係にある国々の海上からの援助を切断させることができるようになる。もちろんそのためにはイタリア側にアドリア海で遮断することができるほどの戦力が必要となるが、対オーストリア＝ハンガリーを考えた上では絶対不可欠な場所であったのである。

ギリシャもまたイタリアの考えに近いところがある。エーゲ海や地中海に面するギリシャもまた、アルバニアを獲得することはギリシャ海軍を広範囲にわたって活用するきっかけにもなりえたし、さらにそこからアルバニアと接しているセルビアとモンテネグロといった国々に圧力をかけるチャンスを得ることにもなる。特にセルビアとはアルバニアに加えてマケドニアをめぐる問題でも争っており、マケドニア問題をギリシャに有利な方向で進めるうえでは重要となっていたのであった。セルビアにも、アルバニア獲得は内陸国・セルビアにとっては悲願となる沿岸地域の獲得を意味し、さらにはボスニア地域をめぐる争っているオーストリア＝ハンガリーに対しての重要な拠点を置くことができるという利点もあった。現にセルビアは、第一次バルカン戦争中はマケドニアへ進軍するとともに、モンテネグロのアルバニア進撃に合わせてアルバニア方面にも軍を送り込んでいる。そこで反セルビア的感情の持ち主であるモンテネグロ国王・ニコラが率いるモンテネグロ軍とアルバニア攻略をめぐる対立した²³²が、最終的にはスクタリを陥落させている。

²³² レフ・トロツキー、(1926) 150-154 頁

いずれの場合にせよ、アルバニアが他国の影響下に置かれることで一番損をするのはオーストリア＝ハンガリーであった。特にセルビアやイタリアにアルバニアの獲得を許し、アドリア海とオトラント海峡を押さえられることはオーストリア＝ハンガリーの海上封鎖を意味するものであり、オーストリア＝ハンガリーに打撃を与えかねないものであった。そこでオーストリア＝ハンガリーが考えたのが、アルバニア地域がアルバニア獲得を目指す国々の影響を受けない状態にあること、つまりアルバニアの独立の支援であった。²³³

こうして、アルバニアは独立宣言を出し、そしてロンドン条約で国際的承認がなされたのにもかかわらず、ナショナリズム的理由そしてアドリア海・オトラント海峡の戦略的価値からセルビア・ギリシャ・イタリア・オーストリア＝ハンガリーは第一次バルカン戦争中からアルバニア獲得をめぐる対立し、ロンドン条約締結の際にも争った。もちろんこれらのやり取りは敗戦国・オスマン帝国も当のアルバニアも知らされることはなく、勝手に周辺国の利権の考えだけで展開されたのである。このアルバニアならびにアドリア海やオトラント海峡をめぐる問題は、その後も第一次世界大戦中にオトラント海峡で大規模な海戦がおこなわれ、さらに第二次世界大戦時にはイタリアによるアルバニア侵略という形で現れた。

第三節 三巨頭体制の成立

(1) シェヴケト・パシャ暗殺の新たな意義

前節で書いたロンドン条約での不備が重なり、第二次バルカン戦争が勃発するのだが、オスマン帝国内ではその間に統一と進歩委員会に関する重大な出来事が2つ起こっている。大宰相・マフムート・シェヴケト・パシャの暗殺とそれに伴うエンヴェル、ジェマル、タラートの「三頭政治」体制の形成の始まりである。特にシェヴケト暗殺は、従来のオスマン帝国史研究の中ではおおむね2つの意義を有していたという説明が行われている。第一に、シェヴケト・パシャが暗殺されたことによって初めて親統一と進歩委員会大宰相・サイート・ハリム・パシャ(Sait Halim Paşa, 1865年-1921年)を生み出すことになったこと、そして第二に暗殺をきっかけに反統一と進歩委員会派の掃討が行われたことで統一と進歩委員会の絶対的優位性が確保され、統一と進歩委員会による指導体制が完成したということである。²³⁴ さらに言えば、「オスマン＝ドイツ同盟」の提唱者であるハリム・パシャが大宰相に就任したことは、オスマン帝国が親独国家としてその立場を表わす上で決定的な出来事にもなり、ドイツへの接近は急速に行われることになる。つまり、シェヴケト・パシャの暗殺が第一次世界大戦まで至るオスマン帝国外交の方針において最終決定を下す出来事となったのである。しかしそれにもかかわらず、シェヴケトの暗殺と統一と進歩委員会メンバーの関係に着眼した視点は意外と少なく、日本のオスマン帝国史研究でも欠落するところである。シェヴケトがもともと統一と進歩委員会メンバーではなく、むしろ委員会にとっては一時期その存続を危ぶませられた人物でもあるからだ。しかし実際のところは彼の存在はメンバーたちに

²³³ 馬場優(2006). 59頁 なお、セルビアによるアルバニア進出の画策とそれに対するオーストリア＝ハンガリーの外交については、馬場優(2006)の「第2章 第一次バルカン戦争とセルビアのアドリア海進出問題—(59-122頁)」を参照されたい。

²³⁴ 新井政美(2001) 124-127頁

としてはかなり影響力のある存在であり、彼は国家や組織ばかりではなく個人個人にも強い影響力を持つ存在でもあった。ここでは、実際のシェヴケトと委員会メンバーならびにオスマン帝国の政治に関わってきた者たちの関係性を、委員会全体からではなく個人個人の視点から少し見ながら、従来の研究では語られることのない新たな意義を探ってみる。

1913年6月15日水曜日。²³⁵大宰相・マフムート・シェヴケト・パシャはバヤジット広場(Beyazıt Meydanı)にて公用車に乗り込もうとしたところを3人組に襲撃され、拳銃で射殺された。ジェマルの友人でもあるイスマイル・ハックなどの反統一と進歩委員会メンバーによってシェヴケト、タラート、そしてジェマルに対して暗殺が実行されようとしていると政府内で騒がれていたその時であった。²³⁶「大宰相府襲撃」以降大宰相として君臨してきたシェヴケト・パシャは、統一と進歩委員会からすれば反統一と進歩委員会派の大物であるとともに、非統一と進歩委員会派メンバーの最後の砦といえる人物であった。統一と進歩委員会に属さないメンバー・反統一と進歩委員会派の旧体制派官僚たちの中で統一と進歩委員会に正面からぶつかって影響力を与えられる人物はシェヴケト以外にはいなかったと考えられていたからだ。彼が統一と進歩委員会の支持のもとで大宰相に任命されたのちも、統一と進歩委員会は彼のことで気を緩めることはなかった。

しかし一方で、統一と進歩委員会のメンバーのほとんどは彼が第3軍団および「行動軍」の司令官として3月31日事件以来つき従っていた人物であり、さらに「強力な愛国心」・「親独派」という観点では統一と進歩委員会と考えを共有する人物でもあった。エンヴェル、ジェマル、ムスタファ・ケマルなどはシェヴケトのもとで彼と行動を共にした人物でもあった。このことについてはシェヴケト暗殺の時にイスタンブールの軍総司令部にいたエンヴェルも、彼が暗殺されたことで自分たちがしてきたことを止めてはならないと一方で、彼のことを「愛国者」と認めている。²³⁷同志ではないにせよ、シェヴケトから様々なことを吸収し、そして同じ志を持つ者が大宰相として昇りつめた男として一定の評価を行う意図もあった。

またシェヴケト暗殺後になって、特にジェマルの周囲で様々な出来事が発生している。まず挙げられるのは前大宰相・キヤーミルの帰還である。キヤーミルは「大宰相府襲撃」にて大宰相を辞任して以降、彼の友人であるイギリス軍人・ハーバート・キッチナー(Herbert Kitchener, 1850年-1916年 後にイギリス陸軍大将)の招きを受けてエジプト・カイロに約3ヵ月間滞在し、その後は故郷のキプロスへ帰国していた。しかしシェヴケトが暗殺されたことを知ると、奪われた大宰相の地位を取り戻すべくイスタンブールに上陸したのである。キヤーミルについては、実はシェヴケト・パシャが存命中にもキヤーミルは訪問しており、シェヴケトらと会話を交わしているが、これらキヤーミルの訪問の背景には、駐イスタンブールイギリス大使であるローザーたちイギリスの関与が関わっているのではないかとジェマル

²³⁵ シェヴケトが暗殺された日時ではあるが、文献によっては「6月11日」となっているものもある。本稿ではジェマルが回想録の中で「(シェヴケトの)暗殺が実行される日」として述べている6月15日を採用する。[Cemal, B. (1959) 47頁]

²³⁶ 同書 36頁

²³⁷ Hanioglu, M. Ş. (1989). 246頁 15 Haziran 1913

は考えている。²³⁸反統一と進歩委員会の見解を持つローザーやイギリス本国からすれば、親独派のシェヴケトが大宰相に居座り続けることはイギリスとの関係はもちろん、親独化することでバルカンにおける勢力均衡をオスマン帝国が破壊する危険性もあったのである。またこの勢力均衡の破壊に関しては、バルカン戦争後のオスマン帝国陸軍の動きもその理由の一つに挙げることができる。バルカン戦争後になってオスマン帝国は、戦時には行うことのできなかった兵および武器の配備を西部のバルカン方面と東部のエルズルム方面で集中的に行っており、また軍全体の整備もドイツの軍事顧問団の協力のもとで急ピッチに進められていた。軍や兵器の質的にはバルカン半島内でも屈指の強さを持つオスマン帝国陸軍であるだけに、バルカン方面への配備が完了すればバルカン半島の脅威にもなりえる存在ではあった。もちろんそこには同盟国であるロシアの負担軽減も意図されており、オスマン帝国内に親英派の人間が政権を握る状態にしておきたいと考えていた。そこでシェヴケトの代わりに親英派のキャーミルを大宰相に置くことでドイツへの接近をやめさせ、そしてイギリスとの関係を修復させることで少なくともイギリスの敵となることを阻止しようと考えたのである。ジェマルはこのイギリス側の意図が、最終的にはシェヴケト暗殺のトリガーにもなったのではないかと後になって推測している。²³⁹いずれにせよ、キャーミルがイスタンブールにいることは統一と進歩委員会の意図と反することであり、シェヴケトの暗殺で崩れかけているイスタンブールの治安を守る上ではマイナス面となることであつた。ジェマル自身もどちらかといえば親英・親仏派である人間であり、親英的なキャーミルたちとは本来はウマが合う存在ではあるが、彼からすれば反統一と進歩委員会派の面々の「売国的態度」を彼の愛国者としての自分が許すことができないところもあつた。シェヴケト暗殺後にジェマルが展開した「自由と連合」を中心とする反統一と進歩委員会派の弾圧には、彼の任務に対する実直な態度が存在するとともに、元来から秘めていた強い愛国心が発露したことも背景にもなっている。キャーミルもその例外ではなく、ジェマルはキャーミルに対してイスタンブールから出ていかない限りはキャーミルを逮捕するという旨の通告を出した。キャーミルは結局それに逆らうことはできず、自身の家族とともにイスタンブールから離れることとなった。²⁴⁰

またジェマル自身、シェヴケト暗殺の際には実際にその現場に居合わせていた。ジェマルはシェヴケトが暗殺される日の朝に陸軍省へ訪問し、さらに約30分にわたってシェヴケトと話をしている。ただその時シェヴケトはなぜかひどく何かに脅えていたようで、「アッラーの思し召しを(Allahın hükmü)」とってはどうすればいいのかとおどおどしていたという。²⁴¹その後2人は別れ、ジェマルは第3軍団の将校たちと軍のことで話し合っていたのだが、その途中で彼は銃声らしき音が5回したのを聞いた。その場にいた将校に確認してみたが、尋ねられた将校は何も聞こえなかったと言っており、ジェマルもその時はただの気のせいではないかと思っていたのだが、それから5分後に誰かが撃たれたという情報が入り

²³⁸ Cemal, B. (1959) 47 頁

²³⁹ 同書 43 頁

²⁴⁰ 同書 47 頁

²⁴¹ 同書 47 頁

242、彼は自分が聞いた音が気のせいではなかったのだと確信した。その後ジェマルは後の大宰相のサイト・ハリム・パシャや他の大臣などのメンバーに電話をするなど、シェヴケト襲撃の犯人の特定やシェヴケト亡き後の新政権樹立の画策のために奔走しているが、シェヴケトをまずは当分の間大宰相に据えておこうと考えていただけに、あまりに唐突なことであったことから全ての人事などを一から作成しなければならない事態となった。²⁴³この時、シェヴケトが政治の実権を握っていたことで統一と進歩委員会が会員ではないシェヴケトのことをいかに信用し、そして暗殺によってその大きな後ろ盾を失ってしまったことを痛感するのであった。さらにシェヴケトの葬儀のときには、ジェマルはシェヴケトの民衆からの支持も多かったことを知ることとなった。²⁴⁴

以上のジェマルの視点からも、シェヴケトと統一と進歩委員会の関係は決して疎遠なものではなく、実際のシェヴケトはかなり統一と進歩委員会に政治的にも強い影響力を受けており、同時に緊密な関係を形成していたとすることができるだろう。またシェヴケトの暗殺の裏には、イギリス側のオスマン帝国の親独化を阻止する意図も垣間見ることができ、その動きに対して統一と進歩委員会が抵抗して親独化を一層強める意義も存在していた。この意義はジェマルによる反統一と進歩委員会派の弾圧にも生かされ、そして従来の研究のなかで語られる「親独派の大宰相の擁立」と「統一と進歩委員会の指導体制の完全確立」の2つの意義をより確固たるものにする土台の役割を担ったのである。

(2) ジェマルの弾圧の真意と「ちぐはぐ」な三頭政治の形成

シェヴケトが暗殺されたことで親統一と進歩委員会派のサイト・ハリム・パシャが大宰相として擁立されたが、これだけではまだ統一と進歩委員会の指導体制が確立されたとは言えない状態にあった。ジェマルのもとに前大宰相・チャーミルがイスタンブールへやってきたという話があったように、国内には「自由と連合」のような反統一と進歩委員会派のメンバーが残存しており、シェヴケトの暗殺によって統一と進歩委員会の政治的優位を崩そうとする動きも考えられた。統一と進歩委員会としては、反統一と進歩委員会の存在は明らかに邪魔であり、自身の指導体制を確立させる為には排除しなければならなかった。そこで重大な役割を果たしたのがジェマルであった。

ジェマルはイスタンブール駐屯の任にいたものの、統一と進歩委員会にとっての重要人物であるシェヴケトの暗殺を防ぐことはできなかった。かつてのシェヴケトの部下であり、反統一と進歩委員会派の陸軍大佐・チェルケズ・キャズム(Çerkez Kazım)²⁴⁵を含むシェヴケ

²⁴² 同書 48 頁 ジェマルはこの時5発の銃声を聞いたものの、「誰が撃った?(Kim vurdu?)」と言っていたことから、この時点では誰が撃たれたのかはまだ分からない状態にいた。それはジェマルにその話を伝えに来たオスマン軍将校も「誰が撃たれたのかは分からない!(Kim olduğunu bilmiyorum!)」と語っており、突然の状況でパニックに陥っていたと考えられる。

²⁴³ 同書 49-50 頁

²⁴⁴ 同書 50 頁 シェヴケトの葬儀には多くのイスタンブール在住の女性たちが駆けつけており、シェヴケトの死を悲しみ、大泣きしている様子がジェマルの回想録から垣間見ることができる。

²⁴⁵ Akşin, S. (1987) 98 頁、233-237 頁

ト暗殺犯たちはジェマルの手によって暗殺決行の2日後に全員逮捕されたが²⁴⁶、それでも彼の身に暗殺者の魔の手が迫っているという危険性を排除することができなかったし、何よりもイスタンブルに駐屯していながら、自分が頼りにしていた人物であるシェヴケトが殺されてしまったことが悔しかったのか、彼はシェヴケトの葬儀の時に人知れず泣いた。²⁴⁷そこでジェマルは、ちょうど葬儀の後に訪問してきた憲兵隊(Jandarma Zabıtlar)の将校らのアドバイスなどを聞きながら、二度と重要人物の暗殺のような事態が発生しない状況を作ること画策した。その結果彼が至ったのが、統一と進歩委員会に弓を引いている反対勢力の弾圧であった。とはいえ、ここでもジェマルはその弾圧の実行に少なからず抵抗感を示した。いわゆる反対派には、ジェマルと外交観を共有するアリー・ケマルやルザ・ヌールといったジェマルと意見をやりとりしていた人物たちもいたからである。かといって彼らを野放ししていれば、反統一と進歩委員会派のメンバーによる暗殺計画は実行され続け、ひょっとしたら自分自身も暗殺される可能性があったからである。さらに反統一と進歩委員会派による統一と進歩委員会への攻撃がエスカレートすれば、オスマン帝国全体をも巻き込みかねない動乱の原因にもなりえた。事実似たような原因から生じた対立の末に発生したのが、保守派・分権派メンバーによって発生し、帝都・イスタンブルを混乱の渦へたたきこんだ3月31日事件であった。苦渋の選択の末、ジェマルは逮捕した暗殺犯からその関係先を割り出し、関係する反対勢力全ての弾圧を決行したのであった。²⁴⁸しかしこの反統一と進歩委員会派の弾圧をめぐるジェマルの在り方は、従来の研究史の中では異なる描かれ方をされている。『マケドニアから中央アジアへ エンヴェル・パシャ』の著者・シェヴケト・スュレイヤ・アイデミル(Şevket Süreyya Aydemir, 1897年-1976年)は著書の中でこの弾圧を「犯人捜しを名目とした弾圧」という明らかに政治的感情のある見解で表現し²⁴⁹、『納得しなかった男 エンヴェル・パシャ 中東から中央アジアへ』の山内昌之も「反対派の殺戮を躊躇わない獰猛ぶり」という表現で以てこの弾圧のことを論じている。²⁵⁰

このジェマルの「苦渋の決断」による反対勢力の弾圧は、統一と進歩委員会の優位性を確固たるものにし、ここに統一と進歩委員会の指導体制が完全に確立されたことになった。通常ここからエンヴェル・ジェマル・タラートによる「三頭政治」が形成されるようになると言われている。しかしこのころはまだ「三頭政治」と呼ぶことのできるほどエンヴェル・ジェマル・タラートが完全に独裁的な権力を握ることができたわけではなかった。シェヴケト暗殺後になって大宰相へ就任したサイト・ハリム・パシャは、新政権の組閣の際に入閣したエンヴェル、ジェマル、タラート、ジャヴィトといった青年トルコ革命時から最前線に立って活躍してきた委員会内の実力者たちの指導力が目立ったことでその存在が霞んでしまっていたものの²⁵¹、エジプト近代化の父として名高いムハンマド・アリー(Muhammad Ali

²⁴⁶ 同書 51頁

²⁴⁷ 同書 50頁

²⁴⁸ 同書 52-53頁

²⁴⁹ Aydemir, Ş. S. (1976) 400-401頁

²⁵⁰ 山内昌之(1999) 17頁

²⁵¹ 貝瀬雅典. (2001) 11頁

Pasha, 1769年-1849年 エジプト・ムハンマド・アリー朝創設者)の孫であり、さらに父親のアブデュルハリム・パシャ(Mehmet Abdülhalim Paşa)もまたオスマン帝国内で政府高官を歴任した人物であることから血統としては申し分のない存在であり、統一と進歩委員会の権威の象徴として大宰相の地位にいた。また彼が統一と進歩委員会の中でその地位を保つことができたのは、彼がアラビア語、フランス語、ペルシャ語、英語が堪能な統一と進歩委員会メンバーで屈指の外国通の人間であったことと、統一と進歩委員会を青年トルコ革命以前から金銭面でバックアップし続けていた人物であったこともあったことも挙げられる。²⁵²そして前述の通り彼はエンヴェルにも劣らない「オスマン＝ドイツ同盟」の熱烈な支持者であった。そのため親独派のメンバーの意見をよく取り入れており、最終的には1914年8月2日に締結されるオスマン＝ドイツ同盟の実現にもこぎつけている。²⁵³とはいえそれでもサイト・ハリム・パシャの指導力の無さが露呈されるようになると、必然的にエンヴェル、タラート、ジェマルの3人の地位が上昇していくのである。実質3人の「三頭政治」が完成するのは、サイト・ハリム・パシャが大宰相を辞職し、タラートが内務大臣から大宰相に就任した時からである。

しかしこの「三頭政治」が形成されるにあたって、少しずつではあるが3人の間にはすでに確執が生じていたのであった。シェヴケト暗殺後の新政権樹立の人事策定の際には、エンヴェル達軍人出身者のメンバーとタラート達文民出身者がそれぞれの見解の違いから対立をおこし、一時期軍人メンバーによる文民メンバーの排除まで画策されたことがあった。²⁵⁴さらにこの時期に問題となったのが、反対派鎮圧によってさらに増したジェマルの存在感と彼の親仏感情であった。これを特に危惧していたのがエンヴェルであった。ジェマルとエンヴェルは長年にわたって共に闘ってきた同志ではあるが、エンヴェルからすればジェマルの実直な軍人としての在り方と部下からの信頼の厚さはある種の脅威といえるものであった。もちろんそれこそがジェマルが統一と進歩委員会内で頭角を現すようになる根本的な理由ではあるが、部下たちからの信頼が大きい以上、ジェマルと正面から対立する時に不利になる可能性があった。エンヴェルが以前考えた「自分自身が思う通りの行動をオスマン帝国が取れるような環境」²⁵⁵を実現するためには、独裁者になりすぎず、しかし独裁者にならない限り自分の考えを阻害する要因をつぶしていく必要があったのである。そこでエンヴェルは、ジェマルの影響が陸軍内に浸透してエンヴェルの思い通りにならなくなることを防ぐべく、自身が陸軍大臣に就任するとともに、ジェマルの面子を立てながら彼とは全く関係ない海軍大臣のポストへ追いやることにしたのである。²⁵⁶ただこれは確かに陸軍におけるジェマルの影響力を排することに成功したものの、ジェマルが海軍大臣時代のなかでオスマン帝国海軍が抱える問題や本章第一節(2)でも書いたような海軍をめぐる外交状況²⁵⁷を知るきつ

²⁵² Aydemir, Ş. S. (1976) 410-412 頁

²⁵³ 同書.518-519 頁

²⁵⁴ 新井政美. (2001) 128 頁

²⁵⁵ 本稿 64 頁

²⁵⁶ Cemal, B. (1959) 94-108 頁

²⁵⁷ 本稿 76 頁

かけにもなり、さらにジェマルが親仏路線へ傾倒していくきっかけをもたらすこととなった。エンヴェルとジェマルの意見対立の主な原因が「親独」であるか「親仏」であるかという問題であっただけに、エンヴェルの一存によるジェマルの海軍大臣への抜擢は、両者の対立をより深刻化させる結果を招いてしまったのだった。

そのジェマルの親仏路線は、シェヴケト暗殺以前からも反統一と進歩委員会派メンバーとやり取りしていたところからも垣間見ることができるが、この時期になってからはよりはっきりと「フランス(Fransa)」という言葉を意識的に使うようになっている。この時期にジェマルが親仏化の影響を受けた人物がダマト・サーリフ・パシャ(Damat Salih Paşa)であった。サーリフはアブデュルハミト時代初期の大宰相であるトゥヌスル・ハイレッディン・パシャ(Tunuslu Hayreddin Paşa, 1823 年-1890 年)の息子である²⁵⁸が、父親がチュニス出身であったことからサーリフは長年にわたってチュニスに住んでいた。しかしそこで彼はフランスのチュニス侵攻を体験し、それ以降彼はフランスの強大さを知る親仏家となった。サーリフの主張はその強大なフランスを味方につけ、オスマン帝国をフランスの力で守護することであり、それを叶えるためには親独派である統一と進歩委員会の政権を打ち崩す必要があると考えていたのだが、それら全ての考えは後々になってフランスから自分の故郷であるチュニスを返してもらおうという彼の真の目的と合致するものであった。²⁵⁹ただ敵対する統一と進歩委員会の中でも「親仏家」として知られていたジェマルとは意気投合しており、サーリフはフランス駐イスタンブル大使のルイ・モーリス・ボンパール(Louis Maurice Bompard, 1857 年-1936 年)など数人のフランス人を連れてきてはジェマルと度々話し合っている。²⁶⁰ボンパールの意図としては、フランスとオスマン帝国の関係を修復し、フランスの保護のもとでオスマン帝国を再興させるというものであった。しかしさすがにこれについてジェマルはフランスの干渉も入っていると考えており、フランス政府側の意向とは少し異なることを言及している。²⁶¹ただそれでもフランスとの関係は全く皆無になっているわけではなく、またボンパールからフランスとの友好を望む者が少しずつ増加していることをジェマルはサーリフやボンパールらとの話の中で知ることができ、フランスの干渉を心配しながらもフランスとの友好の可能性があることを実感したのであった。²⁶²

こうしてジェマルは統一と進歩委員会のメンバーという立場上反統一と進歩委員会派の弾圧を執行し、さらにエンヴェルの思惑によって海軍大臣という今までの人脈を生かすことのできない役職に就くことになった。しかしその一方でその海軍大臣という役職に就いたこと、また弾圧以降も反統一と進歩委員会派の面々と接触を繰り返したことで統一と進歩委員会の掲げる外交姿勢とは違う外交関係の在り方を見出し、自身の親仏感情をより確固たるものへと昇華させ、そして彼の「親仏派」としての外交スタンスを完成させることに大いに寄与することとなった。そしてジェマルの親仏的外交スタンスはエンヴェルの親独的外交スタ

²⁵⁸ Akşin, S. (1987) 236 頁

²⁵⁹ Cemal, B. (1959) 54 頁

²⁶⁰ 同書 53 頁

²⁶¹ 同書 56 頁

²⁶² 同書 54-55 頁

ンスと真っ向から衝突することとなり、第一次世界大戦終戦まで続く「三頭政治」内に絶えず「ちぐはぐ」な関係を作り出す原因となった。

おわりに

さてここで、第三章で書いてきたことを簡単にまとめてみたいと思う。オスマン帝国の大敗で幕を閉じた第一次バルカン戦争、そしてその講和条約であるロンドン条約は、オスマン帝国に近代的海軍の必要性和外交によって友好的な大国を自身の後ろ盾にする必要性を思い知らせる出来事となった。しかしオスマン帝国海軍に目をやれば、オスマン帝国の近代化・西欧化であるタンジマート時代の致命的な反動である国家財政の破綻をきっかけにアブデュルハミト2世が海軍の予算を大幅カットし、さらに帝国軍の主軸を海軍から陸軍にスイッチさせたことすでに散々なものとなっており、さらに海軍の構築によって形成されたイギリスとの関係を悪化させる原因を作っていた。オスマン帝国側にはイギリスとの同盟の可能性がちらついているように見えて、実際はイギリス側にはオスマン帝国との同盟の考えはほぼ皆無であったのが現状であった。

ただしアブデュルハミト2世の陸軍中心の軍拡は、その主な支援元であった陸軍大国・ドイツとの軍事的関係を構築するに至り、やがてはシェヴケト、エンヴェルといった親独派軍人の輩出を生み出す環境をも作り出した。この環境のもとで育ってきた軍人たちが率いる統一と進歩委員会は、「大宰相府襲撃」によって親独派の大宰相のシェヴケトを擁立させることに成功したが、そのシェヴケトもイギリス大使・ローザーの親独化阻止の思惑や反統一と進歩委員会派の暗躍のなかで反統一と進歩委員会派のチェルケス・キャーミルらの襲撃を受けて暗殺された。

こうしたシェヴケト暗殺を取り巻いていた親独化阻止の思惑と反統一と進歩委員会派の暗躍に対して、シェヴケトから強い影響力と緊密な関係性を形成していた統一と進歩委員会は抵抗し続けた。そしてジェマルによる反統一と進歩委員会派の弾圧にて完全に権力を握ることになり、統一と進歩委員会主導の政治体制が完成されたのであった。しかしそのジェマルの弾圧というのは、単に従来の研究の中で語られているような彼の獰猛さを表わす出来事ではなく、ジェマルが親睦を深めてきた人々に対して実行せざるを得なかったという苦渋に満ちた出来事でもあった。

しかし反統一と進歩委員会派の弾圧以降も、ジェマルは親仏家のサーリフ・パシャや駐イスタンブルフランス大使のボンパールらと交流を重ね、さらにエンヴェルの意図で海軍大臣になったことで海軍を取り巻く外交関係を知ることとなり、ジェマルの親仏的外交スタンスが完成されようとしていた。もちろんこれはエンヴェル達親独派の意見とは相反するものであり、そして「三頭政治」においてエンヴェルとジェマルを中心とした「ちぐはぐさ」を生み出したのであった。

第四章 第二次バルカン戦争

はじめに

第一次バルカン戦争後に締結されたロンドン条約は、従来のバルカン半島における問題を解決することができず、新たな禍根を生み出すこととなった。特にマケドニア問題はセルビア、ギリシャ、ブルガリアの3国がその領有を目指さんと対立を繰り返す状態にあり、解決できたと言える状態には程遠いものであった。3国間の対立は結局平行線のままの状態が続き、ロンドン条約締結から1カ月も経っていない1913年6月16日、ブルガリアはセルビアとギリシャへ侵攻を行った。第二次バルカン戦争の始まりである。

セルビア、ギリシャ、ブルガリアの3国がバルカン半島西部を主戦場に繰り広げたこの戦争は、ブルガリアと領土的問題で対立していたルーマニアとオスマン帝国にブルガリアから領地を獲得するチャンスを与え、この二国の電撃参戦を招くこととなった。第一次バルカン戦争でオスマン帝国軍を蹂躪したブルガリア軍も、セルビア、ギリシャ、ルーマニア、そしてオスマン帝国に四方から攻撃を受けるようになったことで劣勢に追い込まれ、敗色濃厚となっていったのである。

実際のところ、この第二次バルカン戦争はオスマン帝国外交をめぐる研究やこの時期の研究では取り上げられることが少ない。第二次バルカン戦争がわずか5ヶ月ほどで終結した短期決戦であったこともあって、第二次バルカン戦争に関する資料がごく限られたものしかないということがその主な原因である。400ページにもわたってバルカン戦争における外交関係や状況を書き記したヘルムライヒの著書でさえ、第二次バルカン戦争およびブカレスト条約についての論述はその10分の1程度しかない。

またオスマン帝国に関して言えば2カ月足らずしか戦闘に参加しておらず、また第二次バルカン戦争の講和条約であるブカレスト条約の締結にも立ち会っていないため、馬場優の著書のようにバルカン諸国のことは書かれても、オスマン帝国に関する部分はわずか数行だけの記述で片づけられてしまうことが多い。

しかし実際は第二次バルカン戦争は第一次世界大戦以前にバルカン半島で発生した最後の大規模な戦闘であり、バルカン半島におけるバルカン諸国と列強の思惑を確定させる戦争であった。事実ロンドン条約やブカレスト条約で消化できなかった諸問題は、オーストリア＝ハンガリー皇太子・フランツ・フェルディナント(Franz Ferdinand Karl Ludwig Josef von Habsburg-Lothringen, Erzherzog von Österreich-Este, 1863年-1914年)が暗殺されたサラエヴォ事件に集約され、第一次世界大戦を引き起こした。オスマン帝国にとっても、エディルネ奪還の絶好の機会となった第二次バルカン戦争は第一次世界大戦で三国同盟陣営に入って参戦する布石となる出来事であり、また「三頭政治」を行うエンヴェル達も自身の外交姿勢を具現化すべく動き始めている時代でもある。言うなれば、第二次バルカン戦争はオスマン帝国にとっても第一次世界大戦の前哨戦となった戦争であった。

本章では、第二次バルカン戦争勃発以降のオスマン帝国外交および周辺国の外交を取り上げながら、最高権力者の仲間入りをしたエンヴェル達が第二次バルカン戦争のなかでどのような行動をし、そして自身の外交姿勢を具現化しようと画策したのかを検証する。

第一節 東の間の平和

(1) バルカン同盟内の対立と反ブルガリア同盟の構築

第二次バルカン戦争を見ていくにあたって、まずはロンドン条約締結後のバルカン諸国、とりわけブルガリアと他のバルカン諸国の関係を確認しなければならない。第三章第二節(1)でもみたように、ブルガリアはオスマン帝国のマケドニアにおける優位性を崩すために、第一次バルカン戦争以前のスタンボロフ時代からマケドニアに住むブルガリア人たちのブルガリア＝ナショナリズムを刺激し、さらにそこへ親ブルガリア的な内部マケドニア革命組織の過激な活動が重なったことで、マケドニア問題の行く末はブルガリアが握っていたと言っても過言ではない状態だった。それ故、領有について主張していたセルビアやギリシャとしては、これ以上ブルガリアがマケドニア問題で好き勝手にやっている状態を残しておくわけにはいかなかった。特にこのことに危機感を覚えたのがセルビアであった。

そもそもセルビア側の20世紀初頭のマケドニアをめぐる外交戦略の主要ポイントは、マケドニア問題でスラヴ系民族同士が対立することではなく、スラヴ系民族が一致団結してオスマンのくびきからマケドニアを解放させることにあった。セルビア側の見解では同じスラヴであるはずのセルビアとブルガリアは「同胞の精神(*spirit of brotherhood*)」を有しているはずであり、両国の袂を分けた原因こそマケドニア問題であるとしていたのである。²⁶³これを反映してか、当時のセルビア首相であるパシッチもブルガリアとの軍事的協力を望んでおり、マケドニアにおける両国の主張を対等な形で行うことを考えていた。しかしそのセルビア側の考えをブルガリアが納得することはなかった。ブルガリア国内ではサン・ステファノ条約によってマケドニア全土が一度ブルガリアの領土になって以降、マケドニア問題はあくまでブルガリアの問題として考えられており、ブルガリアとしてはセルビアがマケドニア問題で介入してくること自体不満の種となっていたのである。こうしてマケドニアをめぐる両国の関係は悪化の一途をたどり、さらに青年トルコ革命に乗じてブルガリアが王国として独立宣言を出したこととオーストリア＝ハンガリーがボスニア・ヘルツェゴビナを併合したことがその関係をより複雑なものにした。²⁶⁴

そんな状況の中で舞い込んできたのがロシア主導のバルカン同盟の構想であった。1909年9月以降に駐ベオグラードロシア大使に就任したニコライ・ガートヴィグ(*Nikolay Genrikhovich Gartvig*, 1857年-1914年)のもとでさらに親露化を強めたセルビアは、ブルガリア国王・フェルディナンドが親露化し²⁶⁵、さらにブルガリアの独立宣言直後からロシア外相・イズヴォリスキーの手筈でロシア・ブルガリア関係が急速に構築されていく状況の中でブルガリアがオスマン帝国への対抗を行おうとしていることを感じ取り、パシッチ政権は再度ブルガリアとの関係の構築を図った。²⁶⁶セルビアがこのように動いたのは、上記のセルビア政府側のマケドニアにおける外交戦略と、ロシア大使・ガートヴィグが掲げ、そして19世紀以降のスラヴ系国家のなかでも流布していた汎スラヴ主義(*Pan-Slavism*)が合致し

²⁶³ Helmrich, E. C. (1938) 10-11 頁

²⁶⁴ 同書 11 頁

²⁶⁵ 本稿 83-84 頁

²⁶⁶ Helmrich, E. C. (1938) 21 頁,

たためであり、共通の友好国であるロシアを媒体にしてブルガリアとの関係づくりを推進する絶好の機会でもあったからだった。ロシアの協力を得て、セルビアとブルガリアは1912年3月に同盟を締結した。

このセルビアとブルガリアの同盟には、両国がマケドニアをめぐる特に対立していたということを踏まえ、いくつかの条項を盛り込んだ秘密議定書および軍事協定を条約とともに締結している。²⁶⁷特に注目すべきは、秘密議定書の第二条に盛り込まれた「領土分割」に関する規定である。この規定によれば、オスマン帝国との争いでその領地を占領することになった場合、その占領地はセルビアとブルガリアが共同で管理し、オスマンとの間に講和条約が締結された後になって占領地の分割を決めるというものであった。その際分割の基準となったのがバルカン半島内の山脈(半島中部のロドプ山脈・半島中西部のシャール山脈)や川(半島中部のストゥルマ川)、そして各国の国境であった²⁶⁸が、ここで少し問題が生じている。この基準に則して分割を行ってみると、この基準から漏れる領域も出てくる。マケドニア最大の都市・ユスキュプ(Üsküp, 現マケドニア共和国領・スコピエ)を含めるマケドニア北東部の広大な土地である。第四条には両国間で食い違いが発生した場合にはロシアの決定に従うという条項を設けてはある²⁶⁹ものの、こうして利害対立のあるところの地域の分割を決定する条項を設けなかったのは、同盟を組むうえでの阻害要因を取り除いておいたというメリットにすることもできるし、逆に戦争後に解決できると考えてその地域の分割問題を先延ばしにしようとしただけというデメリットを秘めるものでもあった。またセルビアについて問題となったのが、前章でも書いたアドリア海をめぐる問題であった。アドリア海への進出を目指すセルビアに、イタリアとオーストリア＝ハンガリーの2つの大国が反対の意を示し、さらにアルバニアをめぐるギリシャとも対立していた。この問題と関わってくるのがエーゲ海の海灣都市・セラーニクの領有問題である。これについては後で書くが、この件についてもセルビア・ブルガリア間では何ら特別な条項が盛り込まれることはなかった。結局そのデメリットのツケとして現れたのが第一次バルカン戦争中およびロンドン条約後の両国の対立であった。セルビア・ブルガリア間の同盟に存在した問題と似たような問題が、ブルガリアとギリシャの防衛同盟ならびに軍事協定にも存在していた。

1912年5月に防衛同盟を、そして同年10月に軍事協定を締結したブルガリアとギリシャもまたマケドニアをめぐる対立を繰り返していた国であるが、先にも書いたようにこの両国に関して問題となったのが、セラーニクの領有問題であった。セラーニクについてはセルビアとブルガリアの同盟でもその領有を認め合うような条項が盛り込まれることはなく、セルビア・ブルガリア間では半ば「暗黙の了解」を取る形となっていた。エーゲ海沿岸の都市の中でも屈指の大都市であったセラーニクもまた、サン・ステファノ条約ではブルガリア領となっていたし、何よりもお互いがほしがっている都市・領地について興味を持ち合わなかったからである。しかしそれに待ったをかけたのが、「メガリ・イデア」を推進していたギリシャであった。しかしブルガリア・ギリシャ間の同盟の内容を見ると、オスマ

²⁶⁷ 馬場優(2006) 175-176 頁

²⁶⁸ 同書 175 頁

²⁶⁹ 同書 176 頁

ン帝国から攻撃を受けた際のブルガリア・ギリシャの合同軍事作戦などのことは細かく書いてはいるものの、やはりマケドニア・セラーニクの領土に関する条項は設けられることはなかった。²⁷⁰「防衛」という観点に同盟の主旨を置いたこともあり、ブルガリアとギリシャそれぞれがオスマン帝国領を占領した場合のことはその時になって話し合われる状態になっていたのである。しかしそんなシチュエーションは思った以上に早くやってきた。

第一次バルカン戦争勃発後の1912年11月8日。ギリシャ軍はブルガリアと問題になっていたセラーニクを一足早く占領することに成功した。「一足早く」といっても、ブルガリアもまたセラーニクを確保しようと軍を進めており、ブルガリア軍がセラーニクに到着したのはギリシャ軍が占領を完了させた日の翌日であった。こうしてセラーニクをめぐる対立していた両者がその争いの原因であった地で居合わせるという事態になったが、ここでうまく立ち回ったのがギリシャ首相のヴェニゼロスであった。ヴェニゼロスはセラーニクを占領する前後に、ブルガリア・ギリシャ間の同盟で触れられることのなかった両国の占領地分割および国境の策定についての打診を行った。²⁷¹その際ヴェニゼロスは、ほぼ同時に入城した両軍のうち、一日早く入城したギリシャ軍の優先性を述べた上で、ブルガリア軍を「客人」として扱うことで共同管理することを行った。また国境線および占領地分割についても、ヴェニゼロスはあくまでバルカン半島における勢力均衡を考慮に入れた策定を行わなければならないとし、自然の地形に基づく国境線の策定を主張した。

しかしギリシャ側の要求が自己の不利益となると考えたブルガリアはこの提案を拒否した。そればかりか、ブルガリアはこれ以降ギリシャやセルビアとは常に対立し続ける状態となった。ギリシャが暫定的に要求してきたマケドニアの領土分割の提案もブルガリアは拒否し、一方でアドリア海への進出について大国から反対の意思を示されて切羽詰まっていたセルビアからブルガリアとの同盟締結時に取り決めを行っていないマケドニアについての提案が出されると、イズヴォリスキーの後任のロシア外相・セルゲイ・サゾノフ(Sergey Dmitrievich Sazonov, 1860年-1927年)が不適切と判断して反対したことに同調して提案に反対した。²⁷²もちろんブルガリアがセルビアやギリシャからの提案を拒否したのは、ブルガリア側にマケドニアを独占しようとする野心が存在していたが、当時のブルガリア政権が連立政権樹立によって足並みを揃えることができない状態であったという理由もある。

当時のブルガリア政権における実力者は2人いた。財務大臣としてブルガリア経済の発展・活性化に影響を与え続けた現職の首相・イワン・ゲショフ(Ivan Evstratiev Gashov, 1849年-1924年)と、マケドニア問題における取り組みで強い指導力を発揮したりベラル派の政治家・ストヤン・ダネフ(Stoyan Petrov Danev, 1858年-1949年)であった。この時のブルガリアは連立政権が立て続けに組まれている時代にあり、ゲショフとダネフはブルガリア議会における実力者として連立政権内で事実上権力を握っている状態にいた。²⁷³今回のマケドニアの分割の提案について、そのゲショフとダネフの2人の意見は異なるものとなってい

²⁷⁰ 同書 177 頁

²⁷¹ 同書 178-179 頁

²⁷² 同書 178 頁

²⁷³ R.J.クランプトン.(1997) 180 頁

た。ゲショフは、ある程度の譲歩が見られるギリシャおよびセルビアの提案を両国の同意であるとして受諾するつもりであったが、これにダネフは反対した。ダネフの意見は「大ブルガリア主義」に近いものがあり²⁷⁴、ブルガリアはセラニクなども含めたマケドニア全土を手に入れるべきであると考えた。このダネフの考えには、ブルガリア国王・フェルディナントも軍部も賛同しており、彼らの意見はもはや政権担当者にとっては無視することができないものとなっていた。ゲショフは連立政権を維持するためにダネフの考えも尊重せねばならず、結局ゲショフはセルビアやギリシャの提案を断らざるを得なかった。こうしたゲショフ・ダネフの「二巨頭体制」は、ゲショフの連立政権がロシアからの支持が得られなくなり、バルカン諸国との関係が急速に悪化したことを受けて崩壊するまで²⁷⁵続き、その間他のバルカン諸国の提案を拒否し続けることとなった。とはいえセルビアとギリシャにブルガリア政権が抱えていた事情が知られるわけでもなく、こうしたブルガリアの否定的対応にセルビアやギリシャはともにブルガリアとの関係を悪化させ、また両国の関係の強化に重点を置いた外交を行うようになった。さらにそこにドブロジャ地方の問題でなかなかブルガリアとの関係が改善できないルーマニアも関わることで、3国は第一次バルカン戦争時のオスマン帝国にしたように対ブルガリア包囲網を形成させるようになっていったのである。²⁷⁶

こうした3国の動きのなかで重要なポジションにいたのがロシアであり、そしてオーストリア＝ハンガリーであった。オーストリア＝ハンガリー外相・ベルヒトルトはルーマニアとブルガリアの関係改善に尽力していた。オーストリア＝ハンガリーからすれば、ともにドイツ系の王室である両国は「同胞」といえる存在であり、セルビアおよびロシアとの戦争を前提としたバルカン半島における勢力均衡の上では重要なパートナーの候補であった。またブルガリアを支持しないことは、ブルガリアへのロシアの影響力の拡大を招くことにつながり、オーストリア＝ハンガリーおよび同盟国・ドイツに何の利益ももたらさないと考えられていたのである。²⁷⁷もちろん親独政権であるルーマニアにも気を配る必要はあり、オーストリア＝ハンガリーがブルガリアを三国同盟陣営に引き込むことができればルーマニアも自動的に三国同盟陣営に参入すると考えていた²⁷⁸以上、ルーマニアとブルガリア双方が満足する結論をオーストリア＝ハンガリー側から出せなければオーストリア＝ハンガリーの目論見が失敗してしまうという綱渡りのような外交の駆け引きをベルヒトルトは行わざるを得なかったのだった。

一方のロシアは、各バルカン諸国に影響を与え続けるとともに、それらの調停を行う役割も担った。例えばロシア外相・サゾノフの発案でブルガリアとセルビアが首脳会談を開き²⁷⁹、両国の関係について話し合われる機会が設けられた。またこのセルビアとブルガリアに関して言えば、両国間の食い違いが生じた問題における最終決定権をロシアが握っているという

²⁷⁴ 同書 170-171 頁

²⁷⁵ 馬場優(2006) 190 頁

²⁷⁶ Helmrich, E. C. (1938) 363-365 頁

²⁷⁷ 馬場優(2006) 182 頁

²⁷⁸ 同書 182 頁

²⁷⁹ 同書 191 頁

条項²⁸⁰はまだ効力が残っていた。ブルガリアとセルビア間で首脳会談が開かれた後、ゲシヨフはブルガリア公使を通じてサゾノフに、セルビアはブルガリアを攻撃したいと考えているルーマニアとオスマン帝国に唆されているということ、そしてセルビア・ブルガリア両国内の対立を解決させることができるのはロシアの断固とした行動だけだと述べている。²⁸¹

しかしそのロシアでも、セルビアとギリシャの接近に歯止めをかけることはできなかった。予てからのブルガリアとの関係悪化をうけ、セルビアとギリシャは対ブルガリア同盟を締結する決意をし、1913年6月1日に正式にセルビア・ギリシャ同盟が締結された。サゾノフは全スラヴ系民族に対して影響力を持つ存在であったロシア皇帝・ニコライ2世にバルカン諸国内の対立を解決する方法を見出したが、結局ニコライ2世の影響力でもその状況を変えることはできなかった。

こうしてマケドニア問題をめぐる対立の末、セルビアとギリシャは対ブルガリア同盟を締結させたが、このバルカン戦争期のロシアとバルカン諸国の外交政策および外交関係の研究者であるアンドリュー・ロッソス(Andrew Rossos, 1941年-)によれば、第一次バルカン戦争時に形成されたバルカン同盟とは全く異なる意図で作られたこのセルビア・ギリシャ間の同盟は、ブルガリア・セルビア間で締結された同盟内で確認された領土分割の方法を捨てることを意味し、さらに話し合うことなく一方的に主張する手法は、バルカン諸国にはもうすでに話し合いで解決させようという意志がないと説明したうえで、この同盟締結はバルカン同盟の解消を決定づけるものであるとの述べた。²⁸²それは同時にバルカン半島および自国の安定を目指した交渉が事実上破綻したことを意味し、バルカン半島が再び戦禍を被ることが確定してしまった瞬間にもなったのである。

(2) オスマン帝国陸軍の改革をめぐる独土・露土関係

第一次バルカン戦争で「バルカン同盟」を結成した国々が、今度は敵同士となって戦う環境が形成されていく中で、第一次バルカン戦争の敗戦国・オスマン帝国は新たな一步を踏み出そうとしていた。その中でエンヴェルは、オスマン帝国を取り巻く複雑な関係のなかで祖国が他国からの干渉を防ぐべく、陸軍大臣かドイツ軍人によるオスマン帝国陸軍のさらなる強化・改革を目指そうと考えていた。²⁸³

しかし本稿の中で何度も繰り返し論述しているように、ドイツによるオスマン帝国陸軍の改革およびドイツ化はすでに始まっている。アブデュルハミト2世の時の陸軍増強への意志²⁸⁴から始まり、それは親独派軍人であるシェヴケトの時代にも継続して行われていた。²⁸⁵しかしそれでもオスマン帝国陸軍はイタリアとの戦争ならびに第一次バルカン戦争ではそれぞれ完敗し、軍の体制を改善させる必要性が明確に提示されていたのであった。近代オスマ

²⁸⁰ 本稿 98 頁

²⁸¹ 馬場優(2006) 191 頁

²⁸² Rossos, A. (1981) 179 頁

²⁸³ 本稿 75 頁

²⁸⁴ 同書 79 頁

²⁸⁵ 同書 66 頁

ン軍事史の研究者であり、自身も従軍経験者であるエドワード・エリクソン(Edward J. Erickson, 1950 年-)の研究によれば、第一次バルカン戦争直前までで14の軍団と39の師団、4の予備師団を有していたオスマン帝国陸軍は、第一次バルカン戦争中に3の軍団や20の師団など全体の半分近くの戦力を喪失し、しかもそのほとんどを要塞・戦線の防衛に費やすなど、とても奪われた古都・エディルネを奪還できるような戦力を持っていなかったという。²⁸⁶エディルネを奪還し、そして他国からオスマン帝国を守るためには軍備の増強とその改革が急務であったのだ。エンヴェルが軍の改革を熱望していたちょうどその時、軍部内から出てきた話がドイツから新たに軍事顧問団を招くこと、そしてそのドイツ軍事顧問団から学んだことを憲兵隊(Jandarma)による国内の治安維持にも生かすことであった。

この軍事顧問団の招聘については、実はエンヴェルがそのように考えた以前からすでに出ていた話であった。1913年1月。第一次バルカン戦争でのオスマン帝国の敗北がほぼ確定した状況の中で、今までのオスマン帝国陸軍のことを問い直す動きが起こりはじめ、そして「大宰相府襲撃」の末にシェヴケトが大宰相と陸軍大臣を兼任するようになるとこの問題は活発に議論されるようになった。確かにゴルツら軍事顧問団によってオスマン帝国陸軍は装備・軍事体制などがドイツ化され、軍隊の質の面では屈指の強さを誇る軍を持つようになった。しかしこのゴルツ達の指導法には、一つ問題となることがあった。ゴルツたちの指導方法はもっぱら軍事理論や思想を重んじる指導であり、ゴルツらがオスマン帝国にやってきてからはいわゆる軍事演習となる実践的な手法は一度も行うことができなかったのである。²⁸⁷そもそもゴルツは軍事学者の大家であるクラウゼヴィッツ(Carl Phillip Gottlieb von Clausewitz, 1780 年-1831 年)らと同じく理論を専門とする軍人であり、「武将」というより「軍師・参謀」に近い人物であった。彼は将官・士官の育成にはピッタリであったが、実戦的な増強は不得手であり、オスマン帝国陸軍は実戦的な効果を得ることができなかった。このことは実はオスマン帝国海軍にも当てはまる。海軍の増強を担当したイギリス軍事顧問団のアーサー・リンパスもまた、ゴルツのように技術を教えるのではなく、あくまで理論を指導したうえで海軍将校のサポートを行う手法を取っていたのだ。²⁸⁸

さらに問題となったのが、オスマン帝国軍参謀総長のアフメト・イゼット・パシャ(Ahmet İzzet Paşa, 1864 年-1937 年)の対応のミスであった。もともとシェヴケトとは仲の良かったイゼットは、1911年からの一年間イエメンで発生したヤヒヤ＝ムハンマド＝ハミード＝アッディーンの反乱の鎮圧に赴いていたが²⁸⁹、バルカン戦争が勃発すると陸軍大臣であったシェヴケトと共に行動し、そしてオスマン帝国軍を指揮していた。²⁹⁰バルカン以前に軍事システムの改革を主張したのも参謀総長のイゼットその人であり、シェヴケトはイゼットからのリクエストを叶えるべく推進させていたのであった。イゼットもまたシェヴケトと同じく非統一と進歩委員会メンバーであったが、親独的という点では統一と進歩委員会に同調

²⁸⁶ Erickson, E. J. (2001) 21・24 頁

²⁸⁷ 藤由順子 (2003) 175 頁

²⁸⁸ Erickson, E. J. (2001) 30 頁

²⁸⁹ Akşin, S. (1987) 186 頁

²⁹⁰ 同書 229-230 頁

できる立場にいた。しかし彼はもとより戦場の中でその経験を積み重ねてきた「たたき上げ」の軍人であり、ゴルツとは異なるタイプといえる軍人であった。そのため、ゴルツとの調整がうまくいかず、イゼット曰く「適切ではない」討議が重ねられることになり、計画の実行が遅くなってしまったとともに、内容そのものも変質してしまったのである。²⁹¹こうした失敗に加え、度重なる戦争での敗北は軍首脳部に実戦的な効果・指導の必要性を思い知らせることとなり、シェヴケトとイゼットは次には実戦経験豊富な軍人を呼ぶべく動きだしたのであった。その候補となっていたのが、後に第一次世界大戦中でもオスマン帝国軍司令官として活躍し、その功績から「東のヒンデンブルグ」と称された軍人・リーマン・フォン・ザンデルス(Otto Liman von Sanders, 1855 年-1929 年)であった。

ザンデルスは現在のポーランドで生まれたのち、弱冠 19 歳から軍に入隊しており、長年にわたって騎兵として軍に携わってきていた。1900 年からは騎兵部隊長も任ずるようになり、常に戦場の最前線にいた。彼はどちらかといえば、ゴルツよりもイゼットに近いタイプの軍人であったと言える。そんな彼の指導方針もまた実戦的な技術・戦術を中心としたものであり、オスマン帝国にとっては必要なものばかりであった。彼のこの指導方針は、理論派として名をはせていたゴルツやリンパスといった面々と対比されることが多い。²⁹²このザンデルスの在り方をオスマン帝国陸軍に取り入れようと、シェヴケトらは駐イスタンブルドイツ大使・ヴァンゲンハイム(Hans Freiherr von Wangenheim, 1859 年-1915 年)を通じて度々話し合い続けた。

この動きはシェヴケトが 1913 年 6 月に暗殺された以降も、後任の大宰相・サイート・ハリム・パシャの政権で陸軍大臣に就任したイゼットを中心に計画され続けた。また憲兵隊の増強・改革の方も、内務大臣となったタラートが中心となって計画が行われ、憲兵隊は国内の治安維持を行う上で欠かすことのできない存在となった。こうしたオスマン帝国の一連の動きをもっとも歓迎したのが、他ならぬドイツであった。

オスマン帝国陸軍最大の後援者・ドイツにとって、このオスマン帝国の軍事的改革は 3 つの利点がドイツにもたらされることを意味していた。まず一つ目は、18 世紀以降のヨーロッパでオスマン帝国ならびにバルカン半島の件で騒がれた「東方問題(Eastern Question)」における最大の懸念事項・ダーダネルス・ボスポラス両海峡がオスマン帝国によって保全される可能性が出たことである。ボスポラス・ダーダネルス両海峡は、黒海からエーゲ海、そして地中海へと通ずる唯一のルートであり、オスマン帝国にとっては帝都・イスタンブルへも通ずるアキレス腱そのものであった。しかしそれは黒海沿岸地域を領有するロシアにとっても同様で、黒海艦隊を駆使して地中海へ進出するうえでは無視できない地域であった。しかしドイツ皇帝・ヴィルヘルム 2 世は、1913 年 6 月にイギリス国王・ジョージ 5 世とロシア皇帝・ニコライ 2 世と会談を行った際、ニコライ 2 世から次のような言質をとった。

²⁹¹ 藤由順子 (2003) 175 頁

²⁹² Erickson, E. J. (2001) 30 頁

イスタンブルはオスマン帝国にとどまる。というのもオスマン政府はダーダネルスの最善の番人であるからだ。²⁹³

ダーダネルスの権益を絶対に保持したいと考えているはずのロシアの最高権力者が以上のことを述べたことを、ヴィルヘルムはロシアから賛同を得たと捉え、オスマン帝国陸軍の改革に協力することを考えた。さらには同盟国であるオーストリア＝ハンガリーにその旨を伝えることで国際的な承認を得ようとしたのであった。ただオーストリア＝ハンガリー側でも、駐イスタンブル武官のヨーゼフ・ポミアンコフスキー(Josef Pomiankowski)が中心となってオスマン帝国陸軍の改革をドイツ側に示唆しており、オスマン帝国を三国同盟陣営に最終的に引き込む上ではゴルツら理論派軍人ではない、より実戦的な軍人を軍事顧問団として派遣するべきであると考えている。²⁹⁴

しかし実際はこの問題に反発したものは少なくなく、ドイツへのさらなる軍事顧問団の派遣に疑念を持った者は国際社会の中はもちろん、オスマン帝国内にも存在していた。国際社会において反発したのは主にロシアであり、そしてオスマン帝国内ではドイツとの連携に疑問を持つ反独派のオスマン帝国軍の将校たち²⁹⁵であった。

ロシアからすれば、皇帝・ニコライ 2 世がヴィルヘルム 2 世に上記のようなことを述べたことかもしれないが、オスマン帝国がドイツなど三国同盟陣営に参入し、そしてドイツによって陸軍が増強されることはあまりにリスクの大きいことであり、ボスポラス・ダーダネルス両海峡を封鎖されることで黒海艦隊を円滑に運用できなくなる危険性もあった。さらに陸軍の観点から考えれば、三国協商側のメンバーであるロシアにとっての仮想敵国であるドイツやオーストリア＝ハンガリーに加えてオスマン帝国が参戦することになれば、ロシアが戦争中に敵国と対峙しなければならない戦線が北はポーランドから南はカフカスにまで伸び、その分自国の戦力を分散させる必要があった。非常に広大な領地を有するロシアにとって、戦線の拡大の危険性は国家の存亡をも脅かしかねないリスクと直結しており、各地に配備されている部隊を結集させる間に戦線を突破されることは何としても防がなければならない事態であった。こうした問題がある以上、オスマン帝国の親独化およびドイツ化による軍備増強をロシアは徹底的に批判し続けた。しかしロシアに内在する問題やそれをもとにロシアが発するようになったオスマン帝国への警戒心を、自身の理想と結び付けて戦略に用いようとした者がいた。その人物こそがエンヴェルだったのだが、この話は次節で説明する。

オスマン帝国内にいた反独派の将校のほとんどは、フランスで軍の教育を受けた者であった。そのなかには親仏家であるジェマルも含まれている。彼は自身の回想録の中で、確かにオスマン帝国はドイツの影響を受けて精強にはなったが、だからと言ってそれをそのまま外交の道具にする意図を認めることはできないと語っている。²⁹⁶反独派の将校たちも似たよ

²⁹³ 藤由順子. (2003) 174 頁

²⁹⁴ 同書 176 頁

²⁹⁵ 同書 177 頁

²⁹⁶ Cemal, B. (1959) 78 頁

うなことを考えており、あくまでフランスとの関係を重んじ続けた。²⁹⁷実際の現場の中でも、より高い俸給と勲位を与えられていたドイツ人士官がオスマン帝国軍人たちから疎まれるという環境が存在しており、その環境が反独派の反感をより強いものにしたのだった。²⁹⁸

以上のような反発やロシアの警戒感は存在したが、結局ドイツ軍事顧問団の招聘は行われることとなり、バルカン戦争後の1913年12月14日に、ザンデルス以下40名余りの将校が軍事顧問団として派遣されることとなった。このザンデルスの来訪はオスマンとドイツの関係を決定させる出来事となり、そしてオスマン＝ドイツ軍事同盟が締結される布石にもなった。

第二節 戦火は再び

(1) ブルガリアの「兄弟殺し」の功罪とエンヴェルの戦略

オスマン帝国が新たな軍備増強を進めようとしていた中で、バルカン半島情勢はもう限界に近付いていた。セルビアとギリシャが軍事同盟を締結したことは、もはやマケドニア問題に関しては議論で解決させることなど不可能であることを表わしており、三国間で戦争が新たに始まるのがほぼ確定となった。ブルガリア国内では、あくまで慎重に対処したいと考えていたゲショフ政権は、ライバルであるダネフやブルガリア国王のフェルディナンドの好戦的な主張を押さえることができず、ついにブルガリアは1913年6月16日にマケドニアに駐屯するセルビア・ギリシャ両軍へ攻撃を行い、これにセルビア・ギリシャ両国は宣戦布告で応じた。第二次バルカン戦争の始まりである。

セルビア・ギリシャから「背信行為」と告発されたこのブルガリアのセルビア・ギリシャへの攻撃に対する人々の評価は非常に厳しいものであった。ブルガリア国内でも国王・フェルディナンド1世の行為を多くの歴史家が批判し、この攻撃が正真正銘の攻撃であったのか、もしくはセルビア・ギリシャに対しての単なる示威行為の延長だったのかをめぐって、激しい論争の的となった。²⁹⁹トロツキーは第二次バルカン戦争の勃発からしばらく日数が経ったある日、ブルガリアの議員であり鉱物学者であるイヴァン・キリーロヴィッチと第二次バルカン戦争をめぐって対話を行ったというルポがある。キリーロヴィッチはもともと穏健的な立場の人間であったのだが、この戦争に関しては次のようなやり取りを交わした。

- ・(キリーロヴィッチ)「恥ですよ。解放戦争[第一次バルカン戦争]を兄弟殺しの戦争[第二次バルカン戦争]にするなんて。達成したものがパァになり、スラヴの事業の成功によってもたらされた同情も失われ、希望や計画がだめになったんです。恥だ、大恥だ。」
- ・(トロツキー)「誰にとって恥なんですか。」
- ・(キリーロヴィッチ)「もちろん同盟国にとってです。セルビア人、ブルガリア人、ギリシャ人…にとってです。」

²⁹⁷ Akşin, S (1987) 264-267 頁

²⁹⁸ 藤由順子(2003) 177 頁

²⁹⁹ ジョルジュ・カステラン(1994) 251 頁

- ・(トロツキー)「失礼ですが、セルビア人、ブルガリア人、ギリシャ人にとってそれは恥ではなく、新しい、非常につらい不幸と言うべきものです。恥というのはバルカン諸民族を支配している者たちに当てはまることで、そのかなりの部分はロシアの個々の政治家たちについても言えることなのです。彼らは正当な、あるいは汚い手段によって、ロシア社会の中でバルカンの運命の支配者たちの計画や意向への信頼を強めようとしたんですから。私が知る限りでも、あなた自身、イヴァン・キリーロヴィッチ…」
- ・(キリーロヴィッチ)「ちょっと待ってください。あなたも反対できないと思いますが、問題になっている戦争は、解放的な性格を持った戦争だったのです。あなたにとってすべては単純です。永久にいかなる状況にあっても、戦争一般を否定しているんですから。バルカンの戦争もパタゴニアの戦争も、攻撃的戦争も防御的戦争も、解放戦争も侵略戦争もあなたは区別しません。だが、われわれはまさにこのバルカン戦争の現実的な歴史的内容を検討することが必要だと考えているのです。そこではトルコ権力からのバルカン諸民族の解放が問題にあったという事実を目をつぶることはできません。そのような戦争に共感もできず、支持もしないというのは、端的に言えば、直接的にはないにせよ、間接的にトルコによるスラヴ諸民族支配を支持することになるのです。教条主義的なあなたでも何度かはこういう意見を持たれたはずですよ。」
- ・(トロツキー)「で、今はかつての同盟国は誰を解放するのですが。」
- ・(キリーロヴィッチ)「だからもう言ったでしょう、恥だって。」³⁰⁰

「オスマン帝国の打破」という大義名分が存在していた第一次バルカン戦争とは異なり、キリーロヴィッチが言うところの「兄弟殺し」・「同胞殺し」という印象を第二次バルカン戦争はブルガリア人たちに与えた。それは同時に、この戦争において国王・フェルディナンド1世やダネフなどナショナリズムを唱える人々の考えと一般の人々の間の考えに深い溝が存在しているということを物語るものでもあった。

それにしても、キリーロヴィッチの用いたこの「兄弟」・「同胞」という表現はかなり深い意味を持った言葉である。バルカン半島に散在するスラヴ系民族の近代におけるナショナリズムの勃興とその歴史を如実に表現したものである一方で、かつてオスマン帝国がバルカン半島を支配する際に用いた手段であり、そして青年トルコ革命時にタラートが声高に主張した「オスマン主義」の中でも使われていた表現³⁰¹でもあったからだ。

オスマン帝国がまだバルカン半島で覇を唱えていた時代では、人間集団の区別の基礎を宗教の違いに求めたミッレト制でバルカン諸民族を支配したが、それでも各宗教の信仰や自治はイスラームの優位のもとで、ムスリムたちの信仰活動を阻害しないレベルで認められていた。³⁰²その社会システムの中で人々は生活を自由に謳歌し、昨今のオスマン帝国史の研究

³⁰⁰ レフ・トロツキー. (1913 年). “Balkanski Obshenie”. *Kievskaya Mysl* (181) in 『バルカン戦争』 (1926 年), (清水昭雄, Trans.) 418-419 頁 なお、会話部分はすべて原文通りに書かれている。

³⁰¹ 本稿 10 頁

³⁰² 佐原徹哉. (2003) 30-31 頁

者たちがこの時代のことを「オスマンの平和(Pax Ottomana)」という表現を用いるほど、バルカン半島はオスマン帝国の統治のもとで安寧の時代を迎えていた。

しかしそれが19世紀にはいってナショナリズムが流布し始めると、バルカン諸民族はそれぞれ自分たちの「民族的」ルーツやアイデンティティを求め始めた。その結果、ギリシャの「メガリ・イデア」のような強力なナショナリズムをバルカン諸国が持つようになり、20世紀初頭になって問題となったようなナショナリズムの衝突をもたらしたのだが、一方で19世紀のバルカン諸「民族語」の形成も行われ、各民族は民族「固有」の言語を模索した³⁰³と共に、同じスラヴ系言語との触れ合いの中で各民族は「スラヴ」という共通の概念を共有する「同胞意識」も育て上げたのである。

ただそれは支配者となったオスマン帝国の観点からも似たようなことが言える。オスマン帝国の統治の中で確かにミッレト制は用いられ、宗教の違いによってそれぞれの集団を規定することを行った。しかしそれを除けばオスマン帝国の臣民たちはタラートが主張したように民族の違いは関係なく、ただ「オスマン帝国に住む者」という一つの観念に則って団結してきたのである。オスマン帝国が「多民族国家」でありながら「世界帝国」としてその勢力を長年保持できたのはこのことが大きかった。青年トルコ革命で統一と進歩委員会が主張していたところもちょうどこの「オスマン主義」による団結だった。しかし統一と進歩委員会の当初の理想は、バルカン諸国内で起こってきた強力なナショナリズムの勃興のなかでその実現の可能性を失っていった。

そして第一次バルカン戦争と第二次バルカン戦争は、結果的にこの双方にとっての「兄弟」・「同胞」という観念を完全に打ち崩すものとなった。第一次バルカン戦争は「オスマンの支配からの脱却」をうたうことで、オスマン帝国がミッレト制に基づいて築き上げてきた「オスマン主義」の、そして栄光ある「オスマンの平和」の歴史に終止符を打ち、そして今度は第二次バルカン戦争で19世紀以降になって築き上げられてきた「スラヴ民族」としての同胞意識の歴史に終止符を打つこととなったのである。

こうしてバルカン諸国内の同胞意識が音を立てて崩れていく状況を、エンヴェルは見逃すことはなかった。バルカン諸国内で起こり始めた争いを「何といいことだ！(Ne İyi!)」と表現した³⁰⁴エンヴェルは、すぐにでもこの争いに介入して領土奪還を図るべきだと考えた。そこで彼の考え出した戦略とは、複雑になっていくバルカン情勢と先にも書いたロシアの警戒心を巧みに利用するものであった。具体的に言えば、第一次バルカン戦争では実現できなかった「ルーマニアとの結託」と「ロシアへの示威行為としての戦闘」であった。

まずルーマニアとの結託については、大筋第一次バルカン戦争時のものと変わってはいない。ドブロジャ地方をめぐるブルガリアと対立をしていたルーマニアを仲間にして攻撃を加えることであった。ブルガリアはちょうどこの頃西部でセルビアやギリシャへの攻撃を行っており、ドブロジャ地方やエディルネ方面のブルガリア軍が西部戦線へ送り込まれていったことで守備も甘くなっていたのであった。このような状況になったのには、ブルガリア国

³⁰³ 同書 235-247 頁

³⁰⁴ Hanioglu, M. Ş. (1989). 245 頁 7 Haziran 1913

王・フェルディナンドが対立関係にあるルーマニアの存在を捨て置いてセルビア・ギリシャへの攻撃に集中してしまった³⁰⁵ということも重なっており、ルーマニアとオスマン帝国双方が望みの領地を獲得するには絶好の機会であった。

さらにルーマニアが参戦してくれることは、双方が隣接するロシアへの圧力にもなった。先の件でロシアはオスマン帝国に警戒心を強めることになったが、それでもオスマン帝国やルーマニアへの攻撃によってそれらの反動がドイツ、オーストリア＝ハンガリーとの決戦という形で跳ね返ってくることを懸念していた。特に今回オスマン帝国は第一次バルカン戦争のように周囲を敵に囲まれた四面楚歌の状態に陥ってはならず、物量に押しつぶれ敗戦した前回とは状況が全く異なっていたのである。しかもこの時オスマン帝国軍は東のエルズルムにも軍を結集しており、いざとなればカフカスへ侵攻して威圧することも可能であった。エンヴェルはこうしたロシアの状況を利用し、ロシアに威圧を行いながらロシアからの攻撃が無いうちにブルガリアから奪われた領地を奪還することを考えていたのである。

実はこのエンヴェルの考えだした戦略は、第一次世界大戦でも実行されている。カフカス戦線でエンヴェル自らが陣頭指揮を行った「サルカムシュ作戦」と呼ばれた一連の軍事行動である。ここでもエンヴェルはロシアがドイツとオーストリア＝ハンガリーと戦っていることを考慮して、ドイツと挟撃できるポジションを確保するべく行われた。³⁰⁶しかし改めて言わなければならないのは、このサルカムシュ作戦と第二次バルカン戦争の中で実行された戦略はその目的も異なるものであり、それを知るには後にも取り上げるエンヴェルがトルコ民族主義により影響を受けていったことを知る必要がある。

こうしてエンヴェルは「ルーマニアとの結託」と「ロシアへの示威行為としての戦闘」という2つの戦略を掲げ、エディルネなどを含む旧オスマン帝国領の奪還を目指したが、それを実行するまでにはもう少し時間がかかった。大宰相・サイート・ハリム・パシャたち政府の一部の人間が参戦に懐疑的であったからだ。

(2) ブルガリアの3つの「誤算」とオスマン帝国の電撃参戦

1913年6月16日深夜から翌日にかけて発生したブルガリア軍のセルビア・ギリシャ両軍への攻撃を行ったが、ブルガリアからすればこの攻撃そのものも第二次バルカン戦争で度々重ねる3つの「誤算」の1つであった。そもそもブルガリア軍は本気でセルビア・ギリシャへ侵攻しようと思って攻撃を仕掛けたわけではなかった。彼らが狙ったのはもっと政治的な威嚇にあった。ブルガリア政府内では、ブルガリア軍参謀総長・ミハイル・サヴォフ(Mihail Savov, 1857年-1928年)と首相に就任したダネフらの提唱により、マケドニア問題をブルガリア優勢のなかで話を進めるためにセルビア・ギリシャに攻撃を加えて圧力をかける戦略を考えたのである。しかし軍と政府はおろか、ブルガリア政府内でも意思の疎通を取

³⁰⁵ レフ・トロツキー. (1913年). “Balkanski Obshenie”. *Kievskaya Mysl* (181) in 『バルカン戦争』 (1926年), (清水昭雄, Trans.) 421頁 フェルディナンドをそのように評したのは、著者であるトロツキー自身である。

³⁰⁶ Erickson, E. J. (2001) 103頁

ることができていなかった。³⁰⁷結局中途半端な軍しか送らなかったブルガリア軍はセルビア・ギリシャの返り討ちにあい、かえって両国にブルガリアとの戦争の大義名分を与えることとなった。攻撃から2日が経った6月18日に、ブルガリアはセルビアとギリシャに対して戦闘を中止するよう求める声明を出したが、もとよりブルガリアと戦う気のあったセルビアとギリシャはこれを無視し、両国はブルガリア領へ攻め込んだのだった。ブルガリアとギリシャが共同統治していたセラーニクでも戦闘が行われたが、ごく短期間にブルガリア軍は撃破され、ギリシャ軍の執拗な追撃を受けながら撤退せざるを得なかった。この際、ブルガリアの2つ目の「誤算」を露呈することとなった。政府首脳陣が予想していた以上にブルガリア軍が第一次バルカン戦争で消耗していたことであった。

1912年10月に第一次バルカン戦争が勃発してから、セルビア、ギリシャ、ブルガリアは東西のオスマン帝国領でそれぞれオスマン帝国と対峙したが、特にブルガリアは、セルビアとギリシャが侵攻したアルバニア・マケドニア方面とは違い、エディルネなどオスマン帝国軍のバルカン方面での主力がいたトラキア地方に侵攻を行っており、その際膨大な数の兵をトラキア方面へ進撃させている。戦争そのものはオスマン帝国の圧倒的劣勢の中で進行していたが、それでもトラキアではオスマン帝国からの激しい抵抗を受け、エディルネ攻略にも約4カ月の時間を費やした。その間、ブルガリア軍のなかでは極度の疲労感と厭戦感が蔓延するようになった。この疲労感・厭戦感が完全に抜けきらないまま第二次バルカン戦争を迎えてしまったのである。³⁰⁸当然のごとく、心身ともに摩耗しきったブルガリア軍は、さほどダメージを受けてないセルビア・ギリシャ軍の攻撃にさらされることとなった。

ギリシャとの最初の大規模戦闘は、開戦直後に旧オスマン帝国領の都市・キルクス(Kilkis)でおこった会戦であった。約10万の大軍勢同士が激突したこの戦いにブルガリア軍は主力を送り込んだが、ギリシャ軍の猛攻の前に手も足も出すことができずに敗戦した。³⁰⁹さらにセルビアとは、6月30日に同じく旧オスマン帝国領のブレガルニカ(Bregalnica)にて大規模な戦闘があったが、ここでもブルガリアは大軍勢を送り込んだが敗戦し、セルビア・ギリシャ軍がブルガリア西部を着々と陥落させていったのだった。³¹⁰

ブルガリア軍が西部でセルビア・ギリシャ軍に苦戦すると、ブルガリアが抱えていた3つ目の「誤算」はより致命的なものとなった。西部に全力を注いでいたため、東部の軍が手薄になり始め、東部に位置する敵国に隙を見せてしまったことであった。まず動きだしたのが、ブルガリアの北東のドブロジャ地方で利権がぶつかっていたルーマニアであった。ルーマニア国内では、6月20日よりルーマニア国王・カロルが軍部などの圧力を受けて参戦する可能性を示していた。とはいえ、ルーマニア政府の親独的態度とは異なってルーマニア国内では奪われたトランシルヴァニアの問題もあって「反オーストリア＝ハンガリー」を標榜する国民も少なくなく、またそのオーストリア＝ハンガリーもルーマニアの参戦をめぐって論議を重ねていたのであった。オーストリア外相・ベルヒトルトは、第二次バルカン戦争ではブ

³⁰⁷ 馬場優(2006) 202 頁

³⁰⁸ 同書 202 頁

³⁰⁹ Hall, R. C. (2000) 112-117 頁

³¹⁰ 同書 112 頁

ルガリアは完敗すると読んでいる一方で、敵国であるセルビアが勝利してその勢力を拡大させることを懸念した。もしこの戦争でセルビアがマケドニアなどを獲得した場合に、次に狙ってくるのは間違いなくオーストリア＝ハンガリー領のボスニア・ヘルツェゴビナであったからだ。オーストリア＝ハンガリーとしては、セルビアが勝利して勢力を拡大させることを前提にルーマニアとの関係を築く必要があったのである。

さらにオーストリア＝ハンガリーは、ブルガリアを三国同盟陣営に引き込みたいと考えていた。ルーマニアに引き続き、ブルガリアを三国同盟陣営に引き込むことができれば、オーストリア＝ハンガリーにとってはバルカン半島における優位性を確保でき、セルビアやロシアといった国々に圧力をかけることも可能であった。しかし第二次バルカン戦争の末にブルガリアが崩壊するようなことがあってはこの構想を達成できない。そこでオーストリア＝ハンガリーは、第二次バルカン戦争に直接軍事介入するかどうかも考えたが、ドイツやイタリアなどの国々から反対され、第二次バルカン戦争後の外交をどのように展開していくのかはルーマニアの動き次第となった。そしてもう一カ国、ルーマニアの動向を気にしている国があった。オスマン帝国である。

しかし厳密に言えば、第二次バルカン戦争へ参入したいと考えていたのはエンヴェルやジェマルといった一部の軍人たちであり、サイート・ハリム・パシャといった政府の中心人物は第一次バルカン戦争での損失の回復がまだ未達成であることとロシアからの脅威を恐れて参戦することにまだ疑問を持っていた。しかも一番の主戦論者であるエンヴェルは先にも書いた戦略を軍の仲間と共有しながらも、これまでの激務がたたって体調を崩しがちになっていた。³¹¹ 1913年6月22日の手紙には、彼が病の床に臥していたことと共に、オスマン帝国のこれからを心配してか、ここ最近は全く眠ることができないということも漏らしている。³¹² それでもエンヴェルやジェマルの働きかけによって、オスマン帝国政府も少しずつ参戦へ気持ちを傾けるようになった。サイート・ハリム・パシャがある日の金曜の夜にイエニキョイ(Yeniköy)に来た時には、全ての国務大臣が結集してエディルネの奪還をどうするかということを話し合い、さらにはタラートにつき従ってオスマン・タバコ専売公社(Reji)の代表であるワイルに会い、軍の動員などへの金銭問題について話し合っている。

³¹³

エンヴェル、ジェマルらが、オスマン帝国が第二次バルカン戦争に参戦する上で問題にしたことは主に2つあった。1つ目は、オスマン帝国が参戦し、そして帝国軍がブルガリアに向けて前進する際、政治的な問題がオスマン帝国に重大な危機をもたらすかどうか、そして2つ目の問題は、軍を動員させるのに十分な資金があるかどうかという問題であった。しかしこれらの問題に関しては、タラートが金銭的な解決を考えていた。先にも述べたオスマン・タバコ専売公社の協力によって軍用資金を作り、そしてそこから賠償金も捻出して支払う方法で政治的問題も穏便に済ませようと考えたのだった。³¹⁴

³¹¹ Aydemir, Ş. S. (1976) 414 頁

³¹² Hanioglu, M. Ş. (1989) 246 頁 22 Haziran 1913

³¹³ Cemal, B. (1959) 57-58 頁

³¹⁴ 同書 58 頁

こうしてオスマン帝国内にも第二次バルカン戦争への参戦をめぐる機運は高まっていたが、これに強く反応したのがイギリスであった。イギリス外相・グレイおよび駐イスタンブールイギリス大使・ローザーはこのオスマン帝国の動きを、ドイツへのさらなる接近であると捉え、ロンドン条約を無視した行為だとしてオスマン帝国に厳しく詰め寄った。イギリスにとってみれば、オスマン帝国を三国協商陣営に引き込むことはもはや皆無であった³¹⁵が、かといってこれ以上ドイツの味方となるような存在が増えることも望まなかったのである。イギリス側の強硬な態度はジェマルのもとにも伝わっており、グレイは次のようなことを述べたという。

トルコ人たち(Türkler)が、ブルガリアが関わっている惨劇から恩恵を受けながら、ロンドン条約を考慮せずにエディルネを奪還することに挑戦するのであるならば、のちに彼らが受けることになるだろう罰は、とても厳しいものになるだろう。ただ全ヨーロッパに存在する領地を奪われることにあらず。ともすると、彼らは帝都・イスタンブールすら失うことになるであろう。³¹⁶

グレイのこの発言は、オスマン帝国へ参戦のリスクを示唆すると共に、グレイ・ローザーの2人が潜在的にもっていた敵対心が体現された脅しであったと考えることができる。

しかしそれでもオスマン政府側はこのイギリスからの脅しに屈することなく、戦争準備を行った。その最前線に立つ指揮官には、特に第二次バルカン戦争への参戦を強く希望していたエンヴェルがなった。そして7月3日、6日前に参戦し、進軍を開始したルーマニアに合わせるように、オスマン帝国も第二次バルカン戦争へ参戦したのであった。

この両国の参戦は、ブルガリアが四方を包囲され、第一次バルカン戦争時のオスマン帝国のように孤立無援で戦うことになったことを意味すると共に、ブルガリアが第一次バルカン戦争時のオスマンと同様、周辺国からの物量に押しつぶされることも意味した。特に手薄となった東部から侵入してきたルーマニア・オスマン帝国両国を、ブルガリアは止めることはできなかった。エンヴェルの手紙にも、参戦後から一週間もしないうちにエディルネまで到達し、そして短期で陥落させたということが書かれている。³¹⁷エディルネ奪還後もオスマン帝国は進軍を続け、ついにはブルガリアとの旧国境まで到達した。それでもエンヴェルは進軍を止めようとせず、ブルガリア本土に本格的な侵攻を行おうとしていた。³¹⁸一方、セルビアとギリシャにブルガリア軍の主力を撃破されたことでセルビア・ギリシャ・ルーマニア・オスマン帝国による四方からの侵攻を止める術を失ったブルガリアは講和を決意。第二次バルカン戦争はわずか5カ月という短期間のうちに終結した。

³¹⁵ 本稿 71 頁

³¹⁶ Cemal, B. (1959) 60 頁

³¹⁷ Hanioglu, M. Ş. (1989) 247 頁 Edirne, 23 Temmuz 1913

³¹⁸ 馬場優. (2006) 210 頁

第三節 ブカレストの講和

(1) 領土再分割と顕在化する帝国主義的打算

8月7日に締結され、そして10日に調印されたブカレスト講和条約は、第一次バルカン戦争での講和であるロンドン条約の在り方を変え、事実上の領土再分割が行われる出来事となった。セルビアはマケドニア北部の大部分とノヴィパザール地方を獲得し、ギリシャはマケドニア南部とイオアニア、そしてルーマニアはブルガリアが領有していたドブロジャ地方のうちのトゥルトゥカイ(Turtukai, ドナウ川の南岸にある都市)からバルチク(Balchik, 黒海沿岸の都市)を結ぶ地域を獲得した。しかしそれでもドブロジャ地方を完全に掌握できたわけではなく、ルーマニアがトゥルトゥカイーバルチク線の獲得にとどまったのにはいくつか理由があった。それはルーマニアの首都・ブカレストで講和会議が開かれるようになることとも関係があり、さらには対ブルガリアをめぐって大国同士がブルガリアをいかに自分たちの陣営に引きこむかを画策した帝国主義的打算にも関係することである。

オーストリア＝ハンガリーがブルガリアを自陣営に引き込むために同国の崩壊を望んでいないように、そもそもルーマニア側もブルガリアからドブロジャ地方は望んでいたものの全土が占領されて降伏すること自体を望んでいなかった。大国・ロシアに隣接しているうえに、たとえば根っからの親露国・セルビアがその勢力をルーマニア南部にまで及ぼすような領土拡大に成功してしまえば、親独国であるルーマニアがドイツと同盟を組んで三国同盟陣営として参戦した際に挟撃をうける危険性があったからだ。ルーマニアからすれば、ブルガリアはドブロジャ地方をめぐって対立する関係にあったとともに、潜在的には同じドイツ系王族が統治する点では同盟関係を形成しうる存在であることには変わりなかった。一方ブルガリアは、ルーマニアよりも大国・オーストリア＝ハンガリーを頼りにしていたところがあり、この両国の関係に深くかかわっていたオーストリア＝ハンガリーも加わって行われた3国間での協議がブカレスト講和の出発点となった。この協議に先立ち、まずブルガリア国王・フェルディナンドは戦争末期の7月15日にオーストリア皇帝・フランツ＝ヨーゼフ(Franz Joseph I, 1830年-1916年)に援助を求めた。³¹⁹オーストリア外相・ベルヒトルトは、オーストリア皇帝たちが夏の間生活をする住居があるバート・イシュル(Bad Ischl, オーストリア中部に位置する避暑地)に赴いてオーストリア皇帝と相談し、³²⁰フェルディナンドからの救援に答える形でオーストリア＝ハンガリーはブルガリアに「トゥルトゥカイーバルチク線の自発的譲渡」・「ブルガリア国王・フェルディナンドがルーマニア国王・カロルにルーマニア主導の停戦交渉に向けた動きを直接依頼すること」の2つの提案をし、実際にこれらが行われればルーマニアがドブロジャ地方の獲得を目指すとともに親露国の勢力拡大を恐れていた状況にあることから提案に賛同し、さらにオーストリア＝ハンガリーはブルガリアが有利な講和の内容を主張する意図を伝えた。³²¹これと同時にオーストリア＝ハンガリーは、ルーマニア国王・カロルにはやがて出されるブルガリアからの要求を好意的に受諾するよう伝え、さらに同盟国であるドイツとイタリアにもルーマニア主導の講和の計画に賛同す

³¹⁹ Helmrich, E. C. (1938) 386 頁

³²⁰ 同書 386 頁

³²¹ 馬場優(2006) 215 頁

るよう要求した。³²²ここでオーストリア＝ハンガリーが目指したのは、ルーマニアが中心となって対ブルガリア講和をバルカン諸国内で行うことであり、この件について大国が口を出さない環境を作ることであり、特にバルカン諸国に影響力のあるロシアの介入をなくす狙いもあった。これにブルガリアは積極的に賛同した。

7月13日にブルガリア首相・ダネフが戦争の責任を取って辞任した後、ブルガリア首相に就任したのがバシル・ラドスラヴォフ(Vasil Radoslavov, 1854年-1929年)であった。また同時にブルガリア外相にはニコラ・ゲナディエフ(Nikola Ghenadiev)が就任した。³²³この両者に共通していえることは、二人ともダネフなどの親露派政治家ではなく、親独派の政治家であることであった。彼らの狙いはおおむねルーマニアやオーストリア＝ハンガリーの考えと同じで、ブルガリアが三国同盟陣営に加わることでバルカン半島における勢力均衡を安定させ、そして同時に長年続いてきたロシアの影響からブルガリアを脱却させることであった。ちょうどこのころから、ブルガリア国内では少しずつ反ロシアの気運が見られ始めている。ロシアは第一次バルカン戦争以前までブルガリアの熱心な援助者であったのに、第二次バルカン戦争では一転してセルビア・ギリシャ側の支援に回っていたからである。これについてはブルガリア国王・フェルディナンドも同様な心証を持っており、従来の親露的外交路線から親独・塊洪的外交路線へ転換を始めようとしていた。この変化は、後にブルガリアの第一次世界大戦での外交姿勢を決定付ける伏線にもなっている。またブルガリア新外相のゲナディエフは、ルーマニアはトゥルトゥカイーバルチク線を獲得することで満足するとともに、ブルガリアがそれでもセルビアと交戦を続ける可能性があるゆえにルーマニア軍をブルガリアから撤退させることはできないというルーマニア側の意図を汲み取り、ブルガリアが停戦を希望するとともに、自身が親オーストリア＝ハンガリーであることを示した。³²⁴

一方、ロシアもまたセルビア・ギリシャとともに対ブルガリア講和の準備を行っていた。ロシアおよびセルビア・ギリシャ側はセルビアのニシュ(Nish)でその準備を行い、3国で領土の再分割を話し合った。ロシアの主な狙いは、セルビアが大部分のマケドニアを、またギリシャがエーゲ海沿岸部の大部分を獲得することで、バルカン半島における親露派勢力の拡大であったが、そもそもロシア外相・サゾノフの考えでは、ロシアのバルカン半島における影響力を保持するために第二次バルカン戦争における講和はロシアが主導となって行うべきであると考えていた。すでにサゾノフは、第二次バルカン戦争中の7月9日にすべてのバルカン諸国の政府に向けて、「全ての軍事行動を即時停止し、さらに交戦国の軍部首脳間で停戦合意を締結させること」および「調停役としてのロシアが全ての戦争当事国に慈悲深い支援を等しくもたらす平和の基盤設立のために、交戦国の責任ある代表者がサンクト・ペテルブルクに即時結集すること」を通達し、主導権を握ろうと画策していた。³²⁵そのためには、親露国として戦争中に支援を送ったセルビア・ギリシャの協力が必要であった。しかし結果的には、大国が介入せずにあくまでバルカン諸国内で話し合われるべきとするオースト

³²² Helmrich, E. C. (1938) 386 頁

³²³ 馬場優(2006) 214 頁

³²⁴ 同書 215-216 頁

³²⁵ Helmrich, E. C. (1938) 381 頁

リア＝ハンガリーおよびルーマニア側の案が承認され、ニシュでの講和会議は実現しなかった。とはいえ、ロシアの意図を受けてセルビアとギリシャはすでにユスキュプで秘密裏に会談を行っており³²⁶、講和時にそれぞれが行う領土的主張の打ち合わせを始めていたのだった。セルビアとギリシャ間の秘密会議内で問題になったのは、エーゲ海沿岸の海港都市・カヴァラ(Kavala)をギリシャが獲得できるかどうかであった。

カヴァラは、エーゲ海沿岸部最大の都市であるセラニクの東に位置する都市である。海港そのものの規模はセラニクに比べれば4分の3ぐらいのものであったが、エーゲ海沿岸部内の都市で人口第二位の規模を誇る大都市であり、またオスマン帝国の帝都・イスタンブールとセラニクのちょうど中間点に位置し、海外の企業が多く集う点で地理的にも経済的にも恵まれた都市であった。ギリシャにとっては、人口増大や経済的利益の増大によって勢力を拡大できる以外にも、「メガリ・イデア」を達成させる上で最大の難関であるイスタンブール攻略のための中継地点にすることができる都市でもあった。しかしこのカヴァラ領有に関してはブルガリアも領有を主張していた。ブルガリアとしては、少しでもエーゲ海へ抜けることのできる領土を手に入れたと考えており、海港としても盛んなカヴァラは経済的にもブルガリアの勢力を拡大する利点となりえたのだった。またカヴァラにはオーストリア＝ハンガリーの企業も多数存在していたことから、カヴァラ領有問題についてはオーストリア＝ハンガリーも関心を示していた出来事であった。³²⁷

しかしブカレスト講和会議においてこの問題は、大国の意見がブルガリアの領有に賛成する国とギリシャの領有に賛成する国に真っ二つに分かれるという事態を招いた。特に注目すべきなのは、このカヴァラの問題についてはロシアがオーストリア＝ハンガリーとともにブルガリアによる領有に賛成したことである。オーストリア外相・ベルヒトルトはブカレスト駐在の公使を通じて、ロシア側にブルガリアはマケドニアの一部・エーゲ海沿岸地域の保持が必要であると伝えたが、これに対してロシア外相・サゾノフも3つの理由を挙げてブルガリア領有に賛成している。ロシアが挙げた理由とは、「ギリシャはすでにセラニクおよびオルファノ湾(セラニクが面している湾)を獲得している以上、ギリシャ側には経済的必要性はないこと」、「ギリシャ海軍がより強大化した際に、ギリシャがダーダネルス海峡の掌握に向けて海軍を動員させることにはロシアは反対していること」、「ブルガリアにカヴァラを領有させるという見解は道理に適ったものであり、支持しなければかえって外交上不利になる」ということであり、それらはすでにブルガリアに割譲予定であったタソス島(Thasos)の話と平行して行われた。³²⁸しかしこれに反対したのがフランスとドイツであった。ブルガリア・ギリシャ双方とも譲ることのできないこの問題は、後にブカレスト講和がなかなか進展しない原因にもなり、最終的にはブルガリアは全体会議の中でカヴァラなどの都市の請求権を放棄する代わりに、係争都市のひとつであったストゥルミツァ(Strumica, 現マケドニア領)をブルガリアは獲得した。³²⁹

³²⁶ 同書 389 頁

³²⁷ 馬場優. (2006) 218 頁

³²⁸ 同書 219 頁

³²⁹ 同書 217-219 頁

こうしてブカレスト講和会議は、表向きは大国が参加しない形でバルカン諸国だけで開催され、バルカン半島における新しいあり方を模索していた一方で、その実は、バルカン諸国はもちろんオーストリア＝ハンガリーとロシアという二大国の帝国主義的打算が深く絡み合っており、「オスマン帝国領の再分割」という大義名分のもとで各国が激しいやり取りを繰り返したのであった。

そのような大義名分があった以上、一番損することになったのはオスマン帝国であった。³³⁰第二次バルカン戦争では「戦勝国」となったことから、オスマン帝国も対ブルガリア講和の参加を表明していたが、キリスト教徒同士の領土変更を協議するという理由で参加を拒否されていた。ヘルムライヒによれば、そもそもバルカン諸国や大国が講和を急ぐきっかけとなったのは、オスマン帝国がロンドン条約で規定された新国境であるエノスーミディア線を突破してエディルネにむけて進撃を続けたことにあるとしている。³³¹オスマン帝国の影響力が再びバルカン半島内で増大になることは他国からすれば本意ではないものであり、後になってオスマン帝国に対抗できるようにするためには講和そのものもオスマン帝国なしで十分話を進める必要があったのである。結局オスマン帝国はブカレスト講和条約に参加することができず、バルカン諸国が講和を始めている中で進撃を続けることとなった。オスマン帝国がブカレストのものとは別の講和条約を締結することになったのは、ブカレスト講和から約一ヵ月経ってからのことであった。

(2) 外交的再構築の起点としてのオスマン＝ブルガリア同盟

タラートの言葉を借りれば、第一次バルカン戦争が「トルコ人から力で権利や領地を奪っていった」戦争だとすれば、第二次バルカン戦争は「これまでトルコ(Türkiye)の人民や力を示し、そして文化的・歴史的にイスラームを象徴してきたエディルネおよびその周辺地域が占領された事へ抵抗を行う」戦争となった。³³²たとえイギリス外相・グレイから脅しを受け、さらに周辺のバルカン諸国やヨーロッパの大国から干渉を受けようとも、オスマン帝国には周辺地域を獲得し、自身の力を示す努力が必要であったともタラートは語っている³³³。とはいえ、先にも書いたように「仲間はずれ」にされた形でブカレスト講和会議に参加することができなかったオスマン帝国は、ブカレストでの講和で領土再分割が完了してしまった後になって講和を結ぶこととなった。ブカレスト講和会議が終了して1ヶ月後の1913年9月29日。オスマン帝国はブルガリアと帝都・イスタンブルで第二次バルカン戦争の講和を行った。この講和で、オスマン帝国は古都・エディルネやクルクラレリ、ディメトカ(Dimetoka, 現ギリシャ領ディディモティコ)の3都市およびその周辺地域を奪還したものの、エーゲ海沿岸の海港都市・デデアアチはブルガリアの元に残ることとなった。さらにこの講和には、オスマン・ブルガリア双方が軍を速やかに撤兵させ、政治的・経済的に関係

³³⁰ 同書 217 頁

³³¹ Helmrich, E. C. (1938) 385 頁

³³² Bolayır, E. (1946) 19 頁

³³³ 同書 19 頁

修復を行う条項も盛り込まれた。³³⁴

またオスマン帝国は、1913年11月14日に第一次バルカン戦争での最終合意を行うため、ギリシャとアテネで条約を締結させた。この条約の中でオスマン帝国はギリシャのセラニク、ヤンヤ、クレタ島領有を承認し、エーゲ海沿岸部の大部分を失うこととなった。³³⁵セラニクや北部の地域、そしてクレタ島を獲得したギリシャは、人口も面積もかつての二倍の規模となり、バルカン諸国内で最もこの戦争でその恩恵を受けた国家となった一方で、オスマン帝国は人口が6分の1になり、さらに領土もかつての8分の1となった。³³⁶

こうして2度のバルカン戦争でバルカン半島での優位性を喪失したオスマン帝国は、脆弱となった自身の国際的立場に危機感を募らせることとなった。戦争前に考えていた大国との同盟はもちろん、ヨーロッパ側の領土をほとんど喪失した今となつては、バルカン諸国内にも協力的な存在が必要となった。そこでオスマン帝国が見出したのがブルガリアであった。

ブルガリアは第一次バルカン戦争では最も領土を獲得できた国家であったが、第二次バルカン戦争でその多くを他国に奪われる結果となった。さらにブカレスト講和ではブルガリアが最も欲しいと考えていたマケドニアもほとんどをセルビアに奪われ、セルビアやギリシャに対して不信感を募らせることとなった。オスマン帝国がセルビアやギリシャから旧領を奪還するためには、ブルガリアはまさに打ってつけの友好国であった。さらにブルガリアは戦争中から親露路線から親独路線へ転換したことも、オスマン帝国がドイツやオーストリア＝ハンガリーとの同盟を目指すうえでは都合のいい相手でもあった。しかしそうは考えていたものの、オスマン帝国側としてはまずは講和を行うことが先であり、先まで敵対関係にあったブルガリアと実際に同盟を組むことができるかどうかは未知数のままであった。しかしそのイスタンブルでの講和のなかでオスマン帝国とブルガリアは、ブルガリア側からの提言をきっかけとして両国の協力関係を築くべく動きだすのであった。その講和の中にいたのがジェマルであり、そしてタラートたち統一と進歩委員会の最高幹部たちであった。

ジェマルはブルガリアより代表使節団が講和条約を締結させるためにイスタンブルにやってきた際、当時陸軍少佐であったイスメトとともに軍事アドバイザーとしてオスマン側の代表であるタラートやハリム・パシャらに随伴する形で会議に参加していた。³³⁷彼らは領地の分割をどのようにするかを話し合う前にブルガリア領に編入された地域のトルコ人たちの問題を取り上げ、多数のトルコ人がこの問題において関係してくるということをまず確認を行った。ブルガリア領として編入された旧オスマン帝国領の地域にいる人々がどうなるのかをひたすら気にかけていたのである。ただその後ブルガリアとオスマン帝国は講和を行い、同盟関係を築くべく話し合いを行った。ジェマルも、会議の議長であったタラートに適宜提案をしながら会議を進めたのだが、かたやブルガリア側は早急にこの話に決着をつけたと考えていた。同席していたブルガリア軍参謀総長のサヴォフは次のように言って早急な

³³⁴ Akşin, S. (2008) 50 頁

³³⁵ 同書 50-51 頁

³³⁶ Erickson, E. J. (2003) 312 頁

³³⁷ Cemal, B. (1959) 63-64 頁 なお、本文中の陸軍少佐・イスメトとは、後のトルコ共和国第二代大統領となるイスメト・イノニユ(Mustafa İsmet İnönü, 1884 年-1950 年)である。

締結を求めた。

皆さん。お願い申し上げたいのだが、今話し合っている問題をさっさと終わらせ、根本的で重要な別の問題について話し合しましょう。私は2平方メートル以上ある土地がブルガリアとトルコ(Türkiye)のどちらのものになるのかを交渉するためにここへ来たのではない。私がここにきた理由は、長年にわたって私が望んできた野望を達成させるためなのです。私はトルコ(Türk)—ブルガリア同盟の件について話し合いたい。私はこの問題を達成させるためにここへ来たのです。³³⁸

サヴォフの提言は、まさにブルガリアとオスマン帝国が同盟関係を形成することこそが重要な問題であり、バルカン戦争での領土問題はもはや問題ではないというブルガリア側の考えを端的に表すものとなった。しかしその時ジェマルたちは、この提言がブルガリアの提案に自分たちを誘い出すために意図的に語ったものであると考え、それが本当かどうかを交渉の中で探りを入れるようにしている。ただジェマルとサヴォフが話を交わしていく中でそれが本当であるとわかると、ブルガリア＝オスマン帝国間の同盟締結を決定したのだった。³³⁹

このブルガリアとオスマンの同盟の締結には、主に2つの役割があったといえる。ひとつは、オスマン帝国・ブルガリア双方とも辛酸を舐めさせられたバルカン諸国に対し、両国が合同で攻撃を行うことができるという軍事面での役割である。オスマン帝国にとって、バルカン戦争が終わり、そしてブルガリアと同盟を締結させたこの時点において最も注意しなければならない近隣の敵とは、カフカスで衝突する東方のロシアであり、そして今回の戦争で急激に勢力を拡大させた西方のギリシャであった。特にギリシャとはエーゲ海の島々の領有をめぐる対立しており、またギリシャで推進されているナショナリズムの性質上アナトリアを狙って攻撃を仕掛けてくる可能性から、交戦する可能性が十分ある国家でもあった。またブルガリアのほうも、マケドニア領有をめぐるセルビアやギリシャと対立しており、マケドニアを奪還するためには両国と再度戦いを挑まなければならない。2度のバルカン戦争ではともに敵対国として戦った両国は、戦争後になって共通の敵を見出すこととなったのである。ジェマルもこの一つ目の役割に関してはサヴォフとの話の中で見出しており、オスマン帝国とブルガリアが手を組むことは、それぞれと利害が対立している国々に脅威を与えることとなることを期待していた。³⁴⁰さらに同盟の条項の中には、セルビアとギリシャそれぞれに進撃を行った際の軍事行動の手順も盛り込まれた。その条項によれば、もしブルガリアがセルビアの領有するマケドニアのウストゥルマに進撃した際にはオスマン帝国は東トラキア全土を確保し、さらにブルガリアがギリシャ領のセラニク方面へ進撃した際にはオスマン帝国はセルビア方面へ進撃することを取り決めており、またこの目的を達

³³⁸ 同書 64 頁

³³⁹ 同書 64 頁

³⁴⁰ 同書 67 頁

成した際には現時点で領有を決定したデデアアチをオスマン帝国へ返還するとした。³⁴¹これらはオスマン＝ブルガリア同盟が軍事同盟としての役割を持っていただけでなく、それぞれが抱えていた利害関係を如実に物語るものでもあるといえよう。

そしてもうひとつは、オスマン帝国にとってはもとより考えていたドイツやオーストリア＝ハンガリーとの同盟をすすめるうえでの「橋渡し」という役割である。ブルガリアが担ったこの役割は、後にドイツおよびオーストリア＝ハンガリーと連携をとる際に重要なファクターとなる。ちょうどオスマン帝国とドイツ、オーストリア＝ハンガリーの中間地点に位置するブルガリアは、オスマン帝国へドイツならびにオーストリア＝ハンガリーから物的・人的支援が供給されるのを安易にするとともに、オスマン帝国側が考えていたバルカン半島での有力な同盟国の存在が、ブルガリアを自陣営に引き込みたいと考えていたオーストリア＝ハンガリー側の願望ともコミットしていたことから、オスマンとオーストリア＝ハンガリーの両国の外交的な関係作りも円滑に行う外交的土壌の形成にも一役買った。つまりこのオスマン＝ブルガリア軍事同盟の締結は、統一と進歩委員会の基本的な外交姿勢である親独的外交路線を再構築する布石にもなったし、そしてその外交観をもとに展開されるバルカン戦争後のオスマン帝国の外交的出発点ともいうことができる。こうしてオスマン＝ブルガリア間で締結された軍事同盟は、第一次世界大戦で両国が三国同盟陣営として参戦した後にも継続され、バルカン半島での戦線でその役割を果たしていくことになる³⁴²のだが、同時にこの同盟には2つの問題点も存在していた。

オスマン＝ブルガリア軍事同盟で問題になった一つ目の問題点は、この同盟ならびに両国に接近していたドイツとオーストリア＝ハンガリーに対して脅威を覚えた国々の危機感を意図的に煽り、オスマン帝国・ブルガリア両国への対抗策を練らせるきっかけをもたらしたことである。このオスマン＝ブルガリア同盟の締結は、ドイツなどの三国同盟陣営にとっては有益なものではあったが、三国同盟陣営の国々と利害対立している国々にとってはこの上なく危険なものであった。バルカン半島内の勢力図だけを見ると、オスマン＝ブルガリア軍事同盟だけでもバルカン半島における勢力均衡を担いうるものであったし、さらにそこに半島北部の大国・オーストリア＝ハンガリーが関わってくるとすると、劣勢に経たされかねない国も出てくるのである。特にこの動きに刺激を受けたのがルーマニアであった。というのも、ルーマニアこそがこの軍事同盟に加えてオーストリア＝ハンガリーに関わるようなことがあれば一番その被害を受けかねない国家であったからだ。第二次バルカン戦争ではブルガリアに対して妥協策を行い、そして首都・ブカレストでの講和において中心的な役割を担ったものの、それでもルーマニアはブルガリアに残存している残りのドブロジャ地方を獲得したいと考えていたし、また協力関係にあったとはいえオーストリア＝ハンガリーとはトランシルヴァニアの件で潜在的な敵対心を秘めていたのである。とはいえルーマニア国内の外交官もバラバラで、親独的な国王・カロールが統治し、さらに政権は親独派としても知られていたティトゥ・マヨレスク(Titu Maiorescu, 1840年-1917年)が担っていた一方で、民衆のほ

³⁴¹ 同書 65 頁

³⁴² Erickson, E. J. (2001) 185 頁

とんどもはトランシルヴァニアの一件から反ドイツ・オーストリア＝ハンガリーを掲げていた。³⁴³ルーマニア国内のこの内部対立の構造は、第一次世界戦直前にカール1世の甥であるフェルディナンド(Ferdinand Viktor Albert Meinrad, 1865年-1927年)がルーマニア王位を継承し、さらに親仏派のイオネル・ブラティアヌ(Ionel Bratianu, 1864年-1927年)が政権を握ることでルーマニアの外交路線が大きく転換されるまで続くのである。さらにセルビア・ギリシャに至っては、そもそもオスマン＝ブルガリア軍事同盟が自分たちに対して結成されたものだったこともあり、ブルガリア・オスマン帝国の両国に対して警戒心を招くこととなり、対抗するために軍備をより増強させる動きを見せている。もとより反オスマンを標榜していたセルビア首相・パシッチは、同様の考えを持っていたギリシャ首相・ヴェニゼロスと会談を重ね、この両国への対策を協議したのだった。オスマン＝ブルガリア軍事同盟は、確かに周辺国に脅威をもたらし同盟にはなったのだが、その性質上おのずと敵を増やすことにもつながり、バルカン半島での緊張度がより高まる原因にもなった。

そしてもうひとつ問題だったのは、物的・人的支援の点でブルガリアがオスマン帝国にとってのアキレス腱となることが確定されたことである。これは近代オスマン帝国軍の研究者・エリクソンが述べたところでもある³⁴⁴し、さらに地政学的な観点からも言えることである。オスマン帝国およびブルガリアがドイツやオーストリア＝ハンガリーと同盟を締結させた場合、この4つの同盟国はちょうどヨーロッパの中央に固まる位置に縦長で並ぶのだが、オスマン帝国とドイツ、オーストリア＝ハンガリーが接続するところにブルガリアは存在しており、本当の意味で「橋渡し」をするポジションにいた。もちろんこの状態ならばオスマン帝国とドイツ、オーストリア＝ハンガリーは互いに物的・人的に共有することができ、戦争が発生しても協力することができるのだが、ブルガリアが敗北して脱落してしまうと、オスマン帝国はドイツとオーストリア＝ハンガリーからの陸路での援助を立たれることとなり、地中海・エーゲ海を確保して制海権を握らない限りはオスマン帝国が孤立し、単独で戦わなければならない状態に陥ってしまうのである。そのためには、崩壊せぬようブルガリアをオスマン帝国がサポートし、さらにバルカン半島内の敵国を短期間に撃破する必要性が出るのであった。これら2つの問題は、第一次世界大戦でもオスマン帝国が三国協商陣営と戦っていく中で焦点となった問題であり、そして同時にオスマン帝国の敗北を促す働きをも担ったのである。

こうしてオスマン＝ブルガリア軍事同盟は、オスマン帝国・ブルガリア双方の利害が一致したことで成立した同盟であるが、同時にこれはオスマン帝国からすれば、バルカン戦争後のオスマン帝国外交の再編の第一歩となるものであった。統一と進歩委員会内にはどの大国と組むべきかという問題はまだ残存していたものの、「親独派」、「親英・親仏派」のいずれにとってもこの同盟はオスマン帝国がドイツに接近していることを物語るものとなり、オスマン帝国が三国同盟陣営・三国協商陣営のいずれかに名を連ねる必要性を迫るものとなった。

³⁴³ アンドレイ・オツェテア(1977年) 104頁

³⁴⁴ 同書 227頁

おわりに

さてここで、第四章で書いたことをまとめてみたいと思う。第一次バルカン戦争での課題がそのまま原因となった第二次バルカン戦争は、バルカン同盟を形成していたバルカン諸国にとっては「兄弟殺し」ともいえる戦争であった。しかしそこにはただ単に「同じ民族同士の対立」という表現だけでは収まらない複雑な対立関係が存在しており、戦争そのものは第一次バルカン戦争とは何ら変わりのないものとなっていた。第二次バルカン戦争の結果、第一次バルカン戦争で最もその恩恵を受けたブルガリアは敗北し、バルカン諸国だけで行われたブカレスト講和条約の末に領土を割譲したほか、セルビアやギリシャに領有を望んでいたマケドニアなどの地域を奪われ、ブルガリアにとっては非常に不本意なものとなった。しかしこのブカレスト講和条約自体は、「バルカン諸国だけで行う」という表向きの意図とは裏腹にロシアやオーストリア＝ハンガリーといった大国の思惑も絡み合ったものであり、両者の対立をより鮮明に表すものとなった。第二次バルカン戦争中のラドスラヴォフら親独派政権の樹立ともあいまって、ブルガリアは従来の親露的外交路線から親独的外交路線へ転換することとなり、最終的には三国同盟陣営の一国として第一次世界大戦へ参戦することとなった。

一方で、オスマン帝国はエディルネ奪還を熱望するエンヴェルらの熱意とオスマン帝国内の支援者の協力によって第二次バルカン戦争へ電撃参戦し、わずかな期間で古都・エディルネやクルクラレリなどの地域を奪還することに成功した。またその中でオスマン帝国は、「新たなドイツ軍事顧問団の招集」とバルカン戦争後の「オスマン＝ブルガリア軍事同盟締結」という第一次世界大戦へ直結する外交的イベントを体験し、オスマン帝国がドイツへ接近していることを物語るものであった。もちろん統一と進歩委員会の全てのメンバーが親独的になったわけでもなく、ドイツ軍事顧問団招集の際にもジェマルら反独派将校から招集に反対する意見も飛び出しており、ドイツやオーストリア＝ハンガリーなどの三国同盟陣営に参入する布石こそあったものの、ロンドン条約締結時のような状態がまだ継続しているというところにオスマン帝国外交はあった。

しかし結果的に、第二次バルカン戦争が終結してからの短期間でオスマン帝国はよりドイツに接近し、最終的にはドイツとの同盟までこぎつける事となる。その最大のきっかけが1914年1月のエンヴェルの陸軍大臣就任であり、また同時期のリーマン・フォン・ザンデルスらドイツ軍事顧問団の来訪であった。また第二次バルカン戦争後のドイツ側の対応の変化もあり、オスマン帝国・ドイツ間に軍事同盟の締結も、もはや時間の問題となっていた。それは同時に、第二次バルカン戦争から数ヶ月後になって勃発する第一次世界大戦への、そして第一次世界大戦の末に600年以上世界帝国として君臨してきたオスマン帝国が終焉することへのカウントダウンをも意味することになるろうとは、この時エンヴェル、タラート、ジェマルたち統一と進歩委員会のメンバーは知る由もなかった。

終章

トルコ近現代史の大家であるハーニオールは、自身の論文の中でオスマン帝国にとってのバルカン戦争およびイタリアとの戦争の意義をいくつか列挙している。彼が提示した意義の前提となっているのは、バルカン戦争やその直前のイタリアとの戦争が第一次世界大戦へとリンクする出来事であったとともに、かつて「世界帝国」としてアジア・アフリカ・ヨーロッパの三大陸をまたにかけて繁栄を遂げたオスマン帝国がヨーロッパ・アフリカの全領土を喪失し、その誇りや自信というものを傷つけた出来事であったとする客観的な評価と歴史的事実である。³⁴⁵しかしその一方で、全般的に見識が浅い「丸裸」同然の状態での政治的・外交的表舞台へ登場した青年トルコ革命のころと比べてエンヴェルやジェマル、タラートたち統一と進歩委員会の最高指導者たちは、それぞれが異なる体験を通して自身の考えをより鮮明なものにし、そしてその考えを元におのおのが困難に対して行動をとりつづけた。彼らの姿は、20世紀初頭からのオスマン帝国の衰亡を巡る時流と照らし合わせれば逆行していた存在と言えるし、より叙情的に言えば衰亡してゆく祖国に存在する数々の真実に立ち向かっていった「革命志士」たちの姿であるとさえ言うことができるであろう。彼らの理想は二度のバルカン戦争の後にも引き継がれ、そして第一次世界大戦によって儚く砕け散ることとなるのである。指導者たちの理想と行動の原理は、その第一次世界大戦に至るわずかな期間の中でどのような軌跡をたどっていったのであろうか。先のハーニオールの意義と関連付けながらそれらを最後に見ていきたいと思う。

ハーニオールがまず挙げた意義は、アフリカ・ヨーロッパという非トルコ人が多い領地を失ったことで、オスマン帝国はその地理学的イメージを修正せねばならず、さらにオスマン帝国を支える支柱であった「オスマン主義」が完全に破綻したことで、残りのオスマン帝国民をまとめあげる新しい思想の必要性が高まったことであった。先にも書いたように、二度のバルカン戦争の末にオスマン帝国は人口も領土も大幅に減少するという事態が発生しており、喪失した領地から何万人もの難民がオスマン帝国領へ再移住し、オスマン帝国は人口・物資・領土の喪失への対処を考えなければならなくなっていた。そこで彼らのなかで台頭してきたのが「トルコ民族主義的思想」であり、そして新たな中心地域としての「アラブ」の存在であった。

トルコ民族主義については、本稿でもトルコ民族主義の草創期の歴史に触れるとともに、イタリアとの戦争中にトルコ民族主義の考えがエンヴェルの心中にも少し現れたことを取り上げた³⁴⁶が、バルカン戦争後になってその勢いはさらに加速していった。すでに本稿内で用いたジェマルやタラートらの手記の中でも「トルコ(Türkiye もしくは Türk)」という言葉を使って祖国・自民族を表現していたことが分かる通り、トルコ民族主義は20世紀初頭のオスマン帝国では欠かすことのできない概念となっていた。アイデミルの著書である *Makedonya'dan Ortaasya'ya Enver Paşa* のなかでは、トルコ民族主義を説明する以前にナ

³⁴⁵ Hanioglu, M. Ş. (2008) 90 頁

³⁴⁶ 本稿 34 頁

ショナリズムとはいかなる思想なのかということや自分たちトルコ人とは何者なのかということやを自問しながら説明している³⁴⁷が、その論述の脚注に用いられているのも、またアイデミルが著名なトルコ民族主義者として取り上げているのも、当時のトルコ民族主義論者の代表格であるズィヤ・ギョカルプであり、そしてユースフ・アクチュラといった存在であった。彼らの存在は、トルコ民族主義が統一と進歩委員会やオスマン帝国内で流布する上で間違いなく重要な役を担っている。しかしそんなオスマン帝国のトルコ民族主義化の潮流において、唯一の「例外」といえる存在がいた。イスマイル・エンヴェルその人である。

ここで改めて言わなければならないことは、昨今の「イスマイル・エンヴェル＝トルコ民族主義者&汎トルコ主義者」とする評価は、現実のイスマイル・エンヴェルと比べてみるといささか捉え違えている節があることだ。確かに彼は現実を直視しながらも、その本質が「理想主義者」であることは間違いない。それについては本稿でも度々書いてきたことではある。³⁴⁸しかし手記などから見える現実のエンヴェルの姿は、従来のオスマン研究史のなかで語られているようなトルコ民族主義者としての、そして汎トルコ主義者としてのエンヴェルの姿とはまったく異なる。彼の思想の軸はもともと「オスマン主義」に近いものであったし、そしてその行動原理も民族を超えた超民族的愛国心にあった。³⁴⁹彼の実際の思想や行動原理を考えれば、彼は途中でトルコ民族主義や汎トルコ主義といった考えを取り入れてはいるものの、エンヴェルは青年トルコ革命の時代から一貫して「オスマン主義者」であり続けたのである。彼が「オスマン主義者」であるという意見を支える根拠として登場するのが、ハーニオールも同時に意義として挙げた「アラブ」の存在である。

バルカン戦争期になると、オスマン帝国が長年にわたって磐石の支配体制で支配下に入っていたアラブ諸地域でもオスマンの影響力に陰りが見え始め、イエメンのヤヒヤ・ムハンマド・ハミード・アッディーンのように抵抗運動を指揮する者やヒジャーズの太守を命じられていたハーシム家のフサイン・イブン・アリー(Usayn Ibn 'Ali, 1853年-1931年 後のヒジャーズ国王)のような独立の野心を秘める者も現れていた。さらにそこに石油の利権を求めてイギリスやフランスといった大国が介入をすると、アラブ世界における情勢は一気に逼迫したものとなった。1914年にはイギリスとオスマン帝国の間でアラブ世界に関する会談が実施され、オスマン帝国とイギリスによるアラビア半島の分割などが話し合われた。この会談の中で、オスマン帝国は自身の主権を侵害するものとしてこれまで頑なに拒んできたアラビア半島沿岸地域の土豪とイギリス間における条約締結を承認することになり、イギリスはアデンやイエメンといった地域に軍の駐留を行うとともに、クウェート・カタール・バハレーンを事実上オスマン帝国から割譲されることとなった。その見返りとしてオスマン帝国は、アラビア半島中央部のナジュド高原で勢力を拡大していたアブドゥルアズィーズ・イブン＝サウード(Abdulaziz bin Abdulrahman bin Faisal Al Saud, 1880年-1953年 後のサウ

³⁴⁷ Aydemir, Ş. S. (1976) 414-494 頁

³⁴⁸ 本稿 20 頁

³⁴⁹ 本稿 34 頁 なお、この考え方にはアイデミルも同調しており、自身の著書の中でエンヴェルはトルコ民族主義者や汎トルコ民族主義者ではなく「オスマン主義者」であると断じている。[Aydemir, Ş. S. (1976) 490 頁]

ジアラビア王国初代国王)の国の宗主権を認めてもらい、かろうじてアラビア半島での影響力を残すことに成功したが、それでもアラブ世界での緊張はまだまだ残存していた。

ジェマルはこのアラブ世界で緊張が高まりつつあるなかで、フランスとシリアを巡って会談を度々行っている。バグダード知事の経験があり、そしてアラブ人たちの内情も知っていたジェマルは、バイルートでフランスとアラブの問題を話し合い、³⁵⁰そして時にはタラートたちとアラブの問題をひそかに話し合った。³⁵¹ただこのアラブ世界の問題については、ジェマルはエンヴェルと共通する考えを持っている。アラブ人とトルコ人はイスラームを信仰する民族において多数を誇るものであり、彼らとはイスラームの観点で協力を図るべきだとするイスラーム主義的考えである。³⁵²これについては、エンヴェルもイタリアとの戦争の中で実際にアラブ人たちと触れ合うことで同様な考えに至っている。³⁵³彼らのこの主張を考えれば、自民族中心的側面を持つトルコ民族主義や汎トルコ民族主義は彼らの主張とは対極にある以上、特にエンヴェルが青年トルコ革命時から頑なに理想とし続けていた「オスマン主義」とは相容れない考えに安易に乗り換えるようなことはエンヴェル自身の理想に反する行為となりえたのである。結局、第一次世界大戦中にはエンヴェル自らがアラブ人を用いた大規模な計画を立案・履行することはなかったが、エンヴェルが考えたアラブ人との協力については、オスマン帝国が第一次世界大戦に参戦して少し時が経った1914年11月14日、オスマン帝国内のウラマーたちが「偉大なる聖戦(Cihad-ı Ekbar)」というフレーズを用いてアラブ人たちにも参戦を呼びかける運動が行われている。³⁵⁴エンヴェルの思想はただ自民族(トルコ人)に限ったものではなく、また従来の評価に見られるような狭小なものでもなく、むしろ民族の垣根を越えた超民族的なものであったといえるだろう。

ハーニオールがもうひとつ挙げた意義は、イタリアとの戦争やバルカン戦争を通してオスマン帝国にはヨーロッパの大国という保護者がいないことがはっきりし、さらにオスマン帝国そのものも余命いくばくもない状態にある以上、オスマン帝国は大国との同盟を早急にかつ慎重に行わなければならないことを決定的に思い知らされることとなったことである。これについては本稿でも幾度となく取り上げてきた話題であるが、オスマン帝国は自分たちの外交観などを基に同盟の構想を練り、オスマン-ブルガリア軍事同盟にまでこぎつけることはできたが、結局のところバルカン戦争期に大国との同盟を実現できなかった。とはいえ同盟についての基本方針は定まっており、あとはその実現を目指すだけとなった。

同盟の打診において最初に動いたのは、内務大臣のタラートであった。そしてその相手はなんと宿敵であるロシアであった。タラートのロシア訪問と同盟打診について、多くの研究者は「奇妙」という表現を用いている³⁵⁵が、これについては確かな理由が存在する。その理由とは、アナトリア東部ならびに黒海沿岸部で隣接しているロシアへ同盟の打診を行うこ

³⁵⁰ Cemal, B. (1959) 69 頁

³⁵¹ 同書 70 頁

³⁵² 同書 69-76 頁

³⁵³ 本稿 31・37 頁

³⁵⁴ Hanioglu, M. Ş. (2008) 95 頁

³⁵⁵ 貝瀬雅典. (2001) 12 頁

とで、タラートはオスマン・ロシア双方の安全保障を確保しておきたいと考えたことである。長年にわたって衝突を繰り返してきた両国は、1913年以降にも外交上で衝突を繰り返し、両者の関係は悪化の一途を辿っていた。しかしバルカン戦争期に入ると、自国の安全保障を脅かしかねない出来事がロシア・オスマン帝国それぞれに発生し、今までの態度を変えなければならない事態を迎えていた。

まずロシアの態度を変えなければならなくなった出来事とは、オスマン帝国軍が1914年1月にザンデルス率いるドイツ軍事顧問団のもとで新たな改革に着手しはじめたことだ。本稿でも書いたとおり、オスマン帝国東部のロシアとの国境沿いの都市・エルズルムの要塞化も順調に進行しており、カフカスからのロシア領への侵入ももはや不可能ではないレベルに達しようとしていた。³⁵⁶さらにオスマン帝国がドイツら三国同盟陣営に加わり、対ロシア戦争に参戦するようなことがあれば、ロシアは戦力の分断を余儀なくされるのであった。これらを警戒して、ロシアはオスマン帝国軍のドイツ化および改革に猛烈に反発したが、³⁵⁷結局軍事顧問団の招集は実行に移されてしまい、そしてオスマン帝国軍の改革は進行した。バルカン戦争ではその弱体化を露呈したオスマン帝国軍であったが、ドイツによる軍改革の効能は計り知れないものであった以上、日露戦争や国内の政局の不安定が続くロシアにとっては不安要素以外の何物でもなかったのだった。

一方、オスマン帝国がロシアへの態度を変えなければならなくなった出来事とは、カフカスおよびアナトリア東部にいるアルメニア人についての問題が立て続けに発生したことである。1914年初頭には、ロシアがオスマン帝国にアナトリア東部のアルメニア人居住区の改革と国際査察団の派遣を強く要求し、事実上の干渉を行う出来事があった。もともとの話は1878年のベルリン条約の第61項にも規定されたものであるが、アルメニア人やクルド人の多いアナトリア東部の行政改革は、改革の結果この地域の分離独立が発生しかねないとしてオスマン帝国は長年にわたって継続的に避けてきた問題であった。³⁵⁸意図的にこの問題を蒸し返し、そして最終的には自分たちの保護下に入れんとしていたロシアが主導する国際査察団の派遣をオスマン帝国は回避しようと画策したものの、ロシアの働きかけで一番の頼みであったイギリスが交渉の場から撤退してしまい、オスマン帝国はロシアからの圧力に屈する形で国際査察団を受け入れなければならなかった。³⁵⁹そもそもタラートは、バルカン戦争期のなかでロシアによるオスマン帝国への政治的圧力が積極的に行われたことを説明し、その圧力の根源となっていたのがアルメニア人問題であるとした。³⁶⁰カフカス・アナトリア東部で積極的な運動をアルメニア人が展開していたこと、さらにはアルメニア人の虐殺事件であるアダナ事件の事例もあり、タラートはこのアルメニア人の存在を殊更気にかけていた。しかしその根底には、タラート自身が個人的にアルメニア人に対して「友情」というものを感じており、また可能な限りアルメニア人とは和解をしなければならない

³⁵⁶ 本稿 54 頁

³⁵⁷ 本稿 105 頁

³⁵⁸ Hanioglu, M. Ş. (2008) 91 頁

³⁵⁹ 貝瀬雅典. (2001) 12 頁

³⁶⁰ Bolayır, E. (1946) 20 頁

と考えていたところがあった。それこそがタラート自身が青年トルコ革命時に抱いた理想そのものであり、またそれゆえに理想と自身の立場の間でジレンマと戦いながら青年トルコ革命時に発生したアルメニア問題を解決させざるを得なかったということは本稿でも書いた。³⁶¹しかし今度はロシアのバックアップのもとで再びアルメニア人の問題が発生しようとしており、当然そのような理想を抱き続けたタラートはロシアの思惑を阻止するために再び動かなければならなかったのである。

こうした背景のなかでロシアとの同盟は、まずは両国間の基本合意を模索しながらロシアとの予備交渉を進めていくことを起点として、ゆっくりと前進し始めた。しかしこの交渉には親独派であるエンヴェルも参加しており、相互防衛協定の提案もなされたが、結果的には何の成果も得られることはなかった。そもそもロシア側にはオスマン帝国との同盟という構想自体存在しておらず、あくまでオスマン帝国は警戒すべき相手であり、そして戦争で勝利したあかつきにはオスマン帝国領へ進出するべきという考えが強かったのである。

タラートがロシアとの同盟に失敗した後、次に同盟の締結に動いたのが海軍大臣となったジェマルであった。ジェマルがその同盟を望んだ相手は、彼自身が好んだフランスであった。そもそもジェマルにフランスとの同盟の打診のチャンスを与えたのは、ジェマルがダマト・サーリフ・パシャを通して親交を深めていた駐イスタンブルフランス大使・ボンパールである。ボンパールは、ジェマルとの親交のなかで1914年7月中旬に実施されるフランス海軍訓練視察にジェマルを招待し、さらにフランス首相兼外相のルネ・ヴィヴィアニ(René Viviani, 1863年-1925年)との直接会談の機会を与えた。ジェマルはこれを喜んで引き受けてパリに向かう³⁶²のだが、ジェマルの中では主に2つの観点からの同盟締結へのアプローチが存在した。

ジェマルが構想したフランスとの同盟におけるアプローチの一つ目は、経済的観点からのアプローチである。つまり、フランスとの同盟をまずは「経済的合意」および「貿易協定」のレベルからスタートさせることであった。イギリスやドイツ、ロシアと比べると、当時のオスマン帝国とフランスの関係はかなり浅いものであった。ただフランスがバルカン戦争後になってシリアを中心とする中東地域に関心を抱くようになってきたこと、そしてフランスが経済的にも先進国であり、その恩恵をオスマン帝国にもたらすことを踏まえ、まずは貿易協定という簡単な形から両国の関係を強化しようと考えたのである。³⁶³

もうひとつは外交的なアプローチであった。おりしもジェマルがパリに赴いたのと前後してオーストリア＝ハンガリーの皇太子であるフランツ・フェルディナンドが暗殺されるサラエヴォ事件が勃発しており、嫌独・嫌奥洪のジェマルはこれをドイツ・オーストリア＝ハンガリーの包囲を行う絶好のチャンスであると考えた。ジェマルはオスマン帝国がフランスなどの三国協商陣営に参加することになれば、すでに同盟国となっているブルガリアも三国協商陣営に引き込むことでドイツ・オーストリア＝ハンガリーへの攻撃も幾分楽に進められる

³⁶¹ 本稿 17-18 頁

³⁶² 貝瀬雅典, (2001) 15 頁

³⁶³ Cemal, B. (1959) 81 頁

と進言しようと考えていた。³⁶⁴

結局彼は主に外交的アプローチを推す形でフランス側に事実上の同盟の打診を行ったが、フランスからは、イギリス・ロシアから許しを得られないという理由を告げられ、同盟の締結に関しては有効な回答を得ることができずに終わった。ジェマルは会談の後になってフランス視察の間に同行していた人物に「まさかこんなにもひどい失望を味わうとは思ってもよらなかった！」と語ったのだが、彼のこの一言には三国協商陣営への参加を望んでいた統一と進歩委員会のメンバーたちの期待が大きく裏切られたことも表していたのだった。³⁶⁵

そしてタラート・ジェマルの同盟打診と時同じくして進められていたドイツとの同盟を推進していたのが、エディルネ奪還によって英雄となり、そして若くして陸軍大臣のポストを射止めたエンヴェルであった。しかしそのドイツとの同盟も、実際のところは上手く言っていたわけではない。一部のドイツ政府要人からは賛同を得られていたが、それでもドイツ政府を納得させるまでには至っていなかったのである。第二次バルカン戦争直後の1913年8月17日。エンヴェルは当時のドイツとの関係を次のように評している。

親愛なる友よ、私的なドイツ(Özel Almanya)が私たちへ示してくれている同情に私はとても満足しているのです。しかし公的なドイツ(resmi Almanya)が同じような感情を見せてくれないのです。³⁶⁶

エンヴェルがここで語った言葉は、まさにオスマン帝国とドイツの関係の本質を述べたものであった。つまり、ドイツとは軍制改革などの面ですでに友好的な関係を築いていたにもかかわらず、肝心の外交面では未だに有効な関係を築けていなかったのである。

ドイツ本国内では、オスマン帝国との同盟に関して意見は二分した。ドイツ皇帝・ヴィルヘルム2世は、もとよりオスマン帝国との同盟に好意的であった。彼がオスマン帝国との同盟のメリットとしてあげたことは、「オスマン＝ブルガリア軍事同盟が、オーストリア＝ハンガリーの負担軽減に役割を果たすこと」、「ドイツによる改革で精強になったオスマン帝国軍とロシアを挟撃できること」、「カリフを擁立しているゆえに協商国に対して世界規模のムスリムの叛乱を引き起こす可能性を持っていること」の3点であった、しかしこの皇帝の意見に、「灰色の猊下(Grey Cardinal)」という名で呼ばれた第5代ドイツ帝国宰相・ベートマン・ホルヴェーク(Theobald von Bethmann Hollweg, 1856年-1921年)たちは反発した。バルカン戦争でオスマン帝国軍がもはや脆弱なものであることは明らかであり、ドイツと同盟を組んだとしても戦時中にただのお荷物になるとしたのである。当時のドイツ軍参謀総長・モルトケ(Hermuth Johann Ludwig von Moltke, 1848年-1916年)にいたっては、オスマン帝国との同盟締結に見出される利益を全面的に否定するとともに、戦争時にはオスマンに派

³⁶⁴ 貝瀬雅典. (2001) 15 頁

³⁶⁵ 同書 16 頁

³⁶⁶ Hanioglu, M. Ş. (1989) 250 頁 17 Ağustos 1913

遣した全ての軍事顧問団を撤退させることも考えており、³⁶⁷オスマン帝国との同盟を「無駄な同盟」と断じた。

またこのことはオスマン帝国内にも言える事であった。先にも書いたように、統一と進歩委員会のメンバー全員が親独派の人間であったわけではなく、中には反独派のメンバーも少なからず存在していた。最高幹部のほうを見てみても、内務大臣・タラートは当初はドイツとの同盟よりもロシアとの同盟を望んでいたし、財務大臣・ジャヴィトも英仏との関係を優先し、逆にドイツとの同盟による危険性をしばしば唱えていた。海軍大臣・ジェマルにいたってははっきりと「嫌独」を唱えており、ドイツとの同盟は薄々感じてはいたものの、心底から受け入れようとはしなかった人物であった。こうした内部対立を踏まえて、エンヴェルや大宰相のサイト・ハリム・パシャらはドイツとの同盟を極秘裏に進め、そして然るべき時に反対派に打ち明けるべきではないかと考えた。オスマン帝国・ドイツの両国にそういう問題があったとはいえ、国家元首たるドイツ皇帝が声高に主張していたこともあってホルヴェークらは自身の意見を転換せざるを得ず、結局1914年8月2日にドイツ政府は内部でその不満を解消させることなくオスマン―ドイツ同盟の草稿を作成させ、そして同日にはジェマルやジャヴィトら反独派を含めた統一と進歩委員会の最高幹部がエンヴェル宅に集まり、同盟締結の旨が伝えられたのだった。³⁶⁸もちろんこれには嫌独・嫌奥洪のジェマルも感情的に怒りを覚えており、³⁶⁹よりエンヴェルとジェマルの間の溝は深まった。

こうしてオスマン―ドイツ軍事同盟は極秘裏に締結されたのだが、いざ第一次世界大戦が勃発するとオスマン帝国は「親独的武装中立」を宣言し、しばらくは戦局を見守ることにした。エンヴェルら少数派はエーゲ海・カフカス地域・アラブ世界・北アフリカでの利権を確保し、「強いオスマン帝国」を復活させたいという強い愛国心に則って戦争への早期参加を主張したのだが、ドイツとの同盟を望んでいたサイト・ハリム・パシャなどの多くの国務大臣が、ドイツとの同盟は必要であったが、それでもヨーロッパ全土を巻き込む戦争に参入するのには自殺行為であると考えたからであった。さらにドイツとの同盟の中にも、「オスマン・ドイツ両国はオーストリア＝ハンガリー、セルビア間のいかなる衝突に対しても中立を維持すること」という条項が含まれていた³⁷⁰ことから、イギリスに発注していた弩級戦艦2隻「レシャディエ(Reşadiye)」と「スルタン・オスマン1世(Sultan Osman I)」がイギリスに接收されてしまった以降反英意識が高まっていた国民の口からも、オスマン帝国は絶対に中立を守るべきだとする意見が飛び出していたのだった。しかしその一方で、ドイツ側のオスマン帝国への期待は一変した。ドイツ国内で提唱されたシュリーフェン＝プランの第一目標であった「フランスを開戦後40日で降伏させること」を達成させることができず、さらに東プロイセンへロシアが攻め込んだことがドイツに危機感を与えたのである。

ドイツは未だに武装中立を解こうとしないオスマン帝国へ、オスマン帝国が欲しがっている軍艦として巡洋戦艦の「ゲーベン」と軽巡洋艦の「ブレスラウ」を派遣した。エンヴェル

³⁶⁷ 貝瀬雅典. (2001) 17 頁

³⁶⁸ 同書 21-22 頁

³⁶⁹ Cemal, B. (1959) 99 頁

³⁷⁰ Aydemir, Ş. S. (1976) 410 頁

は、このドイツからの軍艦2隻の派遣をオスマン―ドイツ軍事同盟内の条項にもある「ドイツが援助を必要としている場合には、オスマン帝国も三国同盟陣営にたって参戦する」に該当するものとして、オスマン帝国の早期参戦を訴えかけたのだった。しかしそれでもハリム・パシャや他の国務大臣たちは参戦を渋り続け、オスマン帝国内で意見がまとまることはなかった。そして1914年10月29日。オスマン帝国海軍提督となっていたドイツ人将校・スション(Wilhelm Anton Souchon, 1864年 – 1946年)の指示のもと、オスマン帝国海軍は国内の意見がまとまらないうちに黒海沿岸のロシアの港町を奇襲攻撃し、オスマン帝国は三国同盟陣営に参加する形で帝国最後の戦いへ身を投じたのである。

さて、本稿ではバルカン戦争期のオスマン帝国を、周辺のバルカン諸国との関係性や外交的アプローチから見てきたが、この時代のオスマン帝国、とりわけ統一と進歩委員会への評価の仕方は着眼するポイントの違いから近年分化しつつある。特にのちのトルコ共和国樹立の父・ムスタファ・ケマルを主人公として語られる歴史の中では、あたかもエンヴェルや統一と進歩委員会が現実をまったく直視しない愚昧な夢想家たちであったと断じているような傾向が増えてきている。時には現実的な見識を持つムスタファ・ケマルの現実主義的な計画をことごとく邪魔をする存在として描かれていることもある。

しかし現実の彼らはどうか。彼らは確かに「夢想家」ということができるほどの壮大な理想を掲げ、青年トルコ革命で政治的・国際的表舞台に躍り出た。しかしその理想は、彼ら自身の見識の甘さと彼らの予想をも凌駕した現実世界の厳しさのなかで挫折を余儀なくされ、彼らは現実を見ながら状況に応じた政策を行わなければならない状況へと立たされた。「オスマン帝国を崩壊させた原因」といわれるドイツとの同盟についても、エンヴェルのような親独派の人間がいたとはいえ、委員会内にはジェマルのような反独派の人間も存在しており、当時の外交戦略としては妥当なものであるイギリス・フランスとの同盟も考えられていたのである。結局その同盟も、理想に反して対英・対仏関係の悪化から失敗し、ドイツとの同盟もオスマン・ドイツ両国の反対を押し切る形で強引に締結したものであった。

現実を無視し、理想ばかり追求して帝国を破滅に追い込んだと揶揄される彼らこそ、「現実」と「理想」の間で最も抗い、そして最もその「乖離」に苦悩し続けた存在だったのだ。

文献目録

<研究文献>

- Bolayır, E. (1946). *Talat paşa'nın Hatıraları*. Güven Yaynevi.
 Cemal, A. (1933). *Hatıralar ve Vesikalar : Cemal Paşa'nın Hatıratı Üzerine Tetkikler*. Vakıf.
 Cemal, B. (1959). *Hatıralar Bahriye Nazarı ve 4. Ordu Kumandanı Cemal Paşa*. Selek Yayınları.
 Hanioglu, M. Ş. (1989). *Kendi Mektuplarında Enver Pasa*. Der yayınları.

<参考文献>

- Akşin, S. (2008). *Çağdaş Türkiye 1908-1980*. Cem Yayinevi.
 Akşin, S. (1987). *Jön Türkler ve İttihat ve Terakki*. Remzi Kitabevi.
 Aydemir, Ş. S. (1976). *Makedonya'dan Ortaasya'ya Enver Paşa* (Cilt 2). Remzi Kitabevi.
 Bayrak, M. O. (2002). *"Osmanlı Tarihi" Yazazrları*. Milenyum Yayınları.
 Erickson, E. J. (2003). *Defeat in Detail: The Ottoman Army in the Balkan Wars, 1912-1913*. Praeger Pub.
 Erickson, E. J. (2001). *Ordered to Die: A history of the Ottoman Army in the First World War*. Greenwood Press.
 Hale, W. (2000). *Turkish Foreign Policy, 1774-2000*. Frank Cass Publishers.
 Hall, R. C. (1996). *Bulgaria's Road to the First World War*. Columbia University Press.
 Hall, R. C. (2000). *The Balkan wars, 1912-1913: Prelude to the First World War*. Routledge.
 Hanioglu, M. Ş. (2008). "The Second Constitutional Period 1908-1918". In *The Cambridge History of Turkey: Volume 4, Turkey in the Modern World*. Cambridge University press.
 Heller, J. (1983). *British Policy toward the Ottoman Empire 1908-1914*. Frank Cass and Company.
 Helmrich, E. C. (1938). *The Diplomacy of the Barkan Wars 1912-1913*. Harvard University Press.
 Laqueur, W. (2006). *The Changing Face of Anti-Semitism*. Oxford University Press.
 R.J. クランプトン. (1997). 『ブルガリアの歴史』. (高田, 久原, 訳) Cambridge University Press.
 Rossos, A. (1981). *Russia and the Balkans: Inter-Balkan Rivalries and Russia Foreign Policy 1908-1914*. University of Toronto Press.
 Taylor, A. J. (1990). *The Habsburg Monarchy 1809-1918*. Penguin Books.
 アンドレイ・オツェテア. (1977 年). 『ルーマニア史 (第 2 巻)』. (鈴木四朗, 鈴木学, 訳) 恒文社.
 オルシ・ピエトロ. (1942). 『伊太利史』. (東又清, 訳) 興風館.
 ジョルジュ・カステラン. (1994). 『バルカン—歴史と現在』. (山口俊章, 訳) サイマル出版会.
 チャールズ・ジェラヴィッチ, バーバラ・ジェラヴィッチ. (1982). 『バルカン史』. (野原美代子, 訳) 恒文社.
 ディミトリ・ジョルジェヴィッチ, ステファン・フィシャー・ガラティ. (1994). 『バルカン近代史』. (佐原徹哉, 訳) 刀水書房.
 トウルグット・オザクマン. (2008). 『トルコ狂乱 オスマン帝国崩壊とアタテュルクの戦争』. (新井政美, 編, 鈴木麻矢, 訳) 三一書房.
 リチャード・クロッグ. (2004). 『ギリシャの歴史』. (高久暁, 訳) 創土社.

- レフ・トロツキー. (1926). 『バルカン戦争』. (清水昭雄, 訳) 柘植書房新社.
- ロザリオ・ロメオ. (1984). 『カヴールとその生涯』. (柴野均, 訳) 白水社.
- 永田雄三. (2002). 「オスマン帝国の改革」. 著: 永田雄三 (編), 『西アジア史Ⅱ イラン・トルコ (ページ: 281 頁-327 頁)』. 山川出版社.
- 岡倉登志. (1999). 『エチオピアの歴史—"シェバの女王の国"から"赤い帝国"崩壊まで』. 明石書店.
- 貝瀬雅典. (2001). 『第一次世界大戦参戦を巡るオスマン帝国外交の研究. —トルコ・ドイツ軍事同盟締結と「統一と進歩委員会」の対外的模索—』. 卒業論文, 東京外国語大学.
- 佐原徹哉. (1998). 「ナショナリズムの勃興と独立国家の形成」. 著: 柴宜弘 (編), 『バルカン史 (ページ: 153 頁-209 頁)』. 山川出版.
- 佐原徹哉. (2003). 『近代バルカン都市社会史—多元主義空間における宗教とエスニシティ』. 刀水書房.
- 山内昌之. (1999). 『納得しなかった男 エンヴェル・パシャ 中東から中央アジアへ』. 岩波書店.
- 小松香織. (2002). 『オスマン帝国の海運と海軍』. 山川出版.
- 小松香織. (2004). 『オスマン帝国の近代と海軍』. 山川出版.
- 新井政美. (1980). 「「青年トルコ」革命以前におけるナショナリストの動向」. 『史學雑誌』, 89 (11), 1712-1811 頁.
- 新井政美. (1979 年). 「トルコのナショナリズム思想に関する一考察・ズィヤ・ギョカルプを中心に」. 『史學雑誌』, 88 (2), 191-308 頁.
- 新井政美. (2001). 『トルコ近現代史—イスラム国家から国民国家へ』. みすず書房.
- 大畑篤四朗 (編). (1997). 『近代国際関係条約資料集 第4編 (第18巻)』. 龍溪書舎.
- 中津孝司. (1991). 『アルバニア現代史』. 著: 変革の現代史シリーズ (第3巻). 晃洋書房.
- 藤由順子. (2003). 『ハプスブルク・オスマン両帝国の外交交渉—1908 - 1914』. 南窓社.
- 馬場優. (2006). 『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争 - 第一次世界大戦への道』. 法政大学出版局.
- 木村真. (1998). 「ナショナリズムの展開と第一次世界大戦」. 著: 柴宜弘 (編), 『バルカン史 (ページ: 210 頁-248 頁)』. 山川出版社.

<総文字数 16万1343字> 一枚あたり 40字×40字